流れる夜兎の血――罪か、希望か――

洒流奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流れる夜兎の血――罪か、希望か――

【Ｎコード】
Ｎ４４６７Ｘ

【作者名】
洒流奇

【あらすじ】
夜兎族の人間とある日出会う銀時と神楽。そして、その人間が教えてくれた情報に疑問を抱きつつも放置した二人に災難が降りかかる。

そして、夜兎の驚きの肉体構造が……！？

取りあえずシリアス！
ダメダメな文や、キャラ崩壊の可能性も！

大丈夫な人はどーぞ！！

荒くれ者が集う街――歌舞伎町。
この街にまた――狂ったモノが入る。

万屋と書かれた家の中では三人の人間が怠そうに目を開いていた。

「あぁ…全然仕事が来ねぇ…オイ、新八」

椅子に座っている銀髪の天然パーマの男――坂田銀時が眼鏡の少年の名を読んだ。

「何ですか？」

ソファでお茶を啜る眼鏡の少年こと、志村新八は適当に言葉を返す。

「ジャンプ買って来い」

新八が固まった。
やがて、

「ハァッ！何言ってんの！」

シャウトした。

「今お金が無いの知ってんですか銀さん！？今日の昼御飯も心配な所なんですよ！」

「そうアル！ジャンプを買うんじゃなくて酢昆布を買って来るアル！」

チャイナ服の少女――神楽が新八と銀時に向かって叫ぶ。

ブチッと新八の血管が切れる音がする。

「ねぇ聞いてた神楽ちゃん！？今さっき昼食も食べれるか食べれないかの瀬戸際って伝えたよね！？酢昆布を買える訳ないでしょう！？」

「知らないアルか？酢昆布は神の食物であり、また、神が髪が生えるようにと願った食材でアルよ？」

「ツッコミ所満載でもうツッコミきれないよ」

叫ぶ新八はハァと溜息を吐いて、

「もう良いです…僕一旦家に帰ります…」

ぽつりと虚ろな瞳で言った。

「おーい新八君。君は頭までおかしくなったのかね？君の家にはダークマターが待っているんだぞ？」

先生風の言葉を出す銀時。

因みにダークマターとは、志村新八の姉、志村妙の作る卵料理を言う。

その卵料理は料理と表記しても良いのか分からぬ、こんがりと焼けた黒こげなモノ。

「だからって…此処に居たって無駄にエネルギーを消費するだけですよ…」

「駄目アルよ、新八。…生きてても良い事アルよ。だから死んじゃ駄目アル」

「…何で僕がリストラされて自殺しようとしている会社員って感じなの神楽ちゃん？」

「だって新八アルよ？あの添加の新八アルよ？」

「うん、添加じゃなくて天下だよ神楽ちゃん」

「新八はそんなに偉くないアル」

「神楽ちゃん…君は何がしたいんだい…？」

疲れきったように聞く新八に目を輝かせて神楽は答えた。

「バイバイ新八。ちゃんと逝くあるヨ」

神楽が涙ぐんだ瞳を隠して手を振る。

「新八…今までありがとな…」

銀時も悲しそうに笑いながら手を振る。

「ちょっと待ってー！だから僕死なないって！何言ってんのあんた達！フラグたてんな！」

「K・Yあるな新八」

「有り得ないな新八」

二人ともハァと溜息を吐いて頭を振る。

「ねぇ壊して良い…？テメェらの頭をぶち壊して良い？」

新八はガックリうなだれると「では家に帰ります」と言ってドアを開けて去って行った。
銀時はフゥと息を吐いて、

「ツッコミ居なくなったらどうするのコレ？待てよ…此処で俺がツッコミに回って役を広げてみるのも…」

「銀ちゃん」

「ちょっと待て神楽。今良い感じに何か閃きそうなんだ」

「定春」

「定春ぅ？そこら辺にでも…」

バッと体を起こして定春を見る。
定春と言う名の犬がプルプル小刻みに震えていた。

「オイッ此処ですんな！神楽！」

「アイッ！」

神楽は元気良く声を出すと通常よりも大きすぎる定春の首輪を掴んで、

「此処ですんなぁー！！」

外に投げ飛ばした。

「違うー！違うよ神楽ちゃん！俺はね、ビニール袋を用意しろって意味で君を呼んだんだよー！？」

銀時がビニール袋を急いで探す。

「人間、ミスがあるのが当然あるヨ？」

「格好良くないからね！全然格好良くないからね神楽ちゃん！？」

もうオカマのような奇声を発した銀時はビニール袋を手に外に向かう。

「すいませーん！離れてて下さーい！今処理するんでー！」

下にはキャアッと叫ぶ着物姿のおなごや「何じゃこ奴…」と定春を見つめる男達が居た。

「すいませーん！」

銀時は再度謝ると定春に駆け寄る。

両目が×になっている定春の近くには――

モザイクがかかったモノがあった。

「何やってんの定春ー！？」

既に気絶している定春にどう叫んでも意味は無いのだが叫ばなきゃ落ち着かない銀時。

「銀ちゃーん。私酢昆布買ってくるアル」

「待ってー。この状態で何で酢昆布ー？銀さんを手伝ってあげようという君の善意はー！？」

「善意？ふっそんなモノとうの昔に捨てたわ」

「格好良くないよー！全然格好良くないからねー！」

「ウルセェお前ら！とっとと店の前からそのデカブツを取り除けー！」

突如、万屋の下の店の主、お登勢が銀時達の会話に加わる。

「ソウダヨコンチキショー。早ク消エテ私二遺産ヲ寄越セ」

カタコトな日本語を発する女――キャサリンもソレに加わる。

「テメェに渡す胃酸何て無いネ！とっとと眠りやがれコノヤロー！」

小銭を手にした神楽はキャサリンに絡む。

「遺産ノ字ガ違ウヨ馬鹿ヤロー！」

「知るアルかバカヤロー！」

こんな馬鹿な事を日々やる万屋達。
ギャイギャイガヤガヤ
五月蝿くて、楽しいモノ。
だが、その日は何時もと違う事が起こった。
五月蝿くしている銀時達の横を傘をさした人が通る。

「あっ…」

神楽の動きが止まる。
ポカンと口を開けて呆けた顔で見つめる。
銀時は「何だよ」と言い、頭を掻いて神楽の視線の先を見た。
銀時の目が見開かれた。
日差しが暖かい春の日に傘をさす人間が視線に気付いてか振り返る。

「…何だよ?って…」

その人間も動きが止まった。
白い肌に茶髪の天然パーマ。
チャイナ服を纏って、

血の臭いがする少年だった。

「坂田銀時…と神楽…か」

少年は独り言を言うと、

「じゃあな」

猛ダッシュした。

「待つアル！」

神楽が少年を追う。

「神楽！」

銀時も神楽を追った。

何か肩書きが有ると格好良い気がするけど、逆に肩書きに負けて地味な奴もいる

銀魂初投稿！！

８月からずっと考えていたモノです！！（てかただずっと書いてた）

感想どしどしお願いします！！

「ハァハァ…神楽アイツ！」

荒い息を規則正しく出しながら銀時は横に並んだ神楽に聞く。

「ハァハァ…アイツは…夜兎アルよ…！」

前で走っている少年はどんどん人気の無い所に行く。

「テメェ待ちやがれ！」

銀時は意味が無い事を理解しながら叫んだ。

「りょーかい」

元気な声が銀時達の耳に届いた時、
少年は止まって此方に顔を向けていた。
銀時達も足を止める。

「でさ…何？俺何かした？」

少年は自分が日陰に居る事を確認すると傘を閉じる。
銀時達は少年をジッと見る。
見た感じは、神楽と同年代に見える位小柄だった。
茶色の髪は日陰なのに輝いていた。
金色の色に間違えそうな色合いだ。
そして、神楽よりは少し身長は高いだろう。
目線が神楽の少し上であった。

纏っているチャイナ服は少し大きいのかブカブカだ。

「…お前」

神楽が口を開いた。

「私の馬鹿兄貴の仲間アルか？」

つまり、神楽が少年に聞きたい事は――

神楽の兄、神威の事だった。

「馬鹿兄貴ぃ？あぁ、神威ね」

「知ってるアルか！？」

「うん。仲間じゃないけど、ある程度情報は持っているよ？あんた達のもね」

「…あんた達ってなんだ？」

銀時は静かに問う。

「例えば、あんた」

少年は銀時を指差す。

「しょうよう先生だっけな…？その先生の教え子で、攘夷戦争で活躍した『白夜叉』」

銀時は目を見開く。

少年は指先を神楽に向ける。

「あんたは…エイリアンバスターの娘。とある時に兄、神威が暴走してあんたの父の腕をもぎ取って消える。現在春雨第七師団で活躍中」

神楽も目を見開く。

少年は2人の過去を的確に当てる。

「で、何?神威って奴の事?確かね…」

少年は自分の顎に人差し指を置くと、

「そこの白夜叉の戦争中に一緒に活躍していた高杉晋介と手を組んだよ?」

「高杉ぃ!?」

銀時が驚きの余り声を上げた。

「えっ…もしかして知らなかった?」

驚きを隠せない様子の少年に神楽は一歩近付く。

「他には…何がアルか!」

「他…?さぁ。それ位」

神楽は勢いよく飛ぶと少年の胸ぐらを掴む。

「他も知らないアルか!?オイッ!!」

グラグラ揺らす神楽の手を少年は優しく離す。

「だぁかぁらぁー知らないって」

少年の肩に手が添えられた。
その大きな手は――銀時の手だった。

「高杉…んことも知ってんのあるのか?」

「無い」

少年は即答した。

「…分かった」

銀時はつらそうに顔を歪ませた。
少年は溜息を吐く。

「何で俺が悪者的な扱いなんだよ?情報をあげたのによぉ?」

「いや…悪い…」

「うわあぁっ…」

神楽は涙を流した。

「おっ…おいっ大丈夫かよ!?」

「神楽落ち着け…なっ？」

銀時は神楽の背中をさすった。

「うぅっ…ありがとナ…」

神楽は涙を拭う。

「おっおう…」

少年は慌てた様子でいた。

ピーポーピーポー

そんな三人にパトカーの音が響いた。

「何だ…？」

銀時は周りに視線を向けて少年に視線を移した。

その時には――消えていた。

「えっ！？何処に行ったアルか！？」

「はい此処ー」

「！？」

少年が居た先は――

近くの二階建ての建物の屋上だった。

「何時の間にアル！？」

「ハハハッ」

少年は笑うと腰に有るポーチから何かを取り出す。

『そこまでだ半殺し屋！』

スピーカーによって大きくなった声が反響する。
そして幕府の犬――真選組がやって来た。

「探せー！情報によると奴は此処に居るんだー！」

鬼の副長、土方十士郎が叫んだ。

「って何で旦那が居るんでィ？」

栗色の髪を靡かせた少年――沖田総悟が銀時に目を向ける。

「それはこっちのセリフだよ総一郎君」

「ちょっサドヤロー私も居るアル」

「テメェ何ざ興味無いですぜェ」

「何だと！やるアルか！？やるアルか！？」

腕をブンブン回す神楽に沖田は、

「残念だけどテメェと遊んでやる程暇人じゃねですぜェ」

「何アルか！」

沖田は何処からか出したバズーカを二階建ての屋上に居る少年に向ける。

「ちょっ…私の話を…」

「散れ」

弾が発射する前に、少年は笑った。

「残念♪」

少年は笑った。

ボンッ

沖田達の周囲に煙幕が広がる。

「総悟、バズーカを空に撃て！」

「アイサッ！」

珍しく土方の意見を受け入れた総悟は、空にバズーカを撃った――のではなく、

土方の声がした方に撃った。

「オイッ！」

短い悲鳴をあげた土方の周りの煙幕は消えていく。

そんな土方の頭は――

「ちょっと総悟オオォォ！何で俺に撃ってんだアアァァ！？」

「いや…ね…昔近藤さんに声がした方を撃てって言ったような言ってないような…」

「結局確証ねぇのかアアァァ！」

総悟と土方の乱闘が始まった中勇者、銀時が土方に言う。

「多串君」

「多串じゃねぇ土方だ！」

「頭」

土方は銀時の言葉に眉間に皺を寄せたが、言われたとうり頭を触る。

チリジリになっていた。

危険なパーマをやった土方だった。

「ちょっと総悟オオォォ！？」

「いや…土方さん良い髪型ですゼェ？クスッザマァミロ」

「最後何つったアアァァ！」

「何も言ってねぇですゼェ？」

「テメェ！」

再度二人の乱闘が始まる中、勇者銀時は土方達に言う。

「あのぉ…君たちの目的は？」

耳をほじる銀時は退屈そうに欠伸を漏らした。

「っつ！テメェら探せぇ！」

土方の命令で隊員達が蜘蛛の子を散らすように別れて探し始める。

「じゃあ神楽帰――」

「待ちやがれ」

銀時の肩をガッシリ掴む土方。

「話を聞こうかぁ？」

血管をピクピク動かす土方を見た銀時はフゥと溜息を吐いて、

「オイオーイしつこい男はモテねぇぞ？」

茶化した。

「銀ちゃんオツカレネ。私先に帰って――」

「そうはいかねぇですゼェ？」

銀時達との構図と同じように総悟はガッチリ神楽の華奢な肩を掴む。

「離すヨロシ。お前なんかに触られたくないネ」

「それは同意見だがよぉ逃げられたのはテメェらのせいだろ？」

「明らかにテメェら税金泥棒のせいダロ！離せヨ」

「嫌だね」

「コノォ！」

乱闘が始まった二人。
銀時と土方達も乱闘する。

「離せよ多串君。そんなにしつこいとほらっ、愛しのあの子も逃げて行くぅ」

「何言ってんだテメェ？殺すぞ？」

「はいっコノ人警察官としてあるまじき言葉を発したー。オメェが牢屋に入れ」

「何だとぉ！？」

…最早どっちが悪いのか分からない状態。

そんな銀時達を見つめる奴が居た。

「見ぃっけ♪」

「団長…本当にアノ話受け入れるんですかい？」

「仕方が無いだろ？ビジネスだよビジネス」

闇の中に溶けていく２つの影。

この二人によって、
恐怖を味わう事になる。

何か肩書きが有ると格好良い気がするけど、逆に肩書きに負けて地味な奴もいる

違う人のも沢山読んでる為、影響を多々受けてるかもしれません…。
オリジナリティが無いんです…。
すいません…。

『逃げたからそれを追った。そこに逃げる奴が居たから』って言ったら少し格好良くない？

ウチのサブタイトル大半『？』が付いてる気がする。
気のせいか？

『逃げたからそれを追った。そこに逃げる奴が居たから』って言ったら少し格好

「で、話って何話せば良いんだよ?」

現在、屯所にいる銀時と神楽。
神楽は退屈そうに欠伸をする。

「何で彼処に居た」

土方が壁にもたれかかりながら瞳に銀時を映す。

「彼処ってなぁ…」

ポリポリ頭を掻いて、

「気まぐれ?」

笑った。
神楽は退屈そうに懐から最後の酢昆布を取り出して食す。

「気まぐれじゃねぇだろ!?ちゃんと答えろ!」

ドンッと机を叩く土方を一瞥した総悟は銀時を見つめて言う。

「旦那ァ、あんた達がちゃんと言ってくんなきゃコッチも旦那を捕まえなきゃいけねぇんですゼェ?」

「何でだよ?だいたいあのガキが何だよ?ただ夜兎っつう位だろ」

「夜兎…戦闘民族か…」

土方は酢昆布を口に頬張る神楽を見て溜息を吐いた。

「何ジロジロ見るアル。警察呼ぶアルよ?」

「残念ながらァ俺達が警察ですぜェ?」

「フゥッ…江戸の未来が心配アルな」

「不法入国者が良く言うぜェ」

「何か文句アルか?」

ガウゥと唸り声をあげて睨み合う二人。

銀時はハァと長い息を出す。

「つうかマジで何となく追って何となく話しただけだよ」

銀時の適当な答えに土方は鋭い瞳を細める。

「アイツは最近(ちまた)巷で有名な『半殺し屋』だ」

「半殺し屋…?」

眉間に皺を寄せる銀時を見て土方は頷く。

「殺しはしねぇが恐怖を体に刻みつけてくれる奴ですぜェ。殺しとどっちが良いか分かりゃしませんよォ」

総悟は視線を神楽から銀時に移して説明する。

「あんなガキがか？」

「あぁ。ちゃんと現場に毎回居て俺達が来た途端どっかに消えちまうんだ」

「しかもしっかりコッチを弄んで（もてあそんで）らァ」

キッと総悟が忌まわしそうに目を細めた。

「まぁそうゆう事だ。分かったか？」

「んで、帰って良いかぁ？」

「そうアル。私、最近始まった謎解きはブレークファーストの前を見なきゃならないアル」

フッと楽しそうに笑った神楽を総悟が睨んだ。

「馬鹿ですかィ？んな簡単に返すわきゃあねぇだろ？ちゃんと理解しろよバカヤロー」

「お前が馬鹿だろコンチキショー。私は用が有るって言ってるアル。真選組はしっかり民衆から税金絞って勝手に満足している馬鹿集団ヨ。そんな奴らが馬鹿じゃない訳が無いアル」

嘲け笑う様に上から見下す神楽。

「アァッ？」

それに総悟の堪忍袋が切れた。
元々大きくも無い堪忍袋だが、
切れたらソレはもう、危険である。

「よぉし。表に出ろチャイナ娘」

「望むところネ」

バチバチと二人の間に火花が散る。
土方は二人を気にせず銀時に言う。

「だがソイツ、何故か毎回俺達に自分から情報を与えるんだよ。去り際にな」

「情報？例えば？」

「最初らへんはくだらない情報だ。だが、最近は何か良く分かんないが…嫌な感じのモンだ」

「情報つうの全て言え」

「残念だがお前らはあくまで一般人。言えるのは此処までだ。総悟、喧嘩は止めにしろ」

手をヒラヒラ振って止めるように指示する土方を沖田は、

「テメェ何ざに指図される覚えはねェ」

目をぎらつかせた。

「馬鹿か。んなガキ相手にする方が馬鹿だ」

「知らねぇんですかィ？馬鹿って言った方が馬鹿なんですぜェ？」

「…テメェ」

怒りの矛先を土方に向けた沖田と土方の間で今度は火花が散る。

「銀ちゃん、私帰るアル。こんな所居るだけで疲れるアル」

「神楽ァ、ちょっと待て」

銀時は神楽を制して土方の肩を掴んだ。

「全部を教えろ」

「何でテメェなんかに…」

沖田に向けていた怒りが籠もった瞳を銀時に向けた土方は銀時の真面目な顔を見て、静かになる。

「分ぁったよ。全部教えてやる」

土方は怒りを鎮めると口から様々な言葉を紡ぐ。

「アイツはだな――――」

「ふぅ…やっと終わったアル」

屯所から出た神楽は分かりやすく溜息を吐く。

「…」

俯いて悩んでいる銀時に神楽は頭を傾げる。

「どうしたの銀ちゃん？」

「なぁ神楽」

「何アル？」

「あのマヨラーつうかそのガキが最後に言ったのどう思う？」

「どうって…『住人をしっかり守ってくれよ。これで最後だ』だったアルか？別に…私達には関係ないと思うアルけど？」

「本当にそう思うか？」

「どうしたアル…銀ちゃん？」

「嫌な感じがする…」

神楽は更に頭を傾げる。

「良く分からないアルけど…私、酢昆布食べたいネ。金を寄越すアル」

「あのー神楽さん?今の状態で何故酢昆布ですかー?銀さんもの凄く悲しいよぉ?」

「ふっ…酢昆布に銀ちゃんも金ちゃんも関係ないアル」

「もう意味が分からないから。もう全然意味が分からないからね?」

「良いから寄越すアル!」

「ふげっ!」

銀時の腹に見事に神楽の蹴りが入る。

「銀ちゃん?」

「はっ…はい…」

「酢昆布」

神楽は倒れた銀時を見下す。

「はっ…はい…」

「返事は要らないアル。誠意を見せて欲しいネ」

銀時は冷や汗をかきながら懐から小銭を神楽に渡す。

神楽は満足そうに頷くと「コンビニ行って来るネ!」と元気な声を発して走って行った。

「いっ…行ってらっしゃーい…」

苦笑いをした銀時はぎこちなく手を振った。

これでしばらくの間神楽を見れなくなるとは――

誰も分かる筈が無かった。

『逃げたからそれを追った。そこに逃げる奴が居たから』って言ったら少し格好良くない？

感想お待ちしてまーす。

兄貴ってのは居ない人間には分からないけどねぇ、鬱陶しいんですよ。これ常識

意外と面倒だと気付いた自分。
何がって？
秘密です。

銀：だったら書くなよ糞作者が。

神楽：そうネ。何でこんなに私が食い意地がはったガキみたいアル？納得いかないネ。

新八：それ位良いじゃん、僕なんて忘れ去られてるよ？

神楽・銀時：普通だ（ネ）

新八：黙れエエエェェェェ！！

つまらなくてスイマセン。

「あっ、近道した方が早いアル」

足を止めてポンッと手を叩く。

神楽は右に曲がる。

曲がった先には廃工場があった。

「こっから行くと早くいけるアル♪」

最近見つけた近道。

だが、まだ一回も行った事が無い。

神楽の胸が踊る。

神楽は楽しそうに歩く。

やがて――

前方に昼にあった少年が居た。

地べたに座ってスルメをくわえていた。

「お前…こんな夜中に何で…坂田銀時は…？」

眉を寄せた少年に神楽は疑問を抱く。

確かに、もう空は闇で覆われている。

だが、これ位の時間には度々外に出ている。

知らないだけなのかな？と自問自答して出てきた答えに頷いて少年の言葉に応える。

「私は酢昆布を食べたいだけアル。こっちからだとコンビニが近いネ。何か悪いカ？」

「…万屋まで送る」

「嫌ネ。半殺し屋なんかと一緒に居たらまた税金泥棒に御世話になんなきゃならないネ」

「大丈夫だ。真選組の動きはしっかり分かってる」

少年は立ち上がって神楽の横に並ぶ。

「…どうかしたアルか？」

「いや、気にするな。ただ、俺は…」

最後まで言わずに少年は顔を横に振る。

「何が――」

「逃げろ」

少年の唐突の言葉。

何時の間にか少年の手に押されて神楽は前に進む。

少年はゆっくり振り返った。

「逃げろ」

神楽に背を向けた少年は腰にかけてあったポーチの中から丸いのを

取り出して、
投げた。

ボンッ！

巨大な風が舞う。
土埃が空に散った。
思わず尻餅をつく神楽。

そこから、
影が二つ出て来たのであった。

兄貴ってのは居ない人間には分からないけどねぇ、鬱陶しいんですよ。これ常識

銀時：なぁ神楽。

神楽：何アル？

銀時：何でお前沢山出てんだよ？こんなペチャパイ娘が。

神楽：銀ちゃん、嫉妬は見苦しいアルヨ？

銀時：くそっ！作者を殺りに行ってやる。

神楽：駄目アルヨ？

銀時：何でだよ？

神楽：今作者、金が金欠で銀ちゃんを収めるカメラが見つからないアルから。

銀時：…意味が分からないんだが。

神楽：銀ちゃん、三位位に好かれてるらしいね。

銀時：何かやる気が失せるな。

神楽：じゃっ私の活躍を見るアル。

銀時：ジャンプ読もう。

神楽：私の輝きに負けたアルみたいネ。読者さん、どんどん私の活躍を見るアル！！

銀時：てかオリジナルキャラのこのガキなんだよ。

新八：何か、この子が重要キャラみたいですよ？

神楽：私より活躍したら殴りに行くアル。

新八：…神楽ちゃん、この子はコレの主人公だよ？

神楽：私じゃないアルか！？

銀時：俺じゃないのかよ！？

新八：…馬鹿だろ。それ、おかしいに決まってんだろ。

意志と意思の違いって結構大きいんだよな。志と思いは。

神楽は目を疑った。
神楽の視線の先には――

「神威！！」

神威が居た。
そして、神威の後ろから神威よりも大柄な男、阿伏兎が現れた。

「なっ…何であの男も…！」

神楽は記憶を呼び起こす。
そう、吉原の時に阿伏兎は最後に新八と神楽を投げ飛ばして落ちた。

「よぉ嬢ちゃん。ちょっと用があるんだ」

阿伏兎が口を開く。

「抵抗するならそれなりの対応をとらしてもらうけど。勿論、何も言わずに来たら何もしないよ？今はだけど」

神威が薄っぺらい笑みを貼り付けながら言う。

「んっ？てか君誰？」

神威が初めて気付いたように目を見開く。

「夜兎…か…」

阿伏兎が悲しそうに口を開く。

「テメェら何かに語る名は無い。お前、早く行け」

尻餅をついた神楽を見もせず少年は傘を力強く握る。

「嫌アル！だって…」

神楽は立ち上がりながら神威を見る。
そう、彼女が長年探していた兄貴。
そんな機会をみすみす逃したいと思う筈が無い。

「邪魔なんだよ！」

少年が苦しそうに言った。

「もし、テメェが捕まったら今までの俺の行動は意味が無い。それに――」

少年は神楽を見た。
神楽は見た。
少年の悲しそうな瞳が。

「お前には、守るべきな奴も、守ってくれる奴も居るだろ？残念だが、俺には縁が無い話だ。だから、」

少年は思いっきり口を開けた。

「逃げてくれ！」

神楽は訳も分からず走った。
何がなんだか分からない。
でも、
あの少年の為にも――

「銀ちゃん！」

ヒーローを呼ばなければならない。
自分の為にも、
彼の為にも。

戦いってのは描写が難しいし、国語能力が無い奴は更に難しい。（前書き）

銀時：ねぇ神楽。

神楽：何アル？

銀時：俺の出番は何時？

新八：僕の出番も…。

神楽：知らないネ。作者に聞くヨロシ

洒流奇：そろそろかな？（新八は除く）

新八：くそオオオォォォ！！！

戦いってのは描写が難しいし、国語能力が無い奴は更に難しい。

「さて…待っててくれてありがとな」

少年は後ろを確認すると前方に集中する。

「阿伏兎、神楽を宜しく」

「こんのすっとこどっこい。さっき捕まえれば良いだろ?何でわざわざ逃がすんだよ」

阿伏兎が一本しかない腕で頭を掻く。

「んーだってビジネスとはいえ、あんな雑魚には興味無いから…そこは阿伏兎が活躍してくれるかなって」

ニコニコ笑う神威に一瞬視線を移した阿伏兎はハァと息を吐く。

「分かったよ。いきゃあい――」

少年の手から丸い物が投げ出された。

轟音が響く。

そして更に握ってる傘から銃弾の雨を降らす。

「チッ…」

少年は舌打ちをする。

ヒラリと爆弾が落ちた所に何かが落ちる。

「最後までセリフを言わせろ。すっとこどっこい」
煙が二人の威圧により消えていく。
「じゃあ行ってらっしゃーい」
空気には合わない明るい声を発する神威に少年は、
「誰も追わせねぇ！」
再度銃弾の雨を降らす。
二人は飛ぶ。
てんでバラバラな方向に。
少年は一瞬迷う。
どちらを殺るかを。
その一瞬の迷いは、
命取りだ。
少年の背後に神威が降りる。
少年は一瞬で振り返る。
だがその時には、
少年の目の前に拳があった。
「ツッ！」

少年は体を地面へ落とす。

神威の拳が宙に舞った。

神威の瞳が下――少年に向けられた時には、

もう拳が降ってくる。

横に転がる少年。

間一髪、一撃も喰らっていない。

「ふーん？結構強いんだ」

間合いを取って立ち上がった少年に神威は笑いかける。

「じゃあ、」

神威は目を開いた。

「がっかりさせないでね♪」

そして、

少年と神威の対決が本格的に始まった。

「ハァハァ…！」

走る。
神楽はただただ走る。
あの少年が稼いでくれた時間内に、
銀時を呼んで助けなきゃ。

その時神楽の足が止まった。

何で、
自分では助けなかったの？

神楽は頭を働かせる。

あの少年が言ってた言葉。
俺には縁が無い話だ。
そう、言っていた。

縁が無い？
あの少年は今戦っている。

何で？
良く分からないがあの少年は、

自分の為に戦っている。

それって、

あの少年にとって自分は守るべき存在なのだろうか？

「助けなきゃ…」

神楽は拳を握った。
さっきまで握りしめていた小銭をポケットに入れる。

「やっと追い付いたぜ、嬢ちゃん」

神楽は振り返った。
そこには阿伏兎が居た。
神楽はゆっくり振り返って阿伏兎を見据える。

「…何で私を狙うアル？」

「それに関しちゃ後で痛い程分かる。だが、」

阿伏兎は間を取ってる神楽にでも分かりやすく溜息を吐く。

「俺ぁ嫌だったんだがなぁ…。ただで少ねぇ同族が減るかもしんねぇのは」

「同族…夜兎が減る…？」

神楽は阿伏兎を睨む。

「どーゆー事アル！」

神楽の言葉が夜道に響く。
阿伏兎が溜息をまた吐く。

その時、

ザアアァァン！

近くの建物に何かがぶつかった。
建物の壁が意図も簡単に崩れる。

少しして建物から人が出て来る。
少年だった。

「！！」

驚きで体を硬直していた神楽は、

倒れた。

阿伏兎の腕が神楽の鳩尾に入っていた。

神楽の小さな体は阿伏兎の肩に乗せられる。

戦いってのは描写が難しいし、国語能力が無い奴は更に難しい。（後書き）

戦い長いなぁ……

携帯がウェブ行き過ぎで熱いな……。

誘拐ってドキドキするけど、書いてる人はハラハラするモンだ。（前書き）

銀時：そろそろって何時何だろうって思うんだが。

神楽：知らないネ。でも今は最高アルヨ！私沢山出てるネ！！

新八：希望を下さい…。

誘拐ってドキドキするけど、書いてる人はハラハラするモンだ。

「…！」

ゆっくりやって来る神威を見つめていた瞳が違う光景を映した。
阿伏兎の肩に俵担ぎをされている少女――神楽がピクリとも動かない。

「クソッ！」

少年はすぐに立ち上がって神楽を担ぐ阿伏兎に足を進める。

「んっ…って団長の獲物が何で此処に居んだぁ？」

「仕方がないじゃん。そっちに飛んだんだからさぁ♪」

阿伏兎の横に並んだ神威。
少年はキッと目を細める。

「で、どうします団長？」

「うーん、殺しちゃう」

ニッコリ笑った神威に何にも感じず、
少年はただ睨む。

「…せ」

か細い声に頭を傾げる神威。

「んっ？」

「ソイツを離せ！」

突如、少年が消える。

神威は頭を上に向けた。

「馬鹿なのか」

阿伏兎が鼻で笑う。

「上じゃあ逃げれねぇよ」

刹那、神威の姿も消える。

月に照らされる二人の姿。

チャイナ服を纏った同族は、

戦う。

「逃げ場がねぇ？」

少年は笑った。

「作れば良いだろ！」

少年はポーチに手を突っ込んだ。
さっきのとは比べ物にならない程小さなスーパーボールの様な物が
少年の手から零れた。
数秒後、蹴りを入れようとした神威の腹に当たる。

カチッ

小さな音が神威の腹になった。

ボンッ

音が響いた次の瞬間、

神威の体が勢いよく落ちる。

少年の体は爆風で宙に舞う。

地面に落ちてきた神威を見た阿伏兎は溜息を吐く。

神威はゆらりと体を起こした。

「阿伏兎…」

「何だぁ？」

「ちょっと待ってて♪」

阿伏兎は当たり前の様に呆れた様に頷く。

再度神威は空に向かった。

まだ宙に舞っていた少年の腹に――
蹴りが入った。

「グハッ！」

少年の口から鮮血が飛んだ。
地面に勢いよく当たる。
ミシミシミシッ
少年の体に嫌な音が響いた。

スタッと落ちてきた神威は少年に近付く。

「なぁ…」

少年は赤い模様で彩られている口を動かす。

「何？」

楽しそうに笑った神威を見て、
少年は立ち上がった。

「俺がお前らに付いていく、だから――」

少年は前に踏み出す。
切れている所から血が僅かに飛び出る。

「神楽を此処に置いていってくれ」

神威は目を見開く。

「何で…こんな雑魚を助けようと思うの？」

「雑魚…？ハハハッ…」

力無く笑った少年の顔は月の光に照らされる。
青白い顔、切れてる唇を動かす。

「強いよ…ソイツは…少なくとも俺よりは…」

「ふうん？」

「俺はお前みたいに夜兎の血に従う訳でも無い、そこのオッサン…阿伏兎みたいに血を愛でる訳でも無い…そこで担がれている神楽みたいに血と戦う訳でも無い…」

「じゃあ君はどう思うの？自分に流れている血を」

「付属品」

少年はそう笑った。

「…良く分からないや」

神威は手を広げて頭を振る。

「分からなくても構わない。でも、」

少年は更に神威との距離を自ら縮める。

「神楽（ソイッ）だけは止めてくれ」

最早、動けない体に鞭を打って神威の目の前に立った。

「ふうん？良いよ。その話」

神威は笑った。

「オイッ団長！」

阿伏兎の声が響く。

少年の顔が一瞬綻んだ。

そして、すぐに少年の腹に拳が入った。

「！？」

「君も一緒に連れてくよ」

少年の小さな体は神威の腕の中に入る。

「帰ろ、阿伏兎♪」

ニッコリ笑う上司を見た阿伏兎は、

「疲れた…」

どデカい溜息を吐く。

「…せ」

神威の肩に乗っている少年がピクリと動く。

「何？まだ起きてるの？」

目を大きく開けた神威に少年はポツリと呟く。

「返せ…」

「行くぜ団長」

「ハイハーイ」

担がれた二人の未来は――

誰にも分からない。

誘拐ってドキドキするけど、書いてる人はハラハラするモンだ。（後書き）

少年の台詞、
アレ、
ただ言わせたかっただけです。
ハイ、
スイマセン。

待ってる奴は憂鬱なもんだけど、待たせてる奴はもう心臓バクバクだよ。（前書き）

銀時：来たよ、主人公の輝き。

神楽：ちっちゃい男アル。私なんか銀ちゃんの何倍出てると思うアル？

新八：どっちが小さいんだか…ねぇ作者さん。

洒流奇：何？

新八：僕は何時出ますか？

洒流奇：ずっと先かな？

新八：…はぁ。

洒流奇：大丈夫、君にはお通ちゃんが居るだろ？

新八：五月蝿い！お通ちゃんは神なんだ！テメェが呼んでも良い奴じゃない！

洒流奇：このヲタクが。

新八：お前の方が学校と家族にヲタクって言われてんだろ！そして中二病患者が！

洒流奇：黙れー！！！

待ってる奴は憂鬱なもんだけど、待たせてる奴はもう心臓バクバクだよ。

「…おかしい」

銀時は呟く。

時計の針はもう夜中の十二時を指していた。

「何で神楽が帰って来ない…？」

そう、幾ら遅くだってコンビニを寄った位で五時間は有り得ない。

銀時は電話をかけた。

「はい、此方真選組です」

地味そうな声が銀時の耳に届いた。

「その声は…山崎か…」

銀時の言葉に相手、山崎退は反応した。

「あれっ、旦那じゃないですか？どうかしたんですかこんな夜分に」

「いや…神楽そっちに居ないか？」

「いや…知りませんけど…何かあったんですか？」

「別に何もねぇよ。つうか何でお前こんな夜遅くに起きてんの？何、

とうとうマヨラーに反抗？」

「違いますよ旦那。事件ですよ事件」

「事件…？」

銀時は自然と眉の間の距離を短くさせ、
受話器を力強く握った。

「えぇ。何か廃工場付近で爆発の音を聞いたーって事で。何かさっきの情報ですけど、チャイナ服の血まみれの少年と少女が運ばれているのを見たってのも。…もしかして旦那、今思ったんですけどその少女って――」

「サンキューなジミー…今からそっちに向かう」

「えっ…ちょっ旦那！？」

ブチッと電話を切った銀時は腰に有る物を確認する。
『洞爺湖』と書かれた木刀は万屋を照らしていた光によって煌めく。
銀時は走る。
そして、叫んだ。

「神楽ァ！」

攫われて、そこに片目を包帯で巻いた男が居たら恐怖だよね。（前書き）

今回スッゴく長いです！

そしてずっと前の話だけど、銀ちゃん誕生日オメです。

銀時：何で忘れてたんだ？

洒流奇：だって予約掲載で忙しかったから完璧に忘れてたんだもん。てかだったら自分で言いなよ。

銀時：はっ？自分で言ったら最低じゃんか。銀さんそーゆーの分かってんだから。

神楽：まるで作者みたいアルな。

新八：確かに。自分で言えずに終わる作者みたいです。

洒流奇：何言ってんだ！私は銀ちゃんと似てない！つか失礼！

銀時：そりゃこっちの台詞だ！こんな腐ったヲタクと同じにすんな！

神楽：…似たものどーしアル。

攫われて、そこに片目を包帯で巻いた男が居たら恐怖だよね。

何でこんなに…体が重いんだろう？
お腹がズキズキするヨ。
何か体がブラブラ宙に浮いてる感覚。
バタッ
何か音がしたアル。
地面に落とされたアルか？
振動が凄いネ。
でも、どうでもいいアル。
疲れたアル。
このまま――

「…せ」

何の声？
あっ温かい。
誰か私を温めてくれてるアルか？
パピー？
銀ちゃん？
新八？
姉御？
それとも――
お兄ちゃん？

「神楽を…返せ…！」

パッと神楽の目が覚める。
さっきまで靄（もや）がかかったように動かない頭が動き始める。

最初に視界に入ったのは誰かの背中だった。
神楽は頭を傾げる。

「神楽を…地球に返せ！」

神楽は瞬きをした。
少年だった。
男物のチャイナ服が所々解れてたり（ほつれてたり）切れていた。
切れている所からは白い肌と生々しい赤い傷が覗いていた。

「お…前…大丈夫アルか…？」

神楽はあまりの光景に頭が回らなくなる。
少年は気付いたようにコッチを見て顔を明るくさせた。

「大丈夫か？怪我は！？」

「えっ…お前の方が酷いじゃないか…お前の方が大丈夫アルか…？」

此方に振り返って顔を接近させた少年に気圧される神楽。
そこで気付く。
少年の手に鎖が巻き付けられている事に。
ジャラッと自分の手にもあった事に神楽は驚愕する。

「俺は平気だから…お前こそ大丈夫か？」

少年は自分の怪我には目もくれずただひたすら神楽の体調を心配する。
だが、此方を向いた少年の体はボロボロだった。
背中だけでは無かった。

腕にも、足にも、腹にも。
服も、体も、
ボロボロだった。

「だっ大丈夫アル…」

神楽は目が合わせられない。
こんなに頑張った少年とは違って無傷に近い自分の体。
自分と同年代位の少年は自分を心配する。
神楽の心が崩れそうだった。

「良かった…！」

少年は嬉しそうに笑った。
神楽はぎこちなく笑った。

「起きたならァ、こっち来い」

二人に氷よりも冷たい――
言葉がかかる。
二人の動きが止まる。
数秒後、少年がゆっくり振り返った。
片目を包帯で隠した男――高杉晋介が居た。

「なんで俺らがテメェん所に行かなきゃなんねぇんだよ」

少年が必死に言った言葉に高杉は嘲る様に笑って見下した。

「良いから来いよォ。それともそっちのガキをどうにかしたら来んのか？」

高杉の目が神楽を捉えた。
神楽の息が止まる。
神楽は辺りを見回した。
何処――？
神楽は見た事も無い部屋に更に思考が絡まる。
向こうに机と椅子が有る。
その机には料理が豊富に乗っている。
椅子には三人座っていた。
高杉と神威と阿伏兎だ。
神威は此方に興味が無いようにただ食べ物を口に含んでいた。
阿伏兎は呆れたように神威を見る。
そして、高杉は――こっちを見ていた。

「…！クソッ…」

少年が悔しそうに言葉を吐くとゆらりと立ち上がった。
少年の息が見るからに上がっていく。

「…オイッ！お前！」

「お前はそこに居ろ」

少年はゆっくり歩み始めた。
神楽は恐怖で動かない足を睨む。
足はただ――震えるだけだった。
神楽は視線を少年に移した。
倒れそうな程不安定な足取り。
はっきり言って動かせるような体では無い。
だが、少年は神楽の為に――歩く。

「ハァ…ハァ…何だ…よ…？」

高杉の前に立った少年は足を広げて体制が崩れないようにした。
神威がチラリと視線を少年に向けたがすぐに食事に集中した。

「オメェは誰だ？」

高杉の問いに少年は力無く笑って、

「力無き男っつう事で」

弱々しく応えた。
神楽は立ち上がって少年の元に確かな足取りで向かう。

「何だよ…？ハァ…来んなつったろ？」

少年は神楽を見たが、
焦点があってない。
焦点があったのなら神楽と目が合う筈なのに少年は合わせられない。

「馬鹿ダロ！こんな奴にわざわざ近付いて！男とか関係なく馬鹿ダロ！」

神楽は少年の肩を叩く。
大して強くない力。
だが、少年は崩れた。

「あれっ…？神楽、今ソイツを男って言った？」

神威が口を手で拭いて神楽を見る。
神楽は神威の視線から逃れず睨む。

「言ったアル。それにコイツ自身言ってたロ？男って」

神威はキョトンとした顔で神楽を見てからクスクス笑う。
目の前に居る高杉もクツクツ笑う。

「何だヨ！ちゃんと言えヨ！」

高杉がニヤリと口だけを動かす。

「そいつァ…女だよ。見りゃあ分かるだろ？」

神楽は「えっ？」と言って崩れている少年を見た。
座っている少年は俯いて表情が伺えられない。

「幾ら男物の服を着てるからって…神楽…クスッ…馬鹿？」

最早笑いすぎて目に涙を貯めている神威に神楽はカチンと来た。

「ウッサイネ！だったらテメェらレディィに何してんだヨ！コンチキショー！」

「別に君達は実験体だから関係ないよ？それこそ、男女関係なく」

「実験体っ！？」

神楽が高杉を見る。

「ソォ言う事だよ。分かったか？」

「んで、」と言って高杉は少年の腕を掴んで無理矢理立たせる。

「テメェの名前は何だ？」

「…実験体に名前は要らねぇだろ」

少年――否、少女は高杉と目を合わす力も無いのかそれとも意識的にか分からないが、机に片方の手を置いて支えて、高杉を見ない。

「良いから言え。じゃねぇと…」

高杉の足が神楽の足を襲う。
高杉の回し蹴りによって神楽の体がよろめく。
そして、倒れた神楽の首筋に――
刃が。
何時の間にか抜いていた刃は切れ味を証明するが如く煌めいた。
神楽は目を見開きながら唾を呑む。
たったそれだけの動作で刀に当たったのか首筋に赤い液体が流れた。

「！？」

「で、どうするんだ？」

少女は神楽を見る。
震えてはいないが瞳には恐怖を映していた。

「…らい」

「あっ？」

高杉の睨みに少女は机に置いている手を震わせた。

「風雷（ふうらい）」

「そうか…」

高杉はアッサリ神楽から刀を離し、少女――風雷から腕を離す。

「…で俺に何させるきだ？実験体ってよぉ？」

「風雷、テメェだけじゃねぇって言ってんだろ？そこのガキ――神楽もだ」

「認めねぇ…。コイツだけは駄目だ…！」

風雷の睨みに今まで見守っていた阿伏兎が溜息を吐く。

神楽はただ風雷の横顔を見ていた。

「まぁ…そりぁテメェの活躍しだいだ。テメェにしてもらう事は――」

高杉が言い終わってない時、風雷は崩れた。

高杉は死んじまったのか？と瞳に映して下を見る。

風雷は死んでいない。

ただ風雷は――神楽の華奢な腹に拳を決めていた。

神楽は何があったか分からないように目を開けて、

意識が途絶えた。

風雷は倒れた神楽の体をゆっくり地面に寝かせた。

「…何のつもりだ?」

高杉の見下した視線に風雷は気にしない様子で口だけを上下に動かした。

「ただ、コイツには…何も苦しんで欲しくねぇだけだ」

風雷はそう言うと体を無理矢理起こす。

「で、俺は何をするんだ?」

「簡単な事だァ。ただ、」

次の高杉の言葉は酷く辛いモノだった。

だが、風雷はふうんと鼻で笑う。

「それ位か」と小さく呟いて。

「分かったかァ?テメェが死んだらそのガキだからなァ?」

高杉は落ち着いた様子で寝ている神楽を一瞬見て、風雷を睨んだ。

「死ぬ筈がねぇだろ?それ位で」

話が終わると風雷は机に座る。

否、座るしか彼女の体を支える事が出来ないのだ。

そこで風雷は視線を感じた。

誰だろうと思い自分を見ている人間を見た。

神威だった。

「…何だ？」

神威は退屈そうな頬杖をついて風雷を見てから視線を落とした。
風雷は下を見る。
別に自分にとっておかしな物は無い。
なら、
コイツは何を見ている？
神威は突如立ち上がるとツカツカ足音をたてて風雷に近付く。
風雷には何をするか分からない。
思わず身構えようとするが、
そんな体力が残っている筈がない。
神威は目の前に来ると風雷の腰周りに手を回した。

「何だよ」

風雷は力無き腕を無理矢理動かして神威の胸板を押した。

「何が入ってるのかなぁって」

そう言った神威の手には、風雷が腰に付けていた物、ポーチが握られていた。

「！」

風雷は顔を歪ませ、神威の手の物を取ろうと手を動かす。
だが、神威はそれをアッサリ避けて風雷の横に並ぶと中身を全て神威によって食された何も無い机にぶちまけた。中には沢山の爆弾などがあったが他にも葉っぱが入った小瓶がコトリと音をたてて落ちる。

「…何これ？」

神威が呆気に取られたように小瓶を一つ親指と人差し指で支えた。

「…別に何でも良いだろ」

風雷の言葉に神威は足をあげて――

寝ている神楽の顔に向けた。

そして、

下ろした。

「止めろ！」

風雷の言葉にすんでのところで神威が足を止めた。

神威は笑顔で頭を傾げる。

どうする？とでも言いそうな素振りに風雷は息を落ち着かせながら

途切れ途切れに言う。

「く…すり…だよ…」

「薬？」

神威は目を見開いて頭を傾げる。

夜兎は治癒力が他の奴らとは違ってすぐに治る。

どれだけ治癒力が凄いかと言うと――銃で撃たれた場所が3日で治

ってしまう位。

そんな夜兎の一人が薬を持つ事に疑問を感じない訳が無い。

「何か…悪いかよ…」

風雷は神威に飛びかかってポーチを取る。

「残念だけど武器は回収するよ」

神威の言葉に風雷は頷く。

「そういや…俺の傘は…？」

風雷の言葉に神威は頭を傾げる。
そこで阿伏兎が口を開いた。

「団長が管理してるよすっとこどっこい」

「そうだっけな～？」

神威は変わらぬスマイルで風雷に話す。

「もう…牢屋でも構わないから…休憩させてくれ…」

高杉は頷いて神威に目で指示する。

「はいはい」
神威は頷く。
風雷は無理矢理体を机からおろして、
しゃがむ。
そして寝ている神楽の背中と足に手を回した。
そして、
持ち上げた。
風雷の閉じかけていた傷口がミシッと音をたてて開く。
服に更に血を染み込ませる。

思わず立ち眩みをする風雷だが、ちゃんと立っていた。
意識があるだけで素晴らしい状態なのに。

「…神楽(ソレ)持とっか？」

神威の形だけの心遣いに風雷は顔を横に振って、

「テメェなんかに持たさしてたまるか」

毒づいた。
神威はじゃあっと小さく言うと、
風雷の腹に軽く力を入れた。

「…つっ」

腹部に食い込む拳によって風雷の体はよろける。
そして神楽を起こさないように、
衝撃を与えないように倒れた。
肩で呼吸をする風雷の手から神楽を乱暴に神威ははがすと、立ち上がった阿伏兎に投げた。

「はっ…？」

予想していなかった阿伏兎は驚きながらも右腕だけで受け取った。
風雷はケホッケホッと咳をする。
口を覆った手の平にはべったり赤いモノが付いていた。

「…何するんだよ」

風雷は体を震える足で起こすと、神威を瞳に映す。

表情が分からない――感情が分からない――何が何だか分からない
笑みを浮かべる神威は、

「無理してるからさぁ。こっちが困るんだよね？」

溜息を零す。

「だいだい君全然寝てないじゃん。それじゃ明日から始められないんだよね？じゃなきゃ俺早く銀髪のお侍さんの所に遊びに行けないんだ」

「…知らねぇよゲホッゲホッ」

ハァハァと荒い息の風雷は何故か意識を保っている。
しかも、神威達と会った時からずっとだ。
はっきり言って普通の人間では一発でもお寝んね位のモノだ。
だが風雷は――二発攻撃を何のガードも無く受け、
意識を繋いでいる。
此処に来るまでずっと「神楽を地球に返せ」というワードを口にしながら。
奇跡と言っても過言では無い。

「まぁ良いから」

そう言った神威は素早く行動に移した。
風雷に向き合ってしゃがみ、風雷のお腹に肩を当てて、
立つ。
風雷にはもう抵抗する力がある訳無いのでされるがままだ。

「くっ…下ろせ…」

神威は風雷の言葉に反応する事無く高杉に気さくに「じゃあねー」と言って手を振る。
高杉はソレに応えず懐から煙管を取り出し口にくわえた。
神威達は部屋から出て行ったのであった。

攫われて、そこに片目を包帯で巻いた男が居たら恐怖だよね。（後書き）

さて、オリキャラの風雷、おはよー！

風雷：五月蝿いんだが。

銀時：こんなの普通だよ。こんなんで苦しんでたら後でもっと辛いぞ？

風雷：マジカ…

誘拐されたらどう持たれるか結構気になる。（前書き）

では、オリキャラ風雷の簡単自己紹介をします！

風雷：：。

神楽：：風雷は誕生日何時アル？

風雷：：４月２日だ。

神楽：：おおっ！早生まれ！

風雷：：うん。

風雷は何歳？

風雷：：１４か１５かな？

神楽：：何であやふやアル？

風雷：：一時期俺は：：

洒流奇：：ハーイ、ドクターストップならぬ作者ストップ！それは未来、コレに書くから今は何も言わなーい。

風雷：：悪いな？

神楽：平気アル！

洒流奇：じゃあ次。風雷は何座？

風雷：夜兎にもそーゆーの有るのか？

神楽：因みに私は餃子アル！

洒流奇：ハイ、黙るー。

風雷：大体、夜兎と人間の差は大きいぞ？構造的にも――

洒流奇：ハイ、作者ストップ！！それを言うのは未来！

風雷：…。

神楽：んーじゃあ風雷ってどんな男がタイプアル？

風雷：…んー。そーゆーの考えて無かったな…。

洒流奇：どーゆーの！？どーゆーの！？

風雷：とりあえずドンと構えている男が良いかな…？

洒流奇：ドン…？

風雷：うん。何でもかんでも考えて速やかに対処する奴。まぁ、出来ればだけど強いと尚嬉しいな。

神楽：風雷、男が出来るといいアルな！

洒流奇：まぁ、でもこんな男女を――

風雷：うん、ありがとう。

洒流奇：ギャアアアァァァ！

風雷：ただ一発殴っただけなのに、五月蝿い。

神楽：同意見アル。

洒流奇：今まで……応援ありがとう…。

―遺書―

長い文を読んで下さり、ありがとうございます！そしてお気に入り登録ありがとう！皆の応援を背に安心して逝けます！まさかガールズトークで死ぬとは…ありがとう（？）！

洒流奇

誘拐されたらどう持たれるか結構気になる。

風雷は周りを見る。
機械的な薄暗い廊下には誰も居ない。

「下ろせ」

「ヤダ」

この会話がずっと続く。
阿伏兎は溜息をついて「すっとこどっこい」と小さく呟く。

「…ん」

唐突に聞こえた声に阿伏兎は頭を傾げる。
前のペアは同じ事を繰り返している。
じゃあこの声は誰だよ…と思考をした時再度声がする。

「お兄ちゃん…」

この嬢ちゃんかと阿伏兎は頭を横に捻った。
死体の様に動かない神楽の体は少し暑い。

そんな神楽はポツリと小さく何回も同じ単語を発する。

「お兄ちゃん…」

阿伏兎はフゥと溜息を吐いて、

「嬢ちゃんが求める団長はもぉ居ねえよ」

と呟いた。

「何か言った阿伏兎？」

前に居た神威が振り返って頭を傾げている。

阿伏兎は「何でもねぇよすっとこどっこい」と呟いてフッと笑った。

神威は「ふうん…？」と頭を傾げて前を向く。

「下ろせっつてんだろーが！」

風雷の怒声が響いた時には――

神威は崩れて無様に座っていた。

「団長っ！？」

阿伏兎は神威に駆け寄る。

神威が崩れた事によって風雷は静かに立ち上がった。

「先…行くぞ」

壁にもたれかかりながら風雷は先に進む。

「団長…さっき…」

駆け寄った阿伏兎に神威は「大丈夫」と言って立ち上がった。

「…団長？」

「何、阿伏兎？」

「いっ…いや…」

阿伏兎の心配そうな顔は苦笑に変わる。
神威は風雷の元に歩む。
風雷の歩く速さは蝸牛並だった。
それでも懸命に歩いていた。
彼女の通った後には、壁には僅かに赤い模様が出来ていた。

「…何だよ？」

隣に並んだ神威を風雷は一瞥する。
神威は風雷の震える足と弱々しい背中の手を回した。
そして、
持ち上げた。

「へっ…？」

風雷の持ち上げられた後の第一声は酷く呆けた声だった。
風雷はゆらゆら揺れる自分の腕、何も支えずただ揺れる足――間近に見える神威の顔に頭を捻る。
今自分はどのように持ち上げられているのかと――
さっきのは俵担ぎとかだった。
では今は何だ？
確か…これ…

お姫様だっこ？

お姫様？この俺が？

風雷は神威に見えないように顔を俯かせる。
といってもどう足掻いても頭上にいる神威は風雷の姿が見えるが。

「下ろせ…」

風雷は人差し指と中指をまっすぐにさせ、
神威に刺す。

だが、

「つっ」

その前神威の背中に回っていた手が風雷の腕を掴んだ。
そして、握られた。
腕から痛みが全身に広がる。
只でさえあまり無い体力が削られる。

「次余計な事したら…」

神威の笑顔が風雷に向いた。

「殺しちゃうぞ♪」

風雷の体に寒気が走る。
風雷は「せめて…」と口を動かした。

「何か文句があるのかいすっとこどっこい」

横から阿伏兎が風雷を見る。
いや、文句は有りまくりっすけど…という言葉を呑み込んだ。
阿伏兎の肩に担がれている神楽。
脅迫か…と笑った。

欲しかった情報を貰うと何か苛つくのが普通だ。（前書き）

風雷、どうやって神威を地面に寝かしたんだー？

風雷：それは簡単だよ。力を使ってたりすると必ずキラーポイントが出来る。まぁ一瞬だけだけど。それを押しただけ。てか他にも色々な血流とかで……

…難しいから黙って下さい。

欲しかった情報を貰うと何か苛つくのが普通だ。

「…山崎」

現場に辿り着いた銀時と山崎。
真っ暗な闇の中、真選組の服は溶け込む。
溶け込めていない野次達は派手な色で自らを彩っていた。

「旦那…どうしました？」

案内した山崎が苦しそうに聞いた。

「情報をくれ」

銀時の低い声に山崎は躊躇いもせずに情報を与える。

「さっきの目撃情報ですけど…四人ともチャイナ服を着ていたそうです。攫った男達の特徴は…一人は大柄、もう一人は…攫われた女の子と同じ髪の色で、おさげだそうです。攫われ女の子は…旦那の知ってるとおりです。もう一人は…茶髪の天パの少年…」

「なぁ…天パの少年っつうのは…」

「旦那、副長達から聞いた人が居たでしょ？ソイツじゃなかったかとコッチは睨んでます。で、誰のか分からない小銭が少し」

山崎が指を指した方には握る場所が小銭がポツンと置いてあった。

銀時は多分神楽が持っていたモノだと伝える。

「じゃあ…茶髪は…」

「そのガキなんじゃねぇの？」

銀時はそう言うと踵を返した。

「あれっ…旦那…？」

「俺は帰るわ。じゃあなジミー…。サンキューな」

銀時は足早に家に向かう。

さっきの山崎の情報の攫った相手…

同じ髪の色でおさげ？

そんな奴一人しか居ねぇじゃねぇか。

「神威…！」

怒りが籠もった言葉をゆっくり銀時は吐いた。

欲しかった情報を貰うと何か苛つくのが普通だ。（後書き）

銀時：俺登場！

新八：…僕は？

神楽：忘れられているアル。

新八：もう、叫べない…。

神楽：仕方が無いネ。

銀時：そういや、オリキャラは？

神楽：作者がコレで先にあったらおかしいーとか云々で連れ去ったアル。

銀時：会ってみたかったのによー。

神楽：ドンマイアル。

銀時：何時会うんだーろ。

神楽：精々待ち続けるが良いネ。

女の子を閉じ込めるんならちゃんとした部屋にしろ。（前書き）

銀時：何で高杉と神威の方が俺より出演してんだ！！

新八：同意見ですね。何でツッコミ無しで話を進めてんですか！

銀時：本編ではアイツ等より１００倍位出演してっつうの！

新八：そうです！なのに何でコレでは僕等全然出てないんですか！

神楽：負け犬の遠吠えアルな。

女の子を閉じ込めるんならちゃんとした部屋にしろ。

ドサッと乱暴に落とされた神楽と風雷。
風雷は周りを見渡した。
ちゃんとした部屋。
寝床もあって奥に扉が二つある。
おそらく、トイレと風呂だ。
風雷は神威を睨む。

「何で…」

牢屋じゃねぇんだと言おうとした時、神威が答えを言った。

「君達が夜兎だから」

逃げられねぇようにっつう事かと風雷は理解する。

「なぁ…頼むから傘だけは返してくれ」

風雷は頭を下げた。
扉を開けた神威が「何で?」と聞いた。

「…その傘は親父のだから」

神威はふうん?と頭を傾げて、

「気がむいたらねぇ」

と言って鍵を閉めた。

「親父…母さん…」

風雷が呟いた言葉は意識を取り戻した神楽の耳に届いた。

「ねぇ？」

部屋に戻って来た神威が高杉の向かいの席に座って話しかける。

高杉は瞳を神威に向けてから「なんだ」と答えた。

「死体屋って言うの聞いた事ある？」

頬杖をする神威は明後日の方向を見ながら聞いた。

「あぁ…あるさ」

ふぅと唇からキセルを離して白い息を吐いた高杉はそのまま口を動かす。

「ソイツァ確か、殺し屋とは違って集団殺人をして、絶対取り逃がさず、それを見た者、見てなくても近くに居た奴らも殺すっつう残虐的な奴らだろ？」

「それそれ。名前しってる？」

「…いいや、知らねぇ」

「全てを蹴散らす雷(いかずち)を持つ男、『神鳴』」

阿伏兎が遅れて部屋に入ってくる。

「風を自由に舞わせ、死体を靡かせる女、『風紀』の二人で行われているんだ」

「良く知ってんなァ」

高杉が神威に顔を向けた。

神威はニコッと笑った。

「だって夜兎の中で異端な二人だもん。スッゴい強いらしかったから戦いたかったんだよネェ」

「“異端”？」

高杉の問いに阿伏兎が答える。

「あぁ。ソイツらは俺達と同じ武器は使わないんだ。夜兎族は普通傘しか使わねぇ。だけど、『神鳴』は刀を使って『風紀』は…」

阿伏兎が何だっけなぁと頭を悩ましていた時、神威が口を開く。

「血」

「血？」

高杉が眉間に皺を寄せる。

「うん」

神威は当たり前のように頷いた。

「どうやって使ったか分かんないけど」

「って…いきなり何だよ。ソイツらの話題を出して」

「夜兎族はソイツらを嫌ったんだよ。だから夜兎族の大人達は『雷』と『風』って名前は子供につけないって決めたらしいんだよねぇ」

「…成る程」

高杉は理解したように頷いた。

「ソイツは良い話だなぁ」

高杉の言葉に阿伏兎は疲れたように溜息を零し、神威は何時も通り笑った。

女の涙にときめくのは男だけじゃない。（前書き）

銀時：つうか作者。

洒流奇：うん？

銀時：幾ら２０話位貯めてるからってよぉ…

洒流奇：貯めてるからってよぉ？

銀時：暇すぎだろ。

洒流奇：うんうん。夜中に予約掲載して満足感にあふれながら次の日も授業寝ちゃうんだよ…へっ！？何言ってんだ！俺は何時でも忙しい！

銀時：だったらこうやって前書きに俺ら出す余裕無いだろ。毎度毎度…。いきなり始まったと思ったら永遠と続いてるし…。

洒流奇：サービスだよサービス！

新八：だったら僕を出すサービスして下さい。

洒流奇：…新八。

新八：何ですか？

洒流奇：チミチミした男は嫌われるよ？

新八：五月蝿エエエェェェェ！！

女の涙にときめくのは男だけじゃない。

「…何で私を気絶させたネ?」

神楽は風雷の肩を勢いよく掴んだ。
風雷は一瞬顔を痛みでしかめさせてからニッコリ笑った。

「君には、そのままで居てほしいだけ」

「…?」

予想外の解答に神楽は頭を捻らせる。
風雷はクスッと笑った。
そして神楽の頭を撫でる。

「なっ…私はガキじゃないネ!」

「ん…懐かしい」

風雷の顔が綻んだ。
そして周りを見回してから頷く。
神楽はんっ?と頭を傾げた。

「監視カメラと盗聴器は無いから平気か」

「…何がネ?」

「俺の本当の名は――」

「名は？」

いきなりの神威の声に風雷は体を震わせてから周りを見た。
神楽もキョロキョロ見回す。

「此処だよ、此処」

声がした方には――窓があった。
そこから見ていた。

「…」

「まさか偽名だとはね。で、名前は？」

「神鳴」

「はい、ダウト」

神威の微笑みに神楽が怒鳴る。

「何でお前なんかが分かるネ！本名に決まってるネ！」

「だって神鳴なんて、死体屋の一人の名だよ？おかしいだろ？」

神威の宥めるような口調に神楽は腹を立てながらも神威の発したワードに頭を傾げる。

「…死体屋？」

「それは後で風雷に聞いてね。あっ偽名なんだっけ？」

「…」

神威は俯いた風雷の顔を見えないのを残念そうに顔をつまらなそうにしてから、で？と聞いた。

「…雨砂（あめさ）」

「それは本名？」

神威の言葉に風雷――雨砂は頷いた。

「分かった。じゃあねー」

カーテンがしまって足音が遠くに行った。

「私は…」

雨砂を見た神楽は時が止まった感覚がした。
雨砂は笑っていた。
清々しい笑顔で。
逞しい、神楽は惚れ惚れした。
さっきの神威達の言葉を思い出す。
こんなに格好良いのが…女の子？
こんなに頑張って私を守る子が…女の子？
確かに、顔立ちは可愛らしいので女の子に見える。
ただ、

それにしては格好良すぎる気がした。
すこし、羨ましいと思った。

「…雨砂」

「風雷って読んでくれ」

「…？」

「この世界には俺の本名を知ってる奴なんか居ねぇよ。だから、風雷って言ってくれ」

神楽は頭を傾げる。
つまり、雨砂という名も――

「そうだよ。偽名」

雨砂、いや、風雷は応えた。

「何で…名前を…？」

「沢山有るからだよ」

此方を向いた悲しそうな声と笑顔に神楽はどう対応すれば良いか焦る。
それを理解した風雷は神楽の頬をさすって「落ち着いて」と優しく言った。

「…神楽、君は何かされたらすぐに俺に言うんだよ？絶対にさせないように尽力は尽くすけど…力不足かもしんないから」

昔のお兄ちゃんのような温かさに神楽は瞳に涙が溜まっていく。

「うっうっ…」

「ほらほら…落ち着いて？大丈夫だから。怖い思いはさせないから」

神楽を抱き締める風雷の優しさに神楽は抑えていたモノを出した。

数分後、落ち着き始めた神楽は赤くなった瞳を袖で拭きながら風雷に震える声で聞いた。

「なっ…何で…私を頼ってくれないネ…わっ…私確かに弱いネ。でも、私っ私だって…やれば出来るネ」

風雷は神楽の問いに応えず、「風呂で落ち着いてきな」と促されるまま、風呂に押し込まれた。

「…風雷？」

「何だ？」

「風雷は…何時入るネ？」

「んー？」と閉まった扉越しから聞こえた。

「後で。神楽、俺が入ってる時は風呂の扉の前、脱衣場ん所に居ろよ？何かあったら嫌だからな」

「だったら…」と神楽の明るい声を聞いた風雷は突如開いた扉に入

れられた。

「一緒に風呂入ればＯＫアルヨ！」

勢いで入れられた風雷は倒れていたので、頭上にある輝かしい笑顔に目を細めた。

「俺には…眩しいや…」

「何か言ったアルか？」

「良いや、つうか恥ずかしいから良いよ。俺は――」

とラスト数文字という所で「良いから良いから！」と神楽の手が服に当たる。

「いやいやいやいや！平気だから！大丈夫だから！」

風雷の抵抗は虚しくも――

神楽に適わなかった。

「んー…」

神威は部屋の前で話を聞いていた。

「沢山名前が有るかぁ…」

神威は頭を可愛らしく傾げて、笑った。

「面白くなりそうだ」

大層な話は無いって言ってる奴いるけど、本当に情報が欲しい奴は気にしてらんねぇ。

洒流奇：銀ちゃーん。

銀時：お前にちゃん付けされるのキモイ。

洒流奇：銀さん。

銀時：何だよ？何かあったのか？何かくれりのか？

洒流奇：未来（第二章）の敵役の人さぁ、ただの天人が良いかな？
夜兎が良いかな？

銀時：興味ないが…。第二章って俺出るのか？

洒流奇：ううん。神威達が活躍。

銀時：じゃあ興味ねぇよ！つか主役はオ・レ！

洒流奇：主役は風雷だよ？まぁ良いじゃん。

銀時：良くねぇよ！

新八：僕の前で言えますか？

銀時：…新八。

新八：銀さんは今回も出れるじゃないですか。僕は出れないんですよ？

銀時：お前にも未来は有るって。

という事で完璧にスッゴく先ですけど、第二章の敵、ただ（何かしら凄い）の天人か、夜兎にしたいんですが、感想お願いします！

（まだ第一章書き終わって無いけど）

大層な話は無いって言ってる奴いるけど、本当に情報が欲しい奴は気にしてらんねぇよ

「なぁ…ヅラ」

「ヅラじゃない桂だ」

長髪の男、桂小太郎はそう言って茶を啜っていた。
此処は、攘夷浪士の拠点の一つだ。

「で、どうしたんだ銀時。高杉の情報をくれなんて。夜中の三時だぞ？」

「…神楽が攫われた」

小さく言った言葉に桂は茶碗を落としそうになる。

「リーダーが！？どうした！」

桂は勢いで立ち上がる。

「…それを聞きに来たんだろうが」

立ち上がった桂を見ず、銀時はただ横を見ていた。
桂の頬に汗が流れた。
桂は静かに座る。

「これと言って大層な話は無いが…知ってるか銀時」

「知らねぇよ」

「…まぁそう拗ねるな銀時。今、春雨と鬼兵隊が繋がっているのは知ってるだろう？」

「…あぁ」

あのガキの御陰様で、と心中で呟いた。

「それで、今江戸を崩壊させる手立てを考えていたとは聞いたが…」

「考えてい“た”？えっ何？過去形？」

「銀時、昔の町外れの近松村で起こった近松蠍事件（ちかまつさそりじけん）の名位は知っているだろう？」

「あれか…確かどっかの頭がいった奴が毒まきやがったせいで起こった事件だろ…？でもありゃ死者は零で、誰も体を壊してねぇっつう話だろ？」

耳をほじった銀時は何か変かよ？と聞く。

「それをやったのは――春雨だ」

その言葉で銀時の眉間に皺が寄る。

桂は気にせず淡々と話す。

「当時春雨はその村のとある住人を消したかったのだ」

「とある…住人？」

「結構昔だが、死体屋と名乗る奴らが居た」

「死体屋？」

「あぁ、殺し屋よりも正確に殺す奴らだ。ソイツらは……夜兎族の奴らで、そこで匿われてた。春雨にとってはソイツらが邪魔だったのだ」

「何でだ？」

銀時の問いに桂は静かに応えた。

「春雨の幹部を殺しまくって悪行を出来ぬようにしたらしい」

「…成る程な。だが、夜兎だからって毒が聞かない訳は無いだろう？つうか、春雨がそんなヤワな毒まくか？普通」

「そんな訳あるまい。春雨は村人共々殺すつもりだったからな」

「だったら…」

何で誰も死んでねぇんだよ？と銀時の頭に多々ある疑問が更に増えていく。

「死体屋の『風紀』という女の御陰らしい」

銀時の目を見て桂は話す。

「その女の得意とするのは…毒作り。しかも、その毒は自分の血らしい」

「…血？」

「あぁ。どうゆう経緯でそうなったかは知らぬがソヤツの血、毒にも薬にもなるらしい」

「…」

「ソヤツは自分の血を流し、村に漂う毒を自分の血の毒で相殺したのだ」

「…んな事」

「出来る筈が無い…とでも言いたいのだろうが、仕方があるまい。現実なのだからな」

うむうむと頷く桂に銀時は「で、それが…何だよ。今には関係ないだろ？」と言って頭を傾げた。

「だから言っとるだろう。ソヤツの血は猛毒になると。では、それを、血が猛毒になる生物を作れないかと春雨の一人が考えたらしい」

「…？」

「ソヤツらは結局死んだらしいが…その時その女の死体からは猛毒が出て、その周りに居た奴らは皆死んだらしい。周り、と言っても半径３０キロ位の距離だったらしいが。鉄や金なども貫く、という話だ」

「それが、もし…」

銀時の力無い声に桂が頷いた。

「そうだ」

桂は神妙な顔をして、
口を割った。

「江戸でやられたら皆、死ぬ」

「…」

銀時の顔が強張る。

「だが、ソイツだけなんだろ…そんな死体になっちまう奴はよ?」

「だが、春雨の中の貿易相手の奴隷商人達は血が毒にさせる事に成功させたらしい。夜兎族の子供だ」

「だったら…何で神楽が攫われるんだよ」

「その子供、他に捕らわれている奴らと一緒に逃げたらしい」

「…」

「だから…リーダーが攫われたのだろう」

「今、高杉は…何処に居るんだ?」

「分からん。江戸をそんな風にさせたくないのはやまやまだが…す

まぬな」

桂はそう言って、俯いた。
銀時は頭を横に振って、「邪魔したな」と呟いた。
銀時は立ち上がり、扉を開け、
外に出た。

「高杉…貴様は本当に遠くなってしまったのだな…」

銀時が去った後、桂が呟いた友への言葉は、

誰にも届かなかった。

体と心は比例するようで反比例。（前書き）

スイマセン！

この前の話の銀さんのコメント、くれりとなっていますが、くれるです！

神楽：本当にいい迷惑ネ。

風雷：…神楽が今更言うか…。

神楽：勿論ネ！私が言わずに誰が言うアル！？

風雷：…坂田さん？

神楽：今居ないアル！風雷のせいアルけど。

風雷：悪ぃ…。

洒流奇：神楽、風雷を苛めちゃダメだよ？この子は――

風雷：ストップ！お前何言おうとした！？

洒流奇：風雷はツンデ――

風雷：黙れっ！

洒流奇‥フゲッ。

体と心は比例するようで反比例。

風雷は神楽の鎖をぶち壊した。
勿論、自分のも。
脱衣場に鎖が散らばった。
そして、服をぐちゃぐちゃのまま床に置くと風呂の中に入った。
風雷は体を一通り洗ってから温度を確かめるように恐る恐る右足を入れる。
神楽は先に湯船に浸かっていた。
風雷が湯船に入るとザバァンと水が流れた。
二人でクスッと笑いあった。
だが、風雷の表情は少し堅い。
なにせ、傷が染みるのだ。

「大丈夫アルか風雷？」

「あぁ、平気」

「なぁ…風雷」

「んっ？」

神楽はブクブク水中で息を吐く。

「あいつらに風雷は何されるアルか？」

風雷はその質問を聞いて、あっさり応えた。

「大丈夫。大した事じゃないよ。ただ少し毒を飲まされるだけ」

神楽が勢いよく立つ。

水に波紋が作りだされた。

「だっ大丈夫じゃないアル！それって…！」

怒りで回らない呂律を回らせて、神楽は舌を噛んだ。

一人痛みで悶えているのを見て風雷は微笑ましいようすで見ていた。

「大丈夫だから。安心して」

「安心出来る訳無いネ！私が――」

「神楽が何出来るの？」

腕をぐわんぐわん振り回して怒りを表現していた神楽の動きが止まった。

そして、俯く。

「…神楽は俺に希望を与えてくれればいいから。なっ？」

「…嫌アル」

悲しい声を発する神楽。

「…」

「私は風雷が傷付いて欲しく無いネ。だから、無力でも良いから…風雷を手助けしたいネ」

「…」

「駄目アルか？」

神楽が頭を傾げる。
神楽の顔に勢いよく水が弾いた。
頭がビショビショになった神楽は数秒の間ポカンとして脳内で情報を処理。
処理後、「何するネ！人が心配してるアルヨ！」と激怒。

「神楽は此処から出たいか？」

優しげな笑みは神楽の怒りの気持ちをうやむやにする。

「そりゃ銀ちゃんや新八の所に帰りたいアル…」

俯く神楽。
そんな神楽に風雷はまた、
水をかけた。

「ちょっ…何するアル！ちょっやめるアル！」

「だったら…俺の言う通りにして」

「なっ何言って…」

「帰りたいだろ？」

有無を言わさず強く言う風雷の言葉に神楽は小さく頷いた。

「今は我慢してくれ」

強い言葉に神楽は黙り、頭を縦に振った。
風雷は満足そうに頷いて、「のぼせちゃうだろうから出な」と神楽を外に出した。
神楽は脱衣場に置いてあるタオルで体を包む。
風雷は一回外に出るとポーチだけを取って再度風呂に入っていった。
神楽は着替え終わって言われたとおり脱衣場で鎖を弄りながら待っていた。
数分、いや数十分位経っただろうか。
やっと風雷が風呂から出て来た。
風雷は真っ白な体を拭くと、ボロボロの服に腕を通した。

「ふぅ…大丈夫か神楽？長くて悪かったな」

「別に…平気ネ」

立ち上がった神楽にのぼせたせいか頬をほんのり赤く染めていた風雷が優しく笑って、

「ありがとな」

礼を言った。
二人は扉を開けた。
部屋には夕食がお盆に乗せられて置いてあった。

「ご飯アル！」

喜んでキャッキャ言う神楽はすぐさま箸を取って、

「いっただきまーす！」

元気良く米を口に流そうとした。
だが、神楽は手が掴まれて米に箸が届かなかった。

「…どうしたアル風雷？」

ぷくっと頬を膨らます神楽に「ちょっとごめん」と米を取ると鼻を近付け、匂いを嗅いだ。
神楽は何かおかしいか分からない。

「神楽…今日の夕食は俺のポーチの中の葉っぱにしな」

ひょいっと神楽の箸を取って床に置いた。

「何でアル？」

「毒が入ってる」

「！」

神楽の顔が強張った。

「毒って…」

神楽も米の臭いを嗅いだ。
普通の温もりのある米の良い香り。
思わずよだれが出てしまいそうな位良い香りだ。

「はい。今日の飯だ」

そう言って風雷は小ビンの中の葉を数枚取って神楽の手に乗せた。

「…コレだけアルか？」

「数日続けられたら困るだろ。我慢しな」

むしゃむしゃ食べる風雷は美味しそうな顔をしていた。

神楽も恐る恐る口に入れた。

「…何にも味がしないアル」

何となく体に良さそうな葉の香りが口内を占拠する。

心情的には物足りない感じだが、体がもう食べれないと言っている感覚がした。

「例え量が少なくても栄養がその分有れば良いんだよ」

ウィンクをした風雷に神楽は成る程と納得した。

「じゃあコレ…どうするアルか…？」

勿体無いよ？と神楽は目で訴える。

ようは、神楽は何となくまだ食べたいのだ。

体が拒否しても心がＯＫサインを出している神楽は風雷の服の袖を掴んだ。

「天人、コレ要らない」

風雷は2つのお盆を持って窓を開けて、
落とした。

「米えええぇぇぇぇーーー！」

「あっつぅぅぅうううーーー！！」

外に居た天人と神楽の絶叫が春雨の戦艦に響いたのだった。

「ねぇ…阿伏兎？」

「何だよ団長」

「あの風雷って子、調べといて」

椅子に腰掛けている神威の言葉に阿伏兎は唖然とした。

「はっ…？」

それ位しか言葉が出ない位。
阿伏兎の反応は当然と言えた。
何せ宇宙海賊春雨は様々な戦いが有り、様々な問題が有る。
そんな情報量の中で一人の小娘を見つけるのは――
川で元気に砂金取りしているようなものだ。

「宜しくねぇ」

神威はそう言うとグルンと椅子を回して阿伏兎に背を向けた。

「まぢかよ…」

阿伏兎の呟きは神威に聞こえたか聞こえなかったかは、
神威にしか分からない。

体と心は比例するようで反比例。（後書き）

入浴あったけど、エロくありませんよ！！

嗅覚が凄いってそれって犬なの？えっ犬なの？（前書き）

洒流奇：今回は鬼兵隊の高杉と第七師団、神威、阿伏兎でーす。

神威：こんにちはー。

高杉：……。

阿伏兎：…こんにちは。

洒流奇：三人って仲良いの？

神威：さぁ？

阿伏兎：…仲良いか…？

高杉：仕事の付き合いだ。

洒流奇：…とりあえず仲良さそうだね。

高杉：目大丈夫か、テメェ…。

洒流奇：多分。右は1あるよ？

高杉：…。

嗅覚が凄いってそれって犬なの？えっ犬なの？

はてさて、部屋でぐっすり寝ていた神楽はふと目が覚めた。
隣にいる風雷を見た。
居ない。
神楽は周りを見渡す。
風呂の電気が点いている。
静かに脱衣場の中に入る。
水の音はとりあえず聞こえない。
神楽は軽い気持ちで扉を開けた。
中には――
風雷が少し切れて血が出ている指の血で小瓶を詰めている光景だった。

「ふ――」

神楽の開きかけた口が風雷の小さな手で覆われる。
風雷が切れてない綺麗でしなやかな人差し指を唇の前にセットし、
静かにしてと口パクで神楽に教えた。

「（…何してるネ？危ないアル。今すぐ止めるアル）」

「（こうしなきゃ駄目何だよ）」

「（駄目アルよ。風雷只でさえ傷だらけアルよ？）」

「（頼む…神楽も帰りたいだろ？）」

その言葉は神楽を黙らせるのには充分だった。

「…おやすみ」

そう言って風雷は扉を閉めた。

夜は長い。

―ＮＥＸＴ　ＤＡＹ―

「ほい。コレを飲め」

高杉に投げられた小瓶を片手で風雷は受け取った。
風雷の鋭い瞳は高杉に向いたままだ。

「因みに…この毒は効果は？」

高杉は「以前」と言いながら近くで笑って成り行きを見ている神威を見た。

「アイツを捕まえる時に使った奴だよ」

以前、高杉と春雨が手を組んだ矢先に起きた事件（丁か半か）。
神威が危険視されて、処刑されかかった時に使われた毒――象さえ混濁させる猛毒。
それを小瓶いっぱいに入れ、
風雷に渡したのだ。

「致死の可能性は？」

「まぁ少しは有るなぁ。まっそこのガキも耐えられたんだからテメェも耐えられるんじゃねぇのか？」

「神楽にコレをやるのか…？」

「テメェが一発ケイオーだったらな」

「だったら、」

風雷は小瓶の蓋を床に落とす。

コロンと小さな音が静かな部屋に響いた。

「余裕だな」

風雷は笑って口に一気に流し込んだ。

「はぁ」とまるで風呂上がりの牛乳のように声をあげた風雷は唇を袖で拭く。

「ふぅ…消化中っつうのはやっぱり重たいな」

ピョンピョン跳ねて溜息を吐いた風雷は、「じゃあ戻って良いか？神楽が心配してっから」と言ってドアノブに手をかけた。

「…おい」

その背中を高杉が止めた。

「何だよ？」

みすぼらしい服を翻して風雷は高杉を見た。

「オメェちゃんと飲んだのか？」

「テメェの前で飲んだだろーが」

ギロリと見下した高杉の視線に風雷は嘲るように笑った。

「片目は坂田銀時を守る為に天人にやられたからって大丈夫かよ？見えるかー？」

挑発的な言葉に高杉は――

「…テメェ。何であの時の事知ってんだ」

質問した。

問いただした。

そう、それはアノ時に戦った者しか知らぬ事。

それが、

こんな子供が知っているのはおかしい事だ。

「んー別に良いだろ？それとも、そんなに知られたくない事だったのか？」

ニコッとわざとらしく微笑んで、

風雷は高杉に自ら近付く。

「なめんなよ。俺は生きるのに必死なんだよ」

高杉の、
胸倉を掴んだ。
爆弾なりの、
お返しだった。

「じゃっ帰らせてもらおうか、一人で帰っちゃいけねぇんだよな？」

手を離して、クルリと踵を返した。
高杉はその背中を、ボロボロな服で覆われた小さな背中を、
精一杯睨む。
やがて、「フン」と息を吐いて神威に目で言う。
神威は「はいはい」と言いながら頭の後ろで手を組んでいる風雷の後ろに立った。
それを確認した風雷は扉を開けて外に出た。

「君さ…何もおかしな感じは無いの？」

外に出た途端の神威のコメントに風雷は「何がだよ？」と適当に応える。

「毒だよ。流石にそんなに普通には無理でしょ？」

神威が疑問を感じるのは無理も無かった。
自分でさえ、意識が朦朧としてぶっ倒れたのだ。
そんな神威には、今の風雷の状態に、おかしいと思わない筈が無い。

「なんでだよ。別に無理矢理やればいける。あぁ、そういや傘何時返してくれるんだ？」

「返さないよ」

神威はハッキリ言う。

「返してなにかされたら困るし」

「ふうん…？つまり、俺が怖いの？俺に勝ったくせに」

ダッサと薄い唇を上下に動かして、悲しそうな笑みを浮かる。

「どうかした？」

「あんたさ、良いよねぇ」

風雷は心底羨ましそうに声を出した。

「何が？」

「家族を否定出来て」

「…？」

思わず頭を傾げる神威。

だが、残念ながら後ろに居るのでその顔は伺えない。

「家族、つうか雑魚は要らないって言ってるんだってね？良いねぇ。そーゆー事言えんのは周りに雑魚も居るんだろ？」

「知らないよ。興味無いからね」

「良いねぇ。『興味無いからね』っか。くぅ、言ってみてぇコメン

トだよ」

「…言えば？」

風雷は一旦足を止めて振り返った。
笑みを消した無表情の神威と数秒間目が合う。
やがて風雷はプッと吹き出す。

「ははっ…そんな事言えたら良いよねぇ…？つうか腐ったテメェをまだ諦めてない家族が居るなんてねぇ。感動だね」

「…興味無いよ」

「興味無い？何言ってんだよ」

笑って言葉をスラスラ紡いでいた少女の顔から――
表情が消えた。
真っ直ぐ神威を睨んでいる。
組んでいた腕も下ろした。

「だったらアイツを此処に連れてくんじゃねぇよ」

静かな怒りを神威は感じた。
荒々しいような――妙に静かな怒りが、
神威を襲う。

「あんな人の為に必死こいて自分を傷つくのを厭わねぇ馬鹿を、父さんでさえ殺しかけた兄ちゃんをまだ諦められない馬鹿を、」

バァンッ！と音がした時、壁に風雷の傷だらけの右手が食い込んで

いた。

「連れてくんじゃねぇよっ!!」

廊下の隅の隅まで響く声は、
神威には響いたか、否か。

その後風雷は「傘返せよ」と言って神威に背を向けて部屋に向かう。
神威はその背中を追う。
笑いもせずに。
風雷を部屋に入れると神威は外の番人の夜兎に「頼むよ」とだけ告げて戻る。
何も考えずに。

「風雷平気アルか?」

昼食を目の前にして少しよだれを垂らしながら聞く神楽に風雷は「平気」と言って笑った。

「風雷、朝食は平気だったアルから、昼食も平気アルヨネ?今度はちゃんと食べるアルヨ?」

朝食には何も入っておらず、その時風雷は神楽に「俺のも食べて」と言った為、風雷は朝食を食べていない。
風雷は昼食の匂いを嗅ぐと、コクンと頷いて「全部食べな」と言った。

「風雷は食べないアルか?」

神楽の問いに風雷は「食べる気分じゃねぇから」と言って風呂に向かった。

「風雷平気アルか…？」

神楽は真剣に考えても分からず、結局ガツガツ食事。
その頃には、すっからかんになっていた。
さっきの事は――忘れて。

風呂上がりの女の子のお誘いした場所は涼しげな所が良いかな？（前書き）

洒流奇：ハーイ、以前の前書きグループに風雷投入。

風雷：…何で俺が加わったんだよ？

洒流奇：勘。

神威：てか俺達だったら話す内容無いと思うよ？キャラ崩壊するだろーし。

高杉：どう意見だ。テメェみたいな国語の平均点取れずにヤバいとだけ思ってる奴が書ける筈が無い。

神威：ありゃりゃ。そうなの？

洒流奇：レッツUターン！

風雷：逃がさねぇ。

洒流奇：離せ風雷！俺は、俺は行かなきゃならない所があるんだ！

高杉：布団でのほほんとした奴が何を言ってんだ。

神威：で、変な事するのかな？下手したら君、殺されちゃうよ？（俺に）

風雷：半殺しの方が良くないか？

高杉：なんなら生き地獄はどうだ？

神威：生き地獄って具体的にどうするのかな？

洒流奇：変な所で意気投合しないで！作者だから！作者だから！

阿伏兎：俺は忘れられてるんだな…。

風呂上がりの女の子のお誘いした場所は涼しげな所が良いかな？

「ゲホッゲホッ…」

風呂に入ると抑えていた咳が出てきた。
手で覆って、落ち着いてきたのでその手を見た。
僅かに血で染まっていた。
それを見て風雷はクスッと愛らしく笑った。
風雷の雪のような美しい背中の右肩らへんに丸い判子のようなモノが描かれていた。
中には竜が、
その首に纏わりつく鎖に、
囲まれていた。

「…良かった」

昨日神楽と一緒に入る時出来る限り背中を見せなかった。
神楽もおかしいとは感じないみたいで良かった。
神楽は何か分からないだろうが、
神威は分かる。
だからバレてはいけない。

「洗おう」

さっきの毒の消化でか、体が重い。
あの時、もっと酷い毒を飲んでたじゃないか。

「…私も雑魚になったな…」

ははっ、と力無き笑いが風呂の中に響く。
早く体を洗わないとは、という事で体に水を打ちつける。
血はゆっくりと下に流れていく。
最終的に美しいラインの体から離れ、
流された。
体を湯船に浸ける。
リラックスしていく体から疲労というものが出た。
やがて風雷は湯船から出て、風呂から出た。
体にタオルを巻いてゆっくり服を体に捲く。
ドアを開けた。
神威が居た。

「!?」

風雷は驚愕とした。
神威の傍らには倒れた神楽が居た。
争った形跡は無い。
それに、音も無かった。

「ちょっと薬で寝てもらってるだけだから。話、良いかな?」

薬…?
風雷の頭に疑問が浮かぶ。
そんな匂いは…無い。
無かった筈。

「飲み物だよ。そんな事良いから来てもらえるかな?」

「…」

風雷は肩にかかってるタオルを床に置く。
濡れた頭を左右に振って犬のように水を落とす。

「分かった…。神楽に何もすんなよ」

「勿論♪」

笑った神威はほのかに温かい風雷の細い手首を握る。
風雷は顔を僅かに歪ませた。

「痛ぇよ」

「我慢だよ。さて、じゃあ急がなきゃなんないから」

グイグイ引っ張り、ドアを開けた。
分厚いドアはゆっくり開いた。
そして、
閉まった。
神威のやや速いペースに息も乱さず風雷はついていく。

「はい、入って」

風雷は部屋に押し込まれた。
小さな部屋だった。
六畳も無さそうな部屋。
そこに、固そうな鉄の椅子と正反対に柔らかそうなソファが有る。
そのソファには高杉が優雅に座っている。

神威は風雷を鉄の椅子に座らせる。
椅子には手を置く所が有り、そして手を置く所には、
動かさないように縛る手錠が有った。

「…何だよ。わざわざこんなご大層な椅子を寄越して」

神威の手により、無理矢理手錠をされ、外されないようになる。
風雷は引っ張る。
椅子がガタンガタン揺れるだけだった。
良く見るとその手錠は普通のモノとは違う。

「無理だよ。それは壊せない」

「どーも、素晴らしい御忠告感謝します」

風雷は唯一動ける足で椅子の脚を蹴った。
この椅子もかなりの硬さで、そう簡単そうには壊れそうに無い。

「チッ…」

舌打ちをした風雷はやむを得ず前を向いた。
笑っている最強タッグに少しカチンときながらも風雷は冷静だった。

「君、親は?」

神威の問いに間も空けずに風雷は答える。

「死んだ」

「親はどうして死んだ?」

「戦争で」

「戦争？何でテメェの親が戦争してんだよ」

高杉が話に入ってくる。

「知るか」

目線を逸らして溜息を零す。

高杉が神威を見る。

神威はコクンと頷くと動いた。

風雷の細い首に――神威の指が食い込む。

「脅迫か？」

大して力が入ってないのか風雷は余裕綽々の顔で神威を見上げた。

「そうだったらどうすんだ？」

高杉の問いに風雷は笑った。

「別にな。俺が死んだら困んのオメェらだしな」

「あっ…？」

高杉が顔をしかめる。

神威は目を開いて風雷の脈をただ感じていた。

「最初の実験から気付いてんだろ？俺はフツーの夜兎の奴らより毒

に抗体があるっつう事。さて、此処でお前らが俺を殺しました――
するとお前は神楽を使う。だが、神楽は全く毒に無縁の生活をして
たんだぞ？頑張っても一年はかかる。つうかオメェらは自分達側の
夜兎の奴らは殺したくないんだろ？だから神楽を捕まえた。そこで
オマケとして付いてきた俺が神楽より使える事が分かった筈。だっ
たら――」

バキンッ
風雷の手錠が悲鳴をあげた。

「俺を殺せるか？」

風雷は神威の腕に手を添えた。

「あの手錠を取りやがった…」

高杉が風雷を忌々しいように睨む。
神威は違う所に疑問を感じたのか、目を見開いて口を開いた。

「君は毒に縁のある生活を送ってたの…？」

神威の問いに風雷の動きが一瞬止まる。
だが、すぐに「さあね」と言って立ち上がった。

「んな事良いから傘返せ。傘」

「どうする高杉～？」

「けっ…返してやれ」

「へっ？」

こりゃまた何で？と言葉を吐いた神威は驚いたようで風雷の首から手を離した。
風雷は首をさすって「傘…返してくれんだよな…？」と思わず頭を傾げた。

「ただし、テメェの情報をこっちに寄越せ」

「はいはい。分かりましたよ」

「そんな事かよ」と溜息を漏らした風雷。

「俺は今地球で『半殺し屋』をやってる。それとある程度情報力はこれでも保持してる」

「『半殺し屋』って？」

神威の純粋な質問に、

「前の奴を読み返せ馬鹿野郎」

風雷は変な解答を出した。
ってえっ？止めて下さい。設定壊すの！

「まぁ作者がうっせぇが分かったか？」

「ふうん…成る程。高杉も見る？」

現代の携帯を一丁前に使いこなした神威は高杉に画面を見せる。

高杉は一瞬視線をやるとすぐに風雷に戻した。
…って宇宙にまで電波届くんだ…？

「まぁそれで良い…神威、渡してやれ」

神威がハイハイと五月蝿いなぁとでも言いそうな顔で外に出た。

「んで…俺と二人きりでいいのかよ？」

「どーゆう事だ？」

「テメェを殺っても良いのかって事だよ」

高杉がフンッと嘲るように笑った。

「テメェに殺られる程弱かねぇよ」

「ふーん、っと」

風雷は椅子に座り直して頬杖をついた。

「さいですか」

「そぉーだよ」

「なぁ」

「なんだァ？」

「何で地球を消したいんだよ？」

「当たり前だろ。松陽先生を――」

「生死を気にしない世界だからか？」

高杉を楽しそうに見つめる風雷。

高杉は風雷を、

睨む。

「でもそのわりにはしょうよう先生だつけ？その人の存在が嫌いなんだな？」

「ハァッ？何言ってんだテメェ」

「だってさ、お前その人の生きた歴史を消したいから地球を消そうとしてんだろ？」

「んな訳――」

「あるだろ？」

風雷の強い言葉に高杉の冷めた心が少しずつ熱を帯びる。

「だってさ、だったら生きた証を俺は残したいし、残してほしーし。分かる？つまり――」

風雷は高杉に近付き、

高杉に顔を近付けた。

互いの顔が数センチ先にある。

互いがすぐに殺せる距離に。

「あんたはしょうよう先生を憎んでる訳だ。っくう悲しいねぇ」

高杉から顔を離すとやれやれと手を広げた。
高杉はそんな風雷の――

胸ぐらを掴んで、
引っ張る。

そして、

怒気が籠もった声を風雷へと向けた。

「テメェ何かが分かるもんじゃねぇ」

だが、
風雷は慌てず、
高杉を見据えた。

「分かる訳ねぇだろ。他人なんだからな」

高杉は高杉よりも冷めた瞳の自分の映っている姿を見る。
憎そうに歪めた顔――では無かった。

目を見開いて驚いていた自分の顔が映っていた。

自分が映っている瞳が細まった。

「っつう事を言いたかっただけだ。離せよ」

高杉の手を振り払った風雷は高杉の横、ソファに尻を沈める。
「うわぁ…柔らかいなぁ」と無邪気な子供のように喜ぶ姿は「分かる訳ねぇだろ」と言ってた子には見えない。
見えない。
高杉はギッと歯ぎしりした。
俺はこんなガキに言い負かされたのか。
高杉の心中は複雑になっていった。

モノを返してもらえたなら、御礼を云うのが礼儀だ。（前書き）

洒流奇：スイマセン、短いです！

銀時：今更謝るのか。そして今更俺を出すのか。

洒流奇：えっ…ちょっご機嫌ナナメ！？

銀時：前の時のトーク番組にも変なのが出てよぉ…。俺の唯一の出番がねぇじゃねぇか。もぉ良いよ。うん、殴られたいのか？殺されちゃう？

洒流奇：ちょっそれは神威の言葉…ブヘッ！

銀時：ウオカァハッーのカ○ハメ○ー！

洒流奇：某アニメの技を叫びながら殴るんじゃなーい！！

モノを返してもらえたなら、御礼を云うのが礼儀だ。

「ただいま～」

神威の言葉が部屋に入ってきた。ニッコニコの笑みを貼り付けて登場した神威に風雷が「傘は？」と聞く。

「ほいっどーぞ」

神威から風雷の傘が投げられた。
風雷は自分の傘か確認するように中途半端に開いて、閉じる。

「じゃー帰って良いか？もーヘトヘトだから」

うーん、と言いながら伸びをしている風雷。

「…あぁ好きにしろ」

高杉は何時も通り神威を見、神威も了解と言って風雷を返す。
そう、
返す。

二人は静かに部屋を出る。
高杉は目を閉じて、思い浮かべた。
あの、刀の使い方、武士の道、生きる道を教えてくれた人を。

神威とは会話をせず、風雷は部屋に着いた。
厚い扉がゆっくりと開いていく。
その間に入ると風雷は後ろに居た神威を見た。
風雷と神威の視線が合う。
神威は一瞬目を細めたが、すぐに薄っぺらい笑みで扉を閉めた。
風雷は閉まった扉をしばらく見つめていたが、すぐに神楽を目で探す。
すぐに見つかった。
神楽は床で寝息をたてながらすやすや寝ていた。
風雷は良かった…と言葉を出さずに唇を動かして神楽に駆け寄った。
傘を置いて神楽を抱える。
静かに脈などをはかってから風雷は安心したように微笑んだ。
次の瞬間、風雷は自分の腕に噛みつく。
そして、腕を見る。
腕からは僅かに赤い液体が流れていた。
風雷はソレを神楽の口に流した。
神楽の唇に赤い痕が付く。
風雷は自分の腕を舐めて、血が止まったのを確認してから神楽の唇を指でなぞって血の痕を消す。
そして、静かに横たわらせた。
傘を手に取ると、風呂に向かう。

「…もう少し」

不気味に笑った風雷は扉を閉めた。

拳と拳で語る話って実際問題、拳と殴れられた場所の話じゃね？てか拳と拳が当

銀時：今回の俺さぁ…

洒流奇：何も言うな！ネタバレじゃん！

新八：やっと僕が…！！

洒流奇：十九話でやっとだね。

新八：この日をどんだけ待ちわびたか…！！

銀時：てかたったの2日で二十話近くって凄いな…。

洒流奇：だねー。

銀時：…お前面倒になってきたのか…？

洒流奇：うーうん、違う。ただ、掲載ばっかしてて第一章の続き全然書いてないんだ。

銀時：…。

洒流奇：今まで1日2話位出してたけど第二章からは不可能です！！って思うとアクセス数下がるなぁーって。

新八：でも実際問題凄いじゃないですか。たったの一週間で四千アクセス越えたんですよ？しかもお気に入り三人もいますし、感想も書いてもらってますし。

洒流奇：本当に感謝感激だよなぁ…。こんなウチの為に…。

銀時：何っ？お前？面倒なんだけど。そろそろ相手するの面倒なんだけど。

新八：まぁまぁ銀さん落ち着いて。相手してあげましょうよ。

洒流奇：何か新八のその口調ウザイ。

銀時：だな。８のくせにいきがって。

新八：何で僕の相手はこんなんだろ…。

「おはよーございます…ってあれ？…銀さん？」

所変わって数時間前の万事屋。
何時もどおりやって来た新八は元気に扉を開けた。
中には深刻そうな顔をした銀時がソファに座っていた。

「…銀さん？」

そこで新八は異変に気付いた。
神楽が居ない。
馬鹿で食いしん坊でボケの度が越えているあの神楽が居ない。

「銀さん…神楽ちゃん…は？」

「…昨日の事知んねーのか？」

絶望したように暗い声が新八の耳を痛める。

「昨日…？」

新八は眉間に皺を寄せた。
新八は昨日家に帰って残り物を調理して久しぶりのちゃんとした御飯にがっついて満足したので、お通ちゃんの曲、『お前の父ちゃん××』を聞きながら盛り上がり、そのままご就寝。
つまり、昨日何があったか知る由も無いのだ。

「…何が？」

新八は急いで机の上に有るチャンネルをひんだくってテレビを点ける。

芸能界のチャンネルから様々な奴に変えているとニュースのテレビを見つけ、そのままテレビに張り付くように見た。

『えー今昨晩起こった事件場、廃工場に来ています。見て下さい！近くの無人のアパートの粉砕された壁を！そして反対方向の彼方、爆弾を投げた後のように燃えた痕が有ります！一体何が有ったんでしょうか！？目撃情報によるとチャイナ服の少女と少年が攫われたらしいです。あっ真選組の方が来ました！一言お願い――』

新八はブチッとテレビを消した。

「銀さん…コレは…？」

「神楽が…攫われた…」

その言葉に新八が顔を強ばらせた。

「…攫われた？」

「あぁ…そうだ」

新八は銀時に近付いて机を思いっきり叩いた。

「助けに行きましょう！」

新八の言葉に銀時は――

「どうやってだよ！」

叫んだ。

心底苦しそうに。

「俺だってすぐに助けに行きてぇよ！だけどアイツん所に行く方法がねぇんだよ！」

「行く方法が無きゃいけないんですか…？」

新八は銀時の悲痛な叫びに新八は拳を握って、

銀時を殴った。

「オメェは馬鹿だろ！僕達が頭を動かす事なんて無理に決まってんだろ！？何で行く方法がなきゃ此処で必死こいて考えるんだよ！？行く方法がなきゃどんな事をしてでも作れば良い！今までそうやって頑張ったじゃないですか！？忘れたんですか！？」

新八の言葉は倒れた銀時の耳に大きく響いた。

頭にまで響く位。

銀時はゆっくり立ち上がる。

そして、

新八を殴った。

勢いよく倒れた新八は銀時を見上げた。

「そうしたって無理なもんは無理なんだよ！色んな所回って考えたよ！？だが、俺達に宇宙船渡してくれる奴なんて居ねぇだろ！？」

「宇宙船って…どうゆう事ですか？」

「神楽は糞兄貴に捕まったんだよ」

銀時はそう言うと新八に背を向けて「テメェは帰りな」と言った。

「…」

新八は立ち上がって銀時の肩を掴んで引っ張る。

銀時のクマが出来た疲れた顔が此方に向く。

そして、

再度殴った。

「んな事知るかよ！」

銀時は無様に崩れた。

「何でテメェは一人で何でも抱えんだよ！そんなにつらきゃ分けろよ！テメェは一人なのかよ！？テメェには誰も居ないのかよ！？違うだろ！？少なくとも――」

涙ながらに語る新八は自分の胸に手を置いた。

「僕はずっと銀さんの味方ですよ…」

瞳を潤ませ、銀時をただひたすらに見る新八。

銀時は立ち上がって、

新八を殴った。

新八は倒れてすぐに上を見た。

銀時が笑っていた。

「行くぞ」

新八は涙を拭いてから元気よく頷いて銀時の横に並ぶ。

「何で殴ったんですか…？」

「だって駄メガネに殴られっぱなしは嫌だったからな」

「なっ…それだけで殴ったんですか！？」

「小せぇ男だぞ新八。時として男は我慢するべきだ」

「…どっちが小さいんですか…」

そう言った新八はクスリと笑った。

二人は元気よく扉を開けた。

真っ青な空は二人を眺めていた。

そんな勇気を手に入れた銀時達は知らない。

未来自分達が起こる出来事を。

「なぁ知ってるか？」

頭がかなり長い天人が笑った。

「あぁ…アレだろ？」

『アレ』とは最近春雨の中で出回っている噂である。
現段階、第四師団と第十二師団の団長は不在である。
そこで、
ある“男”達を殺せば団長になれるという噂が。

「分かってんなら行かねーか？」

「だったら俺も」「ひはっ俺もだ」「俺も俺もー」「ミーも」「俺はどーしよ」

そう言いつつも天人達は武器を手にする。

「行くぞ…坂田銀時と桂を討ち取りに！！」

「「「オオー！！」」」

そして天人達は船に乗り、向かう。
上品とは云えぬ笑みを浮かべながら。

頼む人に文句言ってはいけません。（前書き）

銀時：今回も銀さんキタァァァァァ！！

新八：僕もキタァァァァ！！

洒流奇：おめでとさん。

頼む人に文句言ってはいけません。

「ヅラ。頼みが有る」

銀時と新八は今ファミレスに居た。
目の前では桂が蕎麦を口に含んでいた。
銀時と新八の所には食事といったモノが無く、水が置いてあったが中に有ったろう氷は殆どが溶けていた。

「ふむ…何の…（ズルズルッ…モグモグ）…用だ銀時」

「…桂さん。頼む側ですけど言って良いですか?」

「何だ」

新八は水をのどに流し込んだ。
勢いよく空になったコップを机に置いた。

「何でテメェはこんなシリアスの時に蕎麦食ってんだよ!?しかも何でチョイスが蕎麦なんだよ?つうかもう三時だぞ!?飯食ってんだろ!?」

フゥと息を吐いた桂は蕎麦の汁を飲み干すとゆっくり机に置いた。

「新八君よ、落ち着きたまえ。武士はいかなる時でも食べられる心が必要だぞ」

「殴っていいですか?殴っていいですか?」

「まぁ落ち着け新八。んな事ヅラに頼んだって意味ねぇ事知ってんだろ？」

「…そうですね」

新八は溜息を零して桂を見た。

「…アレッ？エリザベスさんは…？」

新八は頭を傾げた。

桂は変なペット……いや、以前地球を乗っ取る為のスパイを一緒に連れている。

それが今日は見えない。

「エリザベスは今情報を集めている」

水を口に流した桂は外を見た。

今にも降り出しそうな雲が風に流されている。

「ヅラ、船を貸してくれ」

「銀時…」

「勿論、乗るのは俺と新八だけで構わねぇ。乗り方さえ教えてくれりゃあな」

「お願いします」

新八は頭を下げる。

銀時もゆっくりと頭を下げた。

「…銀時、一つ言っておこう」

「なんだ?」

桂はニコッと笑った。

「ヅラじゃない桂だ。これから一緒に戦に向かう奴の名位覚えておけ」

「…桂さん」

新八は顔を綻ばせる。

「だがまずは相手が何処に居るか知らなくてはならない。エリザベスの情報を待とう」

「サンキューなヅラ」

「ヅラじゃない桂だ」

ファミレスの一席から明るい笑みが零れ落ちたのだった。

銀時達は鉛色の空を仰ぎながら今歩んでいた。
銀時達は桂の拠点に向かっている。
そんな時、桂の携帯が震えた。

桂は携帯を開いた。

「…誰からですか？」

新八の問いに桂は「エリザベスだ」と答えた。

「何て内容が書いてあんだ？」

「『桂さん逃げて下さい。高杉が桂さん達を狙ってます』と書いてある…」

「逃げて下さい…？」

新八は頭を傾げた。

「何で高杉が今更俺達を狙うんだ…？」

銀時は腕を組んだ。

桂は携帯を仕舞うと「とりあえず早く行くぞ」と言って足を動かした。

「伏せろ！」

銀時が叫んだ。

桂はすぐに伏せ、新八は銀時に頭を掴まれて伏せた。

刹那、パンパンと乾いた音が響く。

今は夕方の５時。

５時だが、周りには人っ子一人居ない。

だが、音はずっと続く。

「銀さん何ですかコレは!?」

「知るわけねぇだろ!」

「銀時、戦えるか?」

伏せたまま、のどが裂ける勢いの大きな声だが、銃声で全然聞こえない。

銀時は正直言って余り聞こえなかったが、意図は理解した為頷いた。

桂は懐から黒くて丸いモノを取り出した。

黒くて丸いモノ――爆弾を銃声のする方へ放り出した。

ボンッ!と小さくはない音が大きくはない音が響いた。

銃弾が一旦止んだ。

銀時はサッと立ち上がって洞爺湖をしっかり握った。

桂も銀時と同じ時位に立ち上がっていたのか爆弾を投げた所に向かっていた。

一拍遅れた新八は腰にある木刀を握って二人に負けない勢いで走った。

まだ煙が舞っている中桂と銀時は飛び入った。

新八は真っ直ぐ入った。

土煙によって影しか見えないが、次々と倒れていくのが分かる。

新八も適当に木刀を下ろした。

目の前の男か、良く分からない人が「うっ…」と呻きながらドサッと倒れた。

煙が消えていた時には既に立っているのは銀時達のみだった。

銀時は僅かに意識がある男の頭に木刀を向けた。

「何の用だ?」

新八は倒れている男達を見る。

見て分かるような、耳が尖ってたりなど『あぁ、天人か』など新八は少しずつ混乱していた頭の靄を取り除いていく。
さて、銀時が男から情報を抜こうとした時――
予想もしなかった声がした。

「…どういう事だ万事屋？」

銀時達は声がした方を見た。
此処は公園。
さっき確認した限り人は居なかった。
だからこの天人達も銀時達を襲ったのだ。
では誰――？

向いた方には、

土方と沖田、そして近藤が居た。

笑顔って無表情よりもある意味恐怖だ。（前書き）

洒流奇：凄いよ、銀さんまたまた登場だよ！おめでとさん！

銀時：…何か屈辱だ。

新八：…ですね。

洒流奇：何で！？ちゃんとおめでとさんって言ったぢゃん。偉くない？偉くない？

銀時：偉くない。

新八：偉くないですね。

洒流奇：うわっ酷い。一様作者なんだから地位的には上だし。

銀時：権力は実質自分には何もない事を言ってるようなモンだ。ふっ。

新八：…。

銀時：どうした新八？

新八：いえ…その格好で言うかと…

銀時：んっ？

新八：自動販売機の下にある十円玉を取ろうとしている姿で言うのは…ちょっと説得力ありません。

笑顔って無表情よりもある意味恐怖だ。

「テメェ何で桂と一緒に居るんだ」

土方の鋭い視線が銀時に注がれる。
既に沖田は鞘に収めている刀の柄を握っていた。
近藤も普段の馬鹿そうな顔を引き締めていた。

「…」

銀時は口を動かさず、土方達をただ見ていた。

「何か言えよ」

「旦那ァ…言って下せェ」

「白夜叉だよ…コイツは…」

倒れていた男が口を開いた。
男は勝ち誇ったように笑った。
新八は目を見開いた。
拳を震わす。
桂は平然と土方達を眺めているだけだった。
銀時は倒れている男に何もせず、ただ見ている。

「…本当か万事屋」

「違うよな…？それは何かの冗談だろ？」

近藤は苦しそうに唇を噛む。

「俺は…」

銀時はやって口を開こうとした時、

「そんな事は後にして下さい！」

新八の叫びが響いた。

「事情聴取は後で幾らやってもらって構いません。ですけど、今は神楽ちゃんを助けに行く今は、止めて下さい」

新八の言葉に土方は「どぉゆう事だ」と問いただす。

「神楽ちゃんは春雨に攫われました。多分、この人達も春雨です。この人達はきっと船で僕達…いえ、銀さん達を狙って来ました…だったら！」

「その船に乗ってコイツらに運んでもらおうって事だ」

銀時はやっと下――男達を見た。

男は小さく悲鳴を上げた。

「俺を捕まえるか貴様達は。だが、それはリーダーを取り返す戦力が減るという事だ。勿論、貴様達は来なくて構わない」

桂の静かな言葉がやけに響いた。

「頼む、今は見逃してくれ」

銀時は小さく、つらそうに言った。

新八は頭を下げる。

土方達は顔を見合わせる。

「…どうする近藤さん。俺はあんたの意見しか聞かねぇ」

土方の問いに近藤は笑った。

「俺達も行く」

新八は頭を上げて、目を開いた。

「二人は構わないか？」

「俺はあんたについて行くだけだ」

「近藤さんが行くんなら俺が行かなくてどうするんですかィ」

二人の笑みに近藤は嬉しそうに頷いた。

「さて…吐いてもらおーか」

銀時は下で倒れている男を洞爺湖の先端でつつく。

「吐くか！テメェ何かに言っちまって何も得がねぇしな」

不適に笑う男を見た沖田が銀時に言う。

「旦那、コレは俺も加わった方が良いですかィ？」

「だなぁ…」

男の前に二人が立ち上がる。

「コイツに世界の厳しさについてたっぷりとな」

いやらしい笑みを見た男は――

今夜地獄を見る。

公園に奇声が響いた。

「話がある」とかって危険信号だから気をつけろ。（前書き）

神楽：私…何アル…？

銀時：食い意地がはったガキ。

新八：ボケの度を越した大食い少女。

神楽：何アル！？感動の欠片も無いネ！

銀時：事実だからな。仕方がねぇ。

神楽：久しぶりの前書きさんのそこん所に私が出たアルよ！？

新八：人気テレビから名前をもじるの止めた方が良いと思うけど…。

神楽：それが万事屋クオリティネ。

銀時：クオリティとか言っちゃ駄目だろ。もしかしたら人気漫画、家庭科ヒットマン非凡を連想する奴が居るだろ？

新八：家庭科ヒットマン非凡って何だよ！？作者が持ってる漫画の名前スッゴく変わってんだけど！つか家庭科のヒットマンって格好悪いよ。非凡って最早意味分かんねぇよ！てかコレ連想ゲームか！？

銀時：長ったらしいんだよ、テメェのツッコミは。何？著作権違反

してないよ？違反してると思った？

神楽：小さい男ネ。

新八：結局僕が悪いんだ！？

「話がある」とかって危険信号だから気をつけろ。

目覚めた神楽は瞼を擦る。

「神楽」

風雷の声に神楽は眠たげに答えた。

「何…アルか？」

「ちょっと俺また風呂入ってくっから、もし夜御飯運んできた奴が来たら話があるって言って止めといてくれ」

「分かったアル…フワァ」

欠伸を漏らした神楽を見た風雷は微笑みを浮かべ、傘を握ってまた風呂に入る。

おかしい、とは神楽自身が良く分かっていた。

だが、風雷は何をするかは皆目見当つかないが、何をしたいかは分かる。

此処から自分を出そうとしている事位、良く分かっていた。

だから、神楽は風雷を止める事が出来ない。

絶対に。

「…風雷、私…何アル…」

辛そうに呟いた言葉はドアの向こうの風雷には聞こえない。

神楽はそう思っていた。
だが、
その言葉は届いていた。

「希望だよ…」

風雷は優しく、神楽に聞こえない程度の音量で言ってから傘を見た。
風雷は地面にお尻を乗せ、傘に手をかける。
「最終チェックだ」と呟いた。
腰にあるポーチから小瓶を取り出す。
中には真っ赤な液体が入っていた。
それをクイッと口に流し込む。
やがて空になった小瓶をポーチに入れた。

「後、もう少しの辛抱だからな」

風雷は傘を開いた。

神楽は風雷が何をしているか分からない。
とりあえず体育座りをして待っていた。
すると、重たそうなドアがズズッと音をたてて開いた。
神楽はすぐに目をやる。
そこには、夜兎族であろうチャイナ服を纏い、神楽よりも一回りも二回りも大きな男が居た。

「飯だ」

短く言うと男は乱暴に置いた。

「待つアル」

神楽は出て行きそうな男の腕を掴んだ。

「何だ？」

「風雷が話があるって言ってたネ」

「知るか…んなもん」

そう言って男は神楽の手を引き剥がした。

神楽は『この男を倒せば出れるんじゃ…』と迷う。

でも、風雷が何か考えているかも…という事でどうする事も出来ない。

「話があるって言ったのに出ちまうのかよオッサン」

その声に男は頭を神楽より先に向けた。

神楽も一拍遅れて振り返る。

「風雷！」

「神楽、お前は風呂で汗を流してきな」

風雷は軽い足取りで神楽達の元に来ると神楽の頭を撫でる。

「…？」

「なっ？」

風雷の優しげな笑みに神楽は思わず頷く。

「分かったアル」

神楽は言われた通り、さっき風雷がいた風呂に入った。

「で、話って？」

気だるそうな男に風雷は見上げて、
自らの腕を引っ掻いた。

「…何のまねだ」

「舐めろ」

風雷は男の顔の前に腕をセットする。

「悪いが俺はそんな性癖はない」

すると風雷はアッサリ腕を下ろして、

「なぁ、質問」

と窓の方を見た。
赤ちゃんがギリギリ通れるか位の小さな窓の先にはただ闇が広がっている。

「監視はお前だけか？」

男は鬱陶しい様子で頭を横に振る。

「言えない」

「そうか」

風雷は分かっていた様に簡単に引いた。

「もうくだらない話は終わりか？」

「くだらなくは無いが、終わり」

男は「そうか」と言って重い扉を通り、閉めた。
風雷はしばらくさっきまで男が居た所を見ていたが、
視線を自分の腕に移すとペロリと舐める。

「あんたのな」

風雷の笑みが邪悪なモノに変わった時、

断末魔が響いた。

大体主人公は何かを手にすると強気になる。これが漫画の常識。（前書き）

今回は後書きに書きますー。

楽しみな人は居ないだろうけど…

大体主人公は何かを手にすると強気になる。これが漫画の常識。

風雷は腕の血が止まっている事を確認してから、神楽が居る風呂に入る。

「今の何アルか！？」

水を滴らせながら神楽は纏った服を靡かせながら入ってきた風雷に飛びついた。

「説明は後だ。出るぞ」

「出るって…？」

「地球に帰るんだ」

風雷と神楽は風呂から出る。

「でも扉は厚すぎて私達には開けられないアルヨ…？」

扉の前に立った神楽は頭を横に振る。

風雷は笑う。

「素手だったらな」

「傘でも…無理アルヨ…」

「傘じゃねぇよ」

「えっ…？」

風雷は傘から――
刀を出した。

「なっ…」

思わず絶句する神楽。
刀は一本では無かった。
二本あった。
そして、その刀は

黒い。

何をもを呑み込みそうな程。
そのうえ、その刀からは何か得体のしれないモノが出ている気がした。

神楽は下がった。

風雷は刀を一つ口にくわえて、もう一つの刀を右手に収める。
左手には閉じている傘を。

風雷は前に進み扉を、

切った。

あまり大きな音はしなかった。

ゆっくりと鉄の塊が落ちた。

「後ろについて来いよ」

風雷はそう言うと走り出した。
神楽は一拍遅れて風雷の背を追った。
外に出るとさっきの男とは違う夜兎族の男が延びていた。
風雷は出て、二手に分かれている道の右に曲がる。
神楽はついて行く。
トタトタ、タタタッと合わない足音が延々に続く廊下に響く。
数人の天人が道を塞いだが、風雷の手により意図も簡単に崩れる。
神楽は僅かに異変に気付く。
恐らく、神威達は何人か見張りを用意した筈。
少なくとも自分達を抑えられる位は。
なのに、さっきのような弱い奴達。
幾ら私達がナメられていても夜兎族なのだ。
雑魚ではない。
なのに――

「神楽、平気か?」

前からの声に神楽は僅かに上がった息を吐きながら「大丈夫アル」と答える。
見た限り、風雷の息は全く上がっていない。
自分達の道に倒れていく天人達を横目で見つつも、ただ走る。
何分走りつづけただろうか。
道が終わり、広い部屋に出た。
部屋の中には多数の船が並んでいた。

「神楽、こっち」

一つの船に乗り込む。
風雷は神楽を椅子に座らせると軽快なリズムで多数あるボタンを押していく。

やがて、ブオォォンと音が響いた。

扉の所が閉まりますと言わんばかりにピカピカ光る。
だが、風雷の刀が何時の間にか扉が閉まらないように置いてあった。

「風雷…？」

風雷は最後のボタンを押すと座っている神楽に向かって笑った。
そして、刀を取って、

出た。

「風雷！？」

神楽は閉まった扉に向かおうとしたが、
先に船が動いた。
勝手に動く船に神楽は何も出来ずにただ扉に向かう。
閉まった扉は開かない。

「風雷イイイィィィィーー！！」

神楽の悲鳴が響いた時には、
春雨の艦内から船は出ていた。

「イヤアアアアアア！」

神楽の悲鳴は、

風雷には届かなかったのか。

大体主人公は何かを手にすると強気になる。これが漫画の常識。（後書き）

洒流奇：てかどうやって傘から刀が出てきたの？

風雷：傘の骨組みの２つが壊れてたのがキッカケだったな。最初は傘を直す為に必死こいて考えて刀で代用。今では丁度良い鞘だよ。

洒流奇：…。

風雷：ほら、だから何話前かの時中途半端に傘を開いただろ？全開したらバレるだろーから。

洒流奇：…。

風雷：何かおかしいか？

洒流奇：伏線パワー凄いな…ははは。

敵はぞろぞろ現れるが、主人公は一人っていう状態はありきたり。（前書き）

神楽：質問ネ。何で作者は毎回此処に出てるアル。良く居て邪魔な気がしてならないネ。

洒流奇：それは自然の定理だからだよ（＾ｗ＾）作者は何処かに出なきゃ何か孤独ぢゃん。普通だろ？

神楽：絵文字使うなキモい。

洒流奇：酷い！俺作者！

神楽：コレの作者は馬鹿が取り柄ネ。

敵はぞろぞろ現れるが、主人公は一人っていう状態はありきたり。

風雷は外に出たら刀を口にくわえ、今出発しようとしている船付近に傘を向け、

打つ。

カキンカキンと鋭い音がなった。

だが、それは銃弾が床に当たった音ではない。

銃弾が銃弾に当たった音だ。

「…ふぅ」

傘を下ろす。

船はゆっくり音をたてて出発した。

微かに神楽の声がする。

「自分の為に叫んでくれたのか」と呟くと風雷は前を向いた。

前には――

銃を風雷に向けている来島また子が居た。

「…あんたどうやったんスか」

「どうやって…？あぁ、あの男の人の事か？」

風雷はニコリとも笑いもせず、「毒で」と答えた。

「それは今どーでも良いッスよ。どうやって私が撃った銃をあんたの銃で撃ったのかって聞いてるんス」

「集中力で」

「不可能ッスよ。銃弾の速さを見える訳が無いッス。幾らあんたが夜兎族でも」

また子は風雷を睨み付けながら僅かに前に足を進める。

「無理だってやれたんだから、やれるんだろ」

「まぁ後で詳しく聞かせてもらう事にするッスから、傷を負いたくなかったら戻るッス」

また子の言葉に間髪入れずに風雷は答える。

「嫌だ」

風雷は刀を握りしめる。

「なら、仕方がないッスね！！」

一丁の銃はまた子の言葉が言い終わるか言い終わらない位の時に火を吹いた。

バンバンバンッ

銃から白い煙が出る。

風雷は体制を低くし、足を引いた。

そして、その引いた足が浮いた時には――
また子の前に居た。
「!?」
「おやすみ」
風雷は短く言うと、また子の腹に頭突きした。
また子の体が飛ぶ。
ドンッ!!
と音がした時にはまた子は壁に寄っ掛かって倒れていた。
風雷はまた子を数秒見、動かないのを確認すると船に乗り込もうとした。
そう、しただ。
パンッ
乾いた音が高らかに鳴る。
風雷はすぐに避け、銃弾が来た先を見た。
そこには、
薄っぺらい笑みを浮かべた死神が居た。
死神――神威だ。
その後ろには高杉と阿伏兎が居た。
傘の先を風雷に向けている神威の頬には真っ赤な液体がこびり付いていた。
「ぞろぞろ…人気者は困るな…アハハハ」
口では笑うが、表情は硬くしている風雷は口にくわえている刀を押して、落ちないようにする。

「神楽は逃げちゃったか。あらら。高杉、平気？」

「平気だ。そのガキが使える」

「はぁ…共食いは嫌いだったのによ…」

溜め息を吐いた阿伏兎の言葉に風雷は「あの男は？」と聞く。

「団長が殺したよ」

その言葉に風雷は寒気がした。
幾ら部下でも仲間の筈なのに。
仲間を…簡単に？

「どうして…」

思わず呟く風雷に神威は頭を傾げる。

「どうしてって…君がそう言う風にしたんでしょ？」

ビクッと風雷は体を震わせる。

「だからって…」

「でもそれなりに楽しめたかな？流石に阿伏兎の次位に強いって話だから」

名を言われた当の本人は倒れたまた子を担いで何処かに消えた。

「…仲間だろ？」

「だから…言ってるだろ?弱い奴には興味が無いって」

風雷は体が怒りで震えている事を分かっていた。
だが此処で理性を外したら、
ダメだ。

「でもアレどうやったの?」

「別に。あんたみたいに血を求めるように理性を司る部分を刺激しただけだよ」

「ふ~ん?どうやって?」

「…」

風雷は口をつぐむ。
神威は変わらない笑みで聞いてくる。

「質問タイムは後だ。まずは生け捕りにして聞きゃあいい」

高杉は刀を抜く。

「はいはい」

笑った神威の後ろには何時の間にか帰ってきた阿伏兎が佇んでいる。

「…こんなガキに三対一か?」

「このバカがやったらソレこそテメェは死ぬだろ」

「…俺が勝つって可能性は無いのか」

「そこまで楽しませてくれるの？」

「…」

風雷は神威という存在を心から恐怖した。

命のやり取りを神威はゲームのように、心底楽しそうに、言う。

ゲームの始まりだ。

会話が無い戦闘シーンは漫画の方が楽だ。（前書き）

洒流奇：今回は短い！会話が無い！妄想力が必要！の三点が品揃えです。どうぞお買い上げを。

風雷：何処のスーパーの店長だよ。つかつまらないボケするな。

洒流奇：違う！スーパーの店長じゃない！ジャパネット高倉だ！

風雷：…。

洒流奇：あーあ、新八だったら気付いたよ？幾ら何でも8がつく奴に負けるなよ。主人公のくせに。

風雷：いや…俺は別に好きで主人公じゃ…。

洒流奇：それ…新八に言ったらキレられるよ…？

風雷：…悪い。

会話が無い戦闘シーンは漫画の方が楽だ。

先に動いたのは高杉と神威だった。
高杉は走ってくると刀を下ろす。
風雷は頭を傾け、口にある刀で受け止める。
神威は既に風雷の足を崩そうと回し蹴りをしている。
その足を傘で受け止め、その衝撃によって一瞬距離を取る。
だが、既に阿伏兎が後ろで風雷に拳を向けていた。
風雷は脚力を最大限使用し、横に飛ぶ。
飛んだ先には高杉が刀を構えていた。
風雷は体を回転させ、刀を弾き高杉の後ろに飛ぶ。
高杉はすぐさま振り返って刀を水平に回す。
それを口の刀で弾いて、壁に向かう。
たった数回のやり取りだが、
瞬き一つが命取りだ。
そう思っていた頃は、まだ余裕があったのだろう。
今はそれすら思えない。
避ける、それだけで精一杯だ。
神威の拳が顔に目掛けてくる。
頭を僅かに横にずらす。
ドンッと音がした時には次の拳が飛んでくる。
頭を横に、
体を倒して、
しゃがんで、
刀を振って、
精一杯、
避ける。

攻撃の最中、三人が集う。
風雷はそこから距離を取る。
息が、喉が、
痛い。
どれだけ吸っても足りない。
心拍数が元の心拍数に戻る気がしない。
喉が渇く。
だが、
そんな事を気にする事なんか、
無理だった。

やや息が落ち着いた所で傘を神威に向ける。
足元を撃つ。
周りにも満遍なく、避けられないように、
だが全てを神威の傘によって受け止められる。
風雷は走った。
そして、神威の傘を、

切る！

骨組みなんかも関係無く、切った。

だが、切った事によって見えた顔は笑っていた。

そして、そこには高杉と神威しか居なかった。
そう、
阿伏兎は居なかった。
風雷は振り向いた。

だが、
もう遅かった。
風雷の無防備な腹に阿伏兎の蹴りが入った。
風雷は口の刀を思わず落とし、数メートル離れた壁にバウンドせず、
真っ直ぐに、
当たった。だが、手の中に収まっている二つの武器は落とさなかった。
解れたり切れてたりするチャイナ服が更にボロボロになる。
阿伏兎の脚力にによって凹んだ壁から風雷は落ちる。
だが、すぐに立ち上がろうと手を床に当てた時、
天使のように柔らかく着地した、
死神が現れた。
神威は肩で息をしている風雷の左手に足を乗せた。
風雷は顔を強ばらせた。
分かったからだ。
次に神威がやる行動に。
神威の足に力が入った。
次の瞬間、広い部屋に骨が潰される不気味なような音と絶叫が、
響いた。

洒流奇：おっはーよ！

銀時：何、君？今シリアスでやべーって時に緊張感ゼロの挨拶。意味分かんないよ？意味分かんねぇよ。

洒流奇：人間って残酷だよね。

銀時：お前は人間じゃねぇだろ。

洒流奇：へっ何言ってるの？どう見たって人間ぢゃん。えっもしかしてウチ夜兎族だったり？

銀時：中二病患者は黙れ。

洒流奇：何言ってるんだ！本場の中二病患者はもしかしたら中二病初期かもね？位しか言われてない！

銀時：本場の奴に認められてるんじゃねぇか！つうか本場って何だよ！？中二病の本場って！

洒流奇：ウチの学校の数名。

銀時：もう良いよ！頼むから黙ってくれぇ！

「戦慄を感じろ」とか格好良いコメントだけどやられる方の身にもなって欲しい

「ウワアアアァァァァアアアーーーーーー！！」

無駄に体力を使わないように気をつけていた風雷の喉が悲鳴をあげた。

ミシミシッと体内に大きく響く感覚。

汗がじわりじわりと吹き出していく。

握っていた傘は神威の手によって離れた場所に寂しげに置かれている。

空いてる右手で神威の足を斬ろうとしてもその刀すら阿伏兎に踏まれて動かせない。

激痛によって回らない頭を使って刀から手を離して神威の足を掴むが神威は力を緩めない。

少しずつ床が窪んでいく。

「ウアアアァァァ…」

やがて息が足りなくなり全ての力が無くなっていった時にやっと神威の足が離れる。

指は明後日の方向には曲がっていないが痛みにより動かす事が出来ない。

「はぁはぁっ…」

汗ばんだ右手で左手を覆う。

「高杉どうする？右手もやっとく？」

残酷なやり取りが風雷の耳元で踊る。

「止めとけ。それはそれで後で厄介だ。足位にしておけ」

その言葉は更に風雷に恐怖を与えるのには十分過ぎた。
風雷は体に鞭打って右手で持ち上げようとする。
だが、その前に神威の足が風雷の背中に乗る。
風雷はそれでも立ち上がろうとするが神威の力に適わず肩を上下に動かすのみだった。

「報告です！」

そんな中、一人の下っ端天人がやって来た。

「何だ」

高杉は落ちている風雷の刀を見回しながら下っ端の話に耳を傾ける。

「坂田銀時と桂小太郎を討伐しに行った光夜率いる軍が帰ってきたもよう。首はちゃんと持ってきたそうです。それと、途中出会った船に乗っていた爆弾を回収したらしいです」

爆弾――神楽だ。
風雷はその話に絶句する。
神楽が…捕まった？
神楽が？

「そうか。じゃあ戻れ」

「それが…」

「何だ？」

高杉の圧力が天人の体をびくつかせる。

「あの…第七師団の一部がまた暴走し始めて…。此方にその…ちょっと戦力が足りないんです…」

「分かったよ。コレが終わりそうだから後少し待って」

神威の笑みに更に天人は体を震わせ、「失礼しました…」と言って去っていく。

「えっ…」

風雷の口から出た言葉は信じられないような、信じたくないような悲しい言葉。

「残念だったね。高杉～足やるよ？」

「構やしねぇよ」

「ウワアアァァァ！！」

風雷の口から再度絶叫が響いた時には風雷は、立ち上がっていた。

「あれっ？」

神威は呆けた声を出した。
それもそうだ。
風雷は神威の力に勝って、立ち上がった。
そして、すぐさま阿伏兎を蹴り、刀を取る。
風雷は走った。
高杉に向かって。

「ウワアアァァァ！！」

風雷の刀と高杉の刀がぶつかる。
カキンッ！と鋭い音が鳴る。
片手で風雷は刀を扱う。
高杉も片手で刀を使う。
力は明らかに風雷の方が上だ。
だが、高杉は気迫でそれを上回る。
カキンカキンカキンカキン！
刀と刀が当たる。
高杉は一瞬左手で弄んでいる風雷の刀を見て、
風雷の腹を斬る。

「！？」

だが、風雷の腹に深く傷を残す事は出来なかった。
風雷のひしゃげた様な程ボロボロの手が風雷の刀の峰を抑えていた。
そして風雷は横に飛んだ。
刀を握りしめるまま。
風雷の刀は高杉の手から離れて風雷の手に収まった。
横に飛んだ風雷は不自然な体制の時に飛んだ為、上手く着地出来ず、
肩から着地。
だが、すぐに立ち上がって三人を視界に収める。

「テメェなんかが『黒雲』を使うんじゃねぇ」

風雷は高杉を忌々しく睨んだ。

風雷の腹からは血が滴り落ち、斬られた所の周辺は赤く染まっていく。

風雷は痛々しい手から『黒雲』を口に運び、右手にある刀――『黒雲』を構える。

「神楽が捕まったならまた俺が逃がしてやる。どうやっても」

「無理だよ」

神威が風雷に笑いかける。

「だって君、死ぬもん」

風雷はその言葉に驚いた――のではなく、笑った。

神威のような笑みを浮かべたのだ。

「だったらさ、俺が先に此処で死ねばいいだろ?」

躊躇いもなく言った言葉は静かげで、落ち着いたものだった。

そんな中、

高杉達の後ろに船が見えた。

音をたてて現れた船は艦内に入るとドアが開いた。

そこから現れたのは――

ボロ雑巾だって意外と活用出来る。（前書き）

洒流奇：携帯の電池がヤバい！！

風雷：お前の頭も残酷なモンだがな。

洒流奇：五月蝿い！生意気言うな！

風雷：先生に反抗する馬鹿に言われた…

洒流奇：黙れー！！！

ボロ雑巾だって意外と活用出来る。

まず船から出てきたのは意識の無い神楽だった。
ポイッとゴミを捨てるように乱暴に投げられた。

「神楽っ！？」

「ありゃりゃ…これまたボロ雑巾が増えた」

風雷は神楽の元に向かおうとするが、神楽に意識を向けた瞬間阿伏兎の蹴りが再度食い込んだ。
口からまた『黒雲』が落ちそうになるが今度は左手で無理矢理掴む。

ドンッ！と凹んだ壁が増える。

「かはっ…」と口からかすれた声を発した風雷は血を吐く。
床に少し血が落ちた。
斬られた所から更に血が出る。

「神楽…」

風雷は崩れる。
神威がソレを確認し、神楽を回収しようとした時船から人が降りてくる。
笠を頭に飾っている男達だった。
神威は神楽に服に手を伸ばして神楽に触れ――
られなかった。

いや、触れたがそれは、
神楽の足が神威の腹に触れたのだ。
「!?」
触れたとは言ったもののそんな生易しいモノではなかった。
神威の体はバウンドせずに風雷の近くの壁に激突した。
高杉は瞳にソレを一瞬映してから前にやった時には――
腹から刀が生えていた。
前の男が笑った。
「オメェ…」
高杉は口から血を垂らしながら前の男を睨む。
「久しぶりだな高杉」
前の男は空いてる手で笠を外した。
他の男達も笠を天井へと投げ飛ばした。
立ち上がった神威の顔が綻んだ。
風雷に更に攻撃を加えようとした阿伏兎は疲れたように溜息を零した。
高杉の目が細くなった。
そこには――
万屋、真選組の頭達、穏健派の攘夷浪士が居た。

「神威、教えてやるネ」

神楽は真剣な顔つきで兄を見つめる。

「テメェが言うソコのボロ雑巾の仲間の力を」

神威はつまらなそうに目を開いた。

「そんな事お前に出来ないよ」

高杉は桂の真っ直ぐな瞳に映されていた。
桂は高杉の忌々しいような細められた瞳に睨まれていた。

「ヅラ、久しぶりだなぁ！」

そう言った高杉は勢いよく桂の刀を抜いた。
刀が抜けた腹からはとめどなく血が吹き出している。
高杉は迷いなく刀を抜き、桂の腋を斬ろうと水平に動かした。
カキンッと鋭い音が響く。

「昔話でもするか？」

悪戯っぽい顔で高杉に笑いかける桂の刀は光に反射して輝く。

「俺には興味のねぇ話だ」

再び刀が打ち合った。

阿伏兎の周りには真選組の近藤、土方、沖田が囲んでいた。

「オッサンに三対一は…ちょっと酷くないかぃ？」

「ガキを大の大人三人でやってたのは酷くねぇのかよ」

土方の言葉に「そうだねぇ」と頷いて見せた。

阿伏兎の後ろで倒れている風雷はやってきたヒーロー達に絶叫している様子で口をポカンと開けていた。

合図も無く土方達は命のゲームを始める。

一人の少女を救うために。

神威と神楽は他よりも早く始まっていた。

「俺は銀髪のお侍さんと戦いたいんだけど」

「私はお前と戦いたいアルヨ！」

二人は互いの拳と拳を打ち合っている。

家族とは思えない重い戦いが始まる。

例え初対面の奴でも頼る時には頼れ。（前書き）

洒流奇：おっはー（＾ｗ＾）

銀時：おっはー（バンッ

洒流奇：グビャッ！

銀時：ふぅ…すっきり。

洒流奇：何がすっきり！？俺はぽっきり逝きそうだったよ！？

銀時：殺さなかっただけ偉いだろ？

洒流奇：偉くない！！

銀時：生意気言いやがって…年上は尊敬すべきだぞ？

洒流奇：年下殴ってストレス解消する奴をどう敬えと！？

銀時：仕方がねぇだろ。銀さん格好良いんだもん。

洒流奇：それ言わなきゃもっと格好良かったー！！

例え初対面の奴でも頼る時には頼れ。

阿伏兎は後ろの風雷を見、
風雷の背中に逞しい足を乗せた。

「なっ…！」

風雷は自分の背中に有るモノから逃れようと体をうねらせるが意味もなく終わる。
阿伏兎は足に力を入れた。
ミキミキッと不気味な音が響く。

「テメェ！」

土方の怒声が響く。
沖田は足を動かそうと前に一歩踏み出す。

「おおっと動かない方が良いぞ」

阿伏兎はニコリと笑った。

「このガキの背骨が折れても構わないならな」

風雷の腹から更に血が出てくる。

「グウウゥゥ…」

風雷は叫ばぬよう、悲鳴を出さないように痛みに耐える為に口から唸り声に似た言葉を吐く。
床もミシミシッと悲鳴をあげていた。

「だったら離せよオッサン！」

銀時の木刀が振り下ろされる。
阿伏兎は傘で受け止める。
更に新八の木刀が水平に一閃。
阿伏兎は舌打ちをして風雷から離れた。

「万事屋テメェ人質の事考えろ！」

土方の怒りの声に銀時は「結果オーライ」と親指を立てた。

「旦那ァ、何処も結果オーライにはなってませんぜェ？」

「全く、無茶しやがって…万事屋」

近藤は安心したような顔から真面目な顔へと変化させる。

「何だ？」

「そのガキを頼む」

「テメェ、犯罪者野放しにしたらぶっ殺すからな」

「旦那ァ、俺達はそいつをブタ箱に入れなきゃなんないんですから、」

三人の言葉が合わさった。

「「「死なせるなよ」」」

まさかのハモリで三人は少し目を見開いて微笑んだが、すぐに前にいる阿伏兎へ視線を向ける。

「分かぁったよ」

銀時は現在新八に介抱されている風雷を見た。
ボロボロな服、赤く染まっていく腹、白い肌なのに赤くなっている左手、必死に呼吸しようと開けた口からは血が付いた歯が覗いていた。
銀時は懐から包帯を取り出して腹に捲く。
風雷は痛みによってか僅かに顔をしかめたが、すぐに何時もの顔にした。

「ありがとな」

銀時は捲きながら風雷に礼を言う。

「…何が？」

皆目見当がつかないといった様子の風雷に新八が優しい口調で言う。

「神楽ちゃんを助けてくれた事ですよ」

風雷はポカンと口を開けて頭を横に振った。

「別に当たり前の事をしただけだ。アイツは傷付いて欲しくなかっただけだ」

「まぁそれでテメェ自身が傷だらけになったら世話ねぇがな」

「別に…てか、」

「どうしたんですか？」

「何で助けに来たんだよ」

「はっ…？」「えっ…？」

まるで助けて欲しくなかったと言いたげな口調に銀時達は眉間に皺を寄せる。

「俺なんかどうでも良いだろ？お前達が心配なのは神楽だけだろ？だったら…神楽が無事に帰ってきてくれれば良いだろ？何で…来たんだよ？」

口が「来ないで欲しがった」と無感情に呟く風雷。

そう、まるで――

自分何か要らないくせに、と言いたいような顔で銀時達を見つめる。

「……ねぇよ」

銀時が俯いて発した言葉は風雷に聞こえなかった。

風雷は思わず「何か？」と聞き返す。

「良かねぇよ。少なくとも、神楽にとっては良くねぇよ」

銀時の真っ直ぐな目に風雷は合わせられずうつむく。

「悪いが俺達はお前なんかの事全然知らなかったよ…だが、アイツが言ったんだよ」

銀時は語る。
数時間前の事を。

ヒロインは涙を流してなんぼ。女の涙に弱いのが男だ。（前書き）

神楽：私凄いアルよ。まるで何処かのプリンセスアル。

銀時：確かにプリンセスだな。卵かけご飯――ＴＫＧ姫だな。

新八：ですね。神楽ちゃんの料理は毎回卵かけご飯ですもんね。

神楽：何言ってるネ！ちゃんとふりかけもつけてるアル！

銀時：それ結局俺の金だし。

新八：それ位だったら幼稚園児でも出来ますしね…

神楽：五月蝿いネ！！そんなに五月蝿いから８ネ！だから１になれなかったアル！

新八：別に名前が１だろーが８だろーが良いじゃん！

神楽：何言ってるネ！１だったら小学生で名探偵って言われるアル！殺人現場何回も見放題ネ！

新八：違う漫画ー！！駄目だから！何年間も視聴率取ってる先輩的存在の事言っちゃ！！

神楽：知らないネ。

新八：…。

ヒロインは涙を流してなんぼ。女の涙に弱いのが男だ。

銀時達は天人を拷問した後すぐに天人達が乗ってきた船に乗った。
勿論、拷問された天人も一緒に。

「さて…行くか」

と誰かが言って船を発進させた。
神楽のみを助ける為に。

重い空気は長い間続いた。

なんせ、戦いに行くのだ。
ノリノリで喋るような馬鹿は少なくとも居なかった。

そんな中、目の前に船がやってきた。

最初は「敵か」と思い、身構えたが、
その船の操縦席には助けようとした少女が居た。

「おい、あの船の奴をコッチに来させる事は出来るか？」

銀時は操縦させていた天人にすぐに命令した。
天人はコクコクと小刻みに頷いて神楽の乗っている船に寄せ、ドアとドアをくっつけた。
２つの扉が開き、銀時と新八は急いで神楽の元に駆け寄った。
神楽も敵かと思っていたのか身構えていたが、二人の顔を見ると目から雫を零した。

銀時に駆け寄り、抱き合う。

「神楽…」

銀時は涙を流す神楽の頭を撫でる。
新八も嬉しそうに涙を流していた。

「銀ちゃん…」

「何だ？」

三人は静かに土方達の元に戻った。

「風雷を助けて！」

唐突にぐしゃぐしゃの顔をあげた神楽の言葉に銀時は頭を掻いた。

「…誰だァソイツは？」

「あの…そこのサド野郎達が言ってた半殺し屋の…」

たどたどしく放たれる言葉に土方が口を開けた。

「やっぱりもう一人の方はアイツか。だが、」

土方の言葉に総悟が後を引き継ぐ。

「そいつを俺達が助ける義理はねぇんだよチャイナ娘」

冷たく放たれた言葉に神楽は固まった。

「な…んで…？」

途切れ途切れの言葉は土方達の耳には入らない。

「そいつは犯罪者だ。犯罪者の為に動くエネルギーはあいにく持ち合わせていねぇ」

「トシ…そこまで言わなくても…」

近藤はフォローしようとあたふたするが、神楽にはその行動は見えない。

助けてくれないアル…？

…だったら、

神楽はコクリと唾を飲み込んだ。

「だったら私一人で戻るネ。風雷だけ苦しむのは嫌アル」

「…だから、」

「行くアル！」

神楽は土方の言葉を遮った。

「風雷だけまた毒を飲まされて、傷付けて…そんなの嫌アル！」

涙を飲み込んだ神楽に桂が近付いた。

「そうだな。これは江戸の為だ。江戸の市民が死なれては困る。どう思う幕府の犬共よ」

「…どぉいう事だ」

土方は現段階では味方の桂を睨む。
桂は嘲るように笑った。

「その風雷とかいう娘は未来江戸で殺され、それによって江戸が死の街へと変わるという事だ」

「…詳しく聞かせろ」

「時間は無い。短く言わせてもらう。その風雷とやらは毒の塊となって、江戸に落とされる。そうしたら江戸にはそのガキの死体から毒が滲み出て江戸が毒の街の化すと言う事だ」

「…そう言う事か」

「どうするんでィ、土方さん」

「江戸がかかってんだ。行くに決まってんだろ。ついでに高杉も捕まえる」

心配そうに見ていた新八の顔が綻んだ。
神楽は銀時を見る。
銀時は頷いた。
次に神楽は桂を見る。
銀時同様、微笑みながら頷いた。
真選組も頷いた。

「じゃ、行くか」

皆、頷いた。

その後は春雨に偽の情報を言うために天人を再度脅迫したのであった。

おつかいとかって意外と年下の奴にねだられる。

「…何で」

風雷は震える唇を噛む。

「何でって今言ったろ?」

「俺なんか何も守れない雑魚なんだ…だから、俺は――」

パンッ

風雷の頬に痛みが走った。

銀時は風雷の頭に手を乗せた。

「オメェは神楽を守ったんだぜ?気にすんな」

銀時は「怪我してんのに悪ぃな」と言いながら乗せた手で風雷の頭を撫でる。

新八は微笑んだ。

風雷は小刻みに震える手でポーチを漁り、赤い液体――風雷の血が入った小瓶を2つ取り出した。

「…何だコレは?」

「薬だ…以前神楽には飲ませたから…他の人は飲め…」

「今…ですか？」

風雷は頭を縦に振った。

新八は頭を傾げながらも新八にとっては何か分からないモノを言われた通り少し口に流した。

銀時も疑問に思いつつも新八の手にしている小瓶を舐めた。

「…コレは血じゃねぇか」

蓋をして少し残っている小瓶を銀時は睨んだ。

満タンの小瓶は新八の手に乗せられていた。

「俺の血は薬になるから…」

優しく笑った風雷に銀時は俯いた。

「坂田さん…他の人にも飲ませてやってくんないか？飲ませてくれたら俺を守んないで大丈夫だから」

「志村さんもね」と名を言ってない新八の名字を言いながら風雷は新八の腕から逃れて壁にもたれかかった。

「分かった…新八ぃ、そのガキ守れよ」

「はい」

元気よく新八は返した。

「ちょっくらガキのおつかいに行ってくらぁ」

銀時は走り出した。
戦場へと。

総悟は空中で刀を下ろす。
阿伏兎は傘で受け止める。
近藤が素早く阿伏兎の脇に入る。
阿伏兎は蹴りを放つ。
土方は背後から刀で斬りつける。
だが、
沖田が力負けして飛ばされ、
近藤は蹴りをすんでで避け、
それによって空いた手によって、
土方の攻撃は無意味になる。
そのうえ、土方は力負けして飛ばされた。

「なぁ団長」

阿伏兎は隣で兄と妹の戦い中の神威に話しかけた。

「何、阿伏兎？」

神威は普通に返す。

「よく話す余裕があるネ！」

神楽は神威に鋭い拳を投げるが神威は意図も簡単に避ける。
そして蹴りを繰り出す。

神楽は寸でで避け、荒々しい息を吐いた。

「ガキの情報だよ。まだ報告してねーだろ」

「そうだったね」

「取りあえず、あのガキは死体屋の娘で間違いがねぇ」

「ふむふむ」

神楽は体を捻って懇親の一撃を突きつける。
神威は簡単に避け、
その隙に神楽の後ろに回る。
神楽の脇腹に神威の足が食い込んだ。

「ガハッ！」

神楽の口から血と唾液が混ざったモノが出てくる。
神威は神楽が意識が有る事を確認すると、その背中に足を乗せた。

「風雷さん！？」

新八の声が飛んでくる。
何故か、
神楽の名では無く、
風雷の名を叫んだ。

そして、

雷と風が全てを覆った。

まず、風が。

新八の腕の中から、
風雷は消える。

風が通る。

風は神威の所で止まる。

次に神威の腹に雷撃のような威力の蹴りが飛んでくる。

早すぎて、神威すら反応出来なかった。

そして、
まるで桜が舞い散る様に、

ヒラリと、

夜叉がおりてきた。

「…風雷さん？」

新八の驚きと困惑が混じった声を零す。

天使のように堕ちてきた堕天使――夜叉は髪を靡かせる。

その髪の色は――

白。

真っ白だ。

そして、

瞳は爛々と燃える赤だった。

考えずに闘う姿は狂い桜のように美しい。（前書き）

洒流奇：すいません！（期待してる人居たか分からないけど）以前の話に前書きストーリー書かずに！いや…忙しくて…。

銀時：朝からゲームして登校している中坊が何言ってんだか。

神楽：英検準2落ちてるかな～って呟く馬鹿が。

新八：喋るのが早すぎて何言ってるか理解されてない人がなぁ…。

風雷：作者の事あまり知らないから何も言わない…。（情報で色々知ってるけど残念すぎるからな…言いたくない。）

洒流奇：うっわー酷すぎだろ！？コレの神的存在に！

銀時・神楽・新八・風雷：馬鹿（ネ）（ですね）（だな）

洒流奇：ギャー！！

考えずに闘う姿は狂い桜のように美しい。

飛ばされた神威は体を起こす。
風雷の力が格段に上がっている。
神威は壁を壊し、数メートル先まで飛ばされていたのだから。

「団長っ！？」

思わず阿伏兎は声をあげた。
風雷のおつかいに駆り出され、沖田達に小瓶を飲むよう指示していた銀時も唖然とした。
その姿は、
正に白夜叉。

「旦那ァ…本当に旦那が白夜叉ですかィ？」

沖田の問いに銀時は答えられなかった。風雷は神楽の手を握って、立たせる。
いきなりの事で頭がパンクしそうな神楽は口をポカンと開けていた。
風雷は神楽の状態を確認すると離れた所にある自分の得物を取った。
数メートルの距離を僅か一瞬で縮め、
戻ったのだ。
瞬きした時には戻ってきた風雷に神楽は更にパニック状態に陥る。
風雷は高杉が握っているもう一つの『黒雲』を睨みつける。
桂と高杉も止まっていた。
あまりの事に。
風雷の腹から血が滲む。
だが、本人は痛くも痒くもない様子であった。
そして、

言う。

「今の俺には手加減出来ない。構わないか？」

神威は笑わずに頷く。

「楽しくなりそうだ」

そして、

始まる。

ゲームが。

「風雷さん…？」

新八は自らの血の付いた服を眺めた。

さっきまで自分の腕に中に居て、苦しそうに戦いを見ていた少女。

その少女は今、神楽のピンチに立ち向かった。

さっきの少女は笑って言った。

「生きろよ」

その言葉に、

一瞬異変を感じた。

まるで、

自分は生きないから、
そんな言葉で、
おかしい。
おかしすぎる。
疑問を感じた時、
少女はポーチから草を出した。
そして、
口に全て放り投げた。
そして、頬張った。
次の瞬間、
消えた。
自分の中に居た少女は抵抗する力も無かった。
ただ、うなだれていただけ。
そんな少女が、
消えたのだ。
いきなり。
瞬きした瞬間、
居なくなった。
そしてドッ、と大きな音がした。
その場所には、
居た。
さっきの少女が。
だが、
変わっていた。
まるで、
夜叉の様な、
畏れさせるような、
そんな少女が。
怖い、
思わずそう思った。

神楽ちゃんでさえ、
あんなに苦戦し、
踏まれた。
後もう少しで、
背骨や内臓が潰される、
そこまで、
やられた。
兄貴に。
だが、
少女は、
神威を蹴り飛ばした。
しかも、
有り得ない力だ。
何メートルの分厚さの壁が、
壊れた。
あの血まみれの少女が。
ボロボロの少女が。
そして、
少女は今も戦っている。
神威は何度も飛ばされていた。
力負けして。
弱々しい少女の力に。
弱々しい筈の少女に。
明らかに風雷が神威を押している。
痛々しかった左手はもう逞しく見えた。
風雷の腹の赤模様が広がるのが見える。
止めるべきか、
一瞬考える。
だが、
止められなかった。

僕には、
無理だ。
理屈とか抜きで、
無理。
ただ、
眺める事しか、
出来ない。
新八は震えた。

神楽は、目を見開く。
震えた。

風雷は、まるで咲き誇る桜のように舞う。
一つ一つの動作が滑らかで、無駄がない。
美しい、
桜が散る姿と同じ位、
綺麗。
真っ白な髪は少しずつ瓦礫の塵などで汚れていく。
体は赤く染まっていく。
傘と一本の刀を上手く使いこなし、
神威に少しずつダメージを与える。
神楽は水を流した。
無力な自分に。

「風雷…」

呟いた言葉は虚空へと、

消えた。

足掻く事は見苦しくても美しい。死ぬ事は美しくても見苦しいモンだ。（前書き

洒流奇：ごめんなさい！何話目かで春雨の団長になれるかもしれない？的な噂のが有りましたが、アレで第四師団と第十二師団と書きましたが、本当は第四師団と第八師団でした！！

ごめんなさい！！！

足掻く事は見苦しくても美しい。死ぬ事は美しくても見苦しいモンだ。

「ありゃ…さっきのガキか…？まるでありゃ――」

思わず口にしそうになった言葉に銀時は頭を振る。
言おうとしてしまった。
「俺じゃねぇか」と。
あのガキは違う。

「取りあえず…」

銀時は周りで烏合の衆となり果てた仲間達を見ずに立ち上がる。
取りあえず、
桂に届けよう。
この血を。
慎重に足を動かす。
そして、
後で風雷っつうガキを止める。
そう決意した銀時の耳に届いた言葉。
思わず足が止まった。
そして、
見た。
少女を。

「でも…凄いね？さっきとは大違いだよ」

「そりゃどーも」

神威の言葉に風雷は素っ気なく返す。

「こりゃお父さんもお母さんも大喜びだね」

「…」

服が綻び、風雷の剣で切れた肉から血が滴る。
そんな事を気にしない様子で立ち上がる神威の放った言葉に風雷は黙った。

「阿伏兎…他は？」

横目で一瞬阿伏兎を見る。
阿伏兎はハァと分かりやすく溜息を吐いた。

「そいつの親が殺される理由は――」

そこで、
阿伏兎の言葉は切れた。
代わりにザァン！と床が斬れた音が響く。

「余裕だな…俺がんな下らない事離させる訳あると思うか？こんな時によぉ？」

煙草をくわえた土方はニッと笑う。
僅かに唇には血が垂れている。

「そーですぜぃ。後で聞いてやらァ」

爛々と輝いた目を細めた沖田は剣を握りなおす。
近藤は頷いた。

「だが聞くのは――」

近藤は刀を構えた。

「御本人からだがな」

「はぁ…団長…ちとオジサンにはキツいッスよ…」

阿伏兎は自分の上司を見返した。
神威は肩をすくめる。

「それでも、言ってよね？勿論、言わなきゃさぁ――」

「テメェが死ぬ」

ザアァァァン！！
風雷の拳が床にめり込んだ。

「もぉ…習わなかった？人の話は最後まで聞きなさいって」

冗談めかしでポツリと呟いた神威は寸での所で避けた。
風雷は笑った。

「習う前にテメェ等にやられたんだよ」

その笑みは何処か愉しげであり、
何処か寂しげであった。
その笑みに神威は無感情な笑みで返す。

「どうして？」

風雷は笑みを消し、神威に殴りかかる。
神威は力では適わない事を理解していた為、寸での所で避ける。
だが、風雷の拳はソレすら許さない。
神威の腹に拳が吸い込まれるように入る。

「こほっ…」

神威の口から鮮血が躍り出た。
そしてそのまま天井へ。

「なぁ」

風雷が口を開く。

「なに？」

口を拭う神威。

「何か感じないか？」

「？何言っ――」

てんの？と言おうとした時グラッと体が揺れた。
だが、それは今まで風雷にやられた事によって体がボロボロでそう

なった訳ではない。
思わず口を塞ぐ。
目眩もする。
目の前に居る風雷の姿が霞んでいく。

「やっとか。それ、俺のせい」

ニカッと笑う風雷。
神威は阿伏兎を見る。
阿伏兎も同じように頭を抑えてうずくまっていた。
桂と戦っていた高杉も膝を床につけている。
何時もクールな顔には冷や汗が垂れている。

「じゃあな」

一歩、一歩、ゆっくり神威に近付く。
そして、
倒れる。
神威ではなく、
風雷が。

「それは君自身にも悪いんじゃないの？」

苦しそうに顔を歪めながらも神威は言う。

「何言ってんだ」

頭を上げ、無理矢理立ち上がる風雷の頬も苦しそうに歪んでいる。

「だってそうなる為には毒を呑んで、ソレを一気にぶちまける。沢

山の毒を飲めば飲む程毒は相手を致死する可能性は上がる。けど、」

ゆらりと、
立ち上がる。

「体にはそれなりに負担がかかる。多分、俺を殺した時君は――」

風雷は飛びかかった。
その言葉の先を言わせない為に。
だが、
神威は言葉を出した。

「死ぬんじゃないかな」

命は重てぇモンだ。だが、そいつ自身は気付かねぇ。自分の重みに。（前書き）

洒流奇：スッイマセーン、そろそろストック切れそうだから1日1話（第一章は）になります！

銀時：うっわ。オメェには誇りがねぇのかよ。

洒流奇：埃ならあるけど。

神楽：つまらないギャグやっても意味無いネ。おねんねしろ。

洒流奇：グキャッ！！

命は重てぇモンだ。だが、そいつ自身は気付かねぇ。自分の重みに。

風雷の毒によって倒れた桂の口に血を注ぐ。
桂は小さく咳をした。

「行ってこい」

桂の言葉に銀時は頷いた。

「言われなくても行ってやらぁ」

銀時は走った。
自己犠牲で全てを終わらせようとする鏡のような自分に。
銀時は知っている。
その努力、苦しみを。
そして、
それを支えてくれる馬鹿共の温もりも。

最後の一撃与えようとする風雷に向かって走る。

「止めろおおおォォォォォォォ！！」

助けたい、
心の中で叫んだ。
でも、
あんなに頑張ってる風雷を止める？
無理だ。

絶望に浸され、
何をすれば良いか分からない時に聞こえた言葉。
やっぱり、
風雷は兄貴を殺す気だし、
兄貴を殺した時、
風雷は死ぬ？
２人とも死ぬ？
えっ…？
そんなの、

「嫌だあああァァァァァァ！！」

足が勝手に動いた。
兄貴にやられた傷が痛い。
でも、
こんなの風雷の苦しみと比にならない。
だから、
私が風雷を止めてやるネ。
待っててネ。

「神楽っ！？」

銀時の驚きの言葉が発せられる。
だが、神楽は耳に入ってない。
反応する余裕など、
無い。
神楽は風雷と神威の間に入った。

「か…ぐら…？」

神楽を見た風雷は目を見開いた。
神威は何でも無いように無感情な様子で神楽を見た。
そして、
神楽は、
神威に抱き付いた。

「えっ…？」

神威の目が開かれ、口がポカンと開かれた。
風雷も驚いたように言葉を零した。

「ふう…らい、もう嫌ア…ル。風雷、死なな…いでよ…」

「兄貴も」と神楽は小さく言う。
「邪魔だよ」と言おうとした神威の口が止まった。

「何…言って…んだよ。死ぬわけないだろ？だから、ソイツから離れろ」

風雷は力無く笑った。
神楽は頭を横に振った。
そんな風雷の肩に温かい手が置かれた。

「もう止めろよ」

銀時の言葉に風雷は頭を横に振る。

「駄目…だ…俺、が終わ…らせ…る。それ、で、皆が…幸せに…な

れ…るなら、俺は……」

必死に言葉を紡ぎ出す。
銀時は風雷を無理矢理寝転がらせる。
力無い風雷は簡単に崩れた。
銀時に必死に抵抗しているが、弱すぎて意味が無い。

「どうやれば治るんだ?…それ」

銀時は腹に包帯を更に捲く。
包帯が紅く滲んでいく。
銀時が指したモノは、風雷の頭だった。
何も無いかのように主張する真っ白な髪。
血で紅くなったような真っ赤な瞳。
風雷はそんな瞳を細めた。

「言わねぇよ」

「言え」

「嫌――」

「言え」

有無を言わさない銀時の圧力は計り知れないモノであった。
体を動かす事すら辛い風雷の体が一瞬震えた。

「血…」

風雷は目を逸らした。

「血？」

コクンと小さく頷く風雷を見た銀時は風雷の腰に有るポーチを開いた。

漁ってみると中からさっきよりも小さな小瓶が一つあった。

銀時は風雷に「これか？」と聞く。

風雷はチラリと一瞬目をやって、恨めしいように頷いた。

銀時は風雷の唇に小瓶を当てる。

僅かに入っている血が風雷の口に入り、喉を通る。

コクリ、と喉が鳴った。

風雷の毛髪が少しずつ以前と同じように茶色に変わっていく。

真っ赤な瞳も瞬きした時には最初の時と同じ色に変わっていた。

銀時は肩を落とした。

「良かった」と小さく呟いた。

風雷は目をまん丸にして、瞬きをした。

「ハッピーエンドでは終わらせないよ」

そんな時、

聞こえた言葉は、

冷たいモノだった。

温もりっつうのは持って無かった時に味わうと中毒になりそうだ。（前書き）

遅くなりました！！ごめんなさい。

銀時：反省してねぇだろ。

神楽：コイツの人生の辞書に『反省』って文字は無いネ。

新八：ですね。見苦しい事を何回もしてますしね。

五月蝿い！五月蝿い！俺の世界は狭いんだぁっ！反省しなくても良いの！

銀時：見苦しいな。

神楽：可哀想アル。

新八：お花…要りますか？

温もりっつうのは持って無かった時に味わうと中毒になりそうだ。

自分を抱いている少女の暖かさ。
殺して、銀髪のお侍さんと闘おうと思った。
だが、
あの少女にやられた傷が悲鳴をあげた。
ただ、さっきまで戦っていた少女が元に戻っていくのを見ていた。
止めてさっきの興奮をもう一度味わいたい。
お互いの命を取り合い、瞬きすら危ないような程の緊張感を肌で感じたい。
そして、
血を味わいたい。
俺の心を唯一埋めるモノ。
こんなくだらないモノに。
駄目だ、
頭が狂ったか。
偽名を語り続ける少女の毒で狂ったのか？
とにかく、
壊す。
そう、壊せ。
自分の心に血を、
注げ。

神威は神楽を手で無理矢理頭を押し、はがすと、風雷に向かって飛ぶ。
銀時は腰にある木刀を咄嗟に握って神威に向かって放つ。
神威はヒョイと軽く避けると銀時に向かって回し蹴りをした。

銀時は飛んで避ける。
そして、丸腰の銀時に神威は拳を――
放てなかった。

銀時は無事着地して神威を見た。

神威は腰に捲かれているモノを見た。
白く、細い腕だった。
傷だらけの腕からは血が零れた。
さっきの毒の名残も有るのか、体がよろけた。
銀時は素早く風雷を担ぐと船に乗せに走った。

「待っ――」

「兄貴…」

銀時を止めようとした声が途切れた。

「兄貴が、傷つける所も、傷つく所も見たくないよ…」

涙が混じった言葉がポロリポロリと落ちていく。

「黙れ…何も言うな…」

拳を堅く握った。
今すぐにこの拳で後ろに居る妹を殴ろうか?
…えっ?
妹?
今、俺、

何て思った？
何で、
神楽を妹って思ったの？
違う。
ただ、
運悪く血が繋がってしまった、
他人だ。
だから、
違う。

「兄貴…も、もう、止めようヨ…。もう、止めようヨ…。皆が傷ついて、い、嫌アル…」

神威は背中が濡れていくのを感じた。

「五月蝿い…黙れ…」

何で、
この手を解かない？
この手を解けば、
楽なのに。

「兄貴、見てアル…私、いっぱい仲間作ったアル…友達、作ったアル…。兄貴程馬鹿じゃないけど、おてんばな馬鹿共が、来たんだヨ…？」

神楽は顔を上げた。
頭を上げると神威のおさげが頬をくすぐる。

阿伏兎は風雷の毒が無くなったからなのか、力強く戦っていた。

桂と高杉も刀を打ち合っている。

「兄貴ぃ…私達、一人じゃないアル。関係ないかもしれないけど、もう独りじゃないアルヨ？もう、沢山沢山大切なモノが有るアル…ヨ？これ、壊しちゃ駄目アル…」

神威は震えた。
小刻みな振動が神楽から伝わってくるのだ。

「もう、止めヨ？」

神楽は神威に向き合った。
涙で濡れた顔は逞しい。
神威は一瞬、怯えた。
その、優しくて、温かくて、
心を癒やしてくれるモノに。
母さん…。
口の中で呟く。
今は亡き母の笑みが頭を支配した。
その母は口を動かした。
もう、居ない筈なのに。

「『大好きだよ』」

神威は、後ずさった。
そして、瞬きをした。
微笑んだ妹の顔は、
闇を照らしたのだった。

過去とか思い出とかって覚えてないようで覚えているモン。（前書き）

洒流奇：ねぇ銀さん。

銀時：何だ？

洒流奇：愚痴っていい？

銀時：…良いぞ。

洒流奇：文化祭って何であるの？ただ皆で仲悪くなって皆でいがみ合ってくだけじゃん。無駄に時間使って無駄に遊んで。意味無いし。つうか皆クラスの一員だよ！って何？青春！みたいな？ウザイよそれ。仲悪いのにクラスの一員ってのがウザイよ！

銀時：…。

洒流奇：はー…1％すっきり…かな？

銀時：…。

洒流奇：どうかした？

銀時：…。

洒流奇：何？

銀時：言っていいか？

洒流奇：うん。

銀時：分かんねえ奴に愚痴ってどうすんだよ。

すいません。ちょっと今苛々してて…。

出来る限りプライベート書かないようにします…。

過去とか思い出とかって覚えてないようで覚えているモン。

「高杉」

「何だ」

斬り合いの中、桂と高杉の間に言葉が飛び出てきた。

「もう、止めぬか」

悲しいように顔をしかめている桂に高杉は微笑した。

「意味が分からねぇなぁ。ヅラ、テメェ何時からそんなに温く（ぬるく）なったんだ？」

高杉は余裕そうに口で弧を描かせるが、その眉間には皺が寄っている。

解毒剤を飲まず、その上桂に刺された傷は放置。

高杉に白星があがる可能性は低い。

「貴様もその傷だ。もう手を引くが良い。此方にも重傷者が居るのだ。そして、頭を冷やせ。自分が収まるべき鞘を探すがいい」

「悪いが、俺が収まる所は火の海となった地球だけだ」

カキン！と高らかに刀の音が響く。

桂は悲しそうに目を細めた。

「何故、我々は違う所を見ていたのだろうな。我々の前には光があった筈なのに」

桂の長い髪が一瞬輝いた。

「その光が無くなっちまったから俺らは点でバラバラな方向を見たんだ。例え、最初らへんは同じ方を少し見ていたとしても」

毒によって崩れた時に落ちた黒雲はキラリと輝いた。
あの輝きの美しさを教えてくれたあの人。
あの人自身、その輝きに負けず光っていた。

「なぁ高杉」

桂は力で高杉を押す。
高杉は後方に飛ぶ。

「お前には、松陽先生がもう居ないのか？確かに、姿が見えなくなったが…もうお前には松陽先生との記憶は無いのか？」

「有るに決まってんだろ。記憶を呼び起こす度に、今ものうのうと暮らしている奴らが憎くなる。そして、地球を壊すことの喜びが。俺の願望を果たす為の原動力となる」

「じゃあお前はあの時の――松陽先生の銀時を受け入れた時を覚えているか？」

高杉は脇腹を抑えながら笑った。

「決まってんだろ?俺は忘れない。松陽先生が教えてくれた全てを」

「じゃあ、今その言葉、その時に我々の心に訴えかけた言葉を思い出せ」

「ヅラ、自分で言え。俺に言わせてどうすんだ」

そう言いつつも高杉は記憶を辿る。

そう、あの時の事を。

「先生、今日も良い天気ですね!」

ポニーテールの髪をゆらゆら揺らしながら幼い頬を赤く染め、桂は松陽先生の腕に絡んだ。

「そうですね…実に良い天気です」

松陽先生も桂と同じように微笑んだ。

そこでふと気がついたように頭を上げ、「どうしたのですか?」と近くでむくれている高杉に頭を撫でた。

風も高杉の頭を撫でるように柔らかく吹いた。

「何で…先生はあんな奴を入れたんだよ?」

低い声をわざとらしくだしながら高杉は刀を抱きながら部屋の隅でうずくまっている銀時を睨んだ。

銀時は周りに溶け込まずに涎を垂らしながら静かに寝息をたてていた。
高杉にはその行動が更に腹が立つ。
松陽先生はクスッと優しげな顔で笑いながらしゃがんだ。
目線が幼い高杉と同じくらいになる。
ブッスーとしている高杉は口を尖らせていた。

「では…何故君は彼を拒むのです？」

松陽先生は咎めるわけでもなく、柔らかい口調で話す。
桂は高杉と同じ事を感じていたのか、興味津々な様子で眺めている。

「だってアイツ『鬼』って言われてんだろ…？そんな奴を先生に近付けたくないし…」

高杉はふっと視線を落とす。
分かっていたのだ。
自分が言ってる事は最低だと。
ただ、気にくわないから後付けとして先生を言い訳にしている事を。
だが、
ちゃんとした理由は自分でも分からない事を。

「ありがとうございます。嬉しいですよ。私の身を案じている事を」

だが、松陽先生は高杉の頭を撫でた。
大きな、温かい手がもっと大きく感じる。
高杉は目を上げた。
そこには、笑っている先生が居た。
何も変わらない先生が。

「私はですね、そんな貴方が好きですよ？少し神経質な部分が有りますが」

高杉の頬が僅かに赤くなる。
桂はクスッと笑った。
高杉はそれを見て、「何笑ってんだ！」と言いながら桂に絡もうとした。
だが、それは松陽先生の優しい手にやんわりと止められた。

「無理かもしれませんが、私はずっとこのままが良いです」

松陽先生の視線が空に向いた。
高杉と桂もつられて上を向く。

「空は真っ青で、皆が笑ったり、喧嘩したり。こんなのがもっと広がって欲しいんです」

「先生…？」

桂の心配した声がかかる。
高杉も頭を傾げた。

「平和、と大々的に言っても多分それは無理でしょう…。私の今の考えが笑われたって構いません。ですけど、皆がこの気持ちを分かったら、きっと太陽はもっと輝くでしょう」

「先生…どうしたんですか？」

桂の小さな手が松陽先生の肩を揺らした。
松陽先生はクスッと笑って、

「気にしないで下さい。少し難しい事を言いました」

桂の頭を撫でる。

「先生」

高杉が松陽先生に声をかける。

「何ですか？」

松陽先生は振り向いた。

「俺にはまだ良く、分かりませんが、俺、先生の言った事叶えてやるよ！」

キラキラした笑顔でたどたどしく言った言葉に松陽先生は優しく笑うと、立ち上がった。

「楽しみに待ってますよ」

「じゃっ、じゃあ俺も！」

桂は手を挙げた。

「俺が先だよ！」

「俺の方が声が大きいから俺の方が先に叶える！」

「なんだとぉ！？」

「やるかっ！」

二人はぐるぐる腕を回す。
そんな二人の頭に温かいモノが乗る。

「授業始めますよ」

桂と高杉は元気よく頷いた。

松陽先生はもう一度空を仰いだ。

「俺も…頑張ってやるよ」

松陽先生は声がした方を振り返った。
そこには、本で顔を隠した銀時が変わらぬ体制で居た。
銀時は本の端から松陽先生の顔を見ると、「ふんっ」と言ってまた顔を隠す。
松陽先生は笑いながら銀時の頭をポンポンッと優しく叩いた。

終わりってのは簡単に終わらせられるモンだし、簡単に終わらせられないモンでもある。

第一章終わってはないけど殆ど終わったー！ストックきれるぅー！

銀時：てか銀さん思ったんだけどさ！

神楽：どうしたアル？

銀時：銀さん全然闘ってねぇ！

新八：僕の方が闘ってませんよ。

銀時：新八は雑魚だから良いけどさ、仮にも俺は原作で主役だぞ！？もっと闘えよ！

神楽：過去の栄光を引きずる男は見苦しいネ。

銀時：何言ってんの！俺は現段階で主役だ！

新八：小さい男は嫌われますよ？

銀時：新八に言われるとか最悪ー！！

終わりってのは簡単に終わらせられるモンだし、簡単に終わらせられないモンでもある。

「高杉、松陽先生という理由付けでまだこんな事を続けるのか？」

「…」

高杉は刀を振る。
がむしゃらに。
だが、桂はまるで大人の様に優しく打ち合わらせた。

「高杉、何故私が髪を伸ばし始めたか覚えているか？一回お前達のせいで切られたがな」

「そういや言ってたな…。『俺は松陽先生みたいになる』とかほざいてたな」

荒い息を吐いた。
目が霞んでいる。

「ウラァ！」

高杉は強く刀を下ろした。
だが、それさえも桂によって軽々と避けられた。
舌で爆発音を作り出す。
桂は悲しそうに微笑んだ。
その時、その笑みに重なる人が見える。

松陽先生だった。

「『時には負けを認めるのも大切ですよ』」

松陽先生が何時か言った言葉。

確かあの時は銀時と喧嘩して、不意打ちで頭を叩かれたんだっけな、と過去の記憶が蘇る。

その時に松陽先生に叱られて、ブッスーと頬を膨らました時に最後笑いながら言ってたな。

「…つっ！」

カキン！と高らかに鳴った刀で今に戻る。

「過去を振り返るのも良いが、振り返りすぎるとろくな事は無いぞ？」

「そぉだな！」

再度高杉と桂の間に溝が作られる。

「…さて、どうする？」

桂は頭を傾げた。

髪が靡いた。

「んな事――」

まだほざくのか、と言おうとした時に、

兎がやって来る。

銀時は風雷の体を船の中に置いた。
風雷は目を開け、荒い息で必死に呼吸している。
船の中にはもう一人乗客が居る。
天人だ。
此処まで運んだ天人は今頭を殴られて意識を失っている。
コイツは邪魔だな、と思った銀時は天人を担いで外にほっぽった。
中を確認する。
風雷は静かに倒れている。
良し、と銀時は頷いて外に出る。
新八に来い、と目で合図する。
新八はビクッとしてから頷いて此方に来る。
銀時は次に辺りを見渡す。
この中だとあのオッサンん所が危ないか、と瞬時に判断して足を動かす。
そして、自らも戦いに身を置こうとした。
そう、しようとし“た”。
現段階、阿伏兎の所まで行けてない。
何故なら、
聞こえたから。
必死な叫びが。

「もう……止めてくれ！！」

振り返った。
そこには、

呼吸するのも辛そうな、
風雷が、
立って居た。

「俺が死ね…ば良いなら、死ぬから……もう」

叫ぶ。
自分の喉が、
体が、
悲鳴をあげていても。
叫ぶ。

「止めてくれっ！！！」

皆の動きが止まり、風雷を見る。

「もう…止めてくれ…。俺の命で…終わんなら、し…死ぬか…ら…」

風雷が崩れた。
新八が駆け寄る。

「風雷さんっ！？風雷さんっ！？」

真っ白な顔が真っ青な色合いに変わる。

「風雷っ！？」

神威の前に居た神楽は振り返って風雷を見た。

「ガキッ！！」「風雷君！？」「オメェ！？」

土方の驚きの声、近藤、沖田の声が重なる。
阿伏兎も唖然としていた。
阿伏兎はポツリと呟いた。

「ガキンチョ…」

風雷は阿伏兎を見た。
その目は驚きを映していた。

「兎…さん？」

風雷の呟きに今度は阿伏兎が驚かされる。

「お前、あん時の…？」

「高杉…どう思う」

桂は風雷を見る。
高杉も刀を下ろして風雷を見る。

「あんなに自分の命より、他人を大切にする…光をどう思う？」

桂は高杉に視線を移す。
高杉も桂に視線を移した。

「お前はあの光を消したいか？」

高杉はフンッと鼻を高々と上げ、背を向けた。

「興が冷めた。お前ら帰れ」

桂は口角を僅かに上げた。

「そうさせてもらうか」

「あれ…良いの？」

神威は頭を傾げた。

土方、近藤、沖田、神楽、そして桂は神威達に背を向ける。

「構いやしねェ。興が冷めたんだよ」

「それにしても…阿伏兎どうしたの？ボケっとして？」

阿伏兎は銀時達と正反対の方に足を向けた。

「阿伏兎…？」

「ちとオッサン調べてくらぁ…」

「？」

神威は頭を傾げながらさっきまでの戦いを思い出す。

「…『妹』っか」

「行くぞ」

「ハイハーイ」

高杉の声に神威は静かに笑って、軽い足取りでついて行く。

戦いは、

終わったのだった。

船の中って狭いようで広い。（前書き）

洒流奇：どうしよう銀さん！ストックが後四話位しか無い！

銀時：知るかよ。まぁこれからも頑張れよ。

神楽：コイツに頑張るという向上心は無いネ。銀ちゃんも分かってるデショ？

新八：ですね。作者が頑張ってた姿って見た事無い気がします。

風雷：結局残念なんだな。

洒流奇：作者なのにーー！！

船の中って狭いようで広い。

銀時は去り際に風雷の愛刀『黒雲』と傘を手にする。
刀はずっしりと重さを実感させた。

「…『刀の重みは斬った相手の命の重みです』ってな」

信頼する先生の言葉を口にし、微笑んだ。
そして、船に乗った。

「にしても…ヅラやっぱり船の動かし方しってるのか？」

銀時は心配そうに頭を傾げた。

「当たり前だ。俺を誰だと思ってる」

「クズ」と銀時。

「部下」と神楽。

「ロン毛」と沖田。

「敵」と土方。

「攘夷浪士」と近藤。

「近藤さんと似た者同士」と新八。

「なっ…お前ら酷すぎでは無いか!?」

桂はギャアギャア喚く。

だが、すぐに銀時の鉄槌が下り、静かに。

「風雷平気アルか…?」

神楽は風雷の元に駆け寄る。

風雷は現在壁にもたれかかって静かに様子を窺っていた。

風雷は神楽が近付いてくるのを確認すると「平気」と笑ってみせた。

だが、それはただの強がりにしか見えないのだが。

「そろそろ包帯代えた方が良いですかね…?」

新八の声に神楽は「捲く捲く!」と元気良く手を挙げた。

「自分…でやるよ。倉庫とか無い…か?」

風雷は優しい声で新八に聞く。

神楽は頬を膨らまして「私やるネ」と呟いた。

「ちょっと服を脱い…で確認したいから自分、でやりたいんだ。ごめんな?」

風雷は素直に謝罪を口にする。

神楽は溜息を吐いた。

「だったら私、女アルから平気アル。別に…」

「俺の心は男だ。だから、はっき…り言って女に体を見られるのは好きじゃないん…だ」

「分かったアル…」

神楽は渋々引き下がる。

「だったら男の俺がやりまーす！」

その時、銀時が勢いよく手を挙げる。

「俺がやる！」

桂も勢いよく手を挙げた。

良く見ると二人の鼻から赤い液体がポタリポタリと落ちている。

「テメェらの目的完全に違うだろっ！？ただ見たいだけだろ！変態が！」

新八のシャウトに、神楽も同調し、銀時の頭を思い切り叩いた。

当の本人は「へっ？」と呆けた声を出し、何があったか分かっていない。

というか、この少女はそうゆうのには全くと言って良い程理解していない為、銀時達の目的を良く理解していない。

「いや…坂田さん達は男だか…ら…一様俺、体は…女だし…無理、だろ？」

あたふたしながらも風雷は必死に言葉を紡ぐ。

僅かに頬は赤らんでいる気がするのは気のせいだろうか。

「何だと!?俺は気遣いで言ってるんだ!」

桂は血を更に噴き出す。

「下心見え見えだ!」

バシッと新八は頭を叩く。

土方はハァと溜息を吐いて風雷の手を握って立ち上がらせ、船の貨物置き場まで支える。

「おっ多串君積極的だねぇ。見直したよ」

銀時は鼻血を拭きながら土方の肩を叩いた。

「んな訳ねぇよ。このガキは邪魔なんだよ」

「そう言って何をする気だ――」

「黙れ!」

土方は空いてる手で全力で銀時の頭を叩く。

だが、その手は沖田に掴まれる。

「土方さん、暴力はいけねぇですぜェ?それと女と二人で楽しむなら倉庫とかじゃあねぇ方が良いんじゃないんですかィ?」

「テンメェ!!」

クスクス含み笑いをする沖田を潰す為に土方は風雷の手を離す。
自分で体を支える力など無い風雷の次の動きは簡単だった。
地面に落ちる、ただそれだけだ。
風雷は倒れる。
土方は自分がしてしまった事を気付き、支えようと動いたが今更遅い。
重力に従って風雷は落ちそうになった。
なった、のだ。
風雷の体は支えられた。
銀時の体で。

「おい…平気か?」

銀時は胸で風雷の肩を支え、手首を握る事によって風雷の体を完璧に支えられる。

「…悪い」

風雷は気まずそうに頭を下げた。
銀時は「気にすんな」と小さく言って抱え上げた。
そして、風雷の求めている場所まで簡単に運んだ。
運ばれた風雷は「へっ…へっ?」と頭を傾げているだけだった。
運ばれるのが多い少女だ。
そして、優しく下ろされて戸を閉められた。

「銀さん…?」

「どうした?」

新八の問いに銀時は普通に応える。

「いえ…」

新八以外の皆も感じた。

数秒、

銀時の体から血が臭った感覚が。

もしかしたら、風雷の血かもしれないが、少し恐怖を感じる。

新八は俯いた。

銀さん…

駄目ですよ。

気持ちを…

欲望を…。

猥褻ってのは何処から捕まるのか分からないからって好きにやるな。（前書き）

投稿遅くてスイマセン！！

文化祭で…。

そして今日はお喋りは無し！！

なぜなら、

チャリンコ漕ぎながらやるのはキツいからだ！！

猥褻ってのは何処から捕まるのか分からないからって好きにやるな。

風雷は戸から誰かが覗いてないか確認すると包帯に手をかける。
包帯はゆったりと、静かに、優しく落ちていく。
次に、帯は緩めずにボタンのみを外す。
上半身の服が落ちる。
だが、緩められてない帯によって下までは服が落ちずに中途半端な位置でぶらぶらと垂れ下がる。
服が纏われてない背中には傷があまり無いのか白い肌が暗闇に目立つ。
そして、
その白い肌に刻まれているモノも良く目立った。
傷口は塞がったのか既に血は流れておらず、ただただ生々しい姿を見せびらかす。
風雷は新八から受け取っておいた包帯を取り出す。
白い肌に白い包帯を捲く。
閉じている筈の傷口を捲いた時に僅かな痛みが。
そして、血が僅かに包帯に染みる。
包帯を胸の所まで捲くと次には刻まれているモノを覆い隠すように肩へ。
そして、包帯をとめると唇で弧を描かせた。

「嘘理（きょり）」

ポツリと呟いた言葉が響く小さな部屋。
風雷は低い天井を見上げた。

「嘘理…。それが俺の世界の…だよな…」

風雷の言葉は誰にも届かない。

「母さん…父さん…」

風雷は外に出た。

扉を開けた風雷はよろよろした足取りではないが多少ふらつくような動きで足を動かした。

「風雷…さん…!?」

新八は顔を強ばらせ、驚きの声を出した。
他の皆も口をポカンと大きく開けていた。
桂は最早鼻から赤い液体を流していた。

「…どうした?」

風雷は頭を傾げた。
神楽が駆け寄る。

「風雷服は!?」

「…?捲いてるじゃん」

「包帯は服じゃないネ!」

そう、
神楽のコメントで分かるでしょうが、
風雷は――
上半身に包帯しか捲いていない。
つまり、
服を纏ってない。
土方は気まずそうに俯いた。
新八は鼻を抑えている。
近藤は抑えているが、すでに流血。
桂は撃沈。
沖田は平然としているように普通に見ている。
銀時は頬を僅かに赤くして口を開けていた。

「別に見えてないぞ…？公然猥褻罪とかで捕まらないだろ？」

風雷はおかしいか？とでも言いたげな風に頭を再度傾ける。

「そおゆう問題じゃないネ！」

神楽は頑張って隠そうと飛び跳ねるが、当の御本人は理解していない。

「何で着てないネ！？」

「血だらけで汚れててイヤだから」

「今からでも遅く無いから着るアル！」

風雷のチャイナ服に手をかける神楽。

風雷は「ヤダよー」と単調な声を発する。

「…着ろ」

とうとう土方が自らの上着を脱いで風雷に投げた。

「…サンキュ」

風雷は逆方向に頭を傾げつつもそれを纏った。

「銀時…見たか？」

「あぁ…あれはあれだな」

「隠れ巨乳だな」

この二人の猥褻な会話が風雷に届かなかったのが救いであった。

「何ですかィ？あんた、そんなに俺達に世話されたいんですかィ？」

沖田の問いに風雷は「はっ？」と呆けた声を出した。

「意味が分からない。別に変な事してねぇし」

「いや…してますよ…風雷さん…」

途切れ途切れの新八の言葉を完全無視した風雷は「知るか」と言って座った。

壁にもたれかかる。

「風雷君…寝ときなさい…まだ怪我人なんだから」

近藤は鼻から流血をしながら気遣いをした。
残念だが、その姿は変質者にしか見えないのだが。
風雷は気にしない様子で、「別に眠くない」と吐いた。

「駄目アル！風雷！寝るネ！」

「…別に――」

「寝るネ！！」

有無を言わさない強い口調に風雷は溜息を吐いて、「分かった分かった」と呟いた。

「はぁ…」

新八が溜息を零すのが非常に似合う光景であった。
風雷は船内の一番端っこに移動すると自分の足を抱えた。
そして頭を伏せる。
そう、体育座りである。

「風雷…？」

「んっ…？」

「何で…そこに…？」

「寝るから」

「だったら横になった方――」
「嫌だ」
強い言葉が出てきた。
神楽はたじろいだ。
「…悪い」
風雷は顔をしかめた。
「…起こす時は声をかけてくれないか？」
「分かった…アル」
神楽は俯いて言葉を発した。
神楽は心の中で呟いた。
私達には…壁が有る…だね…風雷。
「じゃっおや――」
「ハイ、ストップ」
風雷の腕を銀時が掴んだ。
「…何だよ？」
「お前さぁ、何でそんなシケた面してんだ。もう終わったんだぜ？笑えよ」

「…ない」

「…？」

銀時はかすれた風雷の声に頭を傾げた。

「終わってない…終わらない…」

そして、頭を下に向けた。

「俺と春雨の関係は…因縁は終わらない」

現時点で風雷の表情がどんなモノか分からない新八は拳を震わせた。

何で…こう捕らわれる奴が多いんだよ。何で…話さないんだよ…。

言いたい事は言葉として出なかった。

銀時は何も言わずに風雷を無理矢理立たせた。

「…何だよ」

「じゃあ聞くぞ」

「…何――」

「お前はどう思う？」

唐突の銀時の問いに風雷は頭を傾げた。

「…？」

「どう思うんだ？今の神楽の気持ちを」

銀時の問いの意図に気付いた風雷は銀時の手を払った。

「…」

静かに睨み合う。

「もう止めろ」

言葉が聞こえたと同時に風雷の視界が黒くなった。
土方は何時の間にか風雷の後ろに回っており、風雷の目を隠したのだ。

「コイツは俺達の獲物だ。万事屋、落ち着け。事情聴取は後ですんだ。今は休ませてやれ」

銀時はハァと溜息を吐いて、

「…悪かっ――」

謝ろうとした。
その時、
風雷の体がよろけた。
風雷の体は土方によって受け止められる。

「…？」

土方は恐る恐る目隠ししていた手を離した。
風雷は、
静かに寝息をたて、落ち着いた顔で寝ていた。

「ぷっ…」

新八は思わず噴き出した。
それと同時に他の皆も笑う。
その笑い声に起きたのか風雷はビクッと体を震わせて目を擦った。
そして、数秒自分が寝ていた事に気付くと頬を赤らめた。
風雷は土方の手をひっぱたくと端っこに逃亡。
震える子犬の様だった。

「ねっ寝るから、しっ静かにしろっ！」

風雷は怒鳴って頭を隠した。
その姿が面白くてまた笑いが込み上げてくる。

やっと、

笑い声が船内を征服したのであった。

銀時：あー眠い。

新八：本当に作者の通学のせいで早く起こされますし。

神楽：美容の大敵をあの馬鹿は知らないネ。

風雷：…。

土方：ただテメェらが寝坊する馬鹿なだけだろ。

銀時：あぁっ？やんのか多串君？

土方：多串君じゃねーー

はい、お決まりの結果が来る事が丸分かりだからブチ切りーー

ぶへづ！！

土方：何男の戦いを消そうとしてんだぁ？

銀時：テメェから先にやってやらぁ。

えっちょっ待っーー

癖でその人の生き様が少し分かるかもしれないんだよ。

「良いか…捕まえるんだぞ？」

土方は沖田に耳打ちした。
沖田も小声で「分かってますぜェ？」と返す。
捕まえる――とは桂の事である。
そろそろ地上に着くのだ。
今回は仕方が無く共闘したが、敵は敵。
地上に着いて、ドアが開いたらＧＯ。
一発勝負。
全神経を集中させる。
出発した公園に船が着き、扉はゆったりと開く。

「（今だっ！）」

土方の思いが通じたように沖田が動く。
そして、桂の首に刀を――
向ける前に白い煙が船内を支配した。

「ゴホッゴホッ！」

咳き込む銀時達を余所に桂は高笑いしながら扉へ。

「逃がすかぁっ！」

近藤が先回りしていたが、

近藤は倒れる。
近藤の頭に堅いモノが落ちたのだ。

『お帰りなさい。桂さん』

達筆な黒い文字が白い煙を巻き上げる。
そこには――
エリザベスが居た。

「数日ぶりだなエリザベス！さらばっ幕府の犬共～！」

感動の再会を果たして、桂とエリザベスは逃亡。

「クソッ…」

舌打ちをする土方。

「テメェ等何してくれんだアアァァァ！」

神楽の叫びが響き、沖田と激突。

「テメェのせいで何で私が被害受けないといけないネ？私は被害者アル。賠償金払うヨロシ」

「誰がテメェ何かに払うか」

バチッと二人の間に走る電流。

「まぁまぁ…二人とも落ち着いて。地球に帰ったんですよ？」

新八は優しく宥める。
多分意味無いだろーけどなぁ…と心の中で呟きながら。

「そうアルな…」

だが、
神楽が簡単に引いた。

「…どうしたんですかィ？」

思わず心配する沖田を横目に神楽は扉に向かう。
土方達もぞろぞろとその背中を追い、船から降りる。
銀時は風雷の武器を手にし、風雷の肩を揺さぶった。

「起き――」

その瞬間風雷が消え、首に冷たいモノが向けられていた。
風雷が銀時の背中に回って手を銀時の首筋に向けているのだ。

「……どうしたんだ…？」

銀時は焦らずに後ろに声をかけた。

「あっ…悪い！…間違いだった…」

風雷はすぐに銀時の首から手を遠ざける。
銀時は振り返った。

「…どうした？」

「癖…なんだ。悪い。…今度起こしてくれる時は遠くから声をかけてくれ」

銀時に背を向けると風雷は船を降りる。
銀時は疑問を感じた。

「…癖か」

あんなに素早く背後を取り、殺気の満ちた手を首に向ける。
あのガキ、
どんなに信頼出来ない世界に生きてたんだよ…？
戦場で生きていた男ですら、そんな所まで追い詰められていない。

「…高ぇよ」

こんなに高く、分厚い壁、
見たことねぇよ。
銀時は船から降りる。
真っ黒な闇が銀時を纏ったのだった。

おもりの重さには年齢は関係ない。（前書き）

ねぇ聞いてよ！

銀時：んあっ？

昨日文化祭だったから今日は振り替え休日なのに部活でまた６時２０分だよ！？嫌だよぉ…

銀時：だったらテメェと一緒に起こされてる奴の身にもなれよ。

無理だよ。だって昨日先生に「そおゆう自己中な所が嫌いなんだよ」ってキレられたしね。まっテメェが言うなーって思ったけど。

神楽：馬鹿アルか？先生を怒らせるって。

新八：そうですね。怒らせないように出来なかったんですか？

あんなんでキレる奴は居ないよ。

銀時：てかテメェ、プライベートは書かないとか言ってなかった？

愚痴を書きたくなるんだよ。疲れて。

神楽：こっちは毎日働いてるネ。

こっちは一週間と来週もだから…

二週間丸々取られるよ？

新八：何かリアリティがある感じですね。

事実だしな。

銀時：お前、友達居ねぇのか？

居るよ？ただ、昨日愚痴るの忘れてから。

神楽：……。

おもりの重さには年齢は関係ない。

「さて、万事屋とそこのガキは屯所に来てもらおうか」

土方は振り向きざまに言う。

「了解」

風雷はアッサリＯＫする。
そして、「坂田さんありがとう」と言って銀時から武器を受け取ろうとする。
だが、銀時は「後…でな」と心此処にあらずのような乾いた声で返す。

「じゃあ行くぞ」

土方の言葉を合図に前を歩き出す。
その間新八や神楽、近藤達などのギャグで笑いあっていたが、銀時は上の空だった。

「銀ちゃーん？」

「…」

現実世界に引き込まれた銀時はビクッと震えて、「どうした？」と答えた。

「どうしたって…銀ちゃんが反応しないからどうしたのかなって…どうしたアル？」

「ちょっと考え事だ」

銀時は手を振って何でもねぇ事をアピール。
神楽は少し不満そうに頭を傾げ、「もう知らないアル」と言って会話に戻った。
銀時はふと視線を感じて斜め後ろを見る。
風雷が自分を見つめていた。

「どうした？」

銀時は少し微笑んで風雷を見た。
風雷は瞳を悲しそうに細めて頭を左右に振った。

「どうしたんだよ。んなシケた面ァしやがって」

銀時は風雷の頭にポンッと手を置いた。

「シケた面してんのは坂田さんじゃねぇか。…俺のせいか？さっきは悪い…。今度からは気をつけるよ」

「んな事気にしてねぇよ。そんな小さい事気にするほど俺は楽じゃねぇよ」

笑ってみせる銀時の顔を風雷はジッと見て、「そうだな」と小さく頷いた。
銀時は風雷の頭から手を離して土方達の背中に向かって歩く。
銀時は気付かなかった。

風雷の苦しそうな顔で俯いている事に。

「…」

そして頭を上げて、頷いた。

「風雷遅いアルよー！」

神楽の声に風雷は「今行く」と返して走った。
小さな小さな背中に沢山のおもりを背負いながら。

年上の奴は年下の奴を世話したくなる奴ばかり。（前書き）

洒流奇：無い！ストックが全然無い！

銀時：だったら次話投稿しなきゃ良いじゃねぇか。

神楽：そうネ。こんなくだらない作品に期待する馬鹿は居ないネ。次からは『ザ・神楽ストーリー―悲劇的な少女の涙―』とかにするアル。

洒流奇：えっ悲劇的な少女の涙ってウチ？いや、確かに泣きたいけど、泣かないよ？

神楽：何でそうなるネ！私に決まってるアル！馬鹿なのか！馬鹿なのか！

新八：馬鹿は全員だと思うけど…

神楽：駄メガネは黙ってるネ！

洒流奇：そうだ！『だ』って打ったら予測の中に『駄メガネ』ってワードが入ってしまった駄メガネは黙ってろ！

新八：意味分かんねぇよ！つうか作者何言ってんの！？テメェの携帯情報なんか知らねぇよ！！

銀時：因みに『ぎ』ってワードをうったら銀時が予測に入ってるぞ。

新八：テメェはテメェで何言ってんの！？読者は関係ないから分かんないって！

年上の奴は年下の奴を世話したくなる奴ばかり。

屯所についた銀時達は部屋に入れられた。
二部屋に分けられる。
銀時、神楽、新八の万事屋と風雷で。

「何で風雷だけが一人ネ！」

納得出来ないように神楽はドアを叩いた。
土方は新たな煙草に火をつけ、「アイツは犯罪者だからだ」と短く答えた。

「じゃあ何で風雷を事情聴取するのがサド野郎ネ！風雷が可哀想アル！」

土方は「別に誰だろーが変わらねぇだろ」と吐き捨てた。
神楽は不満そうにまだ頬を膨らました。
そんな神楽を見て土方は数分前の事を思い出す。

「取りあえずメンバーは万事屋と半殺し屋で分けるっつう事で良いのか近藤さん？」

部屋に４人を押し込んだ近藤は頷いた。

「あの子は多分、一人の方が話しやすいだろうからな」

「確かに。チャイナ娘の前では妙に強がってらァ」

沖田も頷く。

「じゃあまずどう分けるんだ？半殺し屋に一人、万事屋に二人か？」

「やっぱり他の奴には言わねぇんですかィ？旦那の事…」

沖田の顔に陰が作られる。

「当たり前だ。もし上にバレたらヤバいだろ」

「じゃあ俺があの半――」

「近藤さんは万事屋だ」

『半殺し屋の子』と言おうとした近藤の口を止めさせる。

「どうしてだ、トシ？」

思わず頭を傾げる近藤に土方は溜息を吐いた。

「あんたは人が良すぎる。あんたの悪い所は無駄に気ィ遣って深くまで聞かねーのだよ」

「だったら俺がガキンチョのおもりしてやりますぜェ？」

沖田は手を挙げる。

「テメェにやらせると後々おかしくなる気がすんだが？俺がやる」

「もしかして土方さん、あのガキに興味あるんですかィ？」

「んな訳ねぇだろ。誰があんなに年下のガキに惚れなきゃなんねぇんだよ」

「だったら良いじゃないですかィ。俺はチャイナ娘が嫌いなんですよ。旦那には興味ありますが、今はアイツの方が面白れぇ気がしますしねェ」

「…」

土方は上から沖田を睨む。
沖田も負けずに下からガン飛ばすように睨む。

「分かった分かった！総悟頼むぞ」

近藤が二人の間に入って笑った。

「分ぁったよ。近藤さんがそーいうなら。ちゃんと仕事しろよ」

「少なくともどっかの犬の餌好きの変態ヤローよりはしますよ」

「テメェ…何か文句でも――」

それからもあーだこーだ言い合って、今に至る。

「んな事はどうでも良いんだ。おい、万事屋」

「何だ？」

新八と神楽の間で座っていた銀時は頭を掻いた。

「洗いざらい話せ」

事情聴取ってのは何したって許されると思ったら大間違い。（前書き）

洒流奇：投稿遅くなってスイマセン！朝やろうとしたら、問題があって…。

神楽：結局このサイト自身に文句言いたいらしいね。

銀時：何て最悪な奴なんだ。言い訳は一人前だな。

洒流奇：仕方がないぢゃん！？充電もきれたんだから！

新八：言い訳程醜いモノは無いって何回言われれば気が済むんですか作者さんは。

洒流奇：３２回位？

神楽：地味ネ。

銀時：意味が分かんねェな。

新八：…ドンマイです。

洒流奇：新八に慰められるなんて…駄メガネに…。

新八：だから何で僕だけ扱いが酷いんですか！おかしいでしょうっ！？

銀時・神楽・洒流奇・風雷：ドンマイ。

新八：クッソオオォォォ！！

事情聴取ってのは何したって許されると思ったら大間違い。

「名前は何ですかィ？」

「風雷」

沖田の眠たげな声での質問に機械的に答える風雷。

「本名ですかィ？」

「ＮＯ」

「本名は？」

「言えない」

頭を振る風雷。

「住んでる所は何処ですかィ？」

気にせずに沖田は質問を続ける。

「近くの樹海」

「…樹海ってアレですかィ？」

「ん…近くのアレだよ。こっから十キロ位離れた所」

「…そーですかィ」

沖田はハァと分かりやすく溜息を吐いた。

「どうして半殺し屋の仕事をやったんですかィ？」

「…」

沖田の事務的な質問に風雷はピクッと震えた。
それを沖田は見逃さなかった。

「どぉしちまったんですか？何かあったんですかィ？」

「…黙秘権で」

「何か嫌な事でもあるんですかィ？」

ニヤリと笑った沖田に風雷は目線を横にやって「別に」と短く答えた。

「んじゃ…どれ位稼いだんですかィ？」

「うーん…二百万」

風雷は頭を傾げる。

「今まで何人やったんですかィ？」

「5人」

「成る程ねぇ」

フーンと言ってから机の上の紙に滑らせていたペンを止めた。

「じゃあ次から個人的な質問にいかせてもらいますぜェ」

ガタンと立ち上がって風雷の後ろに回る。

風雷は目線のみ沖田に合わせ動かす。

沖田は真後ろに回る。

何をする気か分からない風雷は耳を集中させる。

「なーんでアンタ包帯をこんなに捲いてるんですかィ？」

沖田がカチリと刀を触れる音が耳に辿り着く。

「怪我してっからに決まってるだろ」

「じゃあ何で肩にまで包帯を捲いてるんですかィ？」

カチャンと刀と鞘が離れる音が響いた時には風雷は机に置いていた手に力を入れて浮いていた。

逆立ちのような状態の風雷と沖田の上下左右反対の目が合う。

一閃していたらしく刀は全く別の方向を向いていた。

「何のまねだ」

沖田とは反対の床に足を落とすと風雷は冷たい声を発した。

「何って肩にあるモンを見ようとしただけですが？」

微笑する沖田は刀を仕舞い、口を動かす。

「んな汚ぇ服着たくねェから胸まで包帯を捲くのは分かりまさァ。ですが、何で肩まで捲くのかは見当もつかねェ」

上から見下して沖田は笑った。

「そこに見せたくねェモンがあるんですかィ？」

「無い。何であるんだよ。俺は後ろめたい事は一切無い」

低い体制のまま風雷はギロリと睨む。

「だったら見せて下せェよ」

「テメェは女の裸に興味があるのかよ」

フッと笑って見せる風雷の頬には汗が流れる。

「俺ァ女の裸なんて興味ねェが、」

クスリと嘲るように笑った沖田の髪は爽やかに揺れた。

「過去とか秘密は気になって仕方がねぇんでさァ」

「知ってるか？『触らぬ神に祟り無し』って諺」

「知ってまさァ。『触って得する金銭巻き上げ』位」

「…」

風雷はハァとわざとらしく溜息を吐く。

「じゃあ質問を変えてやりぁ良いんだろ？」

「…そうしてくれ」

「オメェは死体屋の娘か？」

「そうだ」

「あの犯罪者の娘なんですねェ？」

風雷の瞳が怒りに満ちた。

「違う」

即答した風雷の拳は震えている。

「違うって…さっきは死体屋の娘って――」

「母さんと父さんは正義だ」

「…？」

「母さん達は、他人の為に、励んだんだ」

「…どおいう事ですかィ？」

風雷は噛み締める。
沖田の言葉で燃えた怒りの炎を無理矢理抑える為に。
母さん達の誇りを汚さない為に。

「母さん達は、自分達以外の奴を守る為に春雨と闘ったんだ」

風雷の表情を見た沖田は眉間に皺を寄せる。

「そんな、悪者なんかじゃねぇ！」

風雷の叫びが響く。
沖田は風雷に近付く。

「母さん達は…母さん達は…！」

沖田は熱弁を奮う風雷の頭に手を置いて、自分の方に寄せる。

「俺が悪かったですぜェ…だから、」

沖田は笑った。

「そんな顔しないで下せェ」

風雷は震えた。
何も言えない自分に。

「幾らイジメんのが趣味でも女を泣かせる趣味はあいにく持ち合わせてねェんでさァ」

「知るかよ…」

風雷は沖田から離れた。

「俺なんてどうでも良いから…神楽や、此処の街を…守れ」

「…意味が分か――」

「頼むぞ」

悲しそうに笑った風雷の言葉。
沖田は頭を傾げる。
何を――

するんだ？

この少女は？

何度考えても分からない問題は、

沖田の頭に留まった。

ただいまって言葉は当たり前の様で結構凄い。（前書き）

おはようございまーす。９時５０分に目覚めた洒流奇です。

銀時：文化の日だもんな。

風雷：それだけじゃねぇよ。

新八：えっ？

風雷・洒流奇：ハッピーバースデー神楽！！

銀時・新八：へっ？

神楽：ワーイワーイ！私の誕生日ネ！

新八：神楽ちゃん誕生日だったの！？

銀時：そういや…そうだったかも…。

神楽：最悪な男達ネ！レディの誕生日位覚えてなきゃ駄目ネ！

風雷：そうだよ。神楽が可哀想だよ。

洒流奇：そうそう。

銀時：俺の誕生日忘れてた奴が言う資格ねェだろ！

洒流奇：あん時忙しかったし、2日後位まで予約投稿してたから分からなかったんだよ！仕方が無い！

神楽：私が許してやるネ。

洒流奇：ありがとう！

風雷：コレあげる。

神楽：ありがとネ！

洒流奇：何あげたの？

風雷：樹海の所にあった丈夫そうな木を削って作った定春。因みに手のひらサイズ。

新八：わぁ凄い…繊細すぎる…。

銀時：俺の時は何も無かったのによぉ！

風雷：坂田さんのはコレ。

銀時：おっ？

風雷：神楽と同じ木で作った苺牛乳パックの置物。

銀時：おっ…おう…。（何か凄い細かいけど複雑な気分ー！）

新八：ワァ、僕の誕生日の時が楽しみだな。

風雷：もう作ってあるよ。

新八：えっ？

風雷：眼鏡。

新八：やっぱり眼鏡かよ！でも何か風雷さんが作ったコレレンズ入れれば使えそうなんだけど！

風雷：欲しがったら今あげるけど？

新八：良いんですか！？ありがとうございます！

神楽：私の誕生日なのに何か皆も貰って…何か嫌アル！

風雷：そう言うと思ったからハイ。

神楽：ワァ！

風雷：さっきと同じような感じで…酢昆布パック。

神楽：食べたくなるネ…（ジュルッ

風雷：ついでにモノホンで。

神楽：ありがとうネ！

ハイ、長ったらしい文終了です！

ただいまって言葉は当たり前の様で結構凄い。

風雷は屯所から出た。
そこには既に神楽と新八が。
風雷の後ろから銀時が遅れて来る。

「俺…良いのか？」

風雷は頭を傾げる。
土方は一瞥すると「情状酌量だ」と呟いた。
風雷は土方に駆け寄る。

「意味分かんねぇよ！俺は犯罪者なんだぞ！」

銀時達は目を丸くさせた。

「テメェはブタ箱にぶち込まれてェのか？」

土方は煙を吐いた。

「当たり前だ」

風雷は必死に土方の胸倉を掴んだ。

「…どうしてだ？」

土方の疑問に風雷は「別に良いだろ。とにかく…俺を拘束しろよ」

と俯いて返した。

「何でアル！私、風雷といっぱい話したいネ！」

神楽が風雷に抱き付く。

風雷は神楽を複雑そうな表情で見た。

「…」

風雷は口を動かす。

だが、その後には声が出ない。

風雷は口を覆う。

「風雷…？」

神楽は頭を傾げる。

「別に…平気だ」

風雷は素っ気なく言葉を放った。

「意味分かんねェが、テメェは情状酌量だ。そうだ、後で服返せよ」

土方はそう言うと風雷達に背を向け、闇に消える。

「風雷…」

神楽は腕の力を少し緩めた。

風雷は神楽の頭を撫で、優しく力が抜けた腕を解く。

「帰るぞ」

今まで成り行きを見守っていた銀時の言葉に唖然としていた新八と神楽は頷いた。

「じゃあ――」

な、と言おうとした風雷の首に銀時の腕が絡まった。

「オメェも来るんだよ」

ニヤッと笑う銀時。

風雷は「えっ、えっ？」と銀時の腕を見、横にある銀時の横顔を交互に見て呆けた声を発しつつ頭を抱えそうになる。

「行きましょっか」

それを微笑ましいように見ていた新八は温かく笑った。

神楽も風雷に優しく笑いかけ、頷いた。

風雷は頬の力を緩めた。

緊張が、消えていく。

「ほら、オメェのモンはオメェで持て」

銀時は風雷の手に握らせる。

風雷はそれを見て笑った。

それは黒雲と傘だった。

「ありがとう…な」

風雷は銀時の腕に自分の腕で更に絡ませ、頬ずりした。
銀時は一瞬呆気にとられたように目をパチクリさせてから、クスリと小さく笑った。

「意外とオメェも可愛げあんだな」

銀時は腕に力を入れた。

「はっ？坂田さん、何言ってんだよ？」

風雷は銀時の台詞に目線をずらし、頬を紅色に染める。
だが、銀時の腕を解こうとはしなかった。
そして、家の前に辿り着いた。
『万事屋銀ちゃん』と書かれてある看板は太陽の光を反射させてる月の光によって照らされていた。
銀時達は噛み締めるように一段一段丁寧に階段を上がる。
そして、扉を開けた。

「「「ただいまー！」」」

灯りがすでに消えている江戸の街の一つの家に灯りが灯った。

理解させて欲しかったら取りあえず口説け。（前書き）

洒流奇：いやあぁぁぁぁ。学校だあぁぁ。

神楽：五月蝿いネ。黙るヨロシ。

新八：まぁまぁ。落ち着いて。

銀時：まぁコイツは足掻いているのが日課だしな。

洒流奇：酷いよ！なぁそう思うだろ風雷！

風雷：そういやお気に入りユーザーとお気に入り登録増えてたな。こんなのを読んで下さってるだけでも凄いのに。ありがとうございます。

銀時：そうだな。こんなくだらなすぎる&面白くねェの二本取りの奴を登録した奴、サンキューな。

洒流奇：…ウチの事はもう心配して――

新八：ありがとうございます。こんな駄作を読んで下さって。

神楽：ありがとネ。消えれば良い程最悪なコレを読んでくれて。

洒流奇：えっ…そこまで言いますか？

風雷：第一章が終わったら何かくだらない番外編もやるらしいですけど、見放さないで下さい。

銀時：しかもそのくだらないのも長いっつうな。

新八：作者さんは長文しか書けませんからね。

神楽：つまり雑魚って事ネ。

洒流奇：そこまで言わなくて――

風雷：取りあえず宜しくお願いします。

理解させて欲しかったら取りあえず口説け。

万事屋に帰った４人はそれぞれ寝る支度を整える。
風雷は「俺、帰るよ…」と言って去ろうとしたが、そこは神楽が引き止める。
服は神楽のを数枚拝借。
現在、神楽の普段着のチャイナ服を纏っている。
赤い服のラインは滑らかに流れるように作られていた。

「わぁ、風雷可愛いネ！」

神楽は風雷に抱き付く。
風雷は「男物が良かった…」と口を尖らせる。

「まっ、それで少しは女に見えんじゃねェの？」

「そうですよね。男物の服では男に見えちゃいましたし。では、僕は帰ります」

新八はニコリと愉快そうに笑って万事屋を後にした。

「風雷は何処に寝るアル？」

「坂田さんが布団くれたからソファで」

風雷は傘に黒雲を仕舞い、玄関に立てかける。
神楽は「お休みィ」と風雷に元気良く挨拶して人気アニメのド〇エ

モンのような押し入れの戸を閉めた。
風雷はゆっくりとした動きで電気を消した。

「お休み」

銀時の襖ごしの挨拶に風雷は静かに返した。

「お休み」

闇が広がる夜。
人っ子一人居ないような時間に一軒の家から傘を差した少女が現れる。
男物のチャイナ服を纏った少女は静寂が埋め尽くす世界に静かに入ると入る時に使用した扉に手をかける。
ゆっくりと、ゆっくりと、音をたてないように閉める。
後もう少しで完全に閉まる、という時に少女の手が止まった。
少女は名残惜しいように目を閉じ、閉めようと最後の仕上げに入る。
力を入れ、閉めようとした時、扉がいきなり開いた。
ビシャンッと静寂の中で響く音。
少女の頭の中でやけに響く音は、空気の波紋をゆっくりと消していく。
少女は頭を上げた。
そこには、
さっきまで眠っていた筈の『万事屋銀ちゃん』の店主、坂田銀時が居た。
何時もの定番の服を体に合わせた銀時を見て少女は笑った。

「どうしたんだよ。何時もお寝坊さんの坂田さんがこんな朝早くに」

少女――風雷はさして疑問に思って無いような単調な声を声量としては小さめに聞いた。

「人んち上がっときながら礼も言わねェで朝早く出ちまうようなバカはどうしたんだよ」

銀時は少女と同じように静寂の世界に入り込むと抵抗もなく、扉を閉めた。

「神楽から借りた服じゃやっぱり緊張しちまうから帰って着替えようかなってな」

彼方此方解れている服を指す風雷の顔は何も感情が無いように無表情であった。

銀時はつまらなそうに冷めた目で風雷を見てから、ハァとわざとらしく溜息を吐いた。

「…最近のガキァ抱えるだけ抱えて下ろす事はしねェ。無駄に強がって笑ってよォ。周りの為だなんだ言い訳ばっか言いやがって…お疲れ様サマだな」

銀時は夜空を仰ぐために数歩進む。

立ち止まった風雷を過ぎた時に銀時は風雷の肩を叩く。

「…五月蝿い」

風雷は鬱陶しいように銀時の手を払った。

「なぁ、お前はどう思ってんだ?」

「…何がだよ？」

風雷は銀時の背中を思い切り睨んだ。
だが、銀時の背中はそれ位ではびくともしない。
大きな大きな背中は。
風雷は自分の体を見て歯に力を込めた。

「世界（ここ）をだよ」

「…」

銀時の問いに風雷は俯いた。

「お前の事情聴取、聞かせてもらったんだよ」

あの時、銀時は土方に条件を突きつけた。
『出来る限り話してやる。だがそれは後だ。あのガキの情報をくれ』
と。
勿論、その前に神楽達と事情聴取をする場所を変えてくれと頼んでから。

「お前は、最後に言ってたよな。『守れ』って。テメェ自身で守る事ァ出来ねェのか？」

「俺は弱いか――」

「それだけか？」

「…」

何も言えない風雷はただただ拳を強く握る事しか出来ない。

「他にあるだろ?教えてくれよ。俺に教えてくれよ」

銀時は振り返った。
風雷は顔を上げる。
一つの線となって結ばれる視線と視線。

「俺に、お前を、な」

体の異変に気付かない男は居ない。（前書き）

時間がなーい、って事で今回は無いです！！

体の異変に気付かない男は居ない。

大きすぎる背中。
一瞬考えてしまった。
この人なら、
俺の全てを受け止めてくれるかな、と。
だが、
それは幻想。
俺には、
希望が無いんだ。
それを良く知ってる筈だ。
馬鹿、
俺の、
馬鹿。

風雷は俯いて階段を下ろうと進んだ。

「おっ…おいっ」

銀時は階段を下り始めた風雷の腕を握った。
風雷はピクリと一瞬震えた。
風雷は口の中で小さく呟く。
駄目、だ。
自分の呟きが頭の中でやけに響く。

一瞬力が抜けた。
風雷は頭の中で危険を感じた。
階段落ち――!?

「おっと」

銀時の腕の力によって支えられる。
片足が宙ぶらりんになった風雷は唾を呑み込んだ。

「…悪い」

銀時は頭を横に振った。

「平気だ」

その時、銀時は感じた。
自分の手に収まっている細い腕が震えている事を。
風雷は足をしっかりと階段に置くと銀時の手をやんわり離す。
そして、
また歩みだす。

「待て…」

銀時の手が再度風雷に触れる。
風雷の肩に置かれた手によって風雷は振り返る。
その顔は――

「泣いてねぇよ」

笑っていた。

「残念。俺のプライドみたいな感じだよ。今、この世界で俺の泣いた顔見た事あんの居ないんだよ。凄いだろ？」

風雷はカラカラ笑う。
その姿は、
強がりと銀時に理解させる程、
滑稽だった。

「お前、何処に行く気だ」

あえて、銀時はそこには触れない。
触れてはいけない、と本能的に感じたのだ。

「何処でも構わないだろ？」

「お前、」

銀時は風雷の肩に置いてある手に力を入れた。

「春雨――高杉ん所行く気だろ？」

「…」

風雷は口を閉ざし、銀時の手を再度払って足を動かした。
銀時は二階から飛び降りて風雷の前に立ちふさがった。

「図星だな？」

「…五月蝿い」

風雷は俯いた。

「薄々疑問は感じてたんだよ。帰りの船の中での台詞、事情聴取の時の言葉に」

銀時は風雷をしっかりと見据える。

風雷は、見ない。

「なぁ、神楽が何で地球（家）に帰ってきて喜んでいるか知ってるか？」

「…」

風雷は頭を左右に振った。

「それは、神威――兄貴に言われたんだってよ」

銀時の目をチラリと見て、風雷は再度視線を落とす。

「『意外と良いもんだね。…家族って』だってよ」

感情移入している言葉が躍り出る。

「お前は神楽が頑張って築いたモンを壊す気か？」

「…」

風雷は体中に力を込める。

「お前は、消す気か？神楽の努力を？」

「…よ」

「？」

か細く聞こえた風雷の言葉に銀時は頭を傾げる。

「壊したかないよ…」

再度言われた言葉に銀時は風雷の唇を見た。
血が滲み出る程噛み締めている風雷の顔を。

「でも…そうしなきゃ…俺の死体の使われ方は無いんだよ…アイツに…見つかる前…に」

「…“アイツ”？」

その言葉に風雷はビクリと震えた。

「…大丈夫か？」

思わず銀時は「大丈夫か？」と聞いてしまった。
分かっていたのに。
風雷は、既に、
大丈夫じゃないのに。

「話してくれないか？」

「…」

風雷は銀時の顔を見た。
逞しい、格好良い、
自分すら抱えようとする顔を。
その顔は――

「父さん…？」

「父さん？って何だよ？」

風雷はすぐに片手で口を塞ぎ、もう片方の手で銀時の腕を掴んだ。

「何処に向かうんだ？」

風雷は走り出す。
銀時は風雷の手を見つめる。
冷たく、健気で、折れそうな腕。
あの女と…一緒だ…。
あの人と…。

「会い…てェ」

銀時はポツリと呟いた。

「…悪い」

風雷はその呟きを聞こえたのか謝罪を口にした。
勿論、足は動かしたまま。

「…」

銀時は風雷の背中から視線を落とし、「昔の事だからお前には関係ねェよ」と言う。

風雷は後ろを見ずに頭を振った。

銀時が眉間に皺を寄せた時、「今は待て」と風雷が先手を打つ。

車も走らない中で走る二人の影は月の光で伸びていく。

風雷がやっと止まった場所は公園だった。

そう、

船がある場所。

「お前…」

銀時が言葉を繋げようとした時、風雷は空を見上げた。

「綺麗だよな」

見上げた風雷は銀時の腕から手を離し、手を空に向ける。

「…そうだな」

何かを言わせないようにさせられた気分の銀時は素っ気なく返した。

「神楽が攫われた時の空と同じ位…綺麗だよな」

「…」

風雷の台詞に銀時は言葉を返せない。

必死な時は、上を見なかった。

見えなかった。

「知りたいか？」

風雷は視線を銀時に向けた。

「たった一匹のウサギの事を」

雄大な空を背景にし、笑う風雷。

銀時は唾を呑んだ。

一人の、

人の、

何かを聞く。

それだけなのに、

これほど重たいとは、

思わなかった。

「どうする？」

笑った風雷の問いに銀時は――

太陽は毎朝上がって毎晩沈む。沈むけど、毎日上がってくるんだ。凄くね？（前

神威：…何で俺達がまた此処に居るのかな？

神楽：知らないネ。

高杉：…。

風雷：何か…話さないか？

神楽：そーアル！何かしら話すネ！

阿伏兎：じゃあ話題を出してくんねェかい？

神楽：んー…。

風雷：あっあのさ、神威は神楽に誕生日プレゼントあげた…のか？

神楽：へ…風雷？

神威：あげてないよ。

阿伏兎：はぁ…冷めた兄ちゃんだ。

高杉：だな。

風雷：何か…あげたら？兄貴なんだし？

神威：別にお金で困ってないから良いけどさー、神楽は何が欲しいの？

神楽：えっ…いきなり言われても…何が…欲しいアル…か…。

風雷：神楽、落ち着け！

神威：んー面倒だなぁ？じゃあコレで良い？

神楽：わっ…。…綺麗アル。

風雷：兎のマスコット人形だな。可愛いじゃん。良かったな。

阿伏兎：ん…つうこたぁ…。

神威：何？阿伏兎？

阿伏兎：いや…何でもねェ。

高杉：素直じゃねェなァ。

神威：何が？

風雷・神楽：？？

高杉：まっお幸せに。

何かほのぼの。
書いてみたかった。
ごめんしゃい。

太陽は毎朝上がって毎晩沈む。沈むけど、毎日上がってくるんだ。凄くね？

銀時は静かに、慎重に頷いた。

「じゃあ…何で俺が春雨を潰したいか。それはな、」

笑いもしないで風雷は空を眺める。

「意味あるモノにする為」

「…？」

風雷の言葉に銀時は頭を傾げた。
風雷はソレを見て面白そうに笑った。

「俺が死ぬと毒の塊になるかもしんないんだよ」

風雷は手を広げ、見つめる。
白い手はギュッと萎んだ。

「まず…夜兎の体の構造からだな。天人と人間の体の構造は大抵一緒だ。夜兎も一緒だ。だが、一つだけ違う事がある」

風雷は自分の胸に手を置き、ふぅと息を吐いた。

「臓器が一つ多いんだよ」

「おお…い？」

「あぁ、拳位の大きさのが有るんだよ。その臓器は、毒を貯められるらしい。その臓器は血に毒を染み込ませる事も可能だし、血を薬にする事も可能だ。だが、一つ問題が有るんだよ」

「問題って何だよ」

「その臓器がその働きをする為にはそれなりに毒を飲まなきゃならない」

「…！」

銀時は目を広げる。

「地球の奴らよりも毒に強いって言われてんのは当たり前だよな。だってその為だけの臓器が有るんだから。だけど、あらゆる種類の毒を飲まなきゃいけないってのは辛いモンだよ」

風雷はニコリと優しげに笑って言った。

「俺は結構飲んだからその臓器は働いてるよ」

「…つー事は」

「三百種類は飲まされたよ。俺のは一年位かかってやっと働いてる感じだ」

「…」

言葉を失う銀時を見て風雷は頭を傾げた。

「大丈夫だよ。致死の可能性があるのは二百種類位だったから」

「にっ二百!?」

息を呑む銀時。

そんな銀時を余所に風雷は近くにある石を蹴る。

「…まぁね。母さんはたった一回飲まされただけで開化したらしい。母さんにはその才能があったらしい」

風雷はしゃがんで月によって照らされてる花を撫でた。

花はゆらゆらと頼りなさそうに揺れた。

「んで、母さんは沢山の毒を自ら飲んで…自分の血を薬にする為に、励んだ。そして、そのせいで夜兎の異端児と言われ、蔑みられ、罵られ…それでも皆の病気とか治す為に飲んだ」

風雷は立ち上がってポーチを落とす。

バラバラと音をたてて散らばる小瓶。

次に風雷はポーチの中に手を突っ込んだ。

風雷の手が出た時に、一枚の紙がひらりと風で揺れながら出てきた。

「綺麗だろ?」

風雷の見せた紙きれは写真だった。

古い事を証明するように所々茶色くなっており、色褪せていた。

だが、その中に写し出されている三人の輝きは消えていなかった。

茶色の長い髪を揺らしながら小さな少女が真ん中で手を広げ、子供

らしく愛らしく笑っている。
少女の右隣にはショートカットの白い髪に触れながら少女の肩に優しく手を置く女が笑っている。
少女の左隣の天然パーマの茶髪の男は片方の手は『黒雲』を握って、もう片方の手は少女の頭に置いて、満足そうに微笑んでいた。

「父さんと母さんだ」

少女はすぐさまポーチに仕舞うと落とした小瓶を仕舞う。
その横顔は写真で赤い瞳を細めて笑っていた女と良く似ている。
少女は猫のような程黄色い瞳を閉じた。

「そんな母さんの優しさに気付いた父さんは母さんと行動を共にし、惚れたんだってよ」

銀時はさっきの写真の女を頭で再度思い出す。
そう、
あの女は――

「で、二人は夜兎の異端って言われるようになった。母さん達はそれでも幸せだったんだよ」

銀時は回想を中断させて風雷の話に集中させた。

「春雨の屑共が母さん達を危険視さえしなければ」

「危険視…って…」

「母さん達を最初に勧誘した。勿論、母さん達は断った。後は分かるだろ?母さん達は追われる身となった」

風雷はまた頭を上げた。

「母さん達はそれでも血の薬を配り、懸命に逃げる。でも、春雨は永遠に追い続ける」

風雷の目が険しくなる。

「…てまぁそんな感じだ。分かったろ？つーか、一番の理由は最初に言った、意味あるモノにする為だよ。ほら、俺って必要とされてないし。俺は、付属品だしな」

そう言った風雷は銀時に背を向けた。

「じゃあな」と気さくに手を振って。

そして、

振り返った。

銀時の大きな手によって。

「必要とされてない？何言ってんだお前。必要とされてんじゃねェか」

「誰にだよ？」

風雷は自虐的な笑みを浮かべ、「良いよ。嘘つかなくて」と返す。

「俺だ」

銀時は親指で自分を指す。

「…はっ？」

「お前は既に俺に必要とされてるんだよ。良い事教えてやるよ。必要とされてない奴は居ない。皆誰かしらに必要とされてるんだ」

口を開けた風雷に銀時は口から流れる水のようにスラスラ言葉を吐いた。

「じゃあ聞くけどさ…俺の何が必要なんだよ?あっ俺の血か?そりゃそーだよな。使えるもんな」

風雷は口を塞いで、再度自分の良い所を考え、言葉とする。

「違ェよ」

だが、銀時は頭を左右に振った。

「じゃあアレか。俺の知識か?まぁ何かしら知ってるからな」

「馬鹿言ってんじゃねェ。お前の存在だよ。お前自身だ」

銀時は自分に向けていた指を仕舞い、人差し指で風雷を示す。

「そんな――」

「訳あるに決まってるだろ」

先に台詞を言われた風雷は言葉を失う。

「俺だけじゃねェ。神楽だって新八だってそうだ。テメェを必要としている奴ばかりだ」

「嘘…だ…」

「嘘じゃねェ。自覚しろ」

「…」

風雷は俯いた。
目頭を必死に抑える。
そんな風雷の頭に温かいモノが置かれた。
風雷は頭を上げた。
銀時の手だった。

「んなシケた面すんじゃねェよ。帰るぞ?」

「…『帰る』っか」

風雷は銀時の言葉を復唱した。
銀時は「んっ?」と頭を傾げた。

「良い言葉だよな。帰る場所がある事を証明してくれる…」

「そォだな」

銀時は笑って空を仰いだ。
月は沈み、太陽が昇ろうと起き上がっていく。
絶望だけが、支配しない事を証明するように、温かい光は上がる。
風雷は握っている傘で顔を隠そうとしたが止める。
美しい太陽は全てを包む。
風雷は笑った。

幸せそうに。

ハローワークみたいな人間は意外と近く。（前書き）

前回の前書きの神威の少し前を今回はちょっとやらせて頂きます。
どうぞ→→

神威は辺りを見回す。
「確か此処らへんに居た筈何だけどなぁ…」と小さく呟きながら周りを見るが目的の人は居ない。
というか船艦内のコッチ側誰も居ない。
皆仕事行ったみたいだから今がチャンスなのに…と溜息を零した時、
「んっ？」と自分とは違う高い声が背後から聞こえた。
神威はすぐに振り返った。
そこには――
相も変わらず派手な色で自らを纏う来島また子が居た。

「何の用ッス？晋介様は違う所に居ますよ？」

神威はまた子に近付く。

「いやっ…用が有るのは君なんだよね」

少し気まずいように話す神威にまた子は頭を傾げる。

「ちょっと良いかな？」

「…いや…その…何の用ッス？」

神威は高杉の現段階での仕事仲間のようなモノ。
だが、神威は血を求め続けるような化け物にしかまた子には思えない。

「あの…ちょっと地球に…良い？」

また子はコレも仕事だと思い頷いた。

そこで何故かぬいぐるみの買い物した時は驚愕したが神威の目的は何だろう？と思いつつ戻ったまた子であった。

因みにコレがあったのはコレの前の前書きの前日である。

ハローワークみたいな人間は意外と近く。

「風雷ー！」

突如、神楽の元気な声が公園に響いた。
太陽を背に走ってくる神楽。

「どうしたんだ…神楽？」

風雷は荒い息を吐く神楽の頭を撫でる。
パジャマ姿の神楽は汗を拭う。

「どうしたんだって…二人共居ないから心配したアル…どうした、ネ？」

「人生相談って奴だ」

銀時も神楽の肩をポンポンと叩いて、足を動かす。

「銀ちゃん？」

「帰るぞ。俺ァ眠いんだ」

「だったら私起きて損したアル！酷いネ！」

神楽は息が落ち着いた所で拳を空に向かって何度も殴るように動かした。

風雷はクスッと微笑ましそうに笑って「まぁまぁ」と宥める。

「そう言えば俺って万事屋に居候するの？」

ふと疑問に感じた事を口にした風雷を見て神楽は目を輝かせた。

「それ良いネ！最高アル！」

「まぁ…家に帰って見てみなきゃなんねぇなァ」

銀時は溜息を零した。

「見てみなきゃ…？」

神楽が頭を傾げる。

風雷も「んんんっ？」と呟きながら事の成り行きを見守っている。

「金」

この言葉に神楽は肩を落とした。

「…金って…」

風雷は苦笑いする。

「仕方がないだろ？使えない上に無駄に金を取るガキが二人居んだから」

銀時は手を広げ、自分には罪が無い事をアピールする。

「それって私がいけないアルか！私がいけないアルか！？」

「なら俺達ん所で働くか？」

突如聞こえてきた声に三人は体を震わせ、声がした方を見た。
そこには――

「ふぅ。朝から騒がしい連中だな」

土方が居た。

「…テメェ何時から居た？」

銀時は片方の眉を上げる。

「始めからだ」

土方は短く答えるとポケットから煙草を取り出して、くわえる。

「始めからって…？何アルか？」

一人ついていけてない神楽は腕を組む。ぐしゃぐしゃな髪がゆらりと揺れた。

「…」

無言になった風雷は瞬きする事無く土方を見続けている。
土方はその視線を物ともせず、飄々と煙草を吸っていた。

「んで…どうするんだ？」

近付いて来た土方の言葉に風雷は、

「へっ…？」

呆けた声で返す。

「真撰組で働くかどうかっつう事だよ」

土方はハァと煙草の息を吐いた。

「テメェみたいなむさ苦しい所にこんなガキやれるか」

ある意味父親のような銀時の発言に土方は笑った。

「テメェん所みたいに充分金も無く、飯も食えねェ所よりは少なくともマシだ」

銀時と土方の間で火花が散る。

「あの…」

「「何だぁっ！！」」

言い合いになった二人を止めようとした風雷のあやふやな言葉に二人の怒りが向いた。

「悪い…あの、今朝だし、落ち着いて…なっ？」

ある意味一番大人の対応の十四歳位の少女。

一番年下の少女が一番大人というとてもおかしな４人。

「じゃあ風雷言ってやれ！テメェみたいな糞何かに働く力は無いってな！」

銀時の先制攻撃。

「テメェ言ってやれ！テメェみてェな屑何かに使うエネルギーは無いってな！」

だが、土方も負けない。
風雷はポカンと口を開けていたが、やがて、

「あはははははっ」

幸せそうに笑った。
その笑い声を聞いて二人は「へっ？」と馬鹿丸出しの呆けた声を発した。
何も理解出来てない神楽はただ風雷を見ている。

「あはは…悪い…見てたら…面白くってな…」

風雷は腹を抑えながら空いてる片方の手で目を擦った。
土方と銀時は風雷を見、互いの顔を見合った。
そして、

「がはははははははっ！」

「ぎゃはははははははっ！」

爆笑した。

「どっどうしたアル！風雷…銀ちゃん？おい、マヨラー！」

神楽は一人あたふたしながら怒声で笑い声を消していく。

「あははははっ…神楽…ありがとう」

風雷は一通り笑うと神楽の頭をまた撫でる。

神楽は「へっ？」と言いつつ頭を撫でられるがままである。

「ふぅ…んで、お前はどうするんだ？」

落ち着いた土方に風雷は満面の笑みで答えた。

「俺、働くよ。真撰組に」

銀時は目を丸くして「そうか」と笑った。

土方は空を仰いだ。

真撰組に働く、という事を受け入れた風雷は蒼くなっていく空に向かって笑った。

「会いたかったら来て良いからね。神楽」

風雷は神楽に向かっても笑った。

神楽は元気よく頷いた。

打ち上げとかって大人数の方が良いって言うけど本当？（前書き）

ハーイ、番外編だよ。
来ました番外編。
面白いかは不明だけど番外編。
見てね。

銀時：誰がテメェが作ったレベルの低いのを見るか。

神楽：銀ちゃん、それはもう暗黙の了解みたいな感じアルよ？

新八：そうですよ。今更ですよ？

風雷：だってあの作者のコメディだぞ？

高杉：…。

神威：ふーん、そうなんだ？

阿伏兎：慕われてねェな、作者。

銀時：！？

打ち上げとかって大人数の方が良いって言うけど本当？

「第一章終わったぞー！」

銀時の元気良い叫びが響いた。
第一章終わったという事で万事屋と風雷は記念に頂いた遊園地の券で遊びに来ていた。

「しかも貸し切りっつうのが最高アル！」

「本当にこの四人だけなんですかね！？そうですよね！？記念なんですから！」

「楽しみだなっ！何から行く！？何から行こうか！」

四人の興奮で満ち足りた言葉を次々と生み出す。

「残念だが俺たちも来てんだよ」

声のした方に四人は一斉に目をやった。
そこには――
真選組の近藤に土方、沖田、ジミージミージミーが居た。

「…ジミージミージミーって何ですか…？」

「僕だって分かんないよ新八君…」

地味な会話を地味な奴らどうしで行っているなか、勿論他の五名（風雷抜き）が議論をしている。

「何でテメェが居るんだよ多串君よぉ？」

「そうネ。テメェなんてお呼びじゃ無いネ」

「残念だがァちゃんと作者からチケット頂いたんだよ」

ヒラヒラッと土方は銀時達の前で券を靡かせた。

「アァッ？んな事関係ねーんだよ。とっととテメェは帰れっつうてんだよ」

「今日位良いじゃないか万事屋。それよりお妙さんは？」

ゴリラは辺りを見渡す。

「そうでさァ。旦那ァ今日位は仲良く行きましょうや。土方さんが邪魔なので殺しても構やぁしねェが、俺と近藤さん位許して下せェ」

「ちょー…沖田さん？僕はー…？」

ジミージミージミー事、山崎がおずおずと手を挙げた。

沖田は山崎に目も向けず「頼むぜ旦那ァ。パフェ一個奢りやすから」と銀時に手を合わせる。

「おい総悟」

ガシッと沖田の頭が掴まれる。

「何言ってんだテメェ…？俺抜きでやるなんてよぉ？なめてんのか

？」

土方の引きつった笑みに沖田は笑う。

「土方さんなんてなめたら不味くて死にまさァ（笑）」

「何が（笑）だアアアァァ！！」

土方がシャウトすると二人の乱闘。

「おーい総一郎君、仕方がないからジャンボパフェ2個で良いぞ？」

「仕方が無いネ。酢昆布十個で良いアル」

「チャイナ娘にやる金はねェ！」

アッカンベーをする沖田を見た神楽は――

「オメェにやるタンメンはねぇ！」

全く良く分からないボケをした。

「オーイ神楽。つまんねぇよ。つまんないよソレ」

銀時の言葉に神楽がフンと鼻で笑う。

「女なんて皆つまらないものネ。男も同じアル」

「何アラフォー突入したＯＬみたいな事言ってんの君」

「頭が残念を通り越して残念だな」

総悟が神楽をかなり痛い目で見ていると土方が、

「オメェもな」

頭を握った。

「土方幾ら俺が好きだからって止めて下せぇ」

「誰がテメェ何か好きか。殺されたいんだな?殺されたいんだな?」

二人の乱闘が再び始まった。

「まぁ総悟もトシも落ち着け。万事屋、お前も落ち着けよ」

宥めるような近藤の言葉に銀時と神楽が頭を傾げる。

「ねぇ銀ちゃん、あのゴリラ何言ってるアル?私ゴリラの言葉分からないアル」

「多分、『金を五十万やるから私を殺して下さい』とか言ってんだよ。ほら、目を見りゃ分かるだろ?ありゃあ自殺志願者の目だよ。覚えとけよ神楽?テストに出るからな?」

「分かったアル!じゃあお願い通りやってやるネ!」

その直後、近藤は、

空を飛んだ。

「チャイナ娘、テメェ何やってんだ！」

「何ってお願いを聞いただけネ」

「そうだよ総一郎君、君はゴリラの心の声が聞こえなかったのかね？」

「アアン？総悟の耳がおかしいのは認めるが近藤さんにテメェ何やってんだよ？」

と、今後は銀時と神楽を交えての乱闘。

近藤が落ちてきたのも気付かない位真剣なモノだった。

近藤、哀れなり。

そんな乱闘の中に一匹の兎が足を入れてしまった。

おかげで銀時はつんのめって、

それを沖田が押して、

銀時は不安定な体制の神楽の手を取って、

神楽は土方の首を掴んで、

土方は苦しそうに沖田の顔を握って、

皆で仲良く近藤と同じ体制になった。

「風雷何してんだよ！」

銀時がガバッと顔を上げた。

風雷は銀時を見ずに、一つの方向に指を指した。

四人は何だよ?と思いながらも風雷の指している先に目を向けた。
そこには――

「やっ銀髪のお侍さん♪」

「面倒だよ…すっとこどっこい…」

「久しぶりだなぁ銀時」

個人個人挨拶を済ました男達――神威と阿伏兎と、高杉が居た。

「何でテメェらが居るんだよ!?」
「神威っ!?」
「高杉テメェ!」
「でっかい奴も一緒とはな…」

驚きの声をあげつつも銀時達は素早く戦闘態勢をとる。

「止めなよ、今日は純粋に誘われただけなんだから。まぁ、全然俺は良いんだけどさぁ♪」

「団長…」

「そぉゆう事だ。刀を仕舞いな」

銀時達はそれでも態勢を崩さない。
仕方が無いねぇ、と神威は溜息を吐いて、戦闘態勢に入る。
高杉も刀を抜く。
阿伏兎はハァと溜息を零し、疲れたような顔を作った。
そして、片方が動いて、もう片方も動き、刃が交わる時――

【ストーーーーープ！！】

園内に声が響いた。

皆の動きが止まり、声のした場所を見る。

縮毛矯正で痛んだ髪をポニーテールにし、携帯をイジる少女――そう、私こと洒流奇が居た。

【皆さん、何戦ってんだよ。つうか知ってんの？戦いの描写って面倒なんだよ？】

私の声は何故か良く響いたのだった。

何時作者が作った奴に入っちゃいけないってなった？（前書き）

昨日の続き。

銀時：！？

神威：どうしたの銀髪のお侍さん？

高杉：顔色が悪ぃぞ。

神楽：神威！？

阿伏兎：俺も居るんだけどなァ…

新八：何でこんなくだらない所に！？

風雷：…人多いな。

神威：仕方がないんだよ。作者に『活躍の場、欲しい？』って聞かれたらやるしか無いでしょ？

神楽：別にお前は来なくて良いネ！お前何か出番の量が少ないのに人気投票が三位な奴なんて要らないネ！

神威：まだその事根にもっていたの？大丈夫だよ。永遠の八位の子も居るんだから。

新八：それって僕ですか！？僕ですか！？

風雷：…ドンマイ。

新八：何でダアアァァァ！！！

阿伏兎：可哀想に。

何時作者が作った奴に入っちゃいけないってなった？

「…誰ですか貴方？」

新八が口を開いた。

他、銀時達などは最早私の事をまんべんなく見つめる事しか出来ないみたいだ。

【オイオイ大丈夫かメガネ？俺はこの話の作者だよ。テメェらを此処に招待したお偉いさん】

「…何でそんな方が此処に？」

新八は地面を指した。

私はニコッと笑って答えた。

【だってテメェらすぐ喧嘩やもん。まぢ困るんだよ。一様コレは打ち上げなんやから。主要メンバーの分チケット買うの大変なんだよ？】

「主要メンバーで何でコイツらが居るんだよ」

銀時が高杉達を睨む。

【…だって…】

「だってって何だよコンチキショー？もしかして何？アレ？コイツら好きだから出したいってアレ？」

銀時が冗談半分の言葉を言いつつ私に近付く。

【…正解ッス】

空気が、
爽やかになった。

「「「グエエエェェェェ！！！」」」

真選組の一部と万事屋達の声が合わさった。
…美しいハモリである。
私は美しい声を無視して口を開いた。

【えー今日は皆仲良くなってもらおーって事でグループを分けましたー】

「…ちょっと待って下さい」

新八が私に異議を申す。

「さっき主要メンバーって言ってましたけど…桂さんとかは…？」

「桂が主要メンバーなわけねぇーだろ」

「そうだ、メガネのくせに生意気言ってんじゃねぇよ」

「流石に…無いよ新八君…」

意識が無い近藤以外の真選組が新八を叩く。

「ちょっ…止めて下さいよ…痛いですから！」

【あっ桂？桂は面倒だし五月蝿いからんまい棒五十個あげたら引いてくれた】

「んまい棒五十個って！？」

【まぁ一様待ち合わせ場所がこの遊園地の入り口ってのは言っといた。でもまぁ入れないけどね？】

「ただの嫌がらせだろっ！」

新八の全力のツッコミに私は満足感を感じた。

【じゃっ話が進まないから進めるよ？この打ち上げは仲良く楽しくって事だから仲が悪そうなグループで分けました。ハイ、ドーンと】

私は近くにポツリと有る机の上にある紙を指した。

『

Ｇチーム新八・山崎・近藤

Ｏチーム神威・風雷・高杉

Ｌチーム沖田・神楽

Ｄチーム阿伏兎・土方・銀時

』

「何でｇｏｌｄなんだよ。何で金なんだよ」

【それはこれから話すから】

「冗談じゃねぇよ！」

銀時が土方を睨む。

土方も鋭い瞳をより一層細めた。

「何でコイツと一緒じゃなきゃなんねーんだ。何コレ？イジメ？」

「テメェなんかと一緒なんか寒気がするぜ」

「…一様オッサンもチームなんだけどなぁ…？」

阿伏兎がポリポリ頭を掻いた。

沖田と神楽は既に決闘が始まっていた。

神威は高杉と風雷に「宜しくねぇ」と気さくに言葉をかけた。

風雷は目を細めつつも礼儀として頭を下げる。

近藤は元気に立ち上がって「よぉし弟よ！頼むぞ！」と何やら意気込んでいる。

山崎は「局長…俺も居ます…」と小さく呟いた。

【何でって。さっき言ったやろ？仲良くさせる為って。で、ミッションは――】

「パーンチ！！」

銀時は私に殴りかかった。

私は驚きもせず、銀時の拳を避けない。

そして、銀時の拳は私の腹に――

決まらなかった。

銀時の拳は私をすり抜けた。

「！？」

【意味無いでーす。だってウチ立体映像ですからっ☆】

バチューンとウィンクを決める。

【因みに私が言ったミッションを一番にクリアされた方は、一名のみ簡単な願いが叶いまーす】

「叶う…？」

頭を傾げる群集に私は頷く。

【ウチは作者さかい、好きなように書ける。言わばコノ世界の神や】

仁王立ちをした私に神楽が手を挙げた。

「だったら私が胸を大きくしろって言ったらそうなるアルか？」

ツッコミが無い事に軽く悲しくなりつつも私は神楽の問いに答えた。

【モチノロン。容易い。分かっ――】

「マヨラーやるぞ！！」

「フッ…今回だけだぞ…」

「足引っ張るなよチャイナ娘」

「テメェもな」

「うほっ…！頑張るぞ弟よ！」

「お通ちゃんとデート…！」

「うーん…強い奴と戦う位かな？」

「地球崩壊」

「…団長が大人しくなる事」

「派手になる事…かな…」

「守る力が欲しい…」

様々な願いが交差する。

…交差しても構わないが作者の言葉は遮らないで欲しかった。

心を折れる力を持つキャラは沢山。（前書き）

昨日の続き。

銀時：待てテメェ！

んっ？

銀時：ただテメェが面倒だから全部俺達に任してんだろ！

そうだよ？

新八：あんなキャラが濃い人出さないで下さい！

新八消えちゃうもんね。

新八：違っ――

神楽：新八なんてどうでも良いネ！でも何でアイツ等を出さなきゃいけないネ！

そーいう神楽、楽しそうだったよ？

神楽：んな訳――

風雷：神楽は仕方がないだろ？だって久しぶりに理解しあった兄弟なんだから。

だね。

銀時：まぁ神楽とアイツ等のコラボは構わねェが俺とコラボは止めろ！あんな奴らと居ると吐き気がする。

しゃあないなぁ。次から銀さん欠席で。

銀時：えっ…

じゃあレッツゴー

心を折れる力を持つキャラは沢山。

【ではでは机の引き出しからしおりをチーム一枚取って】

銀時達は静かにしおりを握る。

【皆には遊園地を回ってもらいます。んで、一番早く回ったチームの一人に願いが叶いまーす。アッ回る奴はどれか決まってるからね？】

「あの…」

【何メガネ？】

「…一様順番とかは無いんですよね？」

【無いよ。あぁ、後お昼ご飯は喫茶で食べてね】

「そういえばどうやって時間計ってるんですか？」

【そんなの簡単だよ】

悪そうに笑った私の笑顔に高杉と神威を除く皆が顔を歪ました。

【作者の力乱用】

「オイ作者！テメェ何つう事言いやがった！テメェ作者だろ！作者

のくせに！」

銀時の罵詈雑言に私は【聞こえなーい】と言ってやる。
それでもガミガミ言い続けるので私は話を進める。

【一つ一つのアトラクションにゴールドボールが有るから。ゴールドボールは皆さんのかかった時間－１０分の効果が有るから】

「だからチームの頭文字がｇｏｌｄアルネ」

【そゆこと】

「じゃあ深い意味は無いんですかィ？」

【有るよ】

「へぇ…じゃあ例えば何が有るんだ？」

煙草をふかす土方は瞳だけを動かす。

【Ｇ＝ＧＡＩＣＨＵＵ】

「…害虫」

自分のチーム名が害虫と聞いて新八と山崎は呆れる。

【Ｏ＝ＯＵＳＡＭＡ】

「…」

フンッと高杉は気にしないように息を吐いてキセルをくわえる。
神威はただ「王様って戦えるの？」と風雷に聞いていた。
風雷はハァと溜息を吐いて、「無理だろ。フツー」と答えた。

【L＝RATA――】

「待て馬鹿作者」

総悟に遮られる。

「お前今何て言おうとしたんですかィ？」

ゴゴゴッと黒いオーラを放つ沖田を一瞥した私は、

【日本語で裸体】

迷いなく答えた。

次の瞬間、私の体が飛んだ。

立体映像では無く、本体だ。

「もう一回聞いてやる。俺のチームの名は？」

私は地に落ちた。
私は慌てる。
私は今園内に居るが、絶対に被害が無いように、かつ皆の動きが見える場所に隠れて密かに楽しんでいた筈。
周りを見た。
誰も居ない筈――。

そこには、
神楽が居た。
ニヤッと笑った神楽の笑みに戦慄を……のは言うまでもない。
私は抵抗する事も出来ずに皆の前に出された。

「よう作者さん？」

銀時の優しい挨拶。
だが、声と体の動きは比例していなかった。
銀時の手によって私は胸ぐらを掴まれ、高い高いをして頂いた。

「待って下さい旦那」

総悟が銀時に笑いかけた。
助けてくれるのか！？と期待した。
期待した私が馬鹿だった。

「先に遊ぶのは俺ですゼィ？」

「うぎゃぁぁあああ！！」

その後、描写出来ないイジメを受けた。
作者なのに…女の子なのに…。

「テメェなんざ女じゃねぇよ」

銀時の冷たい言葉に悲しくなりながらも私は説明を始めようとした。

「…もう疲れた。帰って良い？現実逃避して良い？勉強諦めて良い？此処に居るメンバーなんかしらで殺して良い？」

「オイッ！オメェらのせいで作者が病んじまったじゃねぇか！」

新八が銀時の肩を揺する。

サド達は笑った。

「「不可抗力」」

「何やってんのお前ら!?何が不可抗力だコンチキショー」

新八のシャウトに思わぬ人物が言葉を発した。

「まだ?ゲームは?それとも戦い?」

そこには可愛らしく頭を傾げる神威が。

「団長…団長は空気っつうものを知ってるのか…すっとこどっこい…」

阿伏兎は溜息を零した。

高杉がクツクツ笑う。

「んな事このガキが出来るわきゃあねぇだろうよ。テメェも分かってるだろ?」

「俺の願望だよ…すっとこどっこい」

「そぉかよ。んで、そこのガキと同じ事を俺も聞くか。何時始まるんだ?」

「…作者の心が戻るまでかと…」

新八はしゃがんでいる私を見た。
高杉は溜息を吐く。

「神威、お前の出番だ」

神威は「えっ？」と声を発した。
高杉は笑う。

「お前があのガキを立たせろっつう事だ」

「はいはい」

神威はクスッと笑って私に近付いた。
そして私の首根っこを掴んだ。

「高い高ーい」

「ウキャー！」

私の奇声が響いた。
いや、これこそ不可抗力だ。
だって神威は私の首根っこを掴んで、
投げた。
真上に。
私は地に落ちる寸前で神威に拾われる。

「早く始めてくれる？」

私は勢いよく首を縦に振った。
いや、だって恐いんだもん。
私の大好きな神威の笑顔の陰が半端無いんだもん。
死ぬかもしれないもん。
神威は私をゆっくり下ろす。

「でっ…では、私の、笛が、鳴ったら…すっスタート…で、おっ…
OKです、か…？」

震える私の声に皆が頷く。

「ち、因みに、チームの、なっ名前は自由、です…頭文字さえ合ってれば…では…」

私は懐から笛を出した。

次の瞬間、

笛が響いた。

走っても時間は取り戻せませーん。（前書き）

洒流奇：ハイハーイ。何か銀さんが今日は話したくないって事ですが、続けまーす。

新八：あのー作者さん。

洒流奇：んっ？

新八：銀さんの顔に付いてるバッテン印のマスク…見たことあるんですが…。

神楽：以前付けさせられたアルもんな。新八のツッコミが邪魔って事で。

神威：可哀想だね。大丈夫？ウチに来る？囮としてなら使ってあげるよ？

高杉：死兵なら構わない。

新八：ちょっ…扱い酷すぎますよ！しかもなんで僕は勧誘されてるんですか！？

神威：自殺を防ぐ為かな？

高杉：…興味が無い。

神楽：バイバーイネ。

新八：ちょっ二人共何言ってんですか！？しかも神楽ちゃんに至っては全く理解出来ないし！！

阿伏兎：互いに頑張ろうや…おかしな上司を持った者どうし。

新八：そうですね…変な人達の話を肴にでもして。

神楽：わぁーい、ご飯？

神威：じゃっ…阿伏兎の奢りで。

高杉：そこの眼鏡でも構わない。

新八：えっ…みっ皆さん？

阿伏兎：だっ団長…？

神威：阿伏兎の疲れ、聞きたいしね。

阿伏兎：…もう嫌だ。（ぼそっ

走っても時間は取り戻せませーん。

散らばったグループ達。

「まず何から行く？」

神威はグループの中で先頭を走る。

「目的地ねぇのにテメェは走ってんのか」

「うん」

高杉の呆れた顔に神威は頷く。

風雷はしおりを眺める。

無論、走りながら。

「この先は――お化け屋敷……だな」

「つまらなさそうだなぁ。戦ったりする所は無いんだ？」

「一様言っとく。それは戦場であって、遊園地では無い」

「馬鹿かテメェは」

二人の呆れ度はマックスであるが、当の本人は気にする気は無いようだった。

「オイ、マヨラー！」

「何だ万事屋」

「まず始めにジェットコースターに乗るぞ」

「分かった」

銀時と土方が先頭を走っているこのグループの後ろでは「もう帰りてぇ」と阿伏兎は呟いたのだった。

「近藤さん、僕たちは何処に向かっているんですか!?」

「ふっ…聞いて驚くなよ…分からん」

鼻を親指で当て、
格好良いだろ?とでも言いたげな笑みを浮かべた。

「局長ー!何言ってんですか!?ちゃんと考えて下さい!」

「そんな事言ったって分からないものは分からないの!何!?ザキには分かるのか!?ザキにはザキの地味人生わかっていんのかよ!?」

「何言ってんですか!?テメェは黙れ!!」

「あっ上司に向かって言ったな!?もう良い!お妙さんに癒やしてもらうもん!!」

「姉上はそんな事しませんよ」

新八は溜息を吐いてからしおりを開いた。

「此処からは…観覧車ですね」

「良しっ!流石我が弟!ザキよりも性能が良いな!」

近藤は親指を突き立てた。

「一つ言っときます」

新八は眼鏡を光らせた。

「んっどうした?」

「一つのアトラクションに何か色々有るらしいんですよ」

新八は怒りで近藤を殴ろうとしている山崎を抑える。

「ふむふむ…でっ?」

近藤は段々大きくなる観覧車を見た。

そして、

口を大きく開けた。

「手早く近藤さんが犠牲になって下さいって事です」

新八の言葉は冷たかった。
観覧車は目の前だ。
だが、
観覧車に行くためには、
大きすぎる溝が。
下には、
口を大きく開け、愛らしい瞳を細めた、
ライオンちゃんが居た。

「…新八君？」

近藤は冷や汗を体中に流しながら後ろを見る。
そこには、
不気味に笑っている新八と山崎が。

近藤は、

溝の中に、

堕ちた。

笑えるような、

奇声を発しながら。

コーヒーカップって地味にキツい。（前書き）

おはよーございます。
今日も朝から学校。
うかー。

銀時：って…

？

銀時：此処はお前の日記じゃねぇ！！

コーヒーカップって地味にキツい。

「オイ、サド」

「何でィ？」

疾風の如く走り去る沖田と神楽。

「何から乗るアルか？」

「コーヒーカップですぜィ」

沖田の口からスピードとは相反する息がゆっくりと出てくる。
神楽は息をスゥと思い切り吸った。

そして、
立ち止まる。

「さて、乗るアル！」

好奇心で染めた頬。
そこら辺にいる女の子と変わらない姿は四六時中変なワードを言ってる少女とは思えない。
そんな神楽の肩を沖田が掴んだ。

「何アル？」

「あの掲示板を見ろ」

神楽は沖田が指した先に視線を向ける。

そこには――

『コーヒーカップにあるお人形さんを飛ばす位回してネ★真ん中の奴で調節出来ます☆』

と淡いピンクで書かれたモノが。

神楽は次にコーヒーカップを見る。

そこには……

気持ち悪い顔を笑顔で歪ませたおじさんが。

一瞬、マネキンか？と思う位動かないがその目は数秒に一回瞬きをしている。

「よし、チャイナ」

「分かったアル」

神楽は手をグーに握る。

気持ち悪い髭のおじさんのTシャツが濡れていくのが目で分かる。

だが、

動かない。

そんなおじさんに神楽は何の躊躇いもなく、

拳を！！

『ピッピー！！』

コーヒーカップに笛の音が響いたと思った時には目の前に、
私こと洒流奇が居た。

「何アル」

不服そうに頬を膨らます神楽。
遠目で見ていた沖田も眉をひそめた。

『ルール通りやってくれないと早くやっても願い叶えないんでね。
分かった?』

冷静な私の声に神楽は、
足を下ろした。
だが、勿論私はホログラムなので意味が無い。

『これルール。じゃっ』

私は消える。
神楽は振り返って沖田を見た。

「どうするアル?」

「仕方がねぇ…やるか」

「…分かったアル」

神楽は肩を落として大人しくコーヒーカップに乗る。

「…何か有るネ」

神楽はコーヒーカップの中に有る紙を拾う。

『ルールは言ったから良いよね？もう一つ、リーダー決めてね？後、もうもう一つ。ゴールドボールは一つのアトラクションに一つ。所持するのはリーダーで。勿論、ゴールドボールは後で取り合いＯＫ★』

「どっちがリーダーになるネ？」

「そりゃあ俺に――」

「私に決まってるネ」

神楽は沖田の言葉を遮って満足そうに微笑んだ。

「あぁっ？」

沖田の睨みが神楽に向けられる。

「どうしたアル？」

沖田に問題がある？とでも言いたげな笑みで笑う。

「俺がやるに決まってるだろ」

「テメェに任せたらこのグループは崩壊アル」

「何だとォ」

睨みあいが続く。

「仕方が無い」

沖田は溜息を吐いた。

「そうアルな」

神楽は拳を握る。

「「じゃんけんぽいっ！」」

神楽はグーを。

沖田はチョキを。

「やったやった！勝ったネ！」

「くそぅ…」

喜ぶ神楽の横では自分の手を忌々しそうに睨んだ沖田が。

「とりあえず始めるネ！」

嬉しそうに神楽は笑いながら真ん中にある丸い奴に手をかけた。

そして力を少し入れた。

ぐわんっ！

「ちょっ――！？」

何も掴んでない沖田はコーヒーカップの縁を握る。

神楽はそんなに力を入れてないのだが、コーヒーカップは勢い良く回る。

「うっ…」

回りすぎで吐き気がする二人。

だが二人の間に居るオッサンは微動だにしない。

容赦なく回り続ける、コーヒーカップ。

二人の運命は――？

こんなん書いてると普通の遊園地を忘れる作者が一人。（前書き）

ねぇねぇっ！明日英検準２の二次面接だよ！

銀時：…そりゃ良かったな。

神楽：どうしたネ？不機嫌そうな顔して。

新八：何か嫌な事でもあったんですか？

銀時：あぁ、有ったよ！テメェ等のせいで全然話せないっつう苦しみがな！

風雷：…気にしないのが一番だぞ？

銀時：五月蝿エエエェェ！！

って事で明日頑張って来まーす。

こんなん書いてると普通の遊園地を忘れる作者が一人。

「…入るのか？」

風雷は神威に聞いた。

「そーだよ。早くしてくれない？俺戦いたいんだよ」

アトラクションに入ろうとする神威はハァと分かりやすく溜息を零した。

現在、お化け屋敷の前に居るＯＵＳＡＭＡチーム。

「もしかしてお前…怖いのか？」

高杉が嘲るように笑った。

「んっんな訳無いだろ！こっこわっ恐っか無い！」

そう言う風雷だが、ぶるぶる震え、歯はぶつかり合ってガチガチいっている。

「はい入るよー」

神威が入口に入った時、神楽達の所と同じようにリーダーを決めるように書かれた紙が置かれてあった。

「リーダーどうする？面白そうだけど？」

「俺ァパスだ。こーゆーのは損しかねぇに決まってるからな」

高杉は首を振る。

「んー…俺はどうしよっかな～。楽しそうな気もするしな…」

神威は頭に手をやる。

お化け屋敷から数メートル離れた所に居る風雷には聞こえなかったようで風雷はひたすら震えていた。

「君やるー？」

神威は出来る限り大きく言ったがそれでも聞こえなかったようで震えていた。

「はぁ…高杉、どうする？」

「面倒だ。あのガキにしとけ」

高杉は鬱陶しいように手を振りつつ、風雷に向かって歩く。

「行くぞ」

「コレって全員参加…？」

救いを求める風雷に高杉は無情に頷き、首根っこを摘んで風雷を連れてくる。

「行くぞ」

高杉に掴まれていた風雷は逃げようと試みているが、片方の腕は神威に掴まれ、もう片方の腕は高杉に掴まれる。
ズルズル引っ張られる風雷は成す術が無く引きずられる。
一人だけ後ろ向きの風雷は叫んだ。

「神楽ーー！！」

「風…雷…？」

咳き込む神楽は空を見上げた。

「ん…んな訳無ェでさァ…はぁはぁ…」

気持ち悪そうに沖田は口を抑えつつも神楽のコメントにしっかり返した。
あの後、コーヒーカップはずっと回り続け、オッサンはやがて飛んで、でもコーヒーカップは止まらなくて……と様々な苦しみを味わった二人は現在ゆっくり歩きながら次のアトラクションに向かっている。

「次…何に行くネ…」

「とりあえず…ゆっくりそうな…メリーゴーランドにで…も、すっ…か」

沖田は安定しない足取りのまましおりを広げる。

「そう…アルな…無事…ゴールドボールは一個手に入れたアルから…な」

神楽達はヨタヨタ歩きながら向かう。

因みに言っておこう。
これは銀魂の為、
普通のアトラクションがあるなんて、
あるかねぇ？

ジェットコースターって何が面白いの？（前書き）

ねぇ風雷…。

風雷：何だ？

三人共眠いからって言って帰っちゃった。

風雷：つまり…俺とお前しか居ないのか？

うん、そうだよ。

風雷：…帰っていい？

駄目！そしたらウチが一人で語らなくてはならない！！

風雷：何で語んなきゃなんねぇんだよ。

何となく…？

風雷：だったら代わりに神威とか呼べじゃいいじゃねぇか。

誘ったら疲れたから、って……。

風雷：だったら…

土方：俺等を呼べば良いじゃねぇか。

沖田：何で呼ばねェんでさァ。

近藤：そうだぞ。俺達は何時でもＯＫだぞ？

風雷：だってさ。じゃあ帰るな。

沖田：ちょい待って下せェ。

風雷：？

沖田：お前ってＭ何ですかィ？

風雷：えっ…ちょっ…Ｍ…？

土方：テメェは何て事聞いてんだ。

沖田：仕方がないでさァ。ちょと気になった事なんで。

風雷：えっちょっと…分からない。

沖田：顔が赤いでさァ。やっぱりお前――

風雷：知るかっ！

土方：…テメェのせいで走って逃亡してんじゃねェか。

沖田：おかしいですねェ？でもあれだと――

はい、作者が風雷の人権尊重でブチ切りました。
では本文どうぞー。

ジェットコースターって何が面白いの？

「乗るのか…？」

「あぁ…」

「どうしたんだお二人さん？」

土方と銀時の言葉に阿伏兎は頭を傾げた。
そこには――
直角に下れる素晴らしいジェットコースターがあった。
しかも下った先には湖がある。
落ちること必須だった。

「…行く…か」

銀時の慎重な姿勢に土方はゆっくり頷いた。

「どうしたんだいお二人さん？」

意外とオールマイティーな阿伏兎は何がおかしいか分からないようでただ頭を傾げている。

『ではご乗車ください』

アナウンスが入る。

銀時と土方、阿伏兎は静かに座った。

「…あれ…安全レバーは？」

銀時の疑問に隣に座っている土方は頷いた。

「無い…だと？」

『このアトラクションは、最初から最後まで落ちなければ合格です。一人も落ちてはいけませんからね？』

可愛らしい声のアナウンスに銀時の頭がびちんっ！と音が鳴った。

「何言ってんだテメェ！ただ掴む所しかねェじゃねェか！無理に決まってんだろ!?さっきの角度見たか!?九十度だぞ!?無理に決まってんだ――」

『五月蝿ーい。行ってらっしゃーい』

最後まで言わせてくれないアナウンサーの声が聞こえた時には、銀時達は居なかった。

発車したのだ。

最早スペースシャトル並のスピードで登るジェットコースター。

「ぐぎがが！」「ぐきゃいきゃはまた！」「あはははー」

悲鳴（銀時）と絶叫（土方）、笑い声（阿伏兎）がジェットコースターを埋め尽くした。

太陽に近付いていくジェットコースター。

阿伏兎は微風にでも当たるような顔だが、他の二人の顔は強張り、

全身全霊の力で落ちないようにしがみついている。
ジェットコースターが突如止まった。
銀時は震えながらも下を見た。
何とも美しい景色。
夜に見たら感動するかもしれない景色。
その景色が、揺れた。

「「ウギャアアアアァァァァ！！！」」

九十度の傾斜を下っていくジェットコースター。
ジェットコースターとは浮遊感が最高！という乗り物だが、
三人は既に浮いていた。
ジェットコースターの掴む所を掴んでギリギリジェットコースターから離れてない状態。
阿伏兎は「あーあーあー」とジャングルの中で言いたかったと言っていた言葉を叫び、銀時は「いやぁぁぁぁぁ！！」と悲鳴、土方は「マヨネーズウゥゥゥ！！」と叫んだ。
そして、湖の中に入る。
ジェットコースターのスピードは下がらないが、銀時達にかかる負荷が増える。
湖の中には魚が泳いでいた。
もし、船の上に居たら「あら可愛い」と言えるが、今の状態ではソレに目を向けられる程余裕が無い。
やがてジェットコースターは上がり、元居た場所へ。

「ぜぇ…はぁ…」

びしょ濡れの三人はジェットコースターから降りると倒れる。

「終わっ…た…」

銀時の呟きに土方と阿伏兎は頷く。
銀時は空から落ちてきた玉と鷲掴み。
それは――

「ゴールドボール、か」

銀時はクスリと小さく笑った。

恐がりだと何か可愛く見えるのが女の特権。（前書き）

おはよーございます。
やって来ました、朝の学校。
…来んなよ、って言いたくなるのを抑えず、はい、どーぞ。

土方：どーぞっつってもオメェと俺等しか居ねぇぞ？

沖田：何かMな奴居ません？暇ですぜェ。

近藤：さぁて、では何を語ろうか。

沖田：そうだ、宣伝しときませんか？

土方：宣伝？

沖田：第二章は真撰組活躍しまさァ！的な感じのをやりァしませんかっつう事ですぜェ。

近藤：なるほど。それは名案だ。

あのー…

土方：何だ？

ありません…。

近藤：んっ？

第二章、真撰組活躍しませ――

ぶんっ

げほっ

土方：何か言ったか？

ぎゃはかさにさにかはっ！！

恐がりだと何か可愛く見えるのが女の特権。

「さて、近藤さんの御陰で僕達は無事観覧車に着いたし…どうする？助けます？」

新八の残酷な笑みに山崎は頷いた。

「多分そろそろ反省しただろうしね。許してあげよっか」

最早上下関係が分からなくなる台詞だが、因みに山崎の方が位的には下である。

「助けてー！俺が悪かった！俺が悪かったアアァァァ！」

近藤の叫び声が爽やかな空気に流される。

新八はレバーを引いた。

ガシャンッ！と音が響くと近藤とは正反対の場所に高級そうな霜降りのお肉がボタッ！と無造作に落ちる。

ライオン達は勿論ゴリラとどちらが旨いか一瞬で見極められる為、すぐさまお肉へ。

その間に近藤を引っ張る。

「はぁはぁ…やっ…やっと着いた…」

近藤の溜息を完全無視した二人は観覧車に乗車。

近藤は慌てて二人を追い、乗車。

「あっ紙だ…」

観覧車の床に、リーダーを決めるように書かれた紙がヒラリと落ちていた。

「へぇ…何かリーダーを決めるらしいですけど…誰がやります？」

新八の黒い笑みに山崎は「僕は遠慮しとくよ」と返す。
近藤は「俺っ！俺っ！」と自らを指す。
新八は一瞬近藤を見て、「じゃあ僕がやります」と言った。

「おっ…俺は――」

「新八君なら安心だね。良かった良かった」

近藤が自らをリーダーにするように言う前にすかさず山崎は先制攻撃。

「良かった。山崎さんも納得なら安心です」

新八もちゃんと駄目押しの攻撃。
無論、黒い笑みは浮かべて。

「良かった…新八君なら…あっ安心だよ…」

近藤は引きつった笑みで頷いた。

「いやぁ近藤さんにも認められるなんて凄く嬉しいな」

頭を掻いてしっかり頭を傾げる。
これで近藤は完敗した。

「そっそうか…あはははは…」

近藤はうなだれる。

山崎はニコリと楽しそうに笑った。

「局長、元気出して下さい」

「山崎…」

感動したように頭を上げた近藤に山崎は一言。

「面倒事は全部局長に行きますから」

「えっ…？」

山崎の言葉に近藤は汗が流れる。

「はいっ此処のルールを見て下さい」

山崎は上を指した。

近藤は僅かに震えながら上を見た。

【一人観覧車を外で楽しんでね★あっ落ちなかったらゴールドボールゲット！ついでに風邪菌もゲット★】

近藤は震えた。

次の瞬間、新八と山崎の蹴りが炸裂する。

「ｈｅｌｐ　ｍｅ！」

近藤の叫びが空に響いた。

「ギャアアア！」

風雷の叫び声が何度も響くお化け屋敷。

「…」

「♪」

無言で前を進む高杉と楽しそうに鼻歌を歌いながら進む神威。
風雷は真ん中で一人だけ遅いスピードで歩いている。

「ほらテメェ…早く来いよ」

高杉が呆れたように後ろを見た。
風雷はゆっくりと慎重に進む。
その時、高杉の背後に髪の毛が長い白い肌の女がサッと現れる。

「！！」

風雷の足が止まる。

「あぁ？どうしたんだ？」

高杉が一歩風雷に近付く。
女も近付く。

「うっ…後ろ…」

風雷は震える指で高杉を指した。
正確に云うと高杉の後ろなのだが、高杉はハァと溜息を吐いて後ろを見た。

「…」

女と高杉の目が数秒間会う。

「ふーふふーん♪」

神威が女の頬に勢い良く拳を入れた。
次の瞬間、ヅシャシャシャァと女の体が壁にめり込んで消えた。

「行くよ」

神威は風雷に近付いて腕をしっかりと握った。

「あっあぁ…」

風雷は俯いた。
高杉はその姿を見て馬鹿らしいとでも言いたげな溜息を再度零した。

「…あのさ、」

神威に掴まれる事によって同じスピードで歩けている風雷は神威を見た。

「何？」

「平気…なのか？」

「何が？」

風雷の台詞に神威は頭を傾げた。

「…呪いとか」

風雷は俯いて、チラリと神威を見る。
神威はソレを見て始めキョトンとしていたが、やがてクスリと笑った。

「平気だよ。そんなの有るわけ無いしね」

「…そう…なのか？」

挙動不審な風雷の行動が更に可笑しさを際立たせる。
高杉は堪えきれなかったようで、爆笑。

「ちょっ…何でそんなに笑うんだ…？」

「自覚…なしか…」

ハァと溜息を吐いた神威に高杉は含み笑い。
へっ？へっ？と言いながら二人の顔を交互に見て頭にクエスチョンマークを浮かべる風雷。
そんな和やかな中に――

『キャーー！！』

何処からか分からない悲鳴が響いた。
風雷はビクッと震え、逃亡しようとするが神威に見事に首根っこを掴まれ、失敗。

「逃げちゃ駄目でしょう？」

「…やっぱり駄目か？」

最早自分が怖がりである事を認めたようで引きつった笑みを浮かべながら頭を傾げた。
神威は自分の力によって宙に浮いている風雷を見、クスリと楽しそうに笑った。

「おい、神威。お前がソイツ持っとけ」

面倒な様に高杉は手を振った。
風雷は「持つ？」と頭を傾げる。

「ハイハーイ」

神威は風雷を上に投げた。

「えっえええ！？」

風雷は何かを掴むように手を引っ掻き回したが、ただ空気を握るだけだった。
このままだと落ち――！？と云う時、ポスッと柔らかく何かが自らの体を支えた。

体全身に走らない衝撃に疑問を抱きつつ思わず閉じてしまった瞳を開けた。
そこには――

「じゃっ高杉行こっか」

神威が居た。
いや、元々居たのだが、さっきより顔が近い。
斜め右下辺りからのアングルだ。
風雷は混乱する頭を落ち着かせる為に取りあえず前を見た。
浮いている足。
コレは以前体験した。
実行者も同じ。
という事は――

「おっ…下ろせ！お姫様抱っこなんて止めろ！！」

お姫様抱っこである。
抵抗する風雷を気にしない神威は鼻歌の続きを。
周りを見つつも欠伸を零す高杉は普通に足を動かしている。

「ちょっ…まぢで下ろ――」

『バァッ！！』

女の幽霊（実は立体映像）が神威の前――つまり風雷の目の前に現れる。

「！！」

風雷は言葉を失い、気絶するギリギリ。
思わず近く、というか横にある服を握る。

「大丈夫？」

神威は平然と幽霊を通り過ぎて風雷に声をかけた。

「へっ…平気だ」

震えた声で言われても何も説得力が無いのを気付かないのか風雷は上目遣いで神威を見る。
それが更に風雷を小動物の様な愛らしさを際立たせる。

「おい、急ぐぞ」

高杉の言葉に神威は頷いた。

その後は簡単に抜けた事は言わなくても分かるだろう。
遅い原因の風雷は神威に担がれ、高杉と神威のお化け屋敷破壊によって。
……スタッフの働く量が増えたのは言わなくても分かるだろうな。
可哀想に。
だが、
風雷の悲鳴だけは、
お化け屋敷の中に永遠と響いたのであった。

シュールな絵の作り方ってのは意外と簡単。（前書き）

１３日に投稿した『ジェットコースターって何が面白いの？』が最高記録！！１２００位です！！ありがとう！！ありがとう！！

神楽：本当凄くネ。こんな屑作品に。

銀時：もしかしたらアレじゃね？夢オチみたいなモンじゃね？

新八：夢にしてはリアリティありますもんね。

神楽：じゃあとうとう作者の頭がバコーンアルか？

銀時：だな。バコーンだな。

風雷：残念な作者。

何でエエエェェ！！

シュールな絵の作り方ってのは意外と簡単。

観覧車降りた場所では――

「ゴールドボールゲットですね」

「うん、良かった良かった」

ゴールドボールを手にして高く掲げて笑う新八。
そしてその新八を見て普通に笑う山崎。
そこら辺にある地味な男子、というようなほのぼの。
その二人の横にフル○ンの男が居なければ。
ブルブル震える男――近藤。
近藤は過去を振り返る。
まずいきなり外に出され、意味が分からないながら観覧車の天井に寒さに耐えながらしがみついていた。
下に居る二人はほのぼのと地味な会話をしていた気がする。
確か自分あの時、「止めろ地味ィ！派手になればきっと良い事あるから！」と叫んでたなぁ…と過去の過ちを笑う。
何故ならあの後すぐさま、「局長に少し罰お願いしまーす。あっ勿論、他の奴は少し軽くして下さいよ？」と山崎が作者にオーダー。
そのオーダーに作者は『分かりました。ではどれになさいますか？取りあえずプランは幾つか有りますが？』とまるで何処かのレストランの定員のような受け答え。
山崎は「じゃあ局長にあった感じの」と答えた。
「俺にあった奴って何！？」と言う俺の叫びは完璧に無視された。

『プランAは取りあえず……観覧車から落ちて、直ぐに立ち上がっ

て……ＤＯＧＥＺＡをする。あっ、勿論直ぐにってのは五秒以内ですからね？』

「へぇ。面白そうですね。他に何が有るんですか？」と新八も楽しそうに会話に入った。

『プランＢですと……分かりました。アレですね。自殺』

「ちょっとオオオォォォ！！何か最早罰っていうレベルかアアアァァァ！？待って……待っ――」

『あっ流石に簡単すぎですよね。すいません、御手数をおかけしてしまって。すいません、ゴリラなんか死んでも何の得も有りませんでした』

「ちょっとオオオォォォ！！俺の命軽くないかアアアァァァ！？ゴリラなめんじゃねぇぞオオ――」

『ではお手ごろな感じのプランＣはどうですか？』

「どおゆうのですか？局長が苦しめば良いですから」

「ザキにはそんな性癖無いだ――」

『プランＣはですね、全裸で【命】の形をして下されば結構です』

俺は既に叫んでも効果が無い事を知りつつも叫ぶしか方法が無い。

「無理だよオオオォォォ！今は冬だぞ！！秋かもしんねぇけど流石に全裸じゃ寒いに決まってるだろオオオォォォ！頼む、ザキ！！俺が悪かった！！ザキイイイィィィ！！」

「局長…」

山崎は上を見た。

上には観覧車の薄い壁が見えるだけであった。

山崎は目を閉じた。

そして、

笑った。

「誠意を見せて下さい」

近藤は顎を外す位口を開いたのは無論だ。

……そして今のシュールな絵が完成したのである。

「じゃっ行こっか新八君」

「そうですね」

微笑みあう二人。

最早コメディではないと感じた、
近藤であった。

羞恥は結構後々まで心に残る。（前書き）

神楽：今日作者は眠ーいって事で蹴散らしてきたネ。

銀時：ナイスファイトだ。

新八：…何やってるんですか。

風雷：殺りすぎは良くないからな?それこそ半殺しに……

土方：またテメェは俺達に遊ばれてェのか?

沖田：やっぱり生粋のMですかい?

風雷：ちょっ…土方さんのは構わないが、沖田さんは何言ってんだ！俺がえっMな訳ねェだろ！

神楽：風雷イジメるなよサド野郎。風雷は社交的なのネ。テメェと違って。

沖田：じゃあテメェはソイツの爪の垢を煎じて飲むべきだな。いや、体中の垢かィ?

銀時：…落ち着けお前ら。

風雷：坂田さん！（感動の眼差し。

銀時：風雷は見りゃァ分かるだろ？Mだよ、M。

風雷：坂田さアアアァァァん！！！

新八：…風雷さんが此処まで叫ぶの初めて見たな。

羞恥は結構後々まで心に残る。

「次…何処に行くんだ？…てか何時下ろすんだよ！？」

風雷は神威の腕の中で動き回る。

お化け屋敷から出たのだが、神威はまだ風雷を下ろしていない。

「大丈夫？」

「大丈夫に決まってるだろォ！！もう下ろせ！！平気だから！！お・ろ・せ！！」

顔をかぁと赤面にしている風雷に神威はクスリと意地悪そうに笑う。

「…次何処に行くんだ？」

現在の光景に完全無視を決めたように高杉は周りを見渡した。

因みに三人というか神威と高杉は走っている。

「うーん…。君、しおり開いて」

「結局下ろしては…」

口ごもる風雷に神威は簡単に返す。

「しおりで目的地が分かったら下ろすよ」

バサッ！と風雷は風のように素早く開いて今歩いている方向、スピードなど一瞬で計算。

「次はメリーゴーランドだ！そして下ろせ！」

「はいはい」

神威はポーイと投げ捨てるように落とす。
風雷は綺麗に弧を描き着地。

「俺が案内する！」

猛烈なスピードで走り出す風雷。
お姫様抱っこによっての羞恥心をエネルギーのように素早く消す為には何をするのにも厭わない少女だった。

「面白いねぇ」

愉しげに笑う神威に高杉は「先が思いやられるな」と小さく返す。
そして二人は風雷の背を追うのであった。

「メリー…ゴーラ…ンド？」

神楽の疑問を同じように抱いたのか沖田もはぁ？と言いたげな程に口を開けた。

「最早…遊園地じゃねェ…」

沖田の呟きに神楽は心底頷いた。
目の前に広がる光景は――
鼻息が荒い馬が頭を振る様子。
沢山居る馬達は神楽達を見るとバフーン！と更に息を荒くする。

「ルール…は？」

取りあえず頭をキョロキョロさせる神楽。
その時、ピンポンパンポーンとアナウンスが入る。

『ルールはねぇ…取り――』

「俺が先にやる！！」

ルール説明をしようとした作者の声を遮る。
遮った張本人の逞しい声に神楽と沖田は目を向けた。
そこには――
風雷が居た。
息が荒く、肩を上下に揺らす風雷の頬は赤い。
コレは運動のせいか、はたまた違う理由かは誰にも分からない所だ。

「やっと追い付いた」

少し遅れて神威達が到着。
高杉はメリーゴーランドの姿を見ると「何だこりゃあ…」と溜息を零す。

「俺達が先ですぜェ？遅れてきた奴は引っ込んでて下せェ」

「風雷、幾ら何でも此処は引けないネ！」

二人は仁王立ちをして風雷の道を塞ぐ。

「悪いけど神楽！俺は猛烈に馬に乗りたいんだ！」

風雷ＶＳ神楽・沖田の戦いが始まる。

『…ルール説明良い？』

作者の声に神威が「良いよ」と返した。

『しょうがないからその二チームで競争っつう事で…競馬みたいな感じはどう――』

「分かった」

「やってやるネ」

「テメェに上下関係を教えてやらァ」

作者の言葉を遮り、意気込む三人。

『…じゃあＯＵＳＡＭＡチームは一人抜けて下さ…い』

「俺が抜ける」

私の弱々しい、というか疲れきった声に高杉が手を挙げた。

「えー俺が抜けるよ。高杉は乗った事が有るだろ？だからさぁ、ねえっ？」

高杉はチッと舌で爆発音を作って、「分かったよ」と呟いた。
乗馬をする四人ばゲートを潜る。

『因みに、先に一周した人のグループが勝ちね？』

「早くしてくれ！」

「早くしろネ！」

「くだらねぇ事はほざくんじゃねェ！」

作者の厚意は意図も簡単に壊され、その上、罵詈雑言。
…作者、混乱状態に陥りそう。

『…始め』

作者の小さな声に四人は駆け出した。

考察しりゃあ分かる事は沢山。（前書き）

神楽：何か凄い事になってるネ。

銀時：あぁ？何がだよ？

神楽：以前初めてのアクセス数千越えがあったでショ？それの次の日のアクセスも超えたらしいネ。流石にアクセス数一位にはならなかったらしいケド。

風雷：意外とコレも捨てたモンじゃねェんだな…。（逃亡する準備。

新八：どうしたんですか？

風雷：ちょっとな…野暮用だよ。

土方：野暮用？

沖田：何ですかィ？気になっちまうじゃねェか。

風雷：じゃっじゃあな！

銀時：あーらら、行っちまった。

土方：何があったんだ…？

考察しりゃあ分かる事は沢山。

「ん…次は…」

と言いつつ銀時はしおりを開いた。
しおりには『お化け屋敷・メリーゴーランド・コーヒーカップ・観覧車・ジェットコースター・喫茶（コレは午後二時に来て）』と書かれてある。

「こっからだとお化け屋敷が近いな」

阿伏兎がしおりを覗き込んで素早く答えを導く。
そしてその答えに銀時と土方はピクッと動く。

「んじゃあお化け屋敷にで…」

阿伏兎の提案に二人は頭を上げ、顔を見合わせる。

「あー余裕だし？何、たったた多串君？かっ顔色悪いよ？」

「なっ何言ってんだテメェ。おっお前の方が顔色わっ悪ィよ。つーか俺の方が余裕だしィ」

二人の台詞に阿伏兎は頭を傾げ、考察。
そして結論を見出した阿伏兎はハァと溜息を零した。

「もしかしてお前さん達二人ともお化け屋敷が無理――」

「「んな訳有るかアアァァァ！！」」

二人の悲鳴が響く。

阿伏兎は「こりゃ駄目だ」と諦めつつも疲れる事は先にだな、という事で「なら行くぞ」と先頭をきる。

「えっあっ…よっ余裕だからなァ？こっこんなの朝飯前だし、し。なっ……ひっ菱形君。まっまぁもっもしかしたら君は駄目かもしっしれないけっけど」

「なっ何言ってんだ与論島。よっ余裕すぎて欠伸、もっ漏れるし。なっ兜君」

二人の挙動不審レベルＭＡＸである。

冷や汗も凄まじいモノである。

「…早く行くぞぉ」と阿伏兎は返す。

阿伏兎は心底自らがリーダーになって良かった、と思う。

こんな二人のどちらかについて行くとなると自分が辛いに決まっている。

「先に行くんでな」

と言って走る。

土方と銀時は「えっ…やっぱり？」とでも言いたげな困惑した顔で渋々ついて行くように走る。

「…早く番外編終わんないかねぇ」

今回の阿伏兎の切実な願いであった。

新八達は現在ジェットコースターに居た。
ジェットコースターに着き、さっきの近藤の努力が有るからちょと軽くして下さいと営業スマイルで山崎がアナウンスの人に頼む。
アナウンスさんは『ちょっと待って下さーい』と言ってから数秒後『では貴方方は一人でも残っていたら結構ですよー』と軽く答える。
やっと服を着た近藤は「お妙さん…」と言葉を零す。

「じゃあ大変そうですけど頑張りますか」

「そうだね。じゃあ局長、行きますよ？」

二人は近藤の首根っこを締めつつ静かにジェットコースターに乗車。

『じゃっ行ってらっしゃーい』

元気なアナウンスが聞こえた時にはまた消えるというジェットコースターは高く高く空へと登ったのであった。
三人は声にならない叫びを涙で抑える。
はっきり言って軟弱な三人には最も辛いアトラクションである。
そして、銀時達同様、
落ちた。
山崎、新八は風圧にアッサリ負けて離れる。
顔の形が変形している近藤は二人を羨ましげに見送りつつ自分も手を離そうかな…と考える。
が、もしやってしまったらブラックジミー達の手には何やら怪しいモノが何時の間にか握られている事は必須だ。
耐えろ近藤！と心の中で叫ぶ。

だが、水に入り、更に重荷が増える事によって、
近藤は離してしまった。
クソオオォォォ！と叫びつつ近藤は湖の中にどんどん沈んでいくのであった。

さて、とうの昔に離した二人は溜息を零しながらジェットコースター乗り場に戻っていた。

「…失敗しましたね…」

「新八君平気…眼鏡無いよ…？」

「どっかで落としてしまったみたいです…」

二人はうなだれた。
目の前にジェットコースターが戻ってくる。

「局長も失敗しちゃったし…」

「嫌ですね…」

『はい、合格ぅ』

「へっ？」

二人は見上げた。
突如聞こえたアナウンスの言葉に頭を傾げる。

『いや、新八が最後の最後まで乗ってたから合格って言ったんだけど？』

「へっ…僕は此処に居ますけど…？」

「どうして…？」

『山崎目ぇ平気かい？居るじゃないか』

山崎はジェットコースターに目をやった。
そこには――

「僕の眼鏡！」

そう、新八が居た。

「ちょっ…何で…？」

ポカンと口を開けて新八は山崎を見る。
山崎も驚きで目が点になっている。

「凄いね…新八君…」

山崎はジェットコースターに駆けより、眼鏡を撫でる。
運良く引っかかっていた眼鏡はキラリンと眩く輝いた。

「ちょっ…僕は此処に居ますよ！」

そう言いつつ幸せそうに微笑む新八。

ジェットコースタークリア。

怪我何て誰もがしちまうモンだ。（前書き）

洒流奇：重大な事が判明！

新八：重大な事って何ですか？

神楽：どーせくだらない事ネ。手が切れちゃったーみたいなモノネ。

洒流奇：それもそうなんだけど…

銀時：そうなんかよ…。

洒流奇：ストックが無い！

土方：あぁねェな。

洒流奇：コレじゃ一日一話投稿出来ない！

沖田：そォいやなんやかんやで1日1話投稿してやしたねェ。

風雷：気付かなかった。

銀時：あれェ今何話だっけな？

新八：四十話位じゃありませんか？

風雷：…そろそろ六十話だよ。

神楽：マヂアルか！気付かなかったネ！

沖田：意外すぎて欠伸が出るな。

土方：テメェは何時も欠伸してんだろーが。

洒流奇：はいストップ！

銀時：テメェの脳細胞の動きがか？

洒流奇：違う！だけどストップ！分かるか！？つまりウチが言いたい事！

神楽：言いたい事？

洒流奇：うん！コレじゃあアクセス数取れないって事！

風雷：そういやそうだな。毎日一話投稿してたからアクセス数取れてたモンだし。

土方：結局は実力じゃねェんだな。

銀時：さすがだな。

新八：セコい技ですよね。

神楽：本当ネ。

洒流奇：五月蝿い！んで、居ないかもしれない読者さんに連絡！

風雷：認めちゃったな。

洒流奇：本当の本当に一日一話出来ないかもしれません！

怪我何て誰もがしちまうモンだ。

重たい空気が阿伏兎の周りにある。
何故、という理由は一目瞭然である。
後ろに居る二人が冷や汗だらだら、口がガクガク、というまるで冬のプールでも体験してんのかコノヤローという感じなのだ。
阿伏兎はただただ溜息を口から零すのみ。
そんなこんなで着いたお化け屋敷は、憂鬱である。
何故だか建て直したぜ！みたいな程木が彼方此方に被さってるお化け屋敷。
何があったか知らない阿伏兎は「何じゃこりゃ」と小さく呟いた。

「えっ…と此処が俺のパラダイス？はっはは、ざっ雑魚いな。俺をパラダイスに連れて行くんならもっと激しくねェとな」

引きつった笑みで震える唇を動かして言の葉を作り出す銀時。

「おっ俺のはこっこんなんのじゃパラダイスにいいっ行けねェし。もっとヤベェのにしなきゃ意味ねェからな」

土方も銀時同様の強がりを見せつける。

「じゃあ雑魚で激しくなくてヤバくないパラダイスに行こうじゃねぇか」

阿伏兎は銀時と土方の背中を押し、前に進む。

「「（ちょっっっとオオォォォ！待ってエエエェェ！！）」」

銀時と土方の心の叫びを理解しながらも押す阿伏兎。
二人は戦慄を感じた。
人を恐怖に陥れるのに躊躇しない阿伏兎に。

中身は神威達によってボロボロであった。
阿伏兎にとっては気にする事では無いのだが、二人には重要ポイントの一つであった。

「（待て待てっ！！何があったんだぁっ！？何！？幽霊が這いつくばったのか！？ちょっとオォ嫌だよオォ！！）」

「（誰も来るなアアアァァァ！何も悪くない！俺は何もしてないから其処から『こんにちは』とか止めてくれよオォ！！）」

最早意味が分からない叫びを心の中で抑えている銀時と土方。
顔は強張りすぎていてまるで別人のようだ。
前を歩んでいる阿伏兎には見えない葛藤を心中で行っている銀時達の緊張度は計り知れないモノである。

「ちょっとお二人さん？」

阿伏兎が振り返る。

「…！！！！」

銀時達は振り返った阿伏兎の背後を目を見開いて凝視する。

そこには――
神威によって死ぬ寸前の幽霊役の天人が居た。
二人は震える手で示すが当の本人は気付いていない。
言おうとはしても最早言葉が出ない、といった酷い精神状態。
阿伏兎は頭を傾げつつも「もうちっと早く進めねェかい？」と用件を伝え、前を向いた。
天人と数秒間目が合う。

「「（やっちまったよオオオォォォ！）」」

と心の中での叫ぶ二人に対して阿伏兎は瞬きをして、「オメェさん怪我平気かい？」と暢気に聞いた。

「オメェの頭が平気か！そいつは幽霊なんだから関係なくだろオオオォォォ！」

「そおだ！おかしいだろ！？怪我平気かって！」

二人は阿伏兎にビシッと口を大きく開けてツッコミ。
土方は思わず煙草が落ちそうになるくらいだ。

「あっ…平気です。一様病院行ってきたんで」

「「幽霊が病院に行ってどおすんだアアアァァァ！！」」

銀時と土方は阿伏兎を超えて天人の頭にチョップ。
「グエェ…」と天人は呻きながら失神。
叫びすぎた二人の息は荒くなっている。

「何やってんだすっとこどっこい。怪我人を殴るってよォ？」

「ウッセェ！幽霊に怪我も糞も関係あっか！」

「そもそもテメェのせいでこうなったんだろうが！」

阿伏兎は頭を掻いて「凄ェなぁ…」と呟いて足を再度進めた。
ついでに阿伏兎は前に居た二人を押す。

「えっ…ちょっ…」

ツッコミを熱心に励んでいた二人だが、気付いた。
今自分達が居る所はお化け屋敷だと。
二人の足は竦む。

「どうしたんだィ？急ぐぞォ」

阿伏兎の間延びした言葉に二人は心の中で叫んだ。

「助けてくれエエエェェェ！！」

乗馬と書いて戦と読む奴も居るかもしれない。（前書き）

洒流奇：ヘーイ！全部ストック無くなったゼ！

銀時：朝から五月蝿ェ！

洒流奇：仕方がないじゃん！学校なんだから！

神楽：そういやお前の所は週六日だったアルな。

風雷：そしてそこまで勉強しても頭は良くならないんだな。

新八：駄目ですよ風雷さん。事実は隠すべきですよ？

洒流奇：うわあああああぁぁぁ！！

乗馬と書いて戦と読む奴も居るかもしれない。

荒れ狂うように走る馬。
その上で走っている人達の顔も険しい。

「風雷覚悟オオォォォ！！」

ヒュンッと横に並んだ神楽のチョップが風雷に飛んでくる。

「甘いよ」

風雷は目をキランッと輝かせ、神楽の馬の尻を蹴飛ばす。
馬は「ヒヒンッ！」と叫んでスピードアップ。

「うわっはへっ！」

両手を離していた神楽にやって来るのはビュワンビュワン吹く風と馬の強くなった衝撃。
それによって神楽は横に滑り落ちそうになる。
だが、神楽は足のみで必死に落ちないようにする。

「ごめんな」

風雷はニコリと戦慄を感じさせる笑みを浮かべると何時の間にやら握っていた石を神楽の腹に勢いよく投げた。

「ぐぺっ」

神楽はおかしな声を出して馬から落ちる。

「ふぅ…」

落ち着いたように溜息を零した風雷に「甘いのはアンタでさァ」と声がした。

「んっ？」と呟きながら風雷は声がする方を見る。

見た時には、

目の前に刀の鞘があった。

「！！」

風雷は頭を低くさせる。

だが、投げられた刀の端に頭をぶつける。

思わず一瞬目を閉じる。

そして目を開いた時には、

沖田のバズーカが風雷に向いて、

火を吹いた。

「ウギャッ！」

風雷は意図も簡単に地に落ちる。

沖田はニヤリと嫌らしく笑いながら前を向いた。

目の前には後少しでゴール。

「これで一件落――」

『ゴール！！』

沖田の声が私によって遮られる。

沖田は「はっ？」と驚きを口にする。
沖田はまだゴールしていない。
後数メートル有る。
だったら…と疑問を頭に浮かべる沖田は目を見開いた。
ゴールの少し奥、そして端っこに居る奴が居た。

「高杉イイイィィィ！！」

沖田は悔しそうに叫んだ。

高杉にとっては容易なモノであったがまさか自分の存在に皆気付いてなかった、という事実は驚きであった。
諍いを起こしている少し横を通り、相手が集中していない――死角を走ったのは長年乗ってきた高杉には簡単、とは何度も言わずとも分かるだろう。
そして今まで相手の死角を狙った攻撃などの経験を駆使すれば。
だが、
此処まで自分の存在に気付かれなかった事は初めてだった。

……という事で心中では複雑な勝利を勝ち取った高杉であった。

「凄かったね。高杉の圧勝って奴かな？」

神威は高杉の心中を知ってか悪戯っぽく笑う。

「ふん…こんなん朝飯前だ」

高杉はそう切り捨てて乗馬コースで黒く汚れている風雷の首根っこを相も変わらず掴んで引きずる。

「けぽっ…」

口から黒い煙を零した風雷は引きずられるがまま。

「チッまさか高杉が居たとはな。予想外だぞ」

「負けたネ！包帯ぐるぐる巻きのミイラ男に！」

沖田と神楽は地面を蹴ったり殴ったりして感情を露わにする。
それを聞いた神威は大爆笑。
笑いすぎて涙目になるくらいだ。
風雷はパチッと瞬きをし、「いや…神楽…」と言葉を漏らす。
当の本人は黒い影がある。
そんな高杉の頭にボトッと何かが落ちる。
高杉は頭に当たった衝撃を感じなかったかは不明が、とりあえず地に落ちたゴールドボールを手にし、風雷に投げる。

「あ…ありがとう」

風雷はゴールドボールを手に取ると大切そうに懐に忍ばせた。

「風雷」

「何神楽？」

「負けないアルからな！」

「こっちもね」

ジリジリっと火花を散らしてから二チームは別れる。
互いに正反対の方向に向かう。

因みにこの後、全チームなんやかんやで一つのアトラクションを残し、クリア。
乗馬だったメリーゴーランドは近藤達などが来た時には最早暴れ猪の突進に耐えろ!という内容に変わっていたが。
勿論、新八のチームは近藤が出、クリア。（因みに近藤は一瞬お空に逝った。）
阿伏兎チームは阿伏兎が。
コレは阿伏兎の威圧で猪が気絶してクリア。
風雷チームはジェットコースターは難なくクリア。
観覧車のライオンちゃんは神威の笑みに怯え逃走したため、簡単に観覧車をし、神威は外でお空を仰いだそうだ。
その時にゴリラの星を見たという話もある。
阿伏兎チームと風雷チームは後でコーヒーカップで鉢合わせしたが両者気にせずにクリア。
新八チームはお化け屋敷は地味にクリア。
……コーヒーカップではおじさんの耳元で何かを語ったとか。

という事で何げに一番最後、変装喫茶に皆居るのであった。

乗馬と書いて戦と読む奴も居るかもしれない。（後書き）

すいません。
最後手抜きです。
いや、仕方がないんですよ。
だってこのままじゃ第二章始められないもん。
って事で宜しく。

男と女の違いってのは何か分からない人も居る。（前書き）

ハーイ、言った通り1日あきました。
スイマセーン。

男と女の違いってのは何か分からない人も居る。

変装喫茶に最初に来たのは銀時達のチームだった。

『何名様ですか？』

入口を通ろうとした三人の頭上からの声。

「大人三人だ」

阿伏兎が返す。

『性別は何ですか？』

「…？何でそんな事を聞くんだァ？」

土方は煙草を手に取り、くわえる。

『着替えの更衣室の部屋ですよ。だって此処は変装喫茶ですよ』

「良く分からねェが…男三――」

「男二人、女一人だ！」

土方ははぁ？と苛立ちを隠さずに横に居る銀時を見る。

銀時の鼻からは鮮やかな赤い液体が流れていた。

「どうしたの多串君？私は実は女なんだよ？」

「下心が見え見えだぁっ！！」

裏声で話す銀時の頭を勢いよく叩く土方。

「ちょっとォ多串君気付いてなかったのォ？私ィ、パー子って名前なんだよォ？」

「んな訳有るかアアアァァァ！」

再度勢いよく叩く土方に銀時は「酷ーい」と甲高い声を出す。

『では女子更衣室は右、男子更衣室は左ですから』

その言葉を聞いた銀時は素早かった。

土方の打撃を一瞬で避け、ダッシュ。

さながら戦う侍のようであった。

「侍ってなァ…何だィ？」

阿伏兎の疑問に土方は答えられなかったのであった。

次にやってきたのは風雷チームであった。

さっきと同じような質問をされた風雷は「…」と頭を抱える。

「どうしたの？」

神威の問いに風雷は頭を上げた。

「だって俺は体は女かもしんねェけど……魂は男だからなァ…」

「男二人、女一人だろ」

高杉の答に風雷は「女……嫌な響き」と呟いた。

「んじゃっ、男三人で良いんじゃない？別に何か有るわけじゃないし」

『いやっ、一様更衣室が関係あります…』

頭上の声に驚く事無く神威は「何かおかしな事があるの？」と聞く。

『まぁ着替え場所ってのが一つ…ですね。おかしな事か分かりませんが…着替える内容とかも…』

「だってさ」

にこりと神威は笑う。

「…」

風雷は再度頭を抱えた。

「別に平気じゃない？何か減るって事は無いだろーし」

神威の言葉に風雷は「減る減らないの問題じゃねェだろ！」と大声で返した。

「とりあえずテメェは女子更衣室に行きゃあいんじゃねェか？何を言おうが女なんだからよォ」

高杉の言葉に風雷は「分かった…とりあえず二人は此処に居てくれ」と言い、「場所は？」と聞いた。

『女子更衣室は右』

その言葉に風雷は「サンキュー」と言って走った。

「くだらねェ」

高杉は風雷を待たずして男子更衣室に向かう。

「えー？行くの？」

「平気だろ。アイツはガキじゃねェだろうしな」

そう言いながら進む高杉に神威は溜息を零した。

「俺は後で行くねェ」

「勝手にしろ」

神威は壁にもたれ掛かりながら高杉の背中を見送ったのであった。

「此処か…」

高杉が先に行ったという事実を知らない風雷は唾を呑み込んだ。
ゆっくりと扉を開ける。
そしてその隙間から覗き込む。
中には――
世に云うスクール水着に足を突っ込む銀時が居た。
勿論、水着を着るためにはまず全裸にならなければならないという事は無いのだが銀時は全裸であった。
風雷には後ろ姿しか見えない形である。

「！！」

最早風雷にとっては呼吸が出来ない。
いや、なんやかんやで呼吸をしているが何故かお化けを見た時のような荒い息。
その顔は恐怖で歪んでいて、体は震えていた。
風雷は扉を勢いよく閉めた。

「んっ…？誰か居んのか？」

銀時は不思議そうに頭を傾げたがすぐに行動、というか着衣をするのであった。

「んっ…？あっどうだった？」

ゆっくりと歩いてきた風雷に神威はにこりと笑いかける。

「ねぇ…坂田さんの性別は？」

風雷は俯いて質問をした。

「多分男だけど？」

何で？と言いたげな瞳で風雷を見つめる。

「いた…んだ」

「？」

「女子更衣室でスクール水着を着ようとしている坂田さん…が」

「へっ？」

風雷の言葉に神威は思わず口を開けた。

「俺は…どうすれば…」

風雷はガクンッと崩れ、溜息を零した。
まるでシリアスの時のコメントだが、
残念な事に今はシリアスではない。

「いやっ…俺にはどうしようも出来ない…かな」

神威すら僅かに動揺していた。

「…俺は何処で着替えれば良いんだ…？」

分からないと動けない奴が居るかもしんないけど動ける奴とか色々居る。（前書

ハァイ、ビバ遅い☆
すいません／（☆ｏ☆）／

銀時：すいませんって言ってる奴が何で／（☆ｏ☆）／（コレ）なんだよ。意味分かんねェよ。

神楽：銀ちゃーん、それより何時まで私達はくだらないギャグをやらなきゃならないネ。眠いアル。

新八：何時シリアスに入るんでしょうね？

風雷：作者の気分じゃないか？

酷いよー。眠いよー。お休みなさい（＾ｏ＾）／

分からないと動けない奴が居るかもしんないけど動ける奴とか色々居る。

土方と阿伏兎は無言で渡された衣装に袖を通していた。

「俺らの服はテーマが【夏】かァ。つーか良いんかい？置いてきて」

白いTシャツ、『何時だって若いよ。ナメんなよ』という文字が刻まれてる服を着た阿伏兎は頭に麦わら帽子を乗せた。

「仕方がねェだろ。俺達が女子更衣室に行くのもアレだろ」

そういう土方は簡素な着物であった。
…意外性の無いつまらない服である。

「考えてみたら団長の所の嬢ちゃんとあのガキンチョだけだよな、女子更衣室使うのは。そんなに見たいモノかァ？」

最後に肩に虫かごを掛け、手には網を持った阿伏兎は頬を掻いた。

「知らねェよ。まぁ風雷っつうガキの方はさらし姿は見た筈だがな」

ハァと煙草を吸う土方。
その時扉がキィと開く。

「アァ？何でテメェラ二人だけしか居ねェんだよ？」

高杉が片目をギロリと輝かせ、仁王立ちしていた。

「仕方がねェだろ。万事屋は女子更衣室に行ったんだからよォ」

「…そうか」

高杉はすぐに背中を見せると立ち去った。

二人はポツンと寂しく残される。

「何だありゃあ？」

「さあなぁ」

そう言って二人はハァと溜息を零した。

「あれっ高杉？」

入口で俯いている風雷の首根っこを掴んで佇んでいる神威は丸い瞳を更に広がらせた。

「そのガキ、最初に男子更衣室で着替えさせりゃあ良いんじゃねェか」

「…男子更衣室に誰か居るのか？」

風雷は頭を上げ、黄色い瞳を閉ざし、開けるを繰り返す。

「二人居たが、もう着替え終わってたから平気だろ」

『では結論を教えて下さい』

「男三人だって」

神威はニコリと笑って上空を見た。

『では貴方方のテーマは…季節どれが良いですか？』

「秋」

風雷が即答する。

「こりゃまた何で？」

神威は風雷から手を離した。

「森に有る植物が多い。美味しく食べれるのが」

風雷はポスンッと軽く床に足を付けた。

『では行ってらっしゃーい』

三人は男子更衣室に向かって行く。

高杉と神威がまず中に入り、二人を外に出す。

二人は「あぁ。分かった」とアッサリ承諾。

…残念なチームメイトが居るからだろうか。

風雷はすぐさま男子更衣室に入り、たったの数分で外に出てくる。

格好は――

「何それ？」

神威の言葉に風雷は短く答えた。

「狼男かな？」

そう、風雷の体は毛むくじゃらなのである。

だが、頭だけは何も付いておらず、代わりに風雷の手には猫耳のようなモノが握られていた。

「まぁ…とりあえず行こっか」

神威と高杉はその後自然な動作で入っていた。

その頃、銀時は――

「女…来ねェかなァ」

ピチピチの水着を着、腹には何故かタオルを巻いて隠していた。

歩いていたら不審者呼ばれる事間違いなしの銀時は扉を見つめ、恍惚な笑みを浮かべ、幸せそうに待つ。

…来る人は…居ますかねぇ？

だが、入口付近には二つのチームが近付いていた。

「着いたっ！」

満足そうに笑って神楽はふぅと汗を拭う。
沖田も汗を拭いつつ「此処は何だァ？」と頭を傾げた。

『お二人の性別は何でしょうか？』

唐突に聞こえた声に二人はううん？と頭を傾げる。

『お二人の性別は何でしょうか！？』

少し強めになった声に沖田は「男とおなべ」と言った。

「ちょっと待つアル！私は女アルよ！」

「まぢですかい！こりゃ初耳でさァ」

わざとらしい演技に神楽は苛っときたらしく蹴りをかます。
沖田は意図も簡単に避ける。
そして、
戦いが始まる。
と、
その時、

「あれっ神楽ちゃん？」

新八が眼鏡を光らせ、笑っていた。
神楽は「新八！」と言いつつ新八の腹に攻撃。
「ぐへっ」と新八は叫ぶと数メートル飛ばされる。

「ちょっとー何してんの！？」

思わず叫ぶ山崎に神楽は「アイツ、リーダーアルか？」と聞く。

「えっ…リーダーって…？」

「成る程。そぉいう事か」

しどろもどろしている山崎に沖田がニヤリといやらしく笑う。

「とりあえずリーダーは誰アルか？」

神楽はニヤリと笑って自らの懐からゴールドボールを取り出した。

「コレが私には必要アルよ。分かるアルな？」

山崎は顔をひきつらせた。

近くにいる近藤は「んっ？」と頭を傾げている。

「ちっ…違います！局長が、りっ、リーダーです！」

山崎の言葉に近藤は頭をもっと傾ける。

「お前、何言――」

てんだ、と言おうとした近藤は新八よりも遠くに飛ばされる。

近藤が上を見た時、そこには――

笑顔が麗しい堕天使が居た。

「ぐぼぶらなさかゆこっ！！！」

近藤は再度、昇天した。

「んっ…このゴリラ、ゴールドボール持ってないネ」

近藤の服を脱がして中をまさぐる神楽はえぇ、と言って眉間に皺を寄せた。

「そうか、仕方がねぇでさァ」

山崎はほっと安心した。
そんな山崎を見た沖田は――

「とりあえず動けねェようにしとくか」

コキコキッと拳を作り、笑った。
山崎、
今までの声援を背にお空に向かいます。

力だけで上手くいくと思う奴も居りゃ策だけで上手くいくと思う奴も居る。（前

洒流奇：そういや、言いたかった事があった。

銀時：何だよ?改まって。

洒流奇：坂田銀時ファンの方すいません。変なの着せて。本当にすいませんでしたｍ（＿＿）ｍ

神楽：んな事言ったらキリ無いネ。どーせお前なんか社会の屑アルから。

風雷：駄目だよ神楽?未来そうなるだろーけどまだ中学生なんだから。言うのが早すぎ。

銀時：だからってありゃあ俺の人権無視だよな。俺に何着せてんだよ。

新八：別にそんなの今更ですよ。銀さんもこんな事で怒ってたらＥｖｅｒｙ　ｄａｙ　自殺未遂ですよ。

神楽：そうネ!カチューシャの様な生易しいモンじゃ無くなるネ!

風雷：ストップ。これ以上言ったらブーイングが来るぞ?

洒流奇：…辛い。

力だけで上手くいくと思う奴も居りゃ策だけで上手くいくと思う奴も居る。

「あっ…新八が持ってたネ！」

神楽は高々にゴールドボールを持ち上げ、達成感の満ちた笑顔を見せる。

「チッ…コイツ騙しやがって」

対して沖田は半殺しになっている山崎を足でつつく。

「まぁ良いアル。馬鹿なりの努力を認めてあげるのも上の仕事ネ」

「そォだな」

珍しく神楽の意見に賛成の沖田。

「あれ…？」

神楽は思わず頭を傾げる。

「アァ？どうしたんだァ？」

「…いや、私の気のせいアル」

神楽はゴールドボールを懐に突っ込み、沖田に向かって言う。

「勝つアルよ！」

「当たり前だ」

そして二人は変装喫茶に入っていった。

神楽と沖田は普通に男子更衣室と女子更衣室に別れる。
沖田は扉を開けた。

「ちわーす」

喋る毛むくじゃらの犬が居た。
扉の真ん前で体育座りをして。
奥には魔法使いのような三角帽子を頭に乗せた神威、その隣にはバンパイアのように口から尖った歯をキラリと輝かせる高杉。
その向かいに座っているのは何故か少年の心をまだ持ってるよ☆みたいな格好の阿伏兎に蒼い簡素な着物を見事着こなしている土方が居た。

「テメェはとうとう自分の性別も分からなくなっちまったんですかィ？」

「違う。断じて違う。ただ女子更衣室には正真正銘の変態…が居ただけ」

「？」

思わず頭を傾げる沖田に風雷は「今出るから」と言い、沖田の横を

通る。
沖田はその背中を見て「まっどうでも構わねェか」と呟き、自分の着替えるべき服に袖を通したのだった。

神楽は普通に、何の疑問を持つ事無く扉を開けた。
そして、動かなくなった。
言わば硬直、というモノだが仕方がないモノであった。

「おぅ、神楽じゃねェか」

そこに変質者が居たのだから。

「どちら様アルか？私には犯罪者の知り合いが沢山居すぎて分からないネ」

神楽はとりあえず中に入り、扉は開けたままにする。

「仕方がねェだろ。体が勝手に動いちまったモンは」

もしシリアスだったら格好良いコメントを呟いた銀時はパツンパツンの水着に触れた。

「…たくぅ、やるんだったらもうちっと刺激の弱いモンにして欲しいモンだ」

「そういう問題じゃないネ。とりあえず出るネ」

神楽は淡々に言葉を吐くと銀時を蹴り飛ばした。

「ぶべっ！」と銀時は呻きながら扉に吸い込まれるように出て行く。
そして神楽は扉をしっかり閉めて着替え始めたのであった。

「新八君…平気？」

山崎は眼鏡をかけ直している新八の背中をさすった。
因みに近藤は地面と同化なう。

「平気ですよ。さっ入りますか」

明るい調子の新八に山崎は「でもボールが…」と俯く。

「大丈夫です。ちゃんと策はうっときましたから」

新八はニコリと笑って近藤の体を揺する。
近藤は「うぅ…こっ此処は…」と呻きながらも体を起こす。

「策…？」

山崎は頭の上にクエスチョンマークを出してみせるが新八は「行きましょう。早く着替えなきゃ」と言って走る。
山崎は「ちょっ」と言いつつその背中を追う。
ただ一人取り残された近藤は這い蹲りながら変装喫茶にのそりのそりと近付く。
一人ニヤリといやらしく笑う新八は期待する。
勝てるかも、と。

始まるよー？コスプレショーの始まり始まり↓↓（前書き）

今回はまさかのあの人登場！！

風雷：あの人…？

神楽：阿野斐砥？

新八：神楽ちゃん。全く分からない漢字変換は止めようね。

銀時：全く、最近のガキはすぐ漢字変換で格好よく見せようとしやがって。まるで作者みてェじゃねェか。

新八：確かにそうですよね。作者さんのペンネームは漢字変換で決まったみたいですし。

神楽：でも何でセルキって読みを選んだネ？

えっ…ただその時ハマってたデュララ☆！！のセ☆ティの奴をもじって…

風雷：このアニメじゃないんだ。

神楽：死ねばいいね。

銀時：社会の屑。

新八：どぶに落ちて下さい。

風雷：バイバーイ。

ぶほぉっ。

始まるよー？コスプレショーの始まり始まり↓↓

『皆さん用意ＯＫ？では、では扉をＬｅｔ' Ｓオープン！』

広い部屋の四つの端にドアが一つずつ有る。
パーティー会場のようなシチュエーションの部屋の扉は四つともいきなり開く。
一つのチームは新八達のチーム。
新八達のテーマは『春』。
そんな新八達の服装は――

「何処も春じゃねエエエェェェ！！」

現在アニメでやられているイボ。
白く塗りつぶされ、眼鏡は油性ペンで真ん中にチョンッと目が書かれているだけ。
因みにパンツ一丁。
何とも華の無い衣装だ。

「華がある訳ねェだろオオォォ！！」

あれっ聞こえた？

「聞こえとるわアアァァァ！」

新八の悲鳴に近い声が響く。

「だよね…あはは」

山崎はげっそりと疲れた顔でうなだれる。
そんな山崎の服は――
あれ…変わってない。
真撰組の服装のままであった。

「僕の服…置いてなかったんだよね…」

あっごめん。
忘れてた。

「ですよねー…」

山崎はただひたすら俯いてぶつぶつ「あんパン」と言い始める。
さて、そんな中茶色に輝く…？ような生物が一体居た。

「新八君、まぁ落ち着こうじゃないか。なっ？」

近藤は――
いわゆる裸と言われる痴漢行為をするおっさんだった。

「何処が春だアアァァァ！！」

新八の悲鳴が響く中、私は疑問を抱いた。

『えっと、私ちゃんと服置いたよ？だって――』

「はっははは！幕府の犬共、自分の醜さを思い知るが良い！」

突如響いた声に近藤は反応する。

「…この声は…」

新八が驚いたように目を見開いた。
部屋の中心にある壇上の上には――

「どうだっ！自分の醜さは分かったか！？フハハハハッ！！」

桂が居た。

「はい、醜いのはテメェだ」

今まで沈黙していた銀時が跳び蹴りをする。
「うげぇっ」と桂は呟きつつ落ちる。

「桂さん！？何で此処に！？」

新八の声に桂はニヤリと口角を上げた。

「少しでも出なくては本編のように忘れられてしまうかもしんないからな」

グッと親指を突き上げた桂に沖田の足が乗る。
因みに、そんな沖田はトナカイの格好。
神楽チームのテーマは『冬』なので。

「神妙にお縄になれ桂。てか本編じゃ俺等全然出ないんでさァ。つまり言いたい事は分かるかァ？」

沖田の顔に出来た影は今の沖田の剣幕さを物語っている。

「分かる訳が無かろう。他人なんだぞ?」

桂はプーンと頬を膨らます。

「せめて此処位活躍させて頂くぜェ。まァとりあえずテメェは此処で消えて頂きやすぜェ」

「まて総悟。半殺しまでだ。後で拷問して今までの鬱憤を出さなきゃなんねェからな」

着物とトナカイの不思議な組み合わせ。

『駄目だよ捕まえちゃ。一様コレ番外編だから』

私の声にピクッと土方が眉を動かす。

ブラックトナカイは天井をジッと見、「チャイナ娘」と神楽を呼ぶ。

因みにそんな神楽の格好はお察し頂けるようにサンタです。

しかも地味にミニスカ。

白い足が一片たりとも霞む事は無いのを証明するように蛍光灯の光を反射していた。

「何アル?」

「作者ぶっ潰して来て下せェ。仕方がねェから酢昆布を後で買ってやるから」

「分かったネ!」

《酢昆布》という単語を聞いた神楽は顔を輝かせた。

『だめ！駄目だよ！もしやったら絶対願い叶えな――』

「だったら力で無理矢理やらせりゃあ良いじゃないですかィ」

ニコリと輝く笑みで黒い腹をさらけ出す沖田。

「総悟。それ最早ゲームじゃねェよ。ただの集団リンチだ」

フォロ方フォーシローの天の言葉に作者感激！

ありがとう！

「じゃあ土方さん、こおゆうのはどうですかィ？先に作者をやったチームが勝ちっつう事で」

そんな感情を抱いていた私に精神的攻撃を続ける沖田。

因みにその時神楽は今タオルで下半身を隠している銀時に捕まっており、ムスーと頬を膨らましている。

沈黙をしている風雷のチームの神威は何気なく置かれていた食べ物を口にしていた。

風雷も状況を確認しつつ食べ物を口に含む。

高杉は置かれてあるワインを口に流していた。

やばいな…と新八は思考を開始する。

もし本当に作者殺しゲームになったら自分達が最も負けに近い。

なんたってチームメンバーは近藤と山崎。

地味でまぁそこそこの戦闘力だが、

他のチームメンバーとはレベルが違う。

新八は頬に汗を滴らせる。

其処で新八は一つ提案をした。

「互いに票を入れ合いませんか？」

「「はっ？」」

周りの人間は皆揃って頭を傾げる。

「えっと…だからこのアトラクションの一つのゲームクリアの方法です」

新八は舌に休息を与えず動かす。

「一チーム票は一票。勿論自分のチームに入れてはいけないって事で入れ合って…一番票を取ったチームがゴールドボールゲットって事で…」

周りの視線を一気に受ける事によって焦りつつも言いたい事を言えた新八はほっと息を吐いた。

「成る程。それだったら楽かもな」

今まで成り行きを見守っていた風雷は唇を上下に動かした。

「つまり頭（ここ）で競うっつう事か」

高杉は自分の頭を指差して笑う。

「おへはどっひでほひひよぉ（俺はどっちでも良いよぉ）」

神威は口に詰めれるだけ詰めて話したので聞いてる人には分からな

いが、とりあえず賛成なのは分かった為、銀時達は考える。

「しゃあーねェ。その案に乗ってやっか」

土方が納得したように頷くと周りの人間も頷いた。

『じゃっ…じゃあ次回までに考えて下さい…』

私は弱気な言葉で今回の話を一話終わらす。

…ごめんなさい。

始まるよー？コスプレショーの始まり始まり↓↓（後書き）

因みに桂の言葉、「少しでも出なくては忘れられてしまうからな」という言葉の意味は今アニメでやってるエリザベスの話です。
ほらっエリザベス達って一時期忘れられてたでしょ？
まぁそんな感じです。
分かりにくい表現申し訳ありません。

交錯した思いは皆の気持ちを楽にさせる。（前書き）

新八：本当に言うんですか？

洒流奇：勿論！

神楽：そんな事したって変わらないと思うネ。

風雷：そうそう。意味の無いことはやらないに尽きるぞ？

銀時：止めときな。テメェの見る奴は居ねェよ。

洒流奇：五月蝿い！では言いたい事は――

私、ブログ始めました！

風雷：言っちゃった。

洒流奇：↑このペンネームと同じなんでもし良かったら探してみて下さい♪

新八：作者の日課なんて興味ある人居ませんから安心して下さい。

：まぁそんなこんなで本文どうぞ。

交錯した思いは皆の気持ちを楽にさせる。

ピリピリした空気を重たくし、銀時達の口を堅く結ばせる。

『投票結果は――』

銀時達は唾を呑み込む。

結果は――

「一様頭脳戦ですから皆さんのゴールドボールを何個持っているか聞いていいですか？」

投票結果を知らされる数分前。

皆丸くなって互いの顔が見えるように座っていた。

新八の言葉に周りは皆頷く。

「因みにお前は何個だよ」

銀時の問いに新八は「零個です」と苦笑いした。

「神楽は何個ある？」

風雷の問いに神楽は「二個ネ」とVサイン。

銀時は「俺は一個」と気だるそうに答えた。

「風雷は？」

「俺？俺は――」

神楽の問いに答えようとした風雷は一瞬考える。
そして笑いながら答えた。

「一個」

「あれっ？数が合わねェぞ」

土方が眉間に皺を寄せるのを見た沖田も唸る。

「つまり…誰かが嘘を吐いてるっつう事ですかィ」

空気が一瞬で凍える。

「とっとりあえず皆出すネ！」

焦りながらも神楽は懐からゴールドボールを取り出す。
風雷と銀時もゴールドボールをそれぞれ一つ取り出して見せる。
新八は有りません、とでも言いたげなように手を広げた。

「なっ私のゴールドボールが…！？」

神楽の声に沖田が「何ですかィ？」と言いつつ覗き込む。

「なっ…！」

沖田も目を見開いた。
そこには――

輝いているボールが一つ、普通の野球ボールが一つ、あった。
つまり、
神楽はゴールドボールを一つしか所持していないという事。

「つー事は二個足りねェって事か」

高杉の言葉に神威がわざとらしく「何処行ったんだろーねー？」と笑う。
阿伏兎はそんな神威を見てハァと溜息を零す。

「…」

硬直する神楽。
沖田は目を吊り上げ、ゴールドボールを神楽に投げる。

「文字通り頭脳戦って事ですかィ。誰が嘘を吐いてるかは分からねェままですがもう構わねェ。俺は俺を信じまさァ」

そう言って神楽を引っ張る沖田。
銀時達はその背中を見送る。

『投票良いですか…？』

突如部屋に響いた私の声に皆もう慣れたのか驚きもせず頷く。
すると、天井からボトッと箱が落ちる。

『他チームの名前を書いてね…』

気の弱そうな地味な声にチームリーダーは無言で箱に投票。
これで決まる。

それぞれの願いが。
そして、
それぞれの思いが。

『投票結果は――』

私は強く言った。

『風雷チーム』

風雷達は苦笑いした。

「えっ…何で…」

驚いたように神楽と新八は口を開ける。

「ごめんね？」

風雷は頭を傾け、苦笑い。

「どうして風雷が勝ったネ！確か風雷と私は票を交換した筈じゃ――」

「はっ？何でお前も？」

神楽の声を遮って呆けた声を出したのは――
銀時だった。

「何で…まさか！」

神楽はバッと振り返って風雷を見る。
風雷はニコッと愉しそうに笑って口を開いた。

「俺は神楽だけにあの手紙を回して無いんだよ。坂田さんにも渡した。そして――新八さんにも」

風雷は袖の下から紙切れを取り出すと見せ付けるように腕を伸ばす。
そこに書かれてあったのは――
《票を交換しないか？そしたら取りあえず安心出来るだろ？因みに、ゴールドボールの残りは新八さんが持っている。》
とあった。

「新八さんに見せたのはこっちね」

風雷はそう言ってもう一枚紙を取り出す。
《坂田さんがゴールドボールを一個持っている。》

「つー事は…」

「そう。俺の三票ゲットで勝ち」

「じゃあ風雷さんは何処に入れたんですか！？」

新八の声に風雷は分からないの？とでも言いたげなように頭を傾げる。

「何処にも入れてない」

「なっ…！」

風雷は満面の笑みを浮かべ、Vサインをする。
だが、そのVサインは恐怖しか感じさせない。
風雷の笑みに新八がガクッと崩れた時、山崎も手から隠し持っていたゴールドボールを落とした。

「ゴールドボール！」

神楽は飢えた狼のようにゴールドボールに手を伸ばす。

「無駄だよ」

何者かは神楽より素早くゴールドボールを手にした。

「こっちに渡せ！馬鹿兄貴！」

神威はゴールドボールを手で弄び、スライディングして取ろうとした為床に伏せている神楽にニコッと笑いかける。
つまり、結果は明白だった。
風雷達の勝ちとなった。

「せっかく…命がけで普通のボールとゴールドボールを変えたのに…」

新八は少し前の事を振り返る。
神楽に取られた時、空いていた手で素早く交換したのだ。
もしバレたら数倍に返されただろうが、神楽は新八の影の薄さに僅かに違和感を感じつつも気付かなかった。

「くそぅ…」

シュンとなる新八を横に風雷は天井に頭を向けた。

「願いは一人一つ？」

『違いまーす。チーム一つです』

私の声に風雷はどうする？と二人に聞く。

「別にどーでも構わない」

「強者とはいずれ戦えるしね？」

二人の答えに風雷は嬉しそうに顔を綻ばせる。

『願いは？』

「俺の願いはーー」

「ねぇ〇〇〇」

私の母、風紀は私の名を呼んで、私と同じ目線になる為にしゃがむ。

「なに？おかあさん」

私は丸い瞳を更に大きくさせ、頭を傾げる。

当時は長かった優雅な髪の毛がふわり、と柔らかい空気を作り出す。

「写真撮りましょう」

「しゃしん？」

私は「ん？」と唸る。
私が知っている世界は狭い。
でも仕方がないのだ。
私達が幸せを感じる為には。
その時、その事に気付けば良かったのに。

「そうよ。ねっ貴方、貴方もこっちに」

手招きして風紀は私の父、神鳴を呼ぶ。
神鳴は近くの木にもたれかかっていた。
母に呼ばれると頷いて私達の所に近づいた。
無口な神鳴は私の姿を見て微笑ましいように微笑する。
私は「おとうさんー♪」と嬉しそうに言って父の腕にしがみつく。

「お前、また“外”に出たのか？」

神鳴の問いに風紀は小さく頷いて、微笑む。

「私達が居た事を写真に収めましょっ」

母はそう言うと腰にあるポーチから四角い物を取り出した。

「なに？このしかくいの？」

私は興味深そうに満遍なく見る。
風紀はクスリと小さく笑って「カメラって言うのよ」と私の頭に新

たな知識を入れる。

「かめら？」

私は頑張って復唱すると神鳴は頭を撫で、「良く出来た」と短く言う。

私はそれが嬉しくって「かめら！かめら！」とたどたどしく何度も言う。

風紀は何時の間にか近くの切り株にカメラを乗せ、「行くわよぉ」と元気良く言う。

チッチッチッと一秒一秒音が鳴りだすのを見て私は「ほわぁ」と呟く。

母はそのうちに横に来て、父も横に並ぶ。

「笑って」

風紀の言葉に私は元気良く頷き、手を広げた。

そしてシャッター音が響いた。

「写真を撮りたい」

『しゃっ写真？』

驚いたように大きく響く声に風雷は頷いて見せる。

「皆で笑いあってるこの瞬間を」

同じチームの神威と高杉も「はっ？」とでも言いそうな顔を作り出

す。

『そんなん――』

「んじゃっ撮るか」

声を遮った銀時は体を解す為か腕を伸ばす。

「良いですね。面白そうです」

真っ白な生物――新八も満足そうに笑う。

「撮るんだろ？ほら、作者がシャッター係だ」

しどろもどろする私に土方が鋭い指摘をする。

「ちぇっ仕方がねェ。じゃっおじさんは後ろで虫取りしてる所を撮ってもらいますかねェ」

「阿伏兎、痛いから止めたら？」

「年を考えな」

阿伏兎の言葉に神威と高杉は次々と言葉で攻める。

阿伏兎は「すっとこ…どっこい」と本気で落ち込みながら呟いた。

『わっ分かりました！集まって！』

私の声に皆上手い具合に並ぶ。

『はいっ、ちーず☆』

カシャッと心地良い音が風雷の耳に届いた。

交錯した思いは皆の気持ちを楽にさせる。（後書き）

終わりました！
ちょっと過去入れた♪
ヤッホー！
次回は第二章、『少女の過去と鎖』って感じです♪
もし良かったら見て下さい！

昔の癖で気付く事も沢山ある。（前書き）

今回は前置き的な感じなので短いです。
さて、実際書いてる時間は十時３７分なんでお休みなさい…（一・一）ｚｚＺ

昔の癖で気付く事も沢山ある。

「阿伏兎ー、何処ー？」

「何だい、いきなり」

此処は春雨戦艦の中。
風雷達と戦って数日後である。

「阿伏兎何してたの？お前が居なかったから俺の仕事が増えたんだよ？」

ひょこっと阿伏兎の横から頭を出す神威。
ぴょこんっと可愛らしくアホ毛も揺れる。

「ただでさえ仕事しねェ上司が何言うんだい。すっとこどっこい」

変わらない笑みに阿伏兎はハァと溜息を吐いた。

「でもあの時から数日間ずっと資料室に居るからねェ。てか何か気になる事あった？」

阿伏兎が握っているファイルを覗き込む神威。

「…まァそれは後で話してやりやすから。それより団長、他の団員の暴走はどうなったんでィ？」

阿伏兎はパタンとファイルを閉じると神威に向かい合う。

「あぁうん、あれさァ、止まったんだよ」

「止まったって何だィ。まさか団員の暴走がいきなり止まって被害零とでも言うんかい？…あのガキがまさか解毒剤を何時の間にかまいた可能性が有るとでも？」

大量に並べられてある本棚の間だにファイルを突っ込んだ阿伏兎に神威は瞬きをする。

「…阿伏兎凄いねェ。一瞬で分かって。阿伏兎って超能力使えたっけ？」

心底驚いたように蒼い瞳を大きくさせる神威に阿伏兎は「あぁ」と短く答える。

「…んで、阿伏兎が調べたかった事は何？」

神威はニコリと更に口角を上げ、目を細める。
まるで「逃さないよ」とでも言いたげな顔だ。
阿伏兎は「すっとこどっこい」と小さく呟いて答えた。

「まァはっきり言っちまえば調べたかった事は此処に無かったんだがよ、なァ団長」

「何？」

「死体屋って何処で殺されたんだ？」

阿伏兎の問いに神威は「知らないよ」と素っ気なく返す。

「んで、それがどうしたんだよ？」

「団長、団長は昔話が好きか？」

阿伏兎は遠くを見るように目を細める。
誰とも合わない視線は虚空に消える。
神威はそんな阿伏兎の横顔を見る。

「別に普通だよ」

「なら聞いてくれるか？」

阿伏兎の言葉に神威はニコリと笑った。
阿伏兎はその笑顔を見て頷くと語り始める。

「六年前位の話だ」

神威はその話にゆっくりと耳を傾けた。

初めてのお仕事前とかって何かドキドキワクワク。（前書き）

洒流奇：今回は長めです！そして阿伏兎の過去編では有りません！申し訳有りません。

銀時：お前って毎日謝ってるよな。

神楽：残念の象徴だからアルよ。

新八：同情します。

風雷：応援する。

洒流奇：うっ五月蝿ーい！！そんな事より読者の方々に質問！絵とか画像ってどうやって載せるか分かりますか！？もし良かったら教えて下さい！！

銀時：テメェの汚い絵を見てェ奴なんか居るか。

洒流奇：風雷だもーん。

風雷：…。

神楽：風雷、ドンマイネ。

初めてのお仕事前とかって何かドキドキワクワク。

「ただいま！」

風雷はニコリと笑って万事屋の玄関に居た。
隣にはげっそりとさた銀時が居た。

「おかえりネ！うわぁ風雷、それが樹海に置いてた服アルか？何にも変わってないネ！」

神楽はドタドタッと大きな足音を廊下に響かせ、玄関で笑顔という名の華を咲かせる。

「神楽ちゃん、失礼でしょ？ちゃんと取りに行ったんだから」

後から新八もやってくる。
新八は神楽に呆れつつも風雷に「お帰りなさい」と言う。

「まァあんなボロい服を着るのもな。真撰組に入る前に服位は用意しとかないと」

そお言う風雷の手には同じような何時もの黒いチャイナ服が何枚も握られている。

「って風雷着替えそれだけアルか！？下着とか無いアルか！？」

神楽は風雷の黒いチャイナ服を数えつつ、頭を傾げた。

「下着？別に大丈夫じゃないか。上なら包帯捲けば良いし」

「そーゆう問題じゃないネ！ちょっと買い物行くアルよ！新八、お金貸してネ！」

「うーん…そーゆう事なら仕方がないね…。はい、ちゃんと返してね」

新八の胸元を握り、お願い！と切羽詰まったように頼む神楽。
新八は悩みつつも懐から財布を取り出して五千円渡す。

「大丈夫ネ！風雷の未来の稼ぎで簡単に返せるネ！」

「ってか神楽、別に平気――」

「行くアルよ！」

神楽はしっかり風雷の腕を握り、足を一歩踏み出す。
風雷は玄関に服を投げ、傘を握る。
風のように出掛けて行った二人の背中を新八は微笑ましそうに笑う。

「…てか銀さんどうしたんですか？」

そこで新八は顔を無表情、いや、呆れたような顔で端っこにいた銀時を見た。

「いや…はは…俺って原作で主人公だよね？」

「はい、そうですね。それがどうしたんですか？」

「はは…は…」

銀時は靴を脱いでゆっくりゆっくりと歩く。
顔をひきつらせ、腰を曲げた格好の銀時に新八は頭を傾げる。

「銀さん？」

ドサッとソファに尻を沈めた銀時の向かいに新八も座る。

「はは…は」

「銀さん？」

再度名を呼ぶが反応しない銀時に新八はハァと溜息を零して、「苺ミルク要りますか？」と小さな心遣いを見せる。
銀時はコクンと小さく頷いて見せる。
銀時は瞼を閉じ、数時間前の事を思い出す。

「風雷…何時から税金泥棒達と一緒に仕事するアルか？」

「明日から」

あれから家に帰った風雷に神楽は不安げな顔で風雷の服の裾を掴む。

「まァでもとりあえず身支度したらすぐに行こうかなって」

そう言うと風雷は手にある傘を見て「本当はもう行けるけど…」と

苦笑した。

「あれ…風雷着替えは？」

ふと疑問に思った事を口にした神楽に風雷は普通に答える。

「んっ？無いよ？」

「えっ…」

思わず絶句する神楽。

風雷は何かおかしいか？と頭を傾げる。

「まァ平気だ――」

「買いに行くネ！今すぐ行くネ！」

神楽はボサボサの髪をすぐさま整え、グッと親指を突き立てる。

遠目で見ている銀時は何してんだか、と溜息を零す。

「だっ大丈夫！だったら服取りに行くから！」

「えっ…風雷着替え持ってたアルか？」

現在、ボロボロ、所々紅く染まってる風雷の服を神楽はジトッと舐め回すように見る。

風雷はコクンと頷く。

「当たり前だろ…。俺が住んでた樹海に置いてあるんだよ。つーかじゃなきゃ毎日同じ服じゃねェか」

苦笑する風雷に神楽は興奮したように頬を紅く染める。

「じゃあ私も付いて――」

「俺が行くよ」

風雷がどんな所に今まで居たのか、樹海って海なのかな？など様々な疑問を解消したい神楽は少し離れた所に居る銀時を睨む。

「私が行くネ」

短く自分の意思を伝える神楽に銀時はわざとらしく溜息を吐く。

「バッカ野郎。コイツが家出しようとした時ぐーすか寝てた奴にコイツを頼めるか。もしまたコイツが逃げた時止められるのか？」

風雷は“家出”の言葉に僅かに嬉しく思う反面、自分がした事に少し悲しくなる。

神楽も思わず口を閉ざす。

「分かったか？よし、行くぞ」

「神楽、留守番宜しく」

風雷は神楽の頭を撫で、背を向ける。

「行ってらっしゃいネ！」

神楽はその背中に手を振る。

銀時と風雷は無言で歩いていた。
ボロボロで血が染みた服を纏う風雷は周りから奇怪な目で見られる。

「…大丈夫か？」

思わず聞く銀時に傘で顔を隠している風雷はニコリと優しく笑う。

「平気に決まってるだろ？」

「あっ銀さん、風雷さん」

その時、目の前に新八が現れる。

「何処に行くんですか？」

風雷はその質問に「実はカクカクシカジカで…」と手早く説明。

「そうですか。じゃっ僕も家で待ってます」

笑顔で大きく手を振る新八。
風雷はポツリと「家族…」と幸せそうに呟く。
だがその瞳はまるで消えてしまったモノを見るようで。

「あぁ、待っててくれ」

風雷はすぐさま笑顔で返し、銀時に「早く帰らなきゃな」と言って走り出す。

「わァーたよ」
銀時は微笑してその背中を追う。
だが樹海までの道のりは長かった。
しかもずっと走り続けるという地獄。
銀時は風雷に「ちょっ…ストップ」と制止を促す。
「んっ？あっ坂田さん平気？」
そんな風雷は後ろを振り返ると少し荒い息を吐き、フゥと一息。
銀時は腰を曲げ少し屈み、太股に手を置いて息を整える。
そろそろ冬の風が街の中を駆け巡り、人々の手足を少しずつ冷やしていく時期だが、銀時の顔には汗が流れている。
「うーん、後少し…１０分ダッシュだね」
「オメェ…ダッシュって…どれ位だよ…」
ぐったりとした銀時は途切れ途切れの言葉を繋げて聞く。
「５０メートル走をまぢダッシュした時の感じ」
風雷は既に息を整えたのか落ち着いた調子で言う。
銀時は心の中で自分を蔑む。
…何でガキに体力負けてんだよ。
しかも女だし、と。
そんな心中を知らない風雷はニコリと爽やかな笑みを銀時に見せつ

ける。
それがまた銀時を惨めにさせる事に気付かず。

「ん…約５４メートル先に小さな川が流れてる。確か飲めるよ」

「とりあえず其処に…行くか」

銀時は重い足を引きずって風雷に付いて行く。
風雷の言った通り、其処には川が流れていた。
稚魚が互いを突っつき合う姿が水を透けて見える位澄んだ川の水を銀時は口に運んでから顔にかけた。

「あー疲れた」

銀時は顔の水を拭いつつ呟く。

「そうか。んじゃ、ちょっと近道しよっか」

「近道あるのかよ!?」

「うん、其処」

ガバッと顔を上げた銀時に風雷は自分の右手を親指で指す。
其処には――
見事な断崖絶壁が。
断崖絶壁という言葉が良く似合う土はホロリホロリと地に落ちる。
その土壁には生命力が漲った木々が己の体を少し曲げつつ存在している。

「…止めと――」

「じゃっ行くぞォ」
風雷はニコリと笑うと歩み始めた。
銀時を背中に乗せて。
「！？」
思わず息を呑む銀時に風雷は相も変わらず普通のペースで木々の上に登って上に、上にと向かって行く。
「下ろせ！」と叫びたいが、下ろしてもらったらもらったで地面まで落ちる。
銀時は呟いた。
「助けて」と。
そんな無邪気な記憶は銀時の心を見事に打ち砕く。
その後は簡単に風雷の以前住んでた場所――木を銀時はただ呆然とした様子で見ていただけだった。
正にアニメで見るような程雄大な木。
普通に見ていたらただただ圧倒されるような程に自分の存在を見せつける木に風雷は近付く。
その木の根の部分は妙に窪んでおり、子供なら4、5人雑魚寝出来る位のスペースがあった。
風雷は中に入り、「ちょっと着替えるから其処に居て」と魂が抜けてしまった銀時に言う。
今は下心をさらけ出す余裕が無い銀時はコクンと頷いた。
風雷はクスリと小さく笑いながら着替えを始める。
銀時はボケーッと変わらぬ体制で木を見る。

数分後、「待たせたね」と言って風雷が出て来た。
風雷が身に付けている服は現在握られているボロボロな服と全く同じ。
つまり、ただ服が綺麗になっただけであった。

「中見てみる？」

風雷はさっきまで居た木の下を指す。

「…良い」

銀時は短く答え、「服とか必要なモンちゃんと持ったか？」と聞く。

「あっ、葉っぱ忘れてた。もう一回行ってくる」

風雷は忙しない動きで中に入る。
中からゴソゴソッと何かを漁る物音がする。
それを意識する程余裕の無い銀時はプケーと空を眺め始めたが。

「じゃっ帰るか」

風雷は手に数枚の服を握って気さくな笑みを浮かべながら来る。

「そうだ…な」

銀時、まだまだ元には戻れない。
そして、銀時はまた風雷に担がれ、江戸に戻った。

「銀さーん？」

新八の声に我に帰った銀時は「サンキュー…」と言って新八が持ってきた苺ミルクを口に運ぶ。

「さて…また僕達は待ちますか」

新八は満足そうに笑って言った。

「家族を」

その言葉に銀時はフッと笑みを零し、呟いた。

「そォーだな」

二人は神楽と風雷が去った玄関を見て、また笑った。

初めてのお仕事前とかって何かドキドキワクワク。（後書き）

長くてスイマセンでした！！
次回も神楽と風雷の買い物というほのぼの…？で行きます！
もし良かったら見て下さい！！

買い物って実は戦争である。これ、主婦の辞書。（前書き）

洒流奇：蘿蔔さん、以前の質問答えて頂き、誠にありがとうございました！！

銀時：結局作者は携帯完璧に使いこなせないで無理になっちまったがな。いや、ある意味風雷のキャラ崩壊を阻止する為にゃ良かったな。

新八：そうですね。別に絵が本当に上手い訳じゃ無いですし。

神楽：むしろ汚くて風雷が可哀想な感じネ。

風雷：…（ほっ

洒流奇：ちょっと皆酷いよ！作者まぢ頑張ったんだよ！？

銀時：試験勉強から逃れる為にな。

新八：早く英語やった方が良いんじゃないですか？またお母さんに怒られますよ？

神楽：今洗濯で居ないからってコソコソしすぎネ。もう諦めろヨ。

洒流奇：無理だよ！中3だから確実に高校に行けるようにしなきゃ母親に殺される！

風雷：だったらやれよ（ボソッ

洒流奇：恐いよオオオォォ！！

買い物って実は戦争である。これ、主婦の辞書。

「風雷、何買いたいネ！」

キラッと目を輝かせる神楽に風雷はハァと小さく溜息を零しながら伝える。

「…とりあえずパジャマとか？」

「じゃっイチヨーカードに行くネ！ジャージとか確か安かったアル！」

神楽は風雷の腕をがっちり掴んで走る。

「うおっ…！？」と風雷はあたふたしつつ神楽の後に付く。

日差しは強く、地上を光り輝かせる。

神楽の傘は大きいが、今は二人入っているので少し狭い。

だが、二人は嬉しそうにその小さなスペースで幸せに浸る。

二人の合わない足音は長い間続く。

目の前には有り得ない程大きな建物が有った。

風雷の足は日差しによって熱くなったコンクリートの床に置かれている。

「…って風雷靴履いてなかったアルか！？」

今更ながら気付いた神楽は目を見開いて指で指す。

「うん、だって面倒だから。てか持ってないし」

「でも…その…」

神楽は少し言いにくそうに目を泳がせる。

風雷は神楽の心中を悟って答える。

「あのお金は全部孤児の子に渡しちゃったんだよ。まァ包帯のお金とか食費とか抜いて」

あのお金――半殺し屋の時のお金だ。

神楽は「孤児…アルか？」と何とも言いにくいように眉間に皺を寄せて聞く。

「うん…。少しでも楽になって欲しいから」

風雷は優しく笑い、遠くを見る。

そして小さく呟く。

「俺みたいにならないで欲しいから」

「風雷…？」

神楽は目をパチクリさせる。

その顔は少しひきつり、苦しそうである。

「さっ買い物行くか」

風雷は変わらぬ笑みで神楽の緊張を解き、神楽の手を引く。
神楽は傘を閉じて店内に急いで入った。

「とっ…とりあえず靴下と靴を先に買うべきネ」

さっきの緊張からか少しだけしどろもどろしている神楽に風雷は「了解」と笑って返す。
まず二人は靴下を千円で四足買えるよ！という靴下コーナーに行って購入。
そして今二人は靴コーナーに居る。

「うーん…この靴とか使いやすそうネ！」

「でも高いな…」

靴コーナーに居る二人は色々な靴を見比べる。
新しい靴独特のツンとした匂いを吸いながら神楽達はきゃっきゃ笑いあう。

「それなら…ちょっと定員！」

神楽が近くに居る定員に手を振る。
定員は静かに頷いて二人の元に近付く。

「コレを千円にするヨロシ！」

「…はぁ？」

神楽の思わぬ発言に定員は思わず口をポカンと開ける。

「神楽…」

風雷は定員に少し同情する。
因みに神楽が指した靴は四千円弱位のお値段。
とてもだが最早割引というレベルではない。

「お客様…申し訳有りませんが無理です」

定員は呆れたように一様丁寧に飾った言葉を出す。

「別に良い――」

「神楽、ちょっとストップ」

神楽の肩に風雷の手が乗る。
神楽は「風雷？」と頭を傾げる。

「店長さん呼んでもらって良いかな？」

「…はぁ、分かりました」

風雷のお願いに定員は付き合いきれないような顔で答え、そそくさと従業員用のドアを開ける。
やがて、四十代後半位のオジサンがさっきの定員と一緒に出てくる。
店長らしき自分は「どうかなさいましたかお客様？」と風雷達を少し見下すように見る。
風雷は店長の首から垂れ下がっている名前を確認すると、ニコリと愉快そうに笑った。

「最近どうですか奥さんと？」

「はっ？」

風雷の質問に店長は閉まっていた口を簡単に開いた。

「ですから――」

風雷は店長に近付き、耳元でコショコショと何かを伝える。
何を言ってるか分からない定員と神楽は頭をただただ傾げる。
風雷の口が忙しなく動いているのに対し、全然動かない店長。
だがその顔は見る見るうちに真っ青になっていく。

「俺、コレ欲しいな」

店長の耳元から離れた風雷は自分が欲している靴に指を置く。

「ですからお――」

客様、と言おうとした定員は目を開いた。

「どうぞどうぞ！お使いになって下さい！」

店長が意図も簡単に頭を下げ、逆に風雷に貰うように頼み込む姿に。
実はこの店長は謝らない、頑固なオジサンとアルバイトの定員の中で愚痴られている店長。
そんな店長が頭を下げている様子に定員は唖然。

「とりあえずすぐに履きたいから、ラベル取ってくれるか？」

「勿論ですとも！」

店長はすぐさまポケットから鋏を取り出し、ラベルを取り出し風雷の目の前に置く。

風雷はさっき購入した靴下を履いて、その靴を足に付ける。

「うん、じゃっ行こっか」

「あっ…うん…」

思わず呆けている神楽の腕を引っ張り風雷は服のコーナーに向かう。

「ありがとうございました！」

何もお礼するような事をしていない風雷に対して最後まで頭を下げる店長だった。

「おっ…」

風雷はふと足を止める。

「風雷どうしたアルか？」

さっきの事を完璧に忘れる事を決意した神楽は風雷の目線の先を見る。

其処は眼鏡コーナーだった。

「風雷目悪いアルか？」

「ううん…でも欲しいし…千円か…買う」

「ええっ！！」

決断したように風雷はスタスタ眼鏡コーナーに新しい靴を履いた足を向ける。

神楽は貴重な千円を此処で使う事に驚きを隠せない。

てか、もう驚きすぎて唖然とする神楽。

「…この伊達眼鏡…これならバレない」

風雷は地味な黒い眼鏡を手にするとそのままレジへ。

残り、三千円。

神楽は風雷の行動をしっかり監視しつつ目の前にある服にも目をやる。

「風雷、コレなんか可愛いネ！」

年頃の女の子が着そうな可愛らしいパジャマ。

それに対して風雷は――

「あっコレシンプル」

黒いジャージをセレクト。

横に青い線が入っているシンプルな服を手に、満足そうに頷いた。

「上下セットで二千五百円…よし」

風雷は神楽が自分を止める前に素早くレジへ。
しっかりとお買い上げした風雷は少しほくほく顔。

「風雷…渋いネ」

神楽はクスリと笑った。
残り千五百円。

次は下着コーナーに居る年頃の娘さん達。

「風雷、このブラとかきっと似合うアルよ！」

レースのふりふりを風雷に見せつける神楽に風雷はニコリと笑って、

「ブラは要らない。パンツだけ欲しい」

無情な言葉を与える。

「あっ千円でパンツ四枚…どれにしよっかな」

何気に主婦のような風雷はまたしてもシンプルな下着を選ぶ。

「風雷、コレは一枚入れたらどうアルか！？」

めげない神楽、スケスケパンツを風雷に見せる。

「コレ、パンツの意味無い」

風雷の的確な答え、神楽、ノックアウト。
そんな神楽を置いて風雷はまたレジへ。

「お買い上げありがとうございました。あっお客様、お客様は計四千五百円お買い上げなされたのでくじが出来ます。どうぞ」

風雷は差し出された箱に手を突っ込み、一枚の紙を出す。
定員はそれを受け取ると開く。

「はい、お客様は三等です。右手の方向に見える商品からお選び下さい」

「ありがとう」と風雷は言うと神楽に近付き、「選んで良いよ」とまるで母親のように言う。
神楽は一瞬で顔を輝かせる。
そしてすぐに商品コーナーに向かい、無邪気に「どれにしよっかなァ…あっコレも美味しそうネ！」と呟きつつ選ぶ。
風雷はそんな神楽の背中を微笑ましそうに見ていた。

その後、五百円で買えるだけかった風雷達は家という名の万事屋に向かう。

「風雷、楽しかったアルな！」

神楽は三等で当たった八つ橋を胸元で大切そうに握る。
実はコレ、意外と凄い事なのだが神楽は気付いていない。

というか、三等という時点で凄すぎなのだが、神楽は食べ物を選べれば良かったようで、涎を垂らしそうになっている。
風雷はそんな神楽を見て優しく笑って、「そうだな」と返す。

「風雷、明日から頑張ってアルな！」

「おぅ」

二人は拳を打ち合って幸せそうに家に帰った。

その日の夕食は風雷の腕によって出来上がった豆腐ハンバーグであった。
この時、万事屋では風雷を神と崇めつつ口に八つ橋を運んだそうな。

職場案内とかって意外と緊張する。（前書き）

さて試験期間中の為ありません。
すいません。

職場案内とかって意外と緊張する。

「すいませーん。入っても良いですかー？」

次の日、風雷は伊達眼鏡を掛け、傘を差して何時も通りの黒いチャイナを纏って真撰組の屯所前に居た。
片手には服などが詰まった紙袋を手にしている。
少しボーイッシュな声と顔立ち、そして格好からして普通に男の子に見える風雷は少し頭を出す。

「あっ新入りさんですか？」

するとトタトタッと黒い格好の地味そうな男がラケットを手に走ってくる。

「えっ…あっはい」

心の隅でちょっと地味だなぁ…と思いつつ口には出さない風雷。

「えっと、沖田さんや土方さん、近藤さんからどう聞いてますか？…俺の事」

興味本位で聞く風雷に目の前の男は「うーん」と唸る。

「別に『新入り来るからちゃんと相手しろよ』って副長に言われた位だしな…あっ局長には『中々見込みのある奴だ』って聞いたよ」

「…沖田さんは？」

少し不安げに聞く風雷に男は「あぁ…」と辛そうに答えた。

「いじりがいの有る奴…だったね」

風雷はこの言葉に背筋を凍らせたのは言うまでもない。

「だっ大丈夫だよ…多分」

うなだれた風雷に男は頼りない言葉をかける。

「…とりあえず宜しくお願いします」

頭を一度上げすぐに下げる風雷。

「あっ頭を上げて！えっと…」

「風雷。貴方は…？」

風雷は上げた頭を傾げる。

「山崎退。宜しくね」

ラケットを握ってない手を差し出す。

風雷はニコリと笑ってその手を握った。

その後、男――山崎の案内に風雷は興味深そうに頷いた。

「えっと、此処が御手洗いだよ。とりあえず全部案内したかな？」

山崎の問いに風雷は「あぁ」と返した。

「じゃっ部屋に――」

行こうか、と山崎が言おうとした時、煙草の煙たい香りが先から匂う。

「あっ山崎じゃねェか」

其処には鬼の副長こと、土方十四郎が居た。

「副長！今案内してて――」

「山崎」

「なっ何ですか？」

「お前が今持ってんのは何だ？」

「…へっ？」

山崎は自分の手に有る物を見た。

バドミントンラケットが輝く。

「えっ…あの…副長？」

しどろもどろする山崎。

風雷はありゃりゃと山崎に少し同情する。

「テメェはまたミントンしてたのかアアアァァァ！！」

「ギャアアァァァ！！」

山崎の甲高い悲鳴が響いた。
風雷は山崎をひっぱたいてる土方を「まァまァ」と宥める。

「五月蝿ェ！コイツは痛い目合わなきゃ分かんねェんだよ！」

「仕方が無いんだよ。案内する前に俺が教えてくれる様に頼んだんだよ」

「…はっ？」

土方の山崎の髪を引っ張っている手が止まる。
山崎は涙目になりながらも疑問に思う。
…そんな事頼まれたっけ？、と。

「俺色々知ってるじゃん？それで気紛れに山崎さんにバドミントンの魅力を聞いて、ついでに少しやり方教えてもらってだ。んで、疲れたし、とりあえず案内してもらって今にいたる感じ。多分、その時置き忘れて今持ってんだよ。ねっ山崎さん？」

風雷は山崎に同意を求めるように見つめる。

「…本当か山崎」

土方はとりあえず山崎から離れ、ギロリと鋭い瞳で見る。

「はっ…はい！」

自分の命の為に簡単に嘘を吐く山崎。
土方は山崎と風雷を何回も見てから、「フンッ…」と少し納得のいかないように煙草を吸う。

「山崎、テメェは見回り行ってこい」

「へっ…？」

生命の危機から逃れて安心した山崎は土方の言葉に頭を傾げる。

「良いから行ってこい！」

ドンッと山崎の背中を蹴る土方。
山崎は「はっはい！」と返しつつ背中をさすってその場を離れた。

「…駄目だよ。部下を乱暴に扱っちゃさァ」

「五月蝿ェ。上司に簡単に嘘を吐く奴が言うか」

土方は唇から煙草を離して風雷を見る。

「そうだねェ」

コロコロ笑う風雷。
土方は呆れたように溜息を吐くと「来い」と短く伝える。
「はい」と風雷は言い、土方の背中を追う。

「…てかお前眼鏡付けてたか？」

足を動かす土方は少し振り返り、目を細める。

「いや、伊達眼鏡だよ？」

風雷は「それがどうかしたか？」と付け加える。

「…まァそれは良い。んで、お前に聞きたい事があんだよ」

「何が？」

「隊員にテメェを女つっても言って良いのか？」

風雷はそんな事か、と肩を竦める。

「構わない。俺はもう貴方の部下なんだからさ」

「…そうか」

土方は風雷の笑みを眺めて前を向いた。

「だったら此処がお前の部屋だ」

目の前にある障子を開け、風雷に入るように目で指示する。

「ありがとうございます」

風雷は頭を下げてから中に入る。

「其処に置いてあんのは着替えだ。お前の今日の仕事は夜だが構わ

ねェよな？」

土方は新しい自分の部屋に興奮で染めている頬を見せている風雷に聞く。

「勿論だよ。むしろ夜兎には夜の方が有り難い」

「そうか」

「じゃあな」と言い、去ろうとする土方。

「ちょっと待って」

そんな土方を止める風雷。

「何だァ？仕事の事か？」

土方は振り返る。

其処には――

足を綺麗に折りたたみ土方に向かい合っている風雷が居た。

「宜しくお願いします！！」

風雷はそして頭を下げる。

土下座をする風雷に土方はフッと笑う。

「昼寝とかすんなよ」

そう言うと土方はピシャリと障子を閉じた。

風雷は閉じた障子を見つめる。

今日から、新しい生活の始まりの風雷は仕事風景を思い浮かべつつ、新しい服に袖を通した。

初仕事ってもしかしたら上司が何かしらの配慮してるかも。

太陽が沈み、そろそろ月が夜を支配するような時間帯。
風雷は神楽と一緒に買いに行ったモノをちゃんと振り分けていた。
何時の間にか入っている服などが数枚ある事に気付き、クスリと笑う。
『糖分』と書かれた簡素なTシャツが二枚。
数枚のタオル。
頑張って洗ったが消えなかったようで端っこに薄く『新八』と書かれてあった。
そして、『ファイト風雷!』とつたない字で書かれてある酢昆布。
これ食べ物じゃん、と心の中でツッコミ小さく笑う。

「入りますぜェ」

いきなり聞こえた声に風雷は目をパチクリさせ、その方向を見る。

「何笑ってるんですかィ。変態ですかィ?」

其処には沖田が居た。

「何女の部屋にノックもしないで入ってるんだよ。一様体は女だぞ?」

「つまり中身は男何だろーが。今日はお前と組めって土方が五月蝿いんでさァ」

立つように手をヒラヒラさせる沖田に風雷は「分かったよ」と笑っ

て近くにある傘を手に取った。

「んでもお前、何で眼鏡なんかしてるんでェ？」

「チョイ変装」

夜の為か大人しか歩いていない道をゆったりと歩く二人。

「また何で変装なんかしてるんでェ？」

沖田は興味なさげな風に欠伸を漏らしながら聞く。

「色々あんだよ」

風雷は差している傘をくるりと回す。

「まァどうでも構わねェが」

右側を歩いている沖田はまた欠伸を零した。

「仕事中なんだぞ？何で欠伸してんだよ」

至極真面目キャラの風雷は呆れたように沖田を見る。

「仕方が無いじゃねェですかィ。こっちは昼からやってるんですぜェ？そりゃ疲れまさァ」

そう言い沖田は「休みてェ」と呟く。

「昼…から？」

風雷はぽかんと口を開けた。

「そォでさァ。あの土方コノヤローに言われたんですぜェ？今日は午前だけだったんですぜェ？頭に向かってバズーカ撃ってやろーかと思いましたぜェ」

「…そうか」と風雷は呟いた。

意外にあの人優しいんだなァと思いつつ空を眺める。

あの時よりも少ない星達はキラリキラリとダイヤモンドよりも美しい輝きを放つ。

そして風雷は目を伏せた。

忘れたい、だけど忘れてはならないあの記憶は風雷の心を僅かに陰らせた。

「悪かったな」

そんな言葉しか出ない風雷。

だが、すぐに笑い、「でも凄いな？」と明るい声を出した。

「アイツの頭がな」

風雷はその言葉にクスリと笑う。

「あっ、コンビニ。確か俺ポイント溜まってたんだ。ちょっと買い物してきて良いか？」

風雷は近くにあるコンビニを指差す。

「さっき注意したのは何奴ですかィ？」

沖田は呆れたように溜息を零した。

「悪い悪い、大丈夫、ちょっとだけだから」

風雷はそう言って手を摺り合わせ、「頼む」と呟く。

「じゃあ俺も行きまさァ」

「結局アンタも行くんかい！」

「何か文句があるんですかィ？」

「うっ…」

二の次を言えない風雷に沖田はニヤリと愉しそうに笑い、風雷の先を歩く。

「ちょっ…待ってくれよ！」

風雷はその背中を追う。

二人は知らない。

この後何があるかを。

休憩して後悔するのは何時も後。（前書き）

試験明日でラスト！
頑張ってきます（〇☆―）＞

休憩して後悔するのは何時も後。

風雷は傘を閉じて足を出す。
ピロロロンと自動ドアに入った時の音に風雷は面白そうに笑った。

「オメェは何買うんでさァ？」

「スルメだよ」

わざわざコンビニ寄ってスルメかよ…と沖田は呆れる。
そしてポイントが溜まってるっつう事は今まで何回コンビニ行ってんだよ、と頭で考える。
風雷は沖田の心中を理解する事無く、当たり前のように手を伸ばした時、

「キャアアァァァ！！」

女の甲高い悲鳴と二発の鉄砲の音がコンビニから放たれた。

「早く金を出せ！！」

男の低く、焦った声がレジの方から聞こえる。
風雷は興味本位で其方に向かう。
沖田はやれやれ仕事か、と面倒そうに溜息を零した。

「おっ凄い、明るい牢獄の生活の始まりの方はひー、ふー、みー、

と。三人か。まぁもしかしたらもう――」

明るい声の風雷の頭にカチャリと横から何か冷たいモノが当たる。

「動くんじゃねェぞ。…幕府の犬共」

風雷は「はいはい」と適当に答え、周りを見渡す。

女が一人入口付近で気絶している。

後はレジの定員が一人。

そして強盗らしき男は覆面をし、入口に一人、レジの所に一人、横に一人。

「ねェ大葉智暉さん」

隣にいる男がビクッと揺れる。

「とりあえず一般人と俺らは一つの角に集めた方が良くないか?其処の気絶している人が起きたらすぐ逃げようとするだろ?そしたら迷惑でしょ?大葉智暉さん?」

再度誰のか分からない名前を言う風雷。

男は「テメェ!何で!?」と叫ぶが風雷は動じない。

それどころか、

「聞こえてるの?」

男に目で命令をする。

男はカタカタ揺れる指に一度力を入れようかと考える。

が、

「じゃあ皆さん後ろに集まってー」

風雷の言葉がコンビニに響く。
風雷は最早男に興味が無いようにアッサリ背中を向ける。
沖田は何をする気だ…？と頭で考えるが言うとおりに後ろに向かう。
風雷は入口付近の女性の所まで行くと女を担いで後ろに向かう。
定員のみがレジに留まったままだった。風雷は片手にある傘を沖田にさり気なく渡す。

「こりゃあ…」

沖田の声に風雷は女を下ろすと小さく答えた。

「（此処じゃ棚が邪魔で刀が使えないだろ？）」

風雷はそう言って笑うと傘を開けと言わんばかりに目を細める。
風雷と沖田は頷き合う。
風雷は静かに沖田達の前に行く。
風雷はすぅと息を吸う。
そして叫んだ。

「オープン！！」

沖田はさっとしゃがみこんで傘を開く。
男達は風雷の叫び声に一瞬動きを止めた。
そしてその一瞬で十分だった。
一人の男が引き金を引こうとした時には、
腹に衝撃が来る。
男の口は勝手に開き、口から唾液が飛ぶ。
それと同時に体も飛ぶ。

「大葉智暉ノックアウト」

それを見た一人の男は驚きで目を開いた。
だがすぐに、
銃を乱射する。
が、

「遅い」

風雷の鈴とした声が聞こえた時には、
その男は天井にぶつかっていた。
ぶつかっていた、といってもそんな生ぬるいモノではない。
風雷は力加減をした。
が、その力加減とは、
肋骨を四本折る位なのだから。
男の意識は痛みによって強制的に遮断された。
そして天井からその男が床に当たった時には――
定員に銃を向けていた男の目の前に白い何かが見えた。
そしてそのまま、
何もかも暗くなった。

「…ぁあ…」

定員は助けられた事によっての安堵か、それとも圧倒的な風雷の力に言葉を思わず零した。
風雷は「うーん」と腕を伸ばして、

「沖田さん、傘閉じるな」

風雷に声をかけようとした沖田に風雷は笑って言った。
そして、
カチャリとあまりにも残酷な音が風雷の背後から聞こえた。
次の瞬間、
乾いた音がコンビニから響いた。

少しでも気を緩めちゃいけません。お母さんに殴られるよ？（前書き）

銀時：なァ、聞いていいか？

洒流奇：んっ？

銀時：最近俺出てなくねェか！？何で出ねーんだよ！

新八：銀さん、僕の方が出てませんよ。

沖田：真撰組がコレ載ってったから仕方がねェだろ。

神楽：テメェが消えれば良いんだろーが！

沖田：あぁっ？テメェ何かほざいたか？

神楽：テメェの脳味噌じゃ理解出来なかったアルか？ふっ馬鹿アル。

沖田：テメェ！

洒流奇：いや、落ち着いて二人共！

銀時：そういやオメェ言いたいことがあるとか言ってなかったか？

洒流奇：そうそう、下注目←←

買い物の話の所↓自分ってありましたけど、あれジジイって事です。

スイマセンｐ(、（、ｑ)

何か他にもあった気がするけど…
とりあえずスイマセンm（＿＿）m

少しでも気を緩めちゃいけません。お母さんに殴られるよ？

沖田は目を見開いた。
「終わったんですかィ？」と言いながら乱射された時の為に開いていた傘を閉じようとした。
だが、風雷は「閉じるな」と言われ、そして少し傘の横から覗きこんだ時に傘から鈍い衝撃が来る。
夜兎よりも弱い力かもしれないが、二つの腕で一つの弾の衝撃を受け止めるのは余裕である。
驚いたのは見た時の光景と今。
沖田は傘を閉じずに撃った奴を見る。
定員だった。
定員が不敵に微笑み、黒光りする怪しいモノを握っていた。
その横には倒れている風雷が。
風雷の事は心配でもあったが今までの様々な事により沖田は冷静だった。
…見た所あの男は一回しか撃ってねェ。
…ちょっと待てよ。
じゃあ何で俺ん所まで弾が飛ぶんだよ？
沖田は目分量で男と自分までを測る。
普通に撃てば届くが、風雷の頭を撃って貫通したなら、
届かない。
届いたとしても、
あんな衝撃は来ない。
風雷を見る。
風雷は、
“綺麗な床”に虚ろな瞳を開いて倒れている。

「ミスりやがって。テメェ等は幕府の犬に捕まれば良いんだろーけど後々俺ん所を嗅ぎ回られちゃタリィ。此処は一発どでかい花火を打ち上げてやるか」

余裕たっぷりの男は倒れている風雷を見てからフッと笑う。

「にしてもお前甘いなァ。警戒は解いちゃいけねェよ。つっても、もう聞こえねェか？」

男の愉しそうな独り言はコンビニの中を愉快に踊る。

「んじゃっ、後二人か。まァ其処の女はぶっ倒れてっからどーでも構わねーか」

そして男は沖田に近付く。
沖田は思わず微笑する。

「お前に一つ言いてェ事がありまさァ」

「あぁっ？」

沖田の笑みに男のこめかみがピクリと反応する。

「警戒は解いちゃいけねェよ。つってももう、もう聞こえねェか？」

沖田とは違う声が後ろから男の耳に届いた時には――
男は無様に崩れた。

「サンキュー。注意引きつけといて」

何時の間にか立ち上がっていた風雷はズボンの汚れを叩く。
パンパンッと血が付着してない床に砂が落ちる。
沖田は屈んでいた体制を崩して傘を畳む。
「ほらよ」
そして風雷に投げる。
「んっ」と言って風雷は逞しく片腕でそれを受け止める。
「てかオメェ、分かってたのかよ?」
「仮説を立てれば簡単さ。だから前話の時フラグ立てたじゃん」
そう、数分前風雷は言った。
『おっ凄い、明るい牢獄の生活の始まりの方はひー、ふー、みー、と。三人か。まぁもしかしたらもう――』と。
この台詞の続きは、
『一人、其処に居る定員さんもかもしんないけど。ねっ、“指名手配犯小竹験也さん”?』であった。
あの時、男に遮られた言葉はそれなりに意味があったのだった。
「だったらさっさと殺りゃあ良いじゃねェか」
沖田は傍らに倒れている女性の首に触れる。
肌から安定した脈を感じた沖田はチャリンと手錠を取り出して風雷に投げる。
「駄目だよ。もしかしたら本当に無関係かもしんないしさァ」
風雷は受け取った手錠で定員――小竹験也の腕に嵌める。

「てかオメェ、どうやって銃を避けたんでさァ？」

沖田は他の倒れている男達の手に次々と手錠を嵌め、拳銃を徴収。

「知りたい？仕方がないなァ」

風雷はわざとらしく声を出して、
微笑んだ。

「動体視力だよ」

自らの猫のように黄色い瞳を指す。
「はっ？」と思わず沖田は言葉を零した。

「小竹験也が俺の頭に拳銃を向け、引き金を引くのを見、少し早く頭を屈める。多分角度的に見て平行だから沖田さんに当たるな、て思ったからとりあえず言ってあげただろ？それで俺の髪の中を少し通って沖田さんの所へ――」

バーンと口で風雷は言う。
沖田はハァと溜息を零した。

「まァ最初から分かってた行動だからな」

「最初から？」

疲れたように聞く沖田に風雷はうんと頷いて見せる。

「小竹験也は冷や汗一つかいてなかったし、しかも一瞬笑った」

風雷は見た。
「幕府の犬共」というワードが出た時微笑んでいるのを。
その行動で確信した。

「てか待て。コイツ…小竹験也なのか？」

沖田は眉間に皺を寄せる。
そう、指名手配で貼られているこの男の顔は以前――
太っていた。
それは正に豚と言ってもおかしくない位。
風雷はまた頷く。

「てか小竹験也さ、わざわざ整形までしたから少し変わろうと思ったのかな？と思って見逃してあげようと思ったんだよ」

ニコリと爽やかに微笑む風雷。
沖田はハァと再度溜息を吐いた時、

「総悟、風雷君平気か！？」

近藤達がコンビニに入ってくる。
勢いよく風雷の腕を握る近藤に風雷は「あっ仕事宜しくお願いします」と返す。

「つーかテメェ等だけで片付けちまったのか？」

後から入ってきた土方は倒れている男の一人を足でつつく。

「まァ仕事だからな。つかアレやんないの？」

「「アレ？」」

近藤と土方、そして総悟は頭を傾げる。
その横を他の隊員が通り過ぎる。
男を車に運ぶ隊員は風雷の言葉が聞こえてないのかただせっせと仕事をする。

「アレだよ。『御用改めである。真撰組だ』って奴」

風雷は単調な声で発された言葉は空気に溶け込む。

「御用改める前に終わってただろーが」

土方の言葉に風雷は「そっか」と納得。

「てか何で此処に居んの？」

「周囲に居た人の通報だよ。それよりも二人共無事で良かった」

近藤は肩の荷が降りたように微笑んだ。

「後で報告書書けよ？逃げんじゃねェぞ総悟」

報告書という言葉を聞いた途端そろーりとその場を離れようとした沖田に土方はギロリと睨む。

「ありゃりゃ。こりゃあ参りましたぜェ。まさか土方さんそーゆう趣味ですかィ？」

「そーゆう趣味ってどーゆう趣味だコンチキショー」

メンチ切り合う二人。

「ははははっ」

突如聞こえた笑い声に二人は声がする方を見る。
其処には腹を抱えて笑っている風雷が居た。

「はっ？」

思わず唖然とする二人に風雷は目を指の腹で拭いて言った。

「帰ろっと」

「はっ？」

その言葉に再度言葉を零す二人に風雷はさり気なく店からスルメを数枚取って店を出た。

「中々面白いな、この真撰（ばしょ）組も」

風雷は車よりも速い速さでとある場所に向かった。

ピンポーン、とチャイムが鳴る音が万事屋に響く。

「…こんな時間に誰だよクソゥ」

銀時は眠たげな目を擦り、ドアを勢いよく開けた。

其処には――
誰も居なかった。

「誰も居ねェのか？」

最悪だよ、と言葉を漏らす銀時は下を見た。
其処には、三枚スルメが置かれていた。
そして、
そのスルメの上に『食べろ』と達筆な文字の紙が置かれていた。

「ふっ…」

銀時は口元を綻ばせるとスルメに手をやり、静かに中に入った。

「…ったく、アイツは何時帰ってくんだ」

真撰組屯所前で風雷の帰りを待つ土方。
さっきまで自分達より早く帰った筈の風雷は屯所の中には居なかった。

「あっ土方さん」

頭上の声に土方は見上げる。
風雷が屯所の門の上で佇んでいた。

「『あっ土方さん』じゃねェよ。早く来い」

土方は風雷に下りるように目で命令する。

風雷はさっと猫のように軽く着地する。
そして先を行く土方の背中を追った。

「此処で待ってろ。飯は後でやる」

素っ気ない言葉を言われた風雷は頭を傾げた。
現在、屯所内の食堂に居た。
明るい電気とは違って静かな空気が風雷を覆っている。
土方が去った今、更に静かに感じれる。

「夕御飯って話じゃん。まだァ…？」

風雷はそのまま寝ようとしていたが、土方に「夕御飯を食うか？」と言われ簡単に付いてきたのである。

「暇…」

ギュルルルと声と同時に聞こえる腹からの叫び。
思わず机に突っ伏し始めた風雷。
その時、

「御用改めだァ！真撰組だァ！」

大きな声が響く。
其処には、
真撰組の隊員全てが居た。
思わず目をパチクリさせる風雷に近藤は笑った。

「どうだ?迫力あったか?」

「へっ…?」

唖然とする風雷に沖田が笑った。

「土方さんのどや顔見てェっつったのはオメェじゃねェか」

「どや顔なんかしてねェ」

「まァそーゆう事だ」

風雷はいきなり明るくなった空気に戸惑う。

「てか皆さん寝なくて――」

「今日は盛り上がるぞォ!」

近藤の声に隊員が「ウオォ!!」と乗る。

そして何時の間にか配られているコップを高らかに上げる。

「新しい隊員、風雷君に乾杯!!」

「乾杯!!」

酒を口に運ぶ隊員を見た風雷は思わず口元を綻ばせる。

「そら、酒飲め」

無理矢理風雷に酒を飲まそうとする沖田に風雷は「へっ?」と目を

広げ、口に注がれる。

「おっ俺未成年にゃっにゃんだけじょ…」

頬をほんのり赤くさせる風雷は回らなくなった呂律で話すが既に酔ったのか言葉がとろりと溶けそうだった。

その日の真撰組は朝まで五月蝿かったという。

ちゃんと布団で寝る奴は居ないけど朝練する奴は居る。（前書き）

テストが終わり、ぐだぐだ生活に戻った洒流奇です（≧≡ε≡≦）
ちと車酔い中…うっぷ（＾―＾；）

銀時：車ん中で携帯イジってんのが悪い。

風雷：そういやコイツのミス伝えとくな。俺のジャージは二千五百円もしない。千五百円だ。

神楽：風雷の財布を考えろヨ馬鹿作者。

新八：神楽ちゃん、分かりきった事言っても意味ないよ？

洒流奇：何気に傷つく…！

銀時：テメェの存在は傷だらけの中古品みてェなモンだからな。合ってんじゃね？

風雷：中古品って坂田さん、この人は使えないから中古品にすらなれないよ？

洒流奇：風雷の裏切り者ーー！！

ちゃんと布団で寝る奴は居ないけど朝練する奴は居る。

静かな午前三時。
夜中五月蝿かった屯所もすっかり静かになり、皆が眠りへと誘われていた。
勿論、風雷も千鳥足で一番奥の自らの部屋に行き寝た。
隅で体育座りして寝ている風雷。
ただ風雷は何かを感じ、ムクリと自分を覆っていた布団を横に落とす。
「朝…」と呟きながら跳ねている髪の毛を櫛で解かさず手櫛で乱暴に通す。
胸元に『糖分』と書かれたTシャツに黒と青のジャージで覆い、布団を踏みつけながらも風雷は向かう。
朝食(えもの)を頂きに食堂(いくさ)へ。

冷たい床を裸足で歩いていた風雷は食堂で唖然とする。
昨晩、自分を祝ってくれていた隊員の殆どが床で寝ていた。
こんな時期に…と風雷は思い、とりあえず近くに居る男二人を部屋に運ぶ。
昨晩沖田に酒を飲まされたせいか頭を痛みのみが支配する。
あの時風雷は決めた。
酒はもう飲まないと。

何往復したかは分からないがやっとの事で皆布団に運べた風雷はふぅと溜息を漏らす。

現在三時三十分。
この時間に皆食べないんだ?と風雷は頭を傾げる。
風雷は樹海で川の魚を穫る時は何時もこの時間に起きていた。
何故かは本人には分かっていた。
あの時の日課。
嫌な日課を覚えちゃったな俺と何度溜息を出したかは覚えていない。
まァあの時の事はもう平気だろーし、と自分を納得させ、風雷はまた部屋に戻る。

風雷は真撰組の服に着替えた。
部屋に戻ったのはその為であった。
そしてもう一つ。
風雷は傘から丁寧に刀を出した。
普通の刀よりは細く、長い刀はただ沈む月に照らされ黒光りした。
風雷は一本のみ出すと外に出た。

「ふっ!ふっ!」

何回も刀を振り下ろす。
空気さえ斬れるような程の勢いで何度となく振り下ろす。
周りの隊員達は起こさないように声を出さずにただ無心に振り下ろす。
寒いからか汗は全くといって良いほど出ない。
「体を温め、何時でも対応出来なきゃいけねェからな」と心の中で何度も呟く。
それが自らの行動を決めるから。

風雷はただ無心に振り下ろしていた時、

「熱心だな」

冷たい空気に似合う静かな声が風雷の耳に届く。
風雷はハァと生温い息を吐く。
息は空気に当たると白くなり、やがて消えた。

「己を鍛えて他人を守る」

そう言って風雷は振り返った。

「これが父さんの口癖だったからな」

寝間着か、着物を着流している土方は煙草を噴かした。

「何ガキが一丁前な事言ってんだ。つかその刀を振り回すな。危なくて仕方がねェよ」

土方は刀――黒雲を指で指し示す。

「これの他に使うモンがねェんだよ。無理」

風雷は悪戯っぽい笑みを零し、「それに、」と一句一句強くしながらまた振り下ろし始める。

「真撰組（あったかいところ）に釣り合う位は精進しねェと」

一振り一振りが風雷の思いが籠もっているのか、びゅうびゅうと小さく風を作る。

「そォか。なら昼ん時鍛えるか？」

土方は口から煙草を離し、ふぅと息を吐いた。

「仕事は？」

そお言いながらもしっかり振り続ける風雷。

「昨日大活躍したんだ。１日位構わねェ」

その言葉に風雷は振り返った。

「他の人共少しやれるのか？」

パァと顔を明るくさせる風雷。

「そォだが…何でそんなに嬉しそうなんだ？」

頬を興奮によってか赤く染めている風雷に土方はただ欠伸を零した。

「そんなの良いだろ？っじゃ俺ちょっと汗流してこよー♪」

風雷は機嫌良く走り去った。

刀を傘に差し込んだ風雷は時間を確認する。

時刻は四時。

まだまだ隊員達は起きないだろう。

昨日分の汗も流そうという事で風雷はルンルン気分。
どれ位大きいかな?と脳内で想像する。
実は風雷は神威達に攫われたあの日、その日初めて風呂というモノに入ったのだった。
風雷は今まで川などで体を流していた。
その為風雷は幸せそうに歩いている。
まっ、男子風呂しか無いだろーけどこんな時間は居ないよな。
風呂の入口に辿り着くと風雷は頷き、
ドアを開けて中に入った。

コンプレックスは見せちゃ後々後悔するよ。（前書き）

良かったら見て下さい（｀∀´）

神楽：また風雷のヌードがあるから気をつけるネ。

風雷：ちょっ…神楽…。

銀時：悪いな。風雷じゃなくて作者を責めてくれ。

コンプレックスは見せちゃ後々後悔するよ。

脱衣場は銭湯のように棚がずらりと並んでいる。
だが、銭湯程大きくは無い。
風雷はその光景に目を輝かせ、荷物を棚の中に入れる。

「さァて！入るぞ！」

風雷は愉しそうに笑って風呂の扉を開けた。
垢擦り用のタオルで体を隠し、足を踏み入れた。
其処はまるで、
…普通の風呂。
銭湯や宿の風呂のようで、別にありきたりな感じである。
風雷は体を流す為に数ある内の一つのシャワーを手にする。
栓をクイッと緩める。
ザーッと水が冷たい水が出る。
だがこれ位の温度には慣れてる風雷は普通に頭にかけ、汗を流す。
鏡を見る。
嬉しそうに笑っている自分。
そして、
鏡の右端には小さな総悟。

「…はっ？」

風雷と総悟は鏡越しに目が合う。
湯船に浸かっている総悟はただ普通に風雷を見ている。
風雷は垢擦りのタオルで隠すべき場所を隠し、振り返る。
今度はちゃんと目と目が合う。

「何で此処に居るんだよ」

風雷の言葉に沖田は冷静に返す。

「オメェこそ」

沈黙が降臨する。

「…出てくんないか？」

風雷の言葉に沖田は静かに返した。

「オメェがな」

互いに譲らないのである。

「…オメェ」

再度沈黙が降臨した時、沖田が口を開いた。

「その背中の何でさァ？」

その言葉に風雷は目を見開き、顔を青くさせた。

「さっきの龍に鎖を巻いたような――」

のは何でさァ？と聞こうとした沖田の口の動きが止まった。

風雷は口をガクガク言わせ、震えていた。

そして自分を抱くように腕を握っていた。

それを見た沖田は立ち上がった。
腰には水を大量に吸ったタオルが揺れる。
そして沖田は扉に向かい、扉を開ける。

「今は俺が出てやりやすから、」

振り返らずに言う。
見てられない程風雷が痛い姿だから。
以前の時の闘いの傷が更にその姿を痛々しく見せる。

「後で聞かせて下せェよ」

ピシャリと扉が閉まる。
だが風雷はまだ震えていた。
ただただ震える。
総悟が言っていた判子のようなモノがある背中が、じゅうと音をたてた気がする。
あの時の事が、
思い出される。
右肩辺りに焼け焦げた臭い。
そして『じゅう』と肉を焼くように美味しそうな音が。
だが、
美味しそうな音は風雷の耳には届かない。
何故なら、
自らの張り裂けるような程の悲鳴が響くから。
右肩から全身へと広がる。
熱い、とはもう感じない。
だが、
痛い、というレベルでも無い。
それから逃れるように体をうねらせるが、

鎖で縛られてる腕。
床を這うように倒れる自らの腰には、
男の足。
小さな自分ではそれから逃れる事は出来ない。
叫ぼ――

「はぁはぁっ…」

風雷はシャワーの栓を思いっきり回す。
すぐに水がばぁっと風雷の頭にかかる。
俯いている風雷は荒い息を整える。
鏡越しの自らの背中を見る。
龍が駆け巡ろうと必死に鎖を解こうと頭を横に振っている姿が白い背中に有った。
風雷は目を伏せる。
目から液体が流れそうになる。
風雷は頭を振った。
駄目、だ。
これに耐えるのは、
自分だけ。
俺は、
全ての涙を背負うんだ。
顔を上げ、風雷は体と頭を洗い始める。
そしてすぐに湯船に向かう。
足をそろーりと忍び込ませる。
温かい感覚が足から脳に到達する。
思わず笑う。
俺を受け入れてくれるんだな、と言葉に出さずに口のみ動かす。
風雷は体を沈めると言った。
「ありがとう」と。

沖田は脱衣場でゆったりと服を着ていた。
少し前の事を振り返る。
最初風雷が入ってきた沖田は「はっ？」と思わず唖然とした。
風雷は風呂の一番端に居た自分は見えなかったのか平然とシャワーを手に取る。
僅かに紅葉した頬はまるでガキだな、と心の中で笑った時、見た。
背中を。
龍が描かれてあった。
その周りには、
鎖が。
刺青とかか？と思わず頭を傾げたが、色は無い。
何となく凹凸がある気がする。
そんな時、風雷が自分に気が付いた。
風雷は自分が何を見たかも知らずに「出ろよ」と言う。
普通女は恥ずかしがるだろ…と思わず呆れ、聞いてみっかと思って言ったら、
風雷が苦しそうな顔をした。

「俺は何やってるんでさァ…」

沖田は濡れたタオルを頭に被る。
濡れた髪からポタリと雫が零れる。
風雷のあの顔を、
ちゃんと受け止められなかった。
情けねェと口を動かす。
とりあえず、
アイツが出るまでに、

考えよう。
沖田は歩く。
一歩一歩を大切に。

風雷は体を湯船から取り出し、脱衣場に向かう。
脱衣場にはもう誰も居なかった。
自分の荷物からタオルを取り出し、体を拭く。
そして、すぐに服を着る。
下着の代わりに包帯を捲く。
右肩まで。
ちゃんと服を着ると外に出る。
もしかしたら沖田が外に居たら…と暗い気持ちになりつつも外に出た。
誰も居ない事にホッと溜息を吐いた。

「おいっ」

ビクンッ大きく揺れる風雷。

「どうしたんだ?飯だぞ?」

土方が居た。
頭を傾げ、「何かあったか?」と言葉を繋げる。
風雷は頭を横に振って、「荷物置いたらすぐに行く」と答えた。

「んじゃあ先行ってんからな」

そう言うと土方は背を向けた。

風雷は当分その背中を見ていた。
大きく、逞しい背中。
あんな風に俺も大きくなりてェと思い、キュッと唇を噛む。
風雷はすぐに頭を振ると走り出す。
自分の部屋へと。

過去とか未来は食べ物にはなれません。（前書き）

へーい（「∀｀）１２月だー（＾―＾）ｖ

銀時：テメェは結局クリスマスもクリスマスイブも部活だがな。

神楽：関係ないアルよ。コイツは恋愛とは無縁アルからな。

風雷：シュチュエーションよりも食い物だもんな。

洒流奇：食べ物の方が良いじゃん。場所とかどーでも良いじゃん！

新八：恋人が居ないからってやけくそはいけませんよ？

洒流奇：黙れっ！！

過去とか未来は食べ物にはなれません。

春雨戦艦内の資料室。
佇む二人の男達。
その内の一人である阿伏兎は語ろうと口を開いた。

「俺が――」

その時、

「失礼します」

ノックと一緒に聞こえた声に二人は目を其方に向ける。

「入っていーよ」

神威の言葉が聞こえたのか、ドアがカシャンッと音をたてて開く。

「どうかした？」

「はっ、それが元老院が今すぐ来いと。…話を邪魔しましたか？」

天人は申し訳なさそうに顔をしかめた。

「別に平気だよ。ふーん？何の用なんだろ？」

神威は頭を傾げ、「阿伏兎、後でね」と阿伏兎に背を向ける。

「分ァったよ」

阿伏兎はその背中を簡単に見送った。
語らなかった過去に思いを馳せながら。

「そういや銀さん」

昨日玄関に置いてあったスルメを新八は開ける。
因みに神楽のスルメは既に神楽の腹という名のブラックホールに逝った。

「どうした新八？」

銀時は少年のジャンプ（心の共）を手に新八の言葉に適当に返す。

「今ふと思ったんですけど…」

「何アルか？銀ちゃんからの給料が全く来ない話アルか？」

神楽はふわぁと欠伸を漏らした。

「違うよ神楽ちゃん。いや、僕達風雷さんの事全然知らないなァって何となく思ってさ」

「…そういやそうアルな」

新八の台詞に神楽は顔を曇らせる。

銀時は今までジャンプに向けていた視線を新八に向ける。

「まァ仕方がねェんじゃねェの？人には秘密が有るもんだよ」

「いや、でも本当の名前すら知らないんですよ？知ってるのは…風雷さんの御両親位だし…」

新八はもごもごスルメを咀嚼する。

あと半分を口に運ぼうと新八はしたがそれは予想が出来るだろうが神楽に阻止された。

つまり神楽のブラックホールに消えたのであった。

だが神楽の顔は新八を蔑むような顔でも無いし、満足感に満たされた顔でも無かった。

少しでもその虚無感を消す為だったのか、顔は暗い。

新八は神楽を責めずにただ下を見る。

「…んな事気にしてたらラチがあかねェ。新八、そーいうのは御本人から聞いた方が楽だろ？」

銀時はそんな二人を見て溜息を零してジャンプのページをめくる。

「そうですけど…」

新八は落ち着かない様子で指を忙しなく動かす。

「だったら待てば良いんだよ。それに俺は過去（見た目）なんか興味ねェ。俺はソイツの未来（中身）の方が興味あんからな」

「銀ちゃん…」

神楽の顔が僅かに明るくなる。
銀時はふっと安心したように笑った。

「俺達はただ信じるだけだ」

その言葉に二人は元気良く頷いた。

風雷はキョロキョロ頭を動かす。
風雷は今食堂に居る。
だが、座れないのである。
沢山居る隊員達が椅子に座って頭を皆同じように抑えているからである。
勿論、昨日のお酒のせいである。
風雷は運動をしたからか体の調子が良くなった。
だが、心の中は憂鬱であった。
ハァ…と俯く風雷。

「風雷君！こっちにおいで！」

そんな風雷に座っている近藤は声をかけた。
隣の空席を指し、手招きをしている。
その空席の隣は、
普通に朝ご飯を咀嚼している沖田が居た。
風雷はどうしようかと少し迷う。
無論、近藤はそんな事を気付く訳が無い為、「どうしたんだい？」
と爽やかな笑みでまた手招き。
風雷はそんな近藤の行動に「…ありがとう」と少し躊躇いながらも
礼を述べた。

「あっ…いつつ…猫助おはよー」
「猫助酒平気かー？」
「猫助、宜しくなァ」

重い足を引きずる風雷に近くに居た隊士が自らの頭をさすりながらも背中を押す。
因みに、猫助とは風雷のあだ名である。
風雷は昨日のパーチーに「好きなように呼んで構わない」と言った為、沖田が遊び心で「じゃあ猫助なんてどうですかィ？」と提案。
風雷の特徴的な瞳と軽々と動く姿から考えた風雷の名前に隊士は面白半分で呼び始めたのである。
風雷は一人一人の隊士に「おはよーな」と挨拶して近藤の隣に座る。

「今日も頑張って働いてくれよ？沢山食べとくんだぞ」

にこやかな近藤に「頑張るよ」と風雷も返す。
そんな風雷はもう片方の隣は向けない。
少し近藤の方に顔を向けつつ口に朝ご飯を運ぶ。
味噌汁や鮭など味がうすい和食はそれなりに美味しかったのか風雷は一口目で目を開き、自然と箸が忙しなく動く。

「どうだー？真撰組の朝ご飯は？」

「美味しい」

近藤の問いに風雷は簡素に答える。
これは食べるのに必死の為である。
近藤は「そうかそうか」と言いながら自らの口に味噌汁を流す。

「マヨネーズいるか？」

近藤の横に居た土方がマヨネーズを風雷に見せる。

「まよねーず？」

まるで初めて聞いたように頭を傾げる風雷に土方は疑問に思いつつも「ほらよ」とマヨネーズを投げた。

風雷はちゃんと手を伸ばしてキャッチ。

ほぉと感嘆の声を出す風雷に土方は自らの土方スペシャルに手をかけた。

「止めといた方が良いでさァ。普通の美味い飯が犬の餌になっちまっても構わないんですかィ？」

その時やっと沖田が口を開く。

土方のこめかみからビチッと何かが切れる音がした。

「おい総悟。オメェは何時になったらマヨネーズの魅力に気が付くんだァ？あのなァ、マヨネーズは何にもあってな――」

熱弁する土方に沖田は、

「土方さん、マヨ語話さないで下せェ。日本語しか俺には分からねェでさァ」

ずずっとお茶を啜る。

土方のマヨネーズ魂に火が付いた。

「あのなァ――！」

「んっ美味い」

土方と沖田に挟まれていた風雷の声が二人の耳に届く。
土方が風雷のご飯に目を向けた。
沖田も土方に向けていた視線を落とした。
其処には――
土方スペシャルが存在した。
風雷は「どうかしたか？」と言いながらそれを口に運ぶ。

「オメェ…犬の餌平気なんですかィ？」

呆れたような顔で聞く沖田。

「総悟テメェ――！」

再度熱弁しようとした土方。
だが、
出来なかった。
風雷の言葉を聞いてしまったから。

「犬の餌はもっと不味いぞ？」

間に挟まれていた近藤が「えっ？」と思わず言葉を零す。

「…オメェ食った事が有るんですかィ？」

沖田の目が険しくなる。
風雷は沖田の目を避けるように「別に」と簡素に答え、また土方スペシャルを食べる。

近藤が「ははははっ」と笑う。

「総悟、冗談に決まっているだろ?きっと遊び心で言ったんだよ。なっ風雷君?」

頬に冷や汗を流す近藤のフォローに風雷は答えず、最後の一口を食し「ごちそうさま」と言うと立ち上がった。

「仕事とかになったら呼んでくれ。部屋に居るから」

風雷はそう言って力無く笑うと立ち去る。

土方と近藤はその背中を掴む事もせず、ただ口をぽかんと大きく開けていた。

ただ一人、総悟だけはその背中を静かに見守っていた。

上とか下とか立場も場所も何も変わんない。（前書き）

洒流奇：あぁ…明後日ジャンプフェスタなのに…部活だよ…（＜―＞）

銀時：友達にグッツ買ってもらうから平気なんじゃねェの？

新八：別に大した買い物はしないんですから良いんじゃないですか？

洒流奇：何言ってんの！生で見るとは全然違うんだよ！！

神楽：知らないネ。

上とか下とか立場も場所も何も変わんない。

風雷は急ぎ足で部屋に向かう。
そんな風雷を太陽は照りつける。
太陽からも、隊士からも逃れるように早く部屋に行く。
ばっと勢いよく障子を開け、中に入るとすぐに閉める。
ハァ…と溜息を零す。
肌が少しひりひりと痛みがする。
少しとはいえそれなりに強い日差しを浴びたからかな、と自嘲的に微笑む。
上着を脱ぎ、腕に包帯を巻く。
念の為に足にも。

「日差し対策っと」

小さく呟いた声は明るい。
だが、
顔は暗い。
まるで、
演技しているようだった。

「失礼しまさァ」

突如聞こえた沖田の声に風雷は驚きもせず、

「どーぞ」

と簡素に返す。

障子が静かに開く。

「もう仕事か？それとも朝練的な？」

沖田に背を向けながら包帯を巻く風雷。
沖田は外に誰も居ないのを確認すると障子を閉める。
部屋には風雷と沖田のみになる。

「猫助、ちゃんと聞かせて頂きやすぜェ」

沖田の言葉に風雷は短く返した。

「嫌だ」

まるで子供の様な台詞だが、子供の様に甘い響きは無い。
むしろ冷たく、まるで全てを否定するような程の拒絶反応。
三文字の言葉に隠さないで出した気持ちは沖田に届く。

「少し調べさせてもらいました。テメェのその背中のは…」

沖田の台詞に風雷はピクッと動く。
そして、
消えた。
沖田の目の前から。
だが、沖田はすぐに風雷の居る場所に気付く。
何故なら――

「動くなよ」

首筋に雪のように冷たく、白い手が有ったから。

その雪の手はきっと溶ける事を知らないだろう、とさえ思うほど冷たい手が。

「場所を変えよう。屋根とかで」

風雷はすっと静かに沖田から離れると近くの傘に手を伸ばした。
沖田は驚いた様子では無く、ただ普通に「分かりやした」と返した。

風雷は念の為に顔にも包帯を巻いてから屋根に居る。
勿論、傘も差してはいる。
その横には沖田がふわぁと眠たげな欠伸を漏らした。

「…何でわざわざ俺の事を知ろうとするんだよ」

先に口を開いたのは風雷であった。
白い包帯で隠された唇からは少し寂しげな言葉が出てきた。
沖田はそんな風雷を横目に見てから、「興味本位でさァ」と呟く。

「沖田さんは…コレ知ってんのか?」

自らの背中を指して風雷は沖田を見る。
沖田はコクンと頷いてから小さく耳打ち。

「…」

風雷の顔が一気に曇る。
沖田は「さっき調べさせてもらったんでさァ」と風雷に向かって言う。

「…そうか」

風雷は長い息を吐いた。

「俺は――」

「総悟ー、風雷、テメェら何処でサボってんだ！」

「…土方さん」

語り始めようとした風雷は土方の怒声で遮られる。
こめかみに血管を浮かべ、既に刀の柄に手を伸ばす土方。
沖田は呆れたようにハァと溜息を吐き、小さく一言。

「K・Y・S。腐った野郎は死んじまえ」

「テメェ！」

とうとう刀を鞘から抜き、沖田に向ける土方。
風雷が「まァまァ」と土方を宥める。

「仕事する人減らしちゃ駄目だろ土方さん」

「…くそっ」

土方は諦めたように刀を鞘に戻そうとする。

「そうでさァ。そんなんじゃ愛しのあの子は去っちまいますぜェ」

再度刀を抜こうとした土方は風雷が必死で抑え、舌打ち。

「早く降りてこい。仕事だ」

土方はそう言うと屋根から降りた。
風雷はふぅと溜息を吐いてから沖田を見る。
傘で陰った瞳と太陽に燦々と浴びる瞳が会う。

「また後でな」

風雷はそう言って屋根から軽々と、まさしく猫の様に着地した。
沖田は静かにその背中を見送った。

「はぁ…俺がですか？」

神威は呆れたように目を開く。
暗く、見えないよいな程の高さに居る天人――元老院の一人が落ち着いた渋い声を出した。

「何時までも上が不在とは下も戸惑うだろう。今提督に相応しいのは御主しかおらぬ」

「じゃあしつもーんです」

神威は心の隅で首が痛くなりそうだなァと思いつつも上を見上げ、分かりやすく手を伸ばした。

「何じゃ？」

「提督って戦えますかねェ？」

「…無理に決まってろうが」

神威の問いに思わず呆れる元老院達。

神威は「戦えないんだァ。ふーん？」と言いながら腕組みをして思考を始める。

「良いか？では――」

「待って下さい」

神威は相も変わらず薄っぺらい笑みを見せ付けた。

「…何じゃ？」

「俺の問いにしっかり答えたら提督になっても構いませんよ」

「ほう…御主は何が聞きたいんのだ？」

神威の条件に今まで喋っていた天人が口で弧を描かせた。

「死体屋について聞かせてもらえませんかね？」

ニコッと笑う神威の言葉に今まで話していない元老院達にも電撃が走ったように顔を唖然とさせた。

今まで口を達者に動かしていた天人は震える指で神威を指す。

「しっ死体屋について御主…しっ知りたいのか？」

震える声に神威は弾けるように「勿論♪」と答えた。

「死体屋はな……霞霧島(かすむとう)で死んだ……」

「他には？」

「…これ以上は言えん。それと第四師団に新しい奴が入る」

神威の言葉を避けるように言った元老院は話題を変える。

「新しい奴？」

「あぁ、名は框(かまち)と言う」

ホッと溜息を吐いた元老院は落ち着いた声で話す。

「どんな奴なんですか？」

興味を持ったように笑う神威。

「春雨の取引先相手の奴隷商人の息子だ。後は御本人に聞けばよい。話は終わりだ。御主は帰れ」

「分かりました」

神威はひらりと背を向け、相も変わらず薄っぺらい笑みで歩く。

舌で乾いた唇を少し撫でながら。

獣と人間の勘は全然違う。

「ええっと、ハマチだっけ?宜しくね。第四師団団長さん」

神威は目の前の男に手を差し出した。

「いえ、框ですよ提督殿」

神威のボケのような、本当に間違えたか分からない台詞をしっかりと正す青年は丁寧に返した。

黒髪に白い肌、瞳の色は焦げ茶という少しイケメンの人間に見える好青年。

だが、天人と証明するように耳が尖っている。

神威は僅かに自分より身長が高い框を見る。

そこで理性を働かせる。

一瞬強いかな?と思い、手を出そうとしたが、仕事の為握手と云う名目で手の平を見せた。

「君…誰かと似てる気がするけど、俺の知り合いだったりする?」

神威の瞳には框と闇に咲く一輪の花と謳われた前第四師団の女性が重なる。

神威は頭を傾げて見せる。

框は「皆目見当出来ません。申し訳ありません」と無表情で言う。

神威は差し出した手を握らない框を見上げる。

框は無表情で無感情に言う。

「無理だと言っておきましょう。提督殿からは殺気が溢れ出ており

ます。私の手を木っ端微塵にする気でしょうか？熟慮断行という四字熟語を理解するべきだと私は思います」

神威は瞬きをしてからニコリと笑った。

「ごめん、俺その四字熟語知らないや。それに安心して良いよ。まだ戦わないから」

框は「そうですか」と言って左手を差し出した。
神威が右手を差し出しているのに、だ。
神威は眉間に皺を寄せながら右手を収め、代わりに左手を差し出す。
そしてやっとの事で握手が出来る。
框はそこでやっと笑った。
瞳は笑っていなかったが。
神威も薄っぺらい笑みを見せた。
左手で握手をした二人の中の空気は表現出来ないような緊張感があった。

「団長」

その時、廊下に阿伏兎の声が響いた。

「あっ阿伏兎。どうかした？」

神威は振り返りながら手を離した。
框はそれを怒る事無く、自然に離す。

「まァそれは後で話すぜ団長。それより…お前さんは誰だい？」

二人の左手の握手を一瞬瞳で捉えた阿伏兎は眉間に皺を寄せていた。

「第四師団の団長さんだよ。名前はハマ――」

「框です。阿伏兎団長ですよね？」

神威の言葉を見事に遮った框の台詞に阿伏兎は「はぁ？」と言葉を零す。

「俺ァ団長じゃねェぞ。オメェの前に居るのが団長だぞ？すっとこどっこい」

さっき神威が提督になった事を知る訳が無い為、阿伏兎は僅かに声を大きめに言う。

「阿伏兎、俺はもう提督だよ。阿伏兎は第七師団の団長になったんだよ」

自らを指し「提督だからね？」と言う神威に阿伏兎は「まぢかィ…」と疲れたように引きつった笑みを作った。

「そういや元老院から言われてたんだ。案内するよ」

神威の言葉に頭を振る框。

「いえ、結構です。昔から知ってるので。実は私は今忙しいんです。私は未来行う事を素晴らしいと思います。という事で善は急げ、です。という事でありがとうございました」

框は頭を下げるとサッと素早く背を向け、カツカツと足音をわざとらしくたてながら去った。

「団長…じゃねェ、提督」

「何、阿伏兎？」

「団長は何で左手で握手したんだ、すっとこどっこい」

阿伏兎の言葉に神威は頭を傾げつつ答える。

「あっちから左手を差し出したんだよ、こっちは最初右手を出したんだけどね。それがどうかした阿伏兎？」

神威の台詞に阿伏兎は「そうか」と呟いた。

「提督、あいつァもう提督とは会う気がねェんみてェだぞ。提督には理解出来ない宗教の話だがな」

神威は「そうなんだァ」と言いつつ既に誰も居ない廊下を見る。その顔は笑っているが、瞳はすっと細められており、恐怖を簡単に味わえそうだった。

「んで、阿伏兎どうしたの？」

「団長がまた元老院に何か喧嘩売ってねェか確認しにきてやったんだよ。すっとこどっこい」

阿伏兎はわざとらしく「こんな上司を持つ部下は辛いんだよ」と呟いた。

神威はそれを物の見事にスルーし、「そーいや」と話し始める。

「死体屋が何処で死んだか教えてもらってきたよ」

「何処だ」

神威の言葉に阿伏兎はすぐに聞く。

僅かに切羽詰まったような、急いでるような顔の部下に上司は「霞霧島だって」と答えた。

「霞霧島…そうか…やっと繋がったよ、すっとこどっこい」

阿伏兎は納得したように頷いた。

「何阿伏兎?俺は全く分かんないんだけど?」

神威の台詞に阿伏兎は「後でな」と言い、背中を向けた。

「何処行くのー?」

「資料室だ」

神威は阿伏兎の返ってきた答えに肩を竦めると自らも足を進めた。

「また何か有りそうだ」

神威はギラッと目を輝かせた。

獣とは夜兎とイコール関係を結ばせそうな獰猛な顔。

そして、

獣の勘は当たるモノである。

当てになるのは自分だけ。（前書き）

オリキャラ登場しました！
まァ後々プロフィールを出しますんで（＾ｏ＾）／

当てになるのは自分だけ。

「何処に向かってるんですか？」

ぎゅうぎゅう詰めのパトカーの中に居る風雷は運転席に居る土方に聞く。

ついでにヒョイッと頭を出してニコリと笑う。

助手席に居た沖田は席と席の間に有る風雷の頭にすかさずチョップ。

「いてっ」と風雷は目を瞑る。

後部座席の風雷の横に居る山崎が「風雷さん…」と溜息。

「つかこの勢いだと江戸出ちゃいますよ？」

頭をさすりながら風雷は横に目をやる。

地面はコンクリートに覆われてなく、草が脇に生えている。

「俺達は今近松町に向かってんだ」

ビクンッと風雷が震えた。

沖田は尻目でそれをしっかりと記憶に刻む。

「…何があったんだ？」

土方は気付かない。

山崎は気付かない。

沖田は気付く。

風雷の声が何時もより低いことに。

そして、
苦しそうに言ってる事に。

「良く分かんねェが通報があったんだよ」

「でもこの４人だけで良いのか？」

「当たり前ですぜェ。猫助は逆にこれだけじゃ足りねェって言うんですかィ？」

沖田の言葉に山崎が「でも何で自分が呼ばれたんだろ…」と俯きながら言う。
心の中で「今日見回りついでに武蔵っぽい人と戦おうと思ったのに」と呟きながら。
風雷は頭を左右に振って、

「いや…何か真撰組のトップ2を連れてきて平気かな…？って思って」

と言いつつ風雷はボタンを押す。
窓がウイィンと言いながら開く。
微風が車の中を巡回する。
そして、風雷の顔が一瞬で強張った。

「止まれっ！！」

怒声により、土方は思わずブレーキをかける。
バンッとシートベルトが四人の体に食い込む。

「猫助何してんでさァ！」

沖田の顔が苛立ちにより構成される。
山崎の顔には痛みを耐えるように酸っぱそうな表情。
土方も後ろを見る。

「近松町に行くんだろ…？ガスマスクとか持ってきたか？」

「…？いや、ねェが？」

風雷の問いに土方はいぶかしげな表情で答える。

「だったら三人はコレ飲んで」

そう言って風雷は腰にあるポーチから小瓶を取り出し、一人一人に配る。

「…どォいう事だ？」

土方は静かに問う。
山崎は自分が持っている小瓶を見てあたふたして、三人を見ている。

「毒が微かに匂う。このまま進むとお三方の目にはきっと幻覚が見えるな」

「…どォいう事でさァ？」

沖田の何気ない質問に風雷は綿密に答える。

「近松町に毒が散布されてる。遠いからあまり毒性は無いけどこの毒は幻覚を見せる。まァ麻薬と同じ効果の毒だね。この毒は俺もま

だ味見した事ねェからその血には耐性は無いかもしんないけど、とりあえず緩和は出来るから飲んどきな。三人はガスマスクでも取りにいってくれ。俺一人で行く」

その言葉に土方が「この薬に抗体はねェのか？」と聞く。

「鳥インフルエンザには鳥インフルエンザのワクチンしか効かないようなモンだ。まァでも頭が逝っちまう事は無いよ。多分幻覚も見ねェし。でも念には念を、だ」

風雷はそう言ってパトカーの窓を閉め、自然な動作で降りる。
山崎は「えっ薬？これが？」と一人話についていけてないままであった。
風雷は一人で進もうとした。
だが、

「念の為にマスクを持ってきたから俺は平気ですぜィ」

白いマスクで顔を隠した沖田も降りる。

「ちょっ…駄目だ！沖田さん達人間には耐えられねェよ！」

熱弁の風雷に沖田は目もくれずに土方の方に目をやる。

「土方さん。構ィやしませんよね？俺ァしっかりと猫助の薬も飲んだし、人より体は丈夫でさァ」

土方はウイィンと助手席の方の窓を開け、身を乗り出して沖田を見る。

「行けんのか？」

「当たり前でさァ」

「死ぬんじゃねェぞ」

二人の会話は短かった。
だが、
それで全てが分かる。
土方は見たのだ。
真っ直ぐな沖田の瞳を。
土方は窓を閉める。
そして、車を発進させた。
風雷は止められなかった。
男と男の会話を。
あれを無理矢理止めさせてたら、沖田は土方に連れて行かれる可能性があるのに。
風雷はこの後、
後悔する。
その事を今は知る由も無い風雷は沖田を見た。
沖田は短く「行きますぜェ」と言い、風雷に背を向ける。

「あっ、うっうん…」

傘を差した風雷はその背中を追う。
天気予報は晴れだったが、
外れるだろう。
黒い、今にも落ちてきそうな雲が太陽に迫ってきた。
太陽は輝けるだろうか。
二人の頭の上で。

いきなり何されるか分からないんだから周りはちゃんと見なさい。（前書き）

銀時：：俺はまた何時出んだろうな。

神楽：：ＭＥ　ｔｏｏ！フー！

新八：：何か神楽ちゃんが壊れた：：。

神楽：：それが私アル！フー！！

銀時：：もおコイツは駄目だ新八。

新八：：ですね。

洒流奇：：まァそんな事は置いといて！どーぞ→→

いきなり何されるか分からないんだから周りはちゃんと見なさい。

沖田は一歩進むごとに体が重くなっていく事が直に分かった。
だが後ろに居る風雷に見られたら絶対無理矢理帰されるだろうから、
という理由で出来る限り涼しい顔をしていた。
風雷は辺りをキョロキョロしながら傘をくるんくるんと回していた。

「沖田さん、そういや通報ってどんな内容なんだ？」

風雷の質問に沖田ははぁと長い息を出してから答えた。

「何か桜の呪縛から助けてくれって話でさァ」

「桜の呪縛…」

沖田は自分だけで精一杯の為今度は気がつかなかった。
風雷の悲しそうで、苦しそうな低い声に。

「まァ良く分かんねェ通報だから戦力を少し考えてさっきの４人になったんでさァ」

「…そうか」

沖田はやっと違和感を感じ、振り返った。
風雷は振り返った沖田を見てキョトンとした顔で頭を傾げる。

「どうかしたか？」

風雷はニコリと笑って、
沖田の肩に手を置く。

「体平気か？」

風雷の本当に心配そうな声が傘から飛び出る。

「当たり前でさァ」

その言葉に沖田は前を向いて素っ気なく返した。

「無理すんなよ？そしたら俺一人で行くから」

風雷の気遣いに沖田は頭を横に振った。

「大丈夫ってんだろーが」

その言葉に風雷は心配そうな顔にさせつつ「そうか」と返した。
風雷は分かっていた。
沖田が無理しているという事を。
だが、
それを止められる心は無かった。
何故なら――
自分も強がる馬鹿だから。
それだから、止められ無かった。
そして、
目の前に悪臭漂う村が見えてくる。

門をくぐった沖田と風雷は立ち止まった。

「…此処が近松町ですかィ…？」

沖田がポツリと呟いた台詞に風雷は「そうだ」と頷いた。

近松町は――

廃れた村に等しかった。

鼻にこびり付くのは錆びた血の臭い。

地面には所々紅いモノが舞っていた。

だが死体は見当たらない。

だが、

その光景は何があったか無理矢理理解させるには十分だった。

「…行くか」

風雷は沖田より先に足を前に進めた。

風雷の後を沖田は懸命について行く。

決して沖田がこの光景に唖然とした為に風雷が先に動いたのでは無い。

動けなかったのだ。

体への負担がキツいから。

門のような場所を通った瞬間、ズドンとまるでおもりを乗せられたように苦しくなる。

思わず胸に手を置き、力をギュッと入れる。

服に皺が出来る。

心臓の鼓動が、

息が、

まるで自分の体じゃ無いように、

荒く、早くなっていく。

その時風雷が気がついた様に振り返った。

そして一瞬驚いたように目を開けた。

「…沖田さん平気か？やっぱり此処は毒がキツい…門の外に居てくれ」

沖田は風雷の行動に疑問を抱く程の余裕が無いためただ頭を横に振る。

風雷は唇を噛んでからそんな沖田を、

蹴っ飛ばした。

「がはっ…！」

沖田は目を見開いて飛んだ。

風雷の蹴りは手加減抜きだった。

口からは血が僅かに混じった唾が飛び出るが、マスクによって外には出ずに付着。

意識は手放さないように必死に目を開く。

飛ばされてく体に最早痛みは無かった。

弧を描き、九の字に曲がった沖田は門を上空から抜けて、近くの茂みに飛び込んだ。

頬を草木が容赦なく切り裂く。

地面に落ちた沖田は草木の間から風雷を見る。

僅かな隙間から見える小さな風雷。

自分が何処まで飛ばされたか良く分かる。

何て蹴りの力だと端から見れば思う距離。

いや、

最早そんなレベルでは無かった。

沖田の瞳に映った風雷は悲しそうな顔では無く、ただ切羽詰まったような顔をしていた。

沖田は声が出ない。
かすれた声すら。
だが、呟いた。

「ふ…う…らい…」

其処で沖田は重くなった瞼を閉じた。

先を読めば理解する伏線。

立つ者は一人しか居ない近松町。
町と諞いながら村のようにしか見えない廃れた町は静寂が支配していた。

「非道とは君の事を示しているのか、思わずそう思う行動ですね。ですが君の行動は正しい。逆に正しすぎて正せられません。豪放磊落、剛毅果断を保持している。素晴らしい、とだけ言っといてあげましょう」

突如、風雷の背後に男が現れる。

「そりゃどーも、俺は褒められても嬉しくはねェけどな」

風雷は傘をゆっくり閉じながら振り向く。
念の為に巻いた包帯は何時の間にか汚れている。

「それは残念。そう言えば一年ぶりですかね。お久しぶりですね」

「框…オメェ何する気だ」

男――框に風雷は目を細める。
框はニコリと微笑んだ。
神威の前で一度笑った笑みとは違う、まるで玩具を見つけたような笑み。
右腕が震える。
いや、体全身が小刻みに震えていた。

風雷は右腕を握った。
框は「親から挨拶すら教えてもらえなかったのですか？」と頭を傾げる。
風雷は「生憎、挨拶する相手があまり居なかったもんでな」と返しながら傘から刀を出す。
腰のポーチの中にあるゴムを傘に巻いて、刀を口に運んで、闘う準備を行う。

「私一人が来たと思いましたか。来なさい」

発された静かな声が響くと後ろからザッと足音をたてて兵がやってきた。
その兵達は皆ガスマスクを装着し、手には銃や刀など物騒な物が握られていた。

「分かってるに決まってるだろ。それより、此処の住人は？」

「愚問ですね」

風雷は冷たい言葉に「そうか」と残念そうに言った。
諦めたような風雷の顔に框は「冷たい反応になってしまったですね」と苦笑した。
神威の時とは全く違って表情豊かな框に風雷は「オメェのせいでな」と言い放った。

「何か用なのかよ？」

だが框は風雷の問いに答えずに笑う。

「君――３４番にね。でも驚きましたよ。まさかこんな物を人間と

扱うなんて」

風雷の眉間に皺が寄った。
風雷は眼鏡をポイッと投げた。

「あれっ？目が悪くなったんじゃないんですか？」

その框の問いに風雷は素っ気なく返す。

「伊達だよ」

「わざわざ何でかける必要が？」

風雷はポーチから小瓶を出し、その中の歯を口に運ぶ。

「一様、変装のつもりだったんだけどな」

「残念でしたね。私は貴方をすぐに見つけられるんですよ」

風雷の髪が風によって靡く。

「知るか。そんな事は。今は、オメェを」

「斬る」と言った時には風雷は消えていた。
刹那、
框の前で並んでいた兵達の短い悲鳴が響き、ドサッと倒れる音が響いた。

「こんなんのは意味ねェに決まってるだろ」

風雷の鈴のような声が聞こえた時には全ての兵が倒れていた。
框のみが立っていた。
背中を互いに向けてる二人。
肌を震わせる緊張感が漂う。

「随分早いですね」

「毒は体を壊す作用だけじゃない。それは全面的に出てる作用だ。つまり、」

風雷は振り向く。
框もゆっくり振り向いた。

「その作用を克服したら表に出てない作用が体に働く」

一度下ろした刀を再度構える。

「次は、オメェを斬る」

框は頭を傾げて言った。

「日本語は正しく使いましょうか、３４番。貴方のその使い方は間違ってます」

「それは、どう――」

ドンッ！
と乾いた音が風雷の言葉を遮った。
風雷は片手にある傘でそれを防いだ。
框の片手には煙を吐いている銃があった。

「いう意味だ？」

風雷の言葉に框は淡々と答える。

「私が玩具を捉えるからですよ」

刹那、
框が撃ち始めた。
風雷は、

「甘い」

片手の傘から弾丸を撃ち出す。
バチンバチン、とポップコーンが弾けるように弾丸と弾丸が当たる。
カチャリ、と框の銃の弾丸がきれる。
すぐに風雷は屈み、
飛んだ。
そう、
まさしく、
飛んだ。
まるで鷹のように、
低空飛行。
そして刀を――

「甘いのは、」

框の口から言葉が零れる。
風雷は気にせず進む。

「君だよ」

途端、
肩が熱く感じた。

何時だって力と心の強さは反比例。（前書き）

出来ました（＾ｏ＾）／
良かったら見てね（｀∀´）

銀時：テメェの見てぇ奴は居ねェよ。俺を出せば人気出ると思うがなァ。

神楽：そうネ。私を出せヨ。

新八：僕も出して下さい。

沖田：俺を起こして下せェ。

近藤：お妙さんを出してくれ！頼む！

土方：近藤さんの存在を忘れないでくれ。

桂：スタンバってました。

…皆、今シリアスだよォ？ねっ？落ち着こう？

皆：早く出せエエエェェェ！！

無理イイイィィィ！！

どうぞ↓

何時だって力と心の強さは反比例。

風雷は思わず傘を落とした。

「うあアアァァァ！！」

風雷は、
味わった事の無い違う痛みを感じた。
熱い、
痛みを越えて熱い感覚を。
絶叫したが口にくわえている刀を落とさず、息を整えようとする。

「くそっ…！」

風雷は傘を握るのを諦め、すぐに横跳びをした。
すると風雷が居た場所にはパンパンパンッと雨が降った。
傘が銃弾によって飛んだ。
框はそれを更に打ち、風雷から離れた場所に追いやった。
框のもう片方の手には銃が握られていた。

「銃が何個有るか確認するべきですよ」

そう言って框は一発撃つ。
風雷は刀でそれを斬る。
鈍い衝撃が刀から腕に伝う。

「つっ…」

思わず片目を瞑る風雷。

「少しは理解しましたか？」

風雷は撃たれた肩を見る。

「貫通…良かった」

安心したように怪我を見た。

「それ位の知識はあったんですね」

そう言いつつ框は弾を素早く詰め、
撃った。

「なめんなアアアァァ！！」

柄にもなく叫んだ風雷は手にある刀と口にくわえてる刀を上手く使い、避けれる所は避け、弾を全て交わした。
荒い息を出した風雷はニコリと不気味な笑みを浮かべた。

「俺が沢山の弾だけで倒れると思うか、馬鹿野郎」

框は「そうですか」と目を伏せた。
そして頭を上げ、笑った。

「ではコレで」

框は新しい銃を出し、
二丁の拳銃で撃った。

風雷は「数撃っちゃ当たる訳ねェよ」と小さく呟いて弾を避けようとしたが、取りあえず刀で全てを弾いた。
そして、
最後に一発弾が来た。
風雷は無論、それを弾こうとした。
風雷の視力は弾を弾くのを行える位良い。
簡単と言えた筈だった。
最初に来た弾は全てが神速のように早く、代わりに威力が軽いモノだった。
だが、
今回の弾はおかしかった。
いや、最初は普通の銃弾だった。
最初に来た弾より遅いモノだった。
その為、風雷は即座に拳銃の種類によっての差だろうと理解した。
今回の弾は重い為に遅いと考えた風雷は慎重にやろうと考えた。
だが、
その弾はいきなり速くなった。
いきなり、だ。
その上、
弾が刀に当たった力は予想以上に強かった。
風雷は慎重派な為、重く考えた。
だが、
それでも風雷は、
不可能だった。
弾としては強すぎる為、風雷は飛ばされた。
夜兎族である風雷が、
飛ばされた。
この事実に風雷は目を見開いた。
幾ら肩をやられたとはいえ、風雷は事実を受け入れられなかった。
投げ飛ばされた風雷は着地に成功する筈が無かった。

片手には刀を所持し、しかも片方の肩は壊れてる。
風雷は、
酷く醜い格好で倒れた。

「つっ…」

肩から全身へ走る激痛に耐える風雷に容赦ない銃弾が再度襲った。
パンッと音が聞こえた。
風雷は痛みにより横へ転がるのが一瞬遅くなってしまった。
左足の太股が熱く感じた。
じわりじわりと血が滲む。
風雷は、
叫んだ。

「うわアアァァァ！」

叫びによって痛みが柔らかくなる訳がないと頭では理解しても体は理解してくれない。
うつらうつらと朦朧となる視界。

「流石に夜兎でも出血大量はキツいですか？」

最後に聞こえた声に風雷は、
歯を強く噛み締め、
目を閉じた。

「ふぅ…」

框は意識が無くなった風雷に近付いた。
足でつつく。

反応が無いのを確認するとズボンのポケットから長い布を取り出し、捲く。
しっかり止血したのを確認すると風雷の体を担ぐ。
力無い風雷から刀が落ちた。

「倒れた傭兵の回収、頼みます」

通信機のような黒く、四角いモノを耳につけ、用件のみ伝えると框は歩いた。
頬を吊り上げながら。

何時だって力と心の強さは反比例。（後書き）

えっと、此処は質問回答コーナー（｀∀´）
いずれ本文に出すかもしれませんが、とりあえず此処でもしっかり説明をって事で（＾ｏ＾）／

・風雷の体って血が毒じゃないの？
↓血が完全な毒って事では無いんですよ。毒を大量に食べれば血は毒になるんですよ。もしくは何回も摂取し、その血の毒を消費しなければ。因みにそーゆー体になるためには毒を何回も飲まなきゃいけないんですよ？この話でその体を持ってるのは風雷と風紀のみです。まァそーゆー人を増やす可能性大です。

・だったら風雷それで枠とかを倒せば？
↓無理なんですよ、それが。確かに大量に毒を摂取すればそうなりますが、風雷の近くには沖田が居たでしょ？風雷は沖田のせいって表現は酷いですが、まァそんな訳で。

質問があったらどーぞお聞き下さい（｀∀´）
それでは、
シーユー何時かー。

電話って何か意味深なモノだよね。（前書き）

そういや一昨日クリスマスでしたねェ（｀∀´）

風雷：クリスマス？あぁ、沢山金をぼったくれる日？

神楽：駄目アル風雷。読者にはまだ夢を捨てきれてないロマンチストが居るかもしれないアルよ。でも今回サンタ来なかったネ。現世は価格が上がってるのに、サンタは夢を運んでくれないネ。

新八：神楽ちゃん、サンタはね――（ぶへっ！！

風雷：そういや神楽は何が欲しいんだ？

神楽：ピザまんネ！！

風雷：玄関に置いてあったよ。

神楽：サンタ来たネ！わぁい！！

新八：…風雷さん。

銀時：新八、口は災いの元だぞ。

風雷：どうしたの？（にこり

銀時・新八：ぞわっ

電話って何か意味深なモノだよね。

何時もと変わらない万事屋。
お決まりの三人は仕事が来ない為何時も通り各自のしたい事をしていた。
銀時はジャンプを読んで、
神楽は酢昆布を味わって、
新八は家事をして。
何時も通り、
普通の日常を送る三人。
そんな万事屋に、
プルルル！！と音が響いた。

「銀さーん、今こっち手を離せないんで出て下さい」

新聞を手に、外に出て行こうとした新八の台詞に「仕方がねェな」と頭を掻いて電話を取った。

「はい、もしもし。誰？」

「俺だ、銀時」

適当に言って適当に切ろうと考えていた銀時は相手の声を聞いた瞬間、その考えを切り捨てた。
冷たく、憎しみを隠しきれてない声。
必死に叫ぶ獣を思わせる声だった。
「はいはーい、何の用？」

近くに居る神楽に気付かれないように普通を装う銀時。

神楽は口に酢昆布を運びながら近くで寝転がっている定春の頭を撫でていた。
銀時はその姿を確認し、とりあえず一安心してから横にある電話を睨む。

「そォキレんな。話が有る。近くの団子屋に居っからよォ。早く来いよ」

ぶちっと一方的に切られた銀時は電話を丁寧に置くと、「ちょっと新刊のジャンプ買ってくる」と言ってそそくさ玄関に向かう。

「銀ちゃん」

後ろからの声に銀時は振り返った。
ソファから立ち上がっていた神楽が目に入る。
神楽は頭を傾げて、「何かあったアルか？」と心配そうな声で聞く。

「何言ってんだ馬鹿野郎。何かってジャンプだよ。ほら、今週はあの剣道の奴がヤベェんだよ」

そう言って銀時は笑うと扉を開け、
勢い良く閉めた。
閉まる直前、神楽は意味が無い事を理解しつつも思わず銀時に手を向けた。
届かない手は扉によって思いっ切り遮られる。
見えない壁を感じた神楽は銀時に向けていた手を見た。

「銀ちゃん…」

ゴミ捨てに行った新八、

心配されないように周りを見る銀時には、聞こえなかった言葉は空気に溶けた。

「あれっ銀さん？」

階段の所ですれ違った銀時に新八は声をかける。

「ジャンプ買ってくる」

銀時は短く言うと足を忙しなく走らせる。

「銀さん…？」

頭を傾げる新八を銀時は気にせず走った。

銀時はあと少しで団子屋、という所で足を止めた。

見えた。

蝶々を布に縫い付ける男の背中が。

その男は笠を深めに被り、右手には煙管を持たせ、座っている赤い布が被された椅子の上に茶を乗せていた。

銀時はその背中に静かに近付いた。

「銀時、意外と遅いじゃねェか」

片目を包帯で覆う男――高杉は振り返った。

「用件は何だ」

銀時は冷たく、手短に言う。

「くっ、悲しいねェ。オメェはこれ位の会話も楽しめねェのか？」

「そりゃ悪かったな」

銀時は高杉の横に座り、近付いて来た定員さんに「あんこの一つ、宜しく」と注文する。

何も知らない定員は営業スマイルを浮かべて「少々お待ち下さい」と頭を下げた。

「なァ銀時、あの死体屋の餓鬼は元気にしてっか？」

高杉の台詞に疑問を抱きつつも銀時は「当たり前だろーが」と呟いた。

定員はあんことお茶を置いて「ごゆっくり」と再度頭を下げて他の客の元へ歩いていった。

「なァ銀時、情報交換っていかねェか？」

ふっと不適に笑う高杉を見て銀時は眉間に皺を寄せた。

「情報交換…？」

「アァ、こっちはテメェに今の春雨について教える。だからオメェはあの餓鬼について教えろ」

高杉の言葉に銀時は肩を竦める。

「何でオメェに風雷の事教えなきゃなんねぇんだ。だいたいよォ、俺達は今の春雨に用なんかねェ」

その言葉に高杉は「知んねーのか」と哀れみが籠もった瞳を細めた。

「あの餓鬼は今狙われてる可能性が有るんだよ」

その言葉は銀時を震わせるのには十分だった。

「テメェ！」

「悪いがあくまで可能性だからな。どうする？」

にやりと口のみを笑わせる高杉に銀時は唾を飲んで言った。

「分かった」

知りたい事は情報交換して手に入れろ。（前書き）

明日から確か此処（小説家になろう）が確か休みなんでしたっけ？って事で今日は特別に2話書きました（＾ｏ＾）／

銀時：暢気だな、おい。

神楽：馬鹿だから仕方がないネ。

新八：だから、神楽ちゃんったら――

洒流奇：毎度毎度話す内容がウチを罵るだけかい！おかしいだろ！

風雷：仕方がねェだろ。お前が馬鹿なんだからさァ。

沖田：んな事はいつもの事だからどうでも構わねェ。が、俺が何時目覚めるかは気になるんでさァ。

近藤：あぁ、俺も何時お妙さんとのラブラブ生活が始まるか気になる！

お妙：黙れエエエェェェ！ゴリラは動物園で成仏しやがれエエエェェェ！！

近藤：ぶげえっ！！

土方：…近藤さん。

お妙：えっと何かしらこの企画？私の初出演はゴリラ退治なのかしら？

神楽：姉御ー！！

銀時：えっ、確かお妙はずっと出さないんじゃなかったの？（新八の耳元で

新八：僕もそう聞いてたんですが…。

お妙：何か二人共問題があるのかしら？ねェ、新ちゃん、銀さん？

銀時：いえいえ、とんでもないですよ！えっ？俺がお前の出演拒否する訳ねェじゃねェか！そんなサ☆エさんで波へ☆さんの頭の一本の髪位重要だよな、新八！？

新八：そうですよ姉上！デカマルコちゃんのタ☆ちゃんの眼鏡位重要ですよ姉上！！

風雷：…それってそんなに重要？それに日曜日にやる大物番組のキャラ言って平気か？

銀時：当たり前だアアァァァ！髪の毛一本もねェおっさんの気持ち考えろオオォォォ！髪の毛一本あるだけで気持ちは全然違うんだよ！！しかも貶してねェから平気だしイイィィィ！！

新八：眼鏡は重要ですよ！？眼鏡のお陰で僕はキャラが有るんですからね！？眼鏡がなかったら僕はキャラも何も無いんですよ！？それに僕はただ☆マちゃんも僕と同じ感じだと共感してるだけですから！！

風雷：そんな力説しなくても…。

お妙：まァ二人の気持ちは良く分かったわ。

風雷：分かったのか…？

お妙：殺して欲しいんでしょう？

銀時・新八：ぎゃあああああ！！

風雷：…こんなドタバタ小説ですけど、
来年も宜しくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

知りたい事は情報交換して手に入れろ。

「今、元老院は新たに仲間に入れた男、框っつう奴に違和感を感じたのか俺達、鬼兵隊に仕事を任せた」

銀時はただ真剣に耳を傾ける。

口に団子を運びながら憂鬱そうに目を細めているが、その顔は真剣そのもの。

高杉は煙管を口元に持っていっては離す、という行為を繰り返しながら話す。

「その男は春雨の取引相手の息子らしいんだが、その母親が意外な奴が出てきた」

「…」

銀時は口の中に広がる甘さをお茶で流す。

「確か此処に四天王とか居たんだってな」

銀時は「そうだよ」と短く言った。

「まァオメェに分かるように言えば、その四天王の一人の華陀がソイツの母親だ」

高杉は近くに置いておいた茶をぐびっと一気に飲んだ。

「そしてソイツは春雨に居る」

高杉に銀時は不服そうに口を尖らせた。

「…それがどうしたんだよ？」

「んなの興味ねェ」とでも言いたげな銀時に高杉はハァと溜息を零した。

「因みに華陀は春雨の戦艦で、壊れたぜんまい仕掛けの人形のような状態で囚われてる」

「…知るか」

「つまり、框っつう奴が春雨を恨むかもしんねェんだよ」

銀時は空になったコップを置くと溜息を零した。

「んな単純な理由でその框っつう奴春雨と戦うかよ。それにな、風雷を捕まえたって意味ねェだろ」

「本当にテメェは馬鹿だな。人間っつう生き物は単純な理由で行動出来んだよ」

その言葉に銀時は高杉を見た。

単純な理由、つまり親族を失う事で春雨、つまり一つのバカデカい組織と戦うような奴は、

居た。

自分、そして高杉が。

他にも沢山居た事を思い出す。

桂、坂本、他にも沢山の仲間が。

「それにな、あの餓鬼を捕まえる意味は簡単だ」
高杉は銀時の視線から逃れるように前を向く。
「あいつの爆弾だよ」
「！！」
銀時はその言葉に手を震わせた。
「分かったか。じゃあ次はオメェが俺に情報を寄越せ」
銀時は立ち上がる。
高杉はそんな銀時を冷たい眼差しで見る。
「聞こえてんのか銀時。俺に情報を寄越せってんだよ」
一歩銀時は足を進める。
「そんなん調べられるんならアイツの事も調べられるんじゃねェのか？」
今にも走り出そうな銀時に高杉は唇を噛みながら言った。
「死んだ人間は調べられねェよ」
「…はっ？」
銀時は思わず振り返った。

「俺が知りたいのははっきり言ってあの餓鬼自身の事じゃねェ。母親の方だ」

銀時は一瞬目を細めたがすぐに目を開いた。
思い出したのだ。
風雷が見せてくれた写真の女を。

「お前に聞きてェのは一つ」

高杉は立ち上がる。
銀時と同じ目線になる。
銀時と高杉の真っ直ぐな視線の間には誰も入れない。

「あの餓鬼の母親、風紀は俺の命の恩人の女なのか」

銀時はその言葉に、
声を出す事も出来ず、
ただ、
ただ、
何も出来なかった。

知りたい事は情報交換して手に入れろ。（後書き）

前書き長くなりました。
すいませんＷＷ
そして大物番組のアニメを貶してすいませんでしたアアアァァァｍ
（＿＿）ｍｍ（＿＿）ｍ

新年明けても宜しくお願いします（＾ｏ＾）／

過去を走る鬼。（前書き）

此処（小説家になろう）が休み、のはウチの勘違いでした（｀∀´）
どーもすいませんｍ（＿＿）ｍ

新八：だったら僕に謝って下さい。

銀時：俺にもだ。

洒流奇：何で？

風雷：…昨日のお妙って人が二人をぼっこぼこにして笑顔で「作者さんに私を出すよう言っといて下さいね？」と言って帰ったからだよ。

洒流奇：…神楽、お妙さんに破亜限堕津を渡しに行って。

神楽：人件費として酢昆布１０個ネ。

風雷：俺がやるよ。はい、酢昆布。

神楽：風雷ありがとう！じゃあ行ってくるネ！

洒流奇：行ってらっしゃーい（｀∀´）／

銀時：テメェはあの世に行ってらっしゃーい！

洒流奇：ぎゃあああああ！

風雷……空が、綺麗だな。

過去を走る鬼。

鼻の中に入ってくる空気は火薬や肉が腐った臭い。
手や体にあるのは生ぬるい紅い血。
口の中にも血が感じれる。
そして、
目の前に広がるのは、
仲間の無惨な死体。
そんな仲間を鴉は無邪気な子供のようにつつく。

「はぁはぁ…」

「高杉！高杉っ！！」

高杉と呼ばれた男は大の字になって倒れている。
荒い息で精一杯呼吸をする男――高杉は痛みに堪えるように片目を閉じ、片目を抑えていた。
そして、
その抑えている手にはべっとりと血が付いていた。
唯一立っているのは、
銀色の髪を靡かせた、
白い羽織りを血で染めた、
鬼の子が居た。
鉛のように薄暗い空には、
希望が見えない。

「くそうっ！」

鬼の子は頭に捲いていた鉢巻を高杉の片目に押し付けた。
そしてぐるぐると捲く。
白かった鉢巻は少しずつ紅く染まっていく。

「高杉！高杉っ！！」

それしか出来ない歯がゆさを感じつつも何も出来ない鬼の子はギシッと歯軋りした。

「あらっ其処の方平気なの？」

突如、
鈴のような声が、
地獄に響いた。
鬼の子は辺りを見渡す。

「此処、此処」

声のする方を見るとやせこけた木があった。
そしてその木の枝に、
天使のような女が居た。
だが、
その女の顔を覆っている笑みはまるで死神。

「助けてあげましょうか？」

女はふわりと綺麗に着地する。
白い髪がさらりと流れるように揺れた。
紅い瞳を細めて微笑む女の纏っている服はあまり見た事の無い服。
着物にも見えるが何か違う服は汚れを知らないように滑らか。

こんな格好、
そしてこんな奴、
人間じゃない。
そう判断した鬼の子は刀を取った。
が、

「止めて。私、また人を殺したくは無いの」

女は手を振って、悲しそうに笑った。

「天人なんかに…誰が殺されるかァァ！！」

だが鬼の子は刀を横に振った。

「止めて」

しかし、振った手は止まった。
それは、
女が実力行使で止めた訳ではなく、
ただ単純に自分が止めてしまった。

「後で話しましょっか。とりあえず今は彼ね？」

女は鬼の子の横を通ると痛みで呻いている高杉を指差した。
鬼の子は唖然としたように何も出来ずにただその光景を見る事のみしか行わない。

「力を抜いて…大丈夫、生きれるから」

女はそう言い、高杉の手をゆっくり、一本一本指を離し、高杉の頭

に乗っかっている鉢巻を取った。
鬼の子は目を背けた。
自らのせいで傷を負った高杉は無事の方の瞳を開いた。

「ちょっと痛いけど…貴方を生かすためだしね？だから、貴方も我慢してね」

そう言うと女は懐から葉を出した。
その葉を口へと運び、
食べた。
ごくり、と女の喉が唸った時、
女の髪の色が変化した。
少しずつ漆黒へと染まる白髪。
鬼の子は瞬きをした。
髪が、
髪の色が、
黒くなる。
紅かった瞳も何時の間にか黒く染まっていた。
女は自らに向けられている視線に気付き、鬼の子の方を向いた。
白い肌と正反対の黒い髪、黒い瞳。
唖然とする鬼の子に女は微笑んだ。
まるで、
死神のように。
女は自分の腕を口元にやると、
切った。

「なっ！？」

鬼の子は思わず言葉を零した。
女は気にしないように、端正な顔で表情を作らず、

その手から流れる血を、
高杉の目に流し込んだ。

「アアアァァァ！！」

目を抑えようとする高杉の手を女は払い、そして地に押し当てた。
高杉は痛みに耐える為に必死に抗おうとするが女の腕はビクともしない。

「テメェッ！！」

鬼の子は再度刀を手に取るが、

「止めなさい」

女の声に一瞬動きを止める。

「こんなに汚い場所でこんなに大きな傷をさらけ出すと何かの病原菌が入るわよ？それを阻止するためなの。それに、」

女は鬼の子に目をやった。
真っ直ぐ自分を見る女の瞳は段々紅くなっていった。

「私の血は今は薬だから」

鬼の子は迷う。
この女を信じるか、
この女を斬るか。
そう迷っている内に女は手を離した。
高杉は「はぁはぁ…」と荒い息を落ち着かせようと肩を忙しなく動

かす。

「良く出来ました」

まるで高杉を子供のように頭を撫でると女は懐から今度は包帯を出した。

そして高杉の顔に巻きつける。

さっきまで鉢巻全てを染める位大量に出ていた血は今度はあまり出なかったのか包帯は紅く染まらなかった。

「はい、合格。そうだな、痛みを我慢した代わりにコレ、あげる」

女は懐から煙管を取り出すと高杉の頭の横に置いた。

「はぁ…お前、敵…か？」

必死に言葉を作り出した高杉に女は「さぁね」と笑って見せ、頬を撫でる。

「安静するべきだからね？」

そう言うと女は立ち上がり、くるりと鬼の子に顔を向けた。

さっきまで黒かった髪は既に白く染まっていた。

「貴方の名前、教えてくれる？ついでにこの子のも」

女は高杉を指しながら頭を傾げる。

「俺は…坂田銀時。ソイツは高杉晋助だ」

「坂田銀時…高杉晋助…」

女は二人の名前を何度も言うと「ありがとう」と頭を傾げた。
柔らかく、全てを包むような笑みに鬼の子――銀時は頬を僅かに紅くさせながら目を背けた。

「…お前の名――？」

「元気でね、侍さん達」

女は何時の間にか銀時に近付き、その頬を撫でた。
銀時は女を上から見つつ、いや、それは体格的に仕方がないのだが、ただ口をぽかんと開けて見ていた。

「侍…坂田銀時、高杉晋介、貴方達の事はずっと覚えておくわ。貴方達の闘いは素晴らしかったもの」

女は銀時の頬についていた血が手に移ったのに気がつくとその手を舐めた。

「次の代も、ずっと、ずっと」

そして女は銀時を横切った。
ただ一人、立っている銀時は自らの頬を撫でた。
温もりの有る肌は、
また会いたくならせた。

団子と記憶と思い。（前書き）

洒流奇：そろそろお正月だし、此処だけ少し違う事しよードンドンパフパフー！！

神楽：お年玉ネ。

新八：それですね。

銀時：あぁ、金が欲しい。

風雷：確かに。それが一番欲しいのが人間だよな。

神楽：って事で金アル。

洒流奇：あの…俺、今中3だから…ねっ？無理だよ。

銀時：じゃあ何する気だよ？

洒流奇：色んなキャラを出そうパーティー！！だよ？

新八：もう十分で――

キャサリン：十分ジャネェヨ馬鹿ヤロー。ワタシ、全然出テネェヨ。一話分シカ出テネェヨ！！

タマ：キャサリンさん、我慢して下さい。私はだしてすら頂いてません。

新八：…煩い方が来ましたね…。

お妙：新ちゃん？どうかした？

新八：いっ…いえ…。

神楽：定員オーバーだと話が進まないアルな。

「そうだ」

銀時は間を取ってから小さく呟いた。
一瞬で頭を巡った記憶を隅へと押し込む。
高杉は目を閉じ、「そうか」と返した。

「じゃあ、俺は行くからよ」

銀時はそう言って走った。
高杉はその背中を見て微笑んだ。

「あの…すいません」

「あぁ？」

気まずそうに定員は高杉に近付くと紙を渡した。

「さっきのお客様のご友人なら…代金お願いします」

良く見るとその紙はレシートであった。
高杉は静かに懐から財布を取り出すと小銭を出し、静かに去った。

「そろそろ行くぞ」

土方の言葉に山崎は頷いた。
風雷に言われたように屯所に戻り、ガスマスクなどをしっかり用意した土方達は車を出そうとした。

「待てエエエェェ！！」

突如、車の前に人が飛び出る。

「ちょっ…！！」

土方は急ブレーキをかける。

「…ってテメェ万事屋！テメェ何する――！」

「風雷は今何処だ！？」

窓を開けて頭を出して怒鳴る土方に銀時は怖じ気づに肩をガシッと勢い良く掴んだ。

「あっ…？アイツは今近松町だ」

土方は眉間に皺を寄せながらも答えた。

「俺を其処に連れて行きやがれっ！」

銀時は無理矢理扉を開けるとパトカーに乗り込んだ。

「ちょっ旦那…困りますよ！」

山崎の言葉に銀時は「うっせぇ」と冷たく返し、土方に「急げ！」

と車を出すよう怒鳴る。

「ちっ…まァどうせ行く気はあったんだ。構わねェ」

土方はアクセルを強く踏んだ。

「でも旦那、彼処は毒が撒かれてるらしいんですけど平気ですか？ガスマスクは沖田さんのも入れて3つしかありませんよ？」

「…山崎」

山崎は隣でにっこり微笑む銀時に頭を傾げた。

銀時は山崎に近付く。

突如、バリンッ！！とガラスが割れる音が響いた。

「旦那アアアァァァ！！」

山崎の体は銀時の拳によって見事に宙を舞った。

「山崎…！俺ァオメェの亡骸を越えていく！」

ガッツポーズの銀時に土方は精一杯ツッコミ。

「テンメェ！何してんだ！？」

至って普通のツッコミに銀時は「まだまだ未熟だねェ」と頬杖をついて勝ち誇ったように笑った。

土方は仕方がなくブレーキを押そうとする。

「止めんな」

「…はっ？」

土方が思わず声を零してしまったのは無理がなかった。
銀時の顔は一変し、真面目、いや、無表情と言ってもおかしくない位何もなかった。
それは、
普段お調子者の銀時とは違った。

「…分かった。その代わり、何があったか教えろ」

土方はブレーキを押そうとしていた足の力を緩め、ミラー越しに銀時を見つめた。

「さっき知人から情報を貰ってよ、短く言うと、風雷は攫われてる可能性があんだよ」

「はっ！？んな事がある訳ねェだろ。総悟も居るんだぞ！」

「知らねーけどよ、とりあえず急いでくんねェか？」

土方は歯を思いっ切り噛んでからアクセルに力を入れた。
ブオォンと車は低い唸り声をあげ、タイヤを高速回転させる。
放り出された山崎はただその車を見送る事しか出来なかった。

框は風雷を担いで船に乗り込む。
其処には一人の小柄な少女が居た。
黒い目に二人の姿が映る。

肩まで伸びた髪を結わかずに手櫛で整えていた少女は顔を輝かせた。

「あっ！王子！」

少女はふんわり柔らかい黒髪を揺らして框に走り寄る。
だが、少女はすぐに顔を引きつけた。

「こんな服着せさせられて…王子は…王子は…！」

「すぐに脱がせる」

怒りを露わにする少女に框は風雷を下ろして、風雷の上着を剥ぎ取る。

「好きにするが良い」

框はその服を少女に渡す。
少女は「扉を開けて」と低い声で言った。
框は無表情で頷くと船の扉を開けた。

「邪魔っ！」

少女は何時の間にか手にしていたナイフで服を引き裂き、扉から外へと放った。
ボロボロになった服は風によって流される。

「じゃあ…約束通りお願いしますよ？」

少女はさっきとは打って変わって儚げな柔らかい笑みを浮かべる。
框はコクンと頭を上下に振った。

「あぁ…王子…私の…」

少女は風雷の頬を撫でる。
船は少しずつ近松町から離れる。

「彼処に行くの？」

少女は頭を傾げた。
框は「そうです」と小さく言った。
少女は小刻みに揺れながらも風雷をぎゅっと抱き締めた。
少女が着ている白いワンピースに皺が寄る。

「那落迦の楽園」

框は少女に背を向けて歩いた。
少女は黒い瞳に風雷を広げる。
少女の左目の下にある黒子が白い肌に浮き立つ。

「…私達の出逢った場所」

少女の悲しげな声が響いた時には、
框は居なかった。

団子と記憶と思い。（後書き）

…高杉さん、ごめんなさいｍ（＿＿）ｍ

後から来た人は最初に何があったか分かる訳が無い。（前書き）

洒流奇：嬉しいお知らせ！昨日のアクセス数がウチの今までのアクセス数の第二位！！

神楽：こんな屑小説を読むなんて皆頭が平気アルか？

銀時：平気じゃねェだろ。

風雷：今更だよ、神楽。

新八：まァおめでとうございます。…僕は出てなかったけど。

洒流奇：やっぱり地味に高杉さんの団子事件が良かったのかねェ？

銀時：つまり俺のお陰か。

風雷：いや…坂田さんはただ金払わなかっただけじゃ…

銀時：風雷！忘れるべき事もあんだろーが！

神楽：脳無し銀ちゃんに注目しても意味ないネ。

新八：脳無しじゃねェ。

銀時：何で俺こんなに貶されてるんだアアァァァ！！

風雷：よい子の皆は悪い事しちゃいけねェよ。

後から来た人は最初に何があったか分かる訳が無い。

「…此処か」

ガスマスクなどで白く体を包んだ銀時は唖然とした。
土方も無言で足を動かす。
其処には、
風雷と沖田が見た光景が変わらずあった。
土方は門の前で辺りを見渡した。
その時、

「うっ…」

小さな呻き声が土方と銀時の耳に届く。
二人は声がした方へと近付く。

「総悟っ！」

土方は茂みから沖田を引きずり出した。
隊士服が所々解れ、沖田の顔にも小さな傷が無数に存在した。

「どうしたんだ、総悟！？」

土方は近くに止めといた車に沖田を運びつつ声をかける。
片方の肩を支えてる銀時も「大丈夫か？」と声をかけた。
沖田をパトカーの後部座席に寝転がらせる。

「…ひじ…かたさん…じゃ有りませんか…」

荒い息の沖田のマスクを外し、口元に酸素ボンベを乗せた。

「何があったか後で言えよ。今は休んでろ」

「…すいません」

土方の言葉に沖田は素直に謝罪を口にした。

「風雷…知ってるか？」

銀時の言葉に沖田は頭を横に振った。
銀時は顔を伏せる。
土方は頭を横に向けた。

「行くぞ、万事屋」

土方の言葉を聞いてやっと銀時は動く。
二人は沖田をパトカーに置いて近松町の門を通る。
そして、目の前には、
赤い水溜まりがあった。

「…これは…」

銀時は唇を噛む。
土方は何かに気付いたようにしゃがみこんだ。

「これ…あのガキの…」

黒縁眼鏡が血溜まりの横に寂しげに置かれてあった。
土方は銀時に眼鏡を渡す。
銀時は眼鏡を壊さない程度に力を入れた。
何故か、
嫌な予感しかしない。
そんな自分にも更に苛つく。

「…こりゃあ！！」

そして、
決定的なモノも落ちてあった。

「『黒雲』と傘！！」

そう、
今の天気にあうような黒光りする刀と、
中途半端に開かれてある傘が落ちてあった。

「くそうっ！」

銀時は思わず地団駄を踏んだ。

「落ち着け…万事屋」

土方は暗い表情で言う。

「コレが落ち着いて――！！」

「落ち着け」

やけくそ状態の銀時は土方の苦しげな声に小さく「悪い」と呟いた。
土方は「仕方ねェ」と頭を横に振って銀時の肩を叩いた。

「調べるぞ」

「あぁ」

二人は辺りを丁寧に見渡す。
血溜まりの場所からそう遠くない所に家がいっぱい連なってある。
一軒一軒確認するが、中に人が居たとしてももう話す事は出来ない状態であった。
銀時達は全ての家を見終わると溜息を思わず零す。

「こりゃあ…」

「駄目か」と言おうとした銀時の横を花びらが落ちた。
ガスマスクに付着し始める花びらに二人は言葉を失った。
目の前には、
桜が咲き誇っていた。
言葉に出来ない程の満開の桜。
この人々の手を悴ませる風が吹き荒れる時期に。
しかもその桜の驚く点はそれだけでは無い。
花びらが、
紅かった。
淡いピンクというレベルでは無い。
紅、だった。
梅と間違えそうになる程に。
銀時達が呆気に取られてる時に、
降ってきた。
花びらでは無く、

人が。

「貴方たち、敵ですか」

敵意剥き出しの少女だった。

「違う、遅くなったが俺は真撰組だ」

土方は自らを指し、銀時より一歩踏み込んだ。

「そっか、おばあちゃん達平気みたいだよ」

少女は安心したように頷くと上を見た。
雄大な桜の隙間には痩せこけたお婆さんが居た。
そして、
お婆さんの隣には小さな少女が居た。
二人は頷くと落ち着いた動きでのそりのそりと降りてくる。

「貴方たちは味方なのですよね？」

お婆さん特有の嗄れた声に銀時達は頷く。

「多分大丈夫だよおばあちゃん！」

最初に落ちてきた少女はグッと親指を突き出した。

「大丈夫…この人達…大丈夫…」

お婆さんに隠れた少女は小さく復唱する。

「…！お前が持ってんの見せてくれ！」

銀時はお婆さんに隠れた少女に向かって手を出した。
少女は一瞬ビクッとしてから「…うん」と持っている物を銀時の手に乗せた。
白い防護服の上に乗ったのは黒い布だった。
その黒い布は、
土方が着ている服と似ている。

「こりゃあ…！」

ぎゅっと手に力を入れる銀時。

「…平気…？」

銀時に布を渡した少女は頭を傾げた。

「あぁ…」

顔を暗くさせながらも銀時は一様言葉を発した。

「なァ、お前達此処で何が起こったか教えてくんねェか？」

お婆さんは「分かった」と言って頷いた。

「だがその前に…」

「あっ？」

何かを言いかけたお婆さんに銀時は頭を傾げる。

「その白い服は脱いでも平気だろう」

土方と銀時は顔を見合わせた。

確かにおかしい。

自分達二人はこんなに重装備なのに、

目の前の三人は着物位しか着てないように見える。

「桜は、我々を呪縛する代わりに、毒を浄化する作用がある」

銀時は「脱いでも平気なのか?」と頭を傾げた。

お婆さんは「うむ」と頷いた。

銀時達はゆっくり脱いだ。

最初は半信半疑だったが、桜の花びらが横を通る度に心地よい安らぎが感じられる。

「では、話すかの」

お婆さんの言葉に二人は唾を呑み込んだ。

第三者視点の話は意外と残酷。（前書き）

今年最後の投稿！！！
って事で言いたい事があります！！
誤字脱字、日本語がおかしい、何かいろいろ間違ってるなど……多くのミスがあっても読んでくれた方……
ありがとうございます！！
来年も頑張りますので宜しくお願いしますm（＿＿）m

第三者視点の話は意外と残酷。

「いきなり男達がこの町に降りてきたんだよ……」

お婆さんは顔を暗くさせながら語る。

桜の花びらで今日はジャムを作ろうか、という話になったお婆さんと少女二人は桜に向かっていた。

「おばあちゃーん、やっぱり蕾のが良いよねェ？じゃあ登ろうよー」

元気良く走る少女にお婆さんは「私も登らなきゃならないかねェ？」と頭を傾げた。

「勿論！おばあちゃんにどれが良いか聞かなきゃだもん！」

「体…平気…？」

傍らに居る少女にお婆さんは「頑張ろうかねェ」と笑った。

少女二人は顔をパアッと明るくさせる。

そして三人はゆったりと登り始めた。

と、その時、

「キャアアア！」

叫び声が響いた。

三人は慌てふためながらもとりあえず急いで桜に登る。
三人は桜の花びらの隙間から町に何があったか見る。

「お前誰――がはっ！！」

「邪魔だアアァァ！」

「止めてエエエェェェ！いやアアァァァ！」

「はっははは！死ねエエエェェェ！！」

狂ったような声、叫び声などが色々な場所から聞こえてくる。
白い防護服で体を包む男達は同情も何も感情を抱かないように
無残に殺していく。

「あっ…あぁ…おばさん…おじちゃん…！！」

さっきまで顔を明るくさせてた少女は顔色が少しずつ変わっていく。
小さく微笑んでいた少女も大きな瞳から水が溜まっていく。
お婆さんは二人の肩を抱いている。
が、その手は震える。
お婆さんは「呪いじゃ…桜の…！」と呟く。
そして、
町は見るも無残な姿に変わっていた。
三人が絶望したように顔を暗くさせた時、門から二人の少年がやってくる。
黒い格好の二人は門の所で突っ立っていた。
遠くが見えないお婆さんだが、二人の少女は見えた為、「彼処に人が…」と指差した。

「…黒い…人…」

「…誰かの…？黒い…？あぁ、真撰組の…かね…でも誰が…？」

頭を傾げているといきなり片方の少年が飛ばされた。
すると残っている少年の前に黒髪の男が白い防護服を纏っている人達を引き連れてやって来た。
そしていきなりの戦いが繰り広げられ、血だらけになって倒れる茶髪の少年。
黒髪の男は茶髪の少年を拾い上げると近くの船に乗る。
他の兵達も回収終え、やっと出発するか、という時に船の入口が開いた。
まだ何かするのか…？と恐怖で震えていると小さな少女が黒い服を切り裂き、そしてまた扉がしまった。

「…行ったね」

船が去る姿を見て、三人はうなだれた。
何分、いや、何時間経っただろうか、という時に白い防護服を来た男達――銀時達がやってきたのだった。

「…って感じなんだよ。なァ、私ら以外に生きてる奴は…？」

お婆さんは語り終えると銀時の腕を握った。
銀時は俯く。
土方が頭を横に振る。
それを見た三人は顔を真っ青にして崩れた。

「…とりあえず江戸でほとぼりが冷めるまで居た方が良いよな。来い」

土方はお婆さんと少女の肩を担ぐ。
銀時も一拍遅れて少女を背中におぶった。

「…お父さん…お母さん…おじさん……」

絶望したような暗い声が銀時の耳元で踊る。

「俺が仇とっから…安心しろ」

濡れていく肩に銀時は優しげな声を出した。

「うっ…うん…」

「だから悪いがちょっと聞いていいか？」

「分かっ…た」

力無く頷く少女に銀時は俯く。

「その…攫われた茶髪のガキは…」

「似てる」

「…はっ？」

銀時は少女の言葉に頭を傾げる。

「お話…の時見せてくれた…桜の呪縛…作った…人に」

少女は銀時の首周りに捲いている腕に力を入れた。

「あの人…似てた…」

銀時はもう聞いても意味ねェか…と諦め、空を仰いだ。

「黒髪の…攫った人、おかしかった」

突如、少女はポツリと呟いた。

「何がだ?」

「私、目…良い。攫われた人みたい…に銃弾を斬る事…は無理だけど、見た」

「…何を」

「引き金…を引いた数と、攫われた人が弾いた数…有ってない。当たった数を…入れても…有ってない」

「どーゆー事だ?」

眉間に皺を寄せる銀時に少女は、「知ら…ない」と返した。

目の前に見えてくるパトカー。

沖田は銀時達を見て、悲しそうに俯いた。

「帰るぞ」

寂しげな土方の声に皆頷かない。
パトカーは土埃をあげながら去っていった。

第三者視点の話は意外と残酷。（後書き）

ってか何だろう、儚げな感じの少女、目良すぎだろう！！！
って思いましたが、すいません。
一様框の戦い方を少し解明！！って感じにしようとした結果です！！
最後の最後まですいません！！

荒らされるのは何時も自分の家。（前書き）

正月なんで今回此処はパーティー会場に！！←←

――――

正月だからパーティーしようと言った作者のせいで本文がシリアスなのに始まったパーティー。
風雷は大きな会場の端で成り行きを見守っていた。
銀時達はテーブルの上にある食べ物にがっつき、桂はエリザベスと本文でどうやって活躍しようか語り、土方は沖田と相も変わらず戦い、近藤はストーカーのような愛の告白をお妙にやり、それをお妙は近藤を殺す気で蹴り飛ばし、さっちゃんは銀時を天井から覗き、キャサリンやお登勢やたま達はのんびりと会話。
本当に楽しそうだなァ、と風雷は微笑。
そんな時に会場の扉が開く。
無論そんな事で馬鹿達の動きは止まらなかったが風雷は一瞬動きを止めた。
…相も変わらず作者の好みで出されてるな、と風雷は溜息を零す。
其処には、
「高杉は何食べる？やっぱり正月だしお餅？」
「団長ー、喉につまらせるんじゃねェぞ」
「…」
神威、高杉、阿伏兎が居た。
もうこんな事には慣れたのか馬鹿達は行動を止めない。
風雷は手にしている皿の上にある餅を口に運んだ。
ん、あんこ意外と旨い。
風雷は初めてのあんこを幸せそうに頬張る。

好きなだけ食べて終わるであろうパーティー。
まっそれでいっか。
風雷は食べ終わった皿に更に餅を乗せようと足を動かす。
おっみっけ、と風雷は最後の一つのあんこ餅に箸を伸ばした。
と、その時他の所からも箸が餅に忍びよる。
風雷はそれに気付き急いで箸を伸ばす。
相手も風雷が餅を狙っている事に気付いたのか動きを速める。
だが其処は風雷、風雷は餅が乗せられている皿を先に取って自らの方にあんこ餅を寄せた。
…という事で風雷の勝利。
風雷は相手に文句を言われる前に口に入れ、相手を見る。
神威であった。
「ねェ、それって俺に挑戦？」
神威はにこりと笑う。
苛立ちがひしひしと伝わる風雷。
「…弱肉強食の世界だから仕方がない」
風雷はそう言ってそっぽを向いて次なる目的地、ずんだ餅に向かおうとする。
が、いきなり何かが衝突。
顔を上げると高杉が居る。
「悪い」
風雷はそう言って横を通ろうとする。
「お前、口見ろ」
高杉は風雷の肩を掴んで言う。
風雷は頭を傾げつつも自らの唇を指でなぞる。
…あんこがあった。
「…サンキュー」
顔が火照りそうになるのを抑えて声を出す。
どうやらさっき神威との戦の時についたようだ。
「ちょっと待て」

再度風雷の肩を掴む高杉。
「まだついてるぞ」

荒らされるのは何時も自分の家。

ドクンドクンと波打つ感覚が太ももと肩に感じる。
体は鉛より重いのではないか、思わずそう感じる位重たい。
そして、
瞼は世界を拒絶したように開かない。
このまま…ずっと…、と思っていた時、
顔に冷たいモノがかかった。

「…んっ…」

仕方がなく重たい瞼を開ける。
冷たい床に置かれてる体。
…あれ？と眉間に皺を寄せ始めた時、

「良く寝ましたね」

声が響いた。
その声を聞いた瞬間、
頭に巡る嫌な記憶。

「！？」

風雷は体を起こし、その声から反射的に離れようとした。
だが、

「無理ですよ」

背中に、
重りが乗っかっていた。
天井から丸い円形のモノが出ており、それが風雷の体を固定していた。

「それにしても驚きました。君が此処まで寝るなんて」

手足をじたばたさせ、その場所から逃れようとするが、
意味が無い。
意味が無い事など百も承知だが、
それしか出来ない。

「そういえば君、６年位しっかり寝た事は無いでしたっけ？」

框は風雷に近付き、しゃがむ。
風雷の頭の少し上にある框の頭。

「…」

風雷はキッと勢い良く睨みつける。
框はその顔に何も感じないように笑った。

「君、今度は逃げられませんよ？」

「…逃げる」

「逃げる為の足が壊れるから無理ですよ」

風雷は一瞬口をぽかんと開けるとすぐに後ろを見る。
男が二人居た。

その男の手には、
金槌が。
すぐに顔が強ばる。

「逃げたお仕置きをしましょうか？」

喉が壊れる位、
叫んだ。

「ただいま」

少しずつ暗くなる空。
その時に響いた声は空にあう位悲しい声。

「銀さん（ちゃん）！」

神楽と新八が飛び出てくる。

「どうしたんですか！？ジャンプ買ってくるって言ったままどっかに行って！」

「そうネ！私心配したアルからな！」

銀時は自分の横を固めるように頬を膨らます神楽と新八の頭を撫でた。

「悪いな、急用を思い出したんだよ」

「銀ちゃん…？」

銀時の行動に神楽と新八は頭を傾げる。
そして三人が家に入った時、

「頼もう！」

突如背後に大きな声が響いた。

「！？」

銀時は勢い良く後ろを向く。
神楽と新八は銀時の緊張感を感じ、ゆっくり振り向いた。
其処には――

「何じゃ？依頼じゃぞ？」

男の子が居た。
新八よりやや低い位の男の子。
艶やかな黒髪をポニーテールに結び、横髪を垂らした男の子が。

「…何の用だ？」

銀時は肩の力を抜き、少年を見る。

「おうおう、御主坂田銀時と名乗る者かえ？ちと御主に依頼が有るんじゃ」

こいこいと手を振る少年に銀時は「今日は閉店だ」と背を向けた。
神楽と新八は「えっ？」と言葉を零す。

「此処で言ってしまっても我は良いんじゃぞ？」

得意満面の少年は手を組み、更に誇らしげに胸を張る。

「…神楽、新八、中入ってろ」

銀時は神楽と新八の背中を押す。

「嫌アル！」

「心配は入りません！」

二人はその手を振り切って銀時の横に並ぶ。

「我はどっちでも構わないが。どうする、明（さや）？」

いきなり少年が意味が分からない言葉を放つ。

三人が眉間に皺を寄せてると、

「駄目。出来る限り、迷惑、かけない。それ、決定事項」

突如少年の頭上に逆さまに居る少女の頭が。

良くみると天井に足をつけて立ち上がっている。

「明、御主は何時も天井から現れるのう。ドアから入らんか」

唖然とする銀時達の前に居る少年は突如聞こえた頭上の声に驚く事は無く、溜息を零した。

「不可能、私、変える、王子だけ」

「そうか、そりゃ残念じゃ」

少女はすたっと床に足をつける。

「依頼、其処の男、のみ。許すのは、其処の男」

単語しか言わない少女は銀時を指差す。
少年に負けない位の艶やかな黒髪をショートカットにし、右目側の髪をピンで止めて唯一見えるようにしている。
もう片方は髪を伸ばし、左目を拝める事は無いことを表す。
灰色の地味な着物を太股辺りで切り落としたのか、白く細い太股が霞む事無くさらけ出される。
黒い帯を腹に捲いている少女。
少年は新八の服の緑色バージョンのような地味な服に皺を寄せる。
少年が藍色の瞳、少女は青色の瞳。
2つの瞳が銀時を見つめる。
と、その時、

ドゴゴゴオン!!

普段は聞けないような轟音が響いた。

「相も変わらず破廉(はれん)は船を動かすのが下手じゃのう」

少年がふうっと溜息を零す。
少女は笑いもせず無表情で扉を開けた。
土煙が舞っている。

「…痛いな、あっ二人共」

外では地面にめり込んだ小舟からまた違う少年が出てくる。
少年は軽い足取りで万事屋に近づく。
周囲の人が騒ぐのも気にせずに。

「夜透弥（よつや）、明、久しぶり」

少年は階段を上がると銀時の目の前に来る。

「こんにちは、僕、依頼しに来ました」

少年は頭を下げる。
風雷の髪より茶色が濃い髪。
くるんと捲いてある天然パーマの少年の髪は少年の瞳を隠す位長い。
口元はにこりと笑っている少年の格好は南蛮風。
坂本が率いる快援隊の格好にあっている服装だ。

「あとは巡（めぐ）だけかの？」

黒髪のポニーテール少年は頭を傾げた。
少女はこくんと力無く頷く。

「巡、遅い、遅刻、癖、仕方がない」

その言葉に茶髪の少年は頭を傾げた。

「巡？さっき空から見たよ。多分そろそ――」

「こぉんにちわぁ」

少年の言葉を遮った声は銀時達の後ろから聞こえる。
銀時達は驚いて後ろを見ると其処には可愛らしい笑みを浮かべた少女が居た。

「遅くなっちゃったぁ。ごめんごめん」

間延びした声は良く響く。
金色のような茶髪の髪はウェーブを作り、少女の顔を華やかに見せつける。
ピンクと黄緑の色鮮やかな着物に黒い帯。
小さく黒い帯には花の刺繍がされている。
月詠の着物ように着物の右側に切れ込みがあり、少女の白く細い右足が見える。

「御主もちゃんとドアから入らんか、窓からなど御主は泥棒かえ？」

古風な喋り口調の少年に少女はキャハッと明るい声を出す。

「仕方がないじゃぁん。月姉様に習った忍び術の一つよ？」

「そんな事は良いよ、早く依頼を…」

「頼む、仕事、理解、申す」

黒髪の少女はすらすら単語のみを放つ。

「分かった分かった。じゃあ巡、此方に来い」

巡と呼ばれた少女は銀時達の横を通り、少年達の横に並ぶ。

「頼みがあるんじゃ」

「頼む、依頼」

「お願いです…」

「宜しく」

少年達の言葉がやけに響いた。

荒らされるのは何時も自分の家。（後書き）

高杉はそう言って風雷の頬を人差し指でなぞる。
高杉の人差し指にはあんこが付いていた。
流石に今度は赤くなる風雷。
「高杉ーお前も隅に置けねェなァ」
既に酔っ払った銀時が高杉に絡む。
「…銀時、オメェ俺に殺されてェのか」
高杉は銀時を睨む。
だが酔っ払った銀時はニヤリと嫌らしく笑うと手にしていた酒の瓶をいきなり高杉の口に運んだ。
「へっへっへ！オメェも酒飲めや！楽しいぜェ！」
明らかに傍迷惑な銀時。
高杉の口に注がれる酒。
「ちょっ…！坂田さん！？」
風雷は仕方がなく酒瓶を破壊。
「おいおい風雷、何してんだよォ」
「酔っ払いすぎだ、な、たかす――」
バンッ
銀時の頭にいきなり何かが当たる。
「…高杉？」
神威も頭を傾げる。
「うぉい、銀時、オレに殺されてェのかァ…？」
高杉の手に握られているのは新しい酒瓶の欠片。
…どうやら高杉も酔っ払いに成り果てたようだ。
風雷は唖然とする。
「俺ァこの腐った世界をぶっ壊す！！」
頬を赤らめて高杉は叫ぶ。
…はっきり言って格好良いとは言えない。

「おらぁ！」
高杉は手短に有るものから次々と投げたりぶつけたり。
何時の間にか戦場のようになったパーティー。
「…これが、」
風雷は端に逃げながら呟く。
「仲間なんだよな」
楽しいパーティーはまだまだ続く。

――――
っていう地味パーティー（「∀｀）
はい、高杉さんごめん、つまらなくてごめん。
謝ります。
キャラ崩壊すいませんでしたー！！
因みに本文の新オリキャラは何時かちゃんとプロフィール出しますんで（＾ｏ＾）／

語るのは何時も年上。（前書き）

わー、おはようございます（＾ｏ＾）／
何か最近ぐだぐだ洒流奇。
あぁ…眠いです。
あ、そうだ、

今年も宜しくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

風雷：結局ぐだぐだで終わるんだな…。

語るのは何時も年上。

春雨戦艦内。
阿伏兎はふぅと息を吐いて扉を開けた。

「だんちょ…提督、失礼します」

「んー阿伏兎？」

阿伏兎は苦笑した。
神威は机で突っ伏していた。
そんな神威の横には山積みされた書類。

「阿伏兎ー…提督って暇だよ。阿伏兎ー…」

心底つまらない、というのを精一杯声で表す神威。

「はぁ…団長は提督になっても団長だねェ」

阿伏兎はそんな神威に近付く。

「んで、どうしたんだい。いきなり飯一緒に食おうってよォ」

「ほら、阿伏兎には前昔話してもらおーとしたけど中途半端に終わっちゃったし。他にもさァ高杉も何か色々調べ始めちゃったし。暇なんだよねェ…」

神威はふぅと溜息を零した。

「あー分かった分かった。んじゃ、飯と行こうじゃねェか」
神威はその言葉に「面白くなきゃ殺しちゃうぞ？」と笑った。
阿伏兎は「んな事知るか」と笑う。

「んじゃ、話してよ阿伏兎」
神威は目の前にある食べ物を忙しなく口へ運びながら向かい合って食べている阿伏兎を見る。
無論、話している間もしっかり手の動きは止めない。
阿伏兎は「あいよ」と呟くとナイフとフォークを置いた。

「んじゃ、前書きん所から話すか」
阿伏兎は口を重々しく開いた。

最初に言われた仕事内容は『刀を回収しろ』というモノだった。
その仕事をするのは第七師団、夜兎族。
第七師団の一部の者が行うよう上から言われたのだ。

「刀を回収だァ？上も暇だなァ、すっとこどっこい」
その為、この男――阿伏兎もかり出された。

「んで、詳細は何だ？俺あん時忙しくて聞き忘れてたんだよ」

刀を回収するように言われた島へと向かう阿伏兎は近くの第七師団のメンバーに話しかける。

「阿伏兎さんしっかり聞いといて下さいよ」

その男は苦笑しつつも懇切丁寧に答えた。

「その島に行ったら手分けして刀を探す。刀の特徴は刀身や鍔全てが黒い。んで、島には僅かに毒が有るので無理しない程度に仕事に励むように、だった気がしますよ」

「そうか、ありがとうな」

阿伏兎はそう言うと前を見た。

「因みにこの霧を超えた所にある島の名前は？」

「確か霞霧島だと」

「ふーん…霞霧島ねェ」

阿伏兎は眉間に皺を寄せる。
目の前にあるのは霧。
左右を見ても霧。
何処をどう言っても霧なのだ。

「こんな所に島なんて有るんかねェ」

思わず言葉を零す阿伏兎の耳に突如声が響いた。

「島だー島だぞー！！」

「…へっ？」

阿伏兎は正面を見る。
霧は少しずつ晴れていく。
そして、
目の前に島が現れた。

「んじゃー手分けして仕事に当たれ」

小舟に一人ずつ皆乗っていく。

「無理すんじゃねーぞ、適当にやれェい。五時間後には確実に集合だ」

阿伏兎の言葉に皆頷くと小舟を漕いだ。

「…さて」

阿伏兎も最後に小舟に乗り、肌に染みる微風を浴びつつ、外に出る。

阿伏兎は船から出た途端、体が重くなる事が分かった。
周りを見渡すと他の小舟に乗っている奴らも頭や腹を抑えている。

「…何だよ、こりゃあ」

言葉を零しながらも必死に漕ぐ。
両方の手の平が少しずつ冷えていくのを感じた。
これは吉原に行く前の為今は両方手があるとは分かる筈も無い阿伏兎は「冷てェ」と思わず呟く。

「くっそう…」

島に近付くにつれて重くなる体。
はぁと長い息を吐く。
近くの岸に着くと紐で小舟を固定し、寝っ転がる。

「はぁっはぁ…」

何故か早くなっていく鼓動は阿伏兎を苛立たせる。

「くそっ」

右手を握って地面に打ちつけた。
その時、
かさっ。
草と草が互いにこすり合う音が僅かに聞こえる。
うさぎとかかァ?と耳を疑う阿伏兎だが考えてみれば自分すらキツい毒の中に生きていける筈が無い。
阿伏兎は目を凝らして音がした方を見る。
かさっかさっ、と音は少しずつ近付く。
そしてようやく音の主が現れた。
仮面。
黒い、狐の仮面をした、
人間が居た。

「…人間っ？」

思わず驚く阿伏兎だがその身なりを見て更に驚く。
小さな人間は赤いチャイナ服を纏っていた。
その服から出ている手先は雪のように白い。
長い茶色の髪は今まで洗ってない事を表す位土で汚れている。

「…夜兎か？」

思わず言葉を零した阿伏兎。
其処でその人間は気付いたように阿伏兎を見た。
次の瞬間人間は阿伏兎に背を向けて走り出す。

「ちょっ待て！」

阿伏兎は重い体に鞭打って人間を追った。

「はぁっ…はぁっ…」

追えば追う程激しくなる息。
体は一歩一歩進むごとにおもりが乗せられていくように重くなっていく。

「…待てっくれ」

阿伏兎は其処で意識が切れた。

小さい子と居たらロリコンって事ではない。（前書き）

洒流奇：わぁい、昨日アクセス千越えしたー。

新八：こんな駄作にそんなに見てもらえてるって驚きですね。

神楽：きっと読者も馬鹿アルよ。

風雷：駄目だよ神楽。読者はきっと優しいからこんな駄作を読んでるんだよ。

銀時：そぉだ。神楽、読者は親切なんだぞ。

神楽：成る程ネ。理解したアル。

洒流奇：ちょっと…何処までいっても批判されるんですかウチ…。

銀時：うっせぇ。何もしねぇ餓鬼が。

新八：宿題も終わりそうにありませんしね。

神楽：一回脳内外科にでも行くべきネ。

風雷：精神科の方が良くないか？

洒流奇：酷すぎだろオオオォォォ！！

小さい子と居たらロリコンって事ではない。

辛い。
重い。
そんな感情しか抱けない。
つか…俺ァどうしちまったんだ。
「んっ…」と呟きながら目を開けて体を起こす。

「此処ァ…」

「起きた？」

「！？」

阿伏兎は横を向いた。
そこにはさっき追っていた人間が居た。
あどけない声は鈴のように愛らしさを含む声。
だがさっきと違うなら仮面が変わっていた。
さっきは黒が主となっており、そして白が所々入っているという仮面。
だが今回少女が付けている仮面は色が正反対だった。
白が主で黒が所々ある仮面。

「起きたならさっさと出て行ってくれる？此処は私の家なの」

少女とは思えない大人っぽい台詞。

「いやァすまなかったねェ…てか俺はどうしちまったんだ？」

阿伏兎の言葉に少女ははぁと分かりやすく溜息を零すと語り始める。

「貴方は私を追ったが毒に負けて倒れる。私はそれを確認して貴方を抱えて一番島の端っこの此処に連れてきた」

抱えて、という所で阿伏兎は「夜兎」と確信する。
大の大人である阿伏兎を意図も簡単に運ぶなど不可能。
しかも、
こんな十歳にも満たないような少女が。

「分かった？船は彼処にあるから」

少女は指差す。
阿伏兎は其処を見ると其処には小舟が置かれてあった。

「はぁ…なるほどねェ。だが俺には仕事があるんだよねェ」

「仕事？手短に言って。出来る事は叶えてあげるわ」

頭を豪快に掻く阿伏兎に少女はふんっと鼻を鳴らした。

「そりゃ有り難いねェ。刀を探してんだよ」

「刀…？」

「あぁ、黒い刀だ」

頭を傾げる少女に阿伏兎はさっき聞いた特徴を短く答える。

「刀ねェ…そんなのあったかしら？」

「ガキンチョ、お前取ってきてくれるかい？」

阿伏兎はにこりと営業スマイルを浮かべる。

「ガキンチョじゃないわ。そういえば、貴方名前は？」

「阿伏兎だ」

「あぶとぉ？」

此処で年相応のあどけない声を出す。

「あぁ、阿修羅の阿に体を伏せるの伏、うさぎの兎だ」

小さな少女には理解出来ないとは何にも分かってない阿伏兎は普通に難しい言葉を出した。

「うさぎ？」

「あぁ、うさぎだ」

何で其処だけ聞くんだ？と頭を傾げるが阿伏兎は親切に言葉を復唱した。

「…分かった、うさぎさんね」

少女は最終的に納得した結論を呟いた。

「…っておい、俺の名前は――」

「うさぎさん？」

「…まァ良いか」

もう諦めた阿伏兎。
諦めは良い方なのである。

「じゃっちょっと待ってて、うさぎさん♪」

少女はさっきとは打って変わって可愛らしく言うとタタタッと走り去った。

「んじゃあ…」

阿伏兎は再度体を横に倒した。

「寝るか」

阿伏兎はうとうとと幸せそうに眠りについていた。
腹に蹴りが入るまで。

「ふげぇっ！！」

「うさぎさん、刀無かったよ」

腹をさする阿伏兎は少女を見る。

「ガキンチョ、オメェは起こし方を知らねェのか、すっとこどっこい！」

少女は「あはは」と楽しそうな声を出した。

「んっ…また仮面が変わってんな」

阿伏兎は其処で少女が付けている仮面が変わっている事に気が付く。
さっきまで付けていた仮面とはがらりと変わって今度はクマの形をした仮面。
黒と白は半々、といった仮面を付けている。

「良ーじゃん、遊ぼ、うさぎさん」

少女は阿伏兎に抱き付く。

「おいおい、俺は帰んなきゃなんねェんだよ」

「…えっ？」

少女は阿伏兎から離れる。
阿伏兎は「んっ？」と頭を傾げる。

「うさぎさん」

「何だァ？」

少女は阿伏兎の手を握った。
阿伏兎のゴツい手の一回りも二回りも小さな、柔らかい手。

「此処で会ったのは秘密にして」

「…分かったよ」

阿伏兎の言葉に少女はパアッと明るくさせ、阿伏兎に抱き付く。
阿伏兎は心の中で呟く。

「俺ァロリコンじゃねェんだけどねェ」

最後は最初であって、最初は最後である。（前書き）

洒流奇：宿題がガチでヤバい為、今日は前書きなし！！

最後は最初であって、最初は最後である。

それからも阿伏兎は一人で島に『刀を捜索』という名目で週に一回程度行くようになった。
少女は阿伏兎が来るようになってから仮面はクマの形のみしか付けないようになった。

「つーか、俺ァうさぎさんっつう名前じゃねェんだが。確かに漢字はうさぎって書くがよォ」

「かんじ？」

少女は頭を傾げる。
阿伏兎が来るようになり、少しずつ外の世界に興味を持ち始めた少女の髪は見違える位美しい茶髪に変わっていた。
無論、体を洗うように阿伏兎がシャンプーや石鹸を持ってくるようになったからだからが。

「そういやー、オメェは漢字知らねェのか？」

「平仮名は知ってるもん」

プクーと仮面越しだが分かるように頬を膨らます少女。
阿伏兎はうーん、と小さく唸ってから「んじゃあ」と言葉を続ける。

「広辞苑とか今度持ってくるか？」

十歳に満たない少女に普通「広辞苑が欲しい？」と聞くのはおかし

いが、少女は元気よく頷いた。

「平仮名読めんだよな？」

阿伏兎の問いに少女は頭を上下に振る。

「出来るよ！あいうえお…」

近くにあった棒を握って地面につたない字を描いていく。

「わをん…っと。ほら、出来たよ！」

顔を上げた少女。

まるで褒めて！とでもいいたげな行動に阿伏兎は溜息を零してから少女の頭に手を乗せた。

「凄いな」

少女はその手の上に自分の手を乗せて喜ぶ。

「…そういやガキンチョ、お前何で仮面付けてんだ？」

阿伏兎は手を離して今更の問いを少女に言う。

「これ、お母さんとお父さんの…。だから、まだ、外せない」

「ふーん、そうかい。そういやガキンチョ、お前の父ちゃんと母ちゃんは？」

阿伏兎にとっては何気ない質問だが少女は顔を俯かせる。

阿伏兎はその行動で分からない程馬鹿ではない為、「これ、要るか？」と今回持ってきた剣玉を渡す。
少女はこくんと力無く頷くと剣玉に手を伸ばす。

「これ、どうやって使うの？」

少女は頭を傾げる。
阿伏兎は剣玉を握って球を見事に乗せていく。

「もしもし亀よ、亀さんよってな」

「何、それ？」

「んっ？これは剣玉っつってな」

阿伏兎は剣玉を指差す。

「そうなんだ。って違うよっ。私が知りたいのはうさぎさんが言ってた奴！」

「言ってた奴？」

腕をぐわんぐわん回して何かを表現しようとする少女。
阿伏兎は自分がしていた行動を思い起こす。

「言ってた奴ってなんだよ？」

「んっとねェ…もしもしかめよ、か…傘…」

「亀な。はぁ、それかい」

阿伏兎は溜息を零しながらも丁寧に色んな事を教えていく。
少女はそれを嬉しそうに聞いていく。
阿伏兎は知らない、
少女は知らない。
互いの事を。

何回も阿伏兎は島に行った。
だが、何回も行ってそれに異変を感じないのは居ないだろう。
だから、
元老院は阿伏兎に伝える。
「霞霧島にはもう行くな」と。
阿伏兎は元老院に言う。
「最後に一回、調べさせて頂けませんかねェ？」と。
元老院はあきれながらもそれを承諾した。
そして、最後が、始まる。

「俺ァ今日でガキンチョには会えねェんだ」

阿伏兎は島についてすぐにそれを少女に伝えた。
少女は動かなかった。
数秒後やっと「えっ？」と言葉を零す。

「もう会えねェんだよ、オメェに」

「嫌…」

最初会って一年は経った。
少女は少し身長を伸ばし、髪も更に長くなっていた。
少女は阿伏兎に抱き付く。

「うさぎさん、私、漢字とかも沢山、完璧に覚えたよ！ねェ、私が、悪いの？ねェ！」

阿伏兎の腰辺りに捲かれている腕の力が少しずつ強くなっていく。

「そーゆー事じゃねェよ、俺が悪いんだ」

阿伏兎は少女の頭に手を乗せ、撫でる。
少女は「嫌だよォ…」と小さく、何回も呟く。

「悪いな…また、何時か会えたら良いな」

阿伏兎はそう言い、少女の首もとを手で強く叩く。

「あっ…」

少女の力が一気に緩む。
そして少女は阿伏兎に全ての体重をかける。
阿伏兎は少女を抱えると静かにその場所に横にする。
阿伏兎は最後に船から沢山の荷物を少女の横に置いた。
そして、少女に背を向ける。

「うさぎさん…」

そんな阿伏兎の背中にいきなり声がかかる。

阿伏兎は振り返る。
少女は手をぴくぴく動かしていた。

「わた…し、うさ…ぎさん、また…あ…う」

少女の台詞に阿伏兎は目を丸くさせながらも笑った。

「ガキンチョ、オメェだけは何時まで経ってもガキンチョのままだ」

阿伏兎がそう言うと少女はブイサインをする。
そして力尽きたようにその手を広げた。
阿伏兎は小さく呟いた。

「またな」

阿伏兎はしなかった。
少女の仮面を取る事を。
最後の最後まで。

そして、
六年後、
二人は残念な出会いをし、
互いに気付かず、
そして、
最後に気付く。
『ガキンチョ』
『うさぎさん』
その言葉で。

最後は最初であって、最初は最後である。（後書き）

因みに阿伏兎は以前六年前と言いましたが、それは別れた日から現在です。
実際出会った日から現在までは七年前です。
分かりにくい文すいませんｍ（＿＿）ｍ

自己紹介は漫画の定番。（前書き）

洒流奇：後二、三話ストック有る！！けど…宿題が終わらねェ！！

自己紹介は漫画の定番。

「つー話だよ、団長」

阿伏兎は溜息を零した。

神威は「なるほどね」と呟きながら目の前に有る食事を口に運ぶ。

「俺ァそん時から出来る限り『嬢ちゃん』や『坊主』っつう言葉を使ってきたんだがねェ。あん時つい口が動いちまったんだよ。そしたらあいつはガキンチョだったっつう話だ」

その言葉に神威は微笑む。

そして一言。

「阿伏兎、ロリコンだったんだね」

「違う」

阿伏兎の否定が神威に届いたかははてさて、誰にも見当もつかない。

夜がやってくる日々。

勿論、変わらずに今日もやってくる。

そして、万事屋にも、

やってくる。

「とりあえず自己紹介は必要かの、我は夜透弥(よつや)じゃ」

黒髪のポニーテール、古風な話し方の少年は自らの胸に手を置いてにこりと笑った。

「私、明(さや)」

少年の隣に居た灰色の着物を纏った少女はそう言うと口を閉ざす。

「僕は硲(はざま)って言うんだ」

天然パーマの長い前髪が目を見えないように覆う少年は唯一見えている口で弧を描かせる。

「私は、巡(めぐ)って言うのぉ。宜しくね？」

まるで外人のような金色のような茶髪のウェーブの髪を手櫛で解かす少女はオレンジ色の瞳の片目を瞑った。

銀時達は唖然とする。

ただ、それだけ。

「客だからの、入れさせてもらうか」と少年――夜透弥は言うと銀時達の横を通る。

他の三人も夜透弥に続く。

そして夜透弥はぼんっとソファに尻を沈めた。

明は壁を使って天井に向かい、そして夜透弥の上に逆さまのまま立ち上がる。

硲はそのままソファの横に立ち、巡はソファの背もたれの部分に腰掛ける。

銀時はその姿を見て、溜息を零してから夜透弥の向かいに座る。

「其処のお二方は抜けてくれんかのう？」

銀時達に古風な話し方の夜透弥は頭を傾げた。

「「嫌です（アル）！！」」

神楽と新八はそれを全面的に拒否し、銀時の横をがっちし固める。

「…仕方がないのう、硲、巡」

呼ばれた二人は「はいはい」「分かったよ」と反応すると神楽と新八の横に立つ。

神楽の横は硲、新八の横は巡で。

そして二人は隣に居る神楽と新八の腕を掴むと立ち上がらせる。

「嫌です（アル）！」

二人は必死に抵抗するが、硲は懐から酢昆布を出し、巡は新八にちらりとお通ちゃんの写真集を出す。

神楽は一瞬酢昆布を取ろうとするが自我で抑える。

硲はそれを見過ごさすに神楽を立たせ、一緒に外に出る。

「それは抽選五名様の写真集っ！そっそれは僕ですら手に入れられなかった…」

あたふたする新八の耳元に巡はふっと息をかけ、一言。

「欲しい？」

それは新八にとっては苦渋の決断。

「でっ…でも僕は此処に残ります！」

だが新八は頭を横に振って巡の腕を払う。
巡はそれを見てにこりと愉しそうに笑った。

「そう、残念だわ」

巡は帯から一本のナイフを取り出す。
そして写真集の真ん中で笑っているお通ちゃんの顔に突き立て、

「すっストップ！」

新八は大声でそれを止める。

「貴方、巡さん何やってるんですか！それを欲しくても手に入れられない人は世界に何人居ると思ってるんですか！？」

ヲタクならではの怒りを爆発させる新八に巡は唇を皮肉げに歪めた。

「だって、貴方要らないんでしょう？だったら、ねぇ？」

そう言うと巡は新八に背を向けて硲と神楽の向かった方へ走る。
新八は顔を赤くさせてそれを追う。
何はともあれ、
これで万事屋には銀時と夜透弥、明しか居なくなった。

「わざわざあそこまでして神楽達を聞かせない必要があんのかよ」

今まで沈黙を守り続けていた銀時は勝手に閉まった扉を見る。

「当たり前じゃ。我はあまり話をするのは嫌いなんじゃよ。まァ長（おさ）に聞いて正解じゃった」

うんうん、と一人で頷く夜透弥に銀時は眉間に皺を寄せる。

「長？誰だよそれ。それに何が聞いて正解なんだよ」

もっともな疑問に夜透す弥は幸せそうに笑った。

「長は御主の戦友、桂さんじゃ。それと聞いたのは、御主は立派な男かをの」

「ヅラ？それに男って何だテメェ」

苛立ちを露わにする銀時に明は口を開いた。

「雑談、必要性、零、依頼、話す」

その単語に夜透弥は「そうじゃな」と上を見た。

「頼む、王子を救ってくれ」

「…王子？」

今度は頭を傾げる銀時に夜透弥は頷いた。

「悪いが他を当たってくんねェか？俺ァ今忙しいんだ」

だが銀時はすぐに頭を横に振る。

そして銀時は立ち上がる。
風雷を探しに。

「逃がす、しない」

だが明はすぐに銀時が行こうとした廊下にくないを刺した。

「…おいおい、随分過激なガキだな」

銀時は明を睨む。
明はそんな銀時に冷たい視線を注ぐ。

「明、落ち着け。我が言い忘れたのだ、仕方があるまい」

「何だ」

銀時は冷めた瞳を今度は夜透弥に向ける。
だが夜透弥はそれを気にしないように口を開く。

「我々にとって王子は…確か江戸の風雷じゃ」

その言葉を聞いた瞬間銀時は目を開く。
夜透弥はそのまま口を動かす。

「王子はあの死すべき男、框に捕まった」

銀時はそれを聞いた瞬間急いでソファに再度尻を沈めた。
夜透弥はそれを満足そうに見た。

「では、良く聞くんじゃぞ」

夜透弥は身を乗り出す。
顔を真剣そのものにして。

神を信じてたら必ずしも宗教の人間という訳ではない。（前書き）

洒流奇：宿題行ってきますε＝ε＝┐（　・＿・）┌

銀時：だったら投稿しねェでやれよ…。

神を信じてたら必ずしも宗教の人間という訳ではない。

「嫌アル！私銀ちゃんの所に戻るネ！」

夜中なのに元気良く響く神楽の声。

硲はハァと溜息を零して「とりあえず我慢してくれないかな…」と呆れたように呟く。

「そうですよ、僕達を帰して下さい！」

新八も巡の横で叫ぶが、巡は「要らないの？」と写真集を見せる。

「うっ…」

何も言えなくなる新八。

「神楽さん、少し静かにして下さい。近所迷惑ですよ？」

人差し指を唇の前に突き出す硲に神楽はベーと舌を出す。

「船を地面にめり込ませた馬鹿が良く言うネ！」

ふんっと唇を突き出してアヒル口にする神楽に硲は頭を傾げた。

「別に良いじゃないですか。船長は貴方の家を壊しましたよ？」

「船長？」

「はい、船長です。神楽さんはこんな格好した人を見た事がある筈ですが」

裕は手を広げる。
神楽は裕をじーと満遍なく見つめる。
裕の格好は主に黒を基準とした格好。
マフラーのような灰色の布。
それに黒いコート。
黒いズボン。
色が違う服を着た人…見た事が…、という所で神楽は思い出す。

「あのもじゃもじゃアルか！？」

「もじゃもじゃ…まァそうです。坂本辰馬さんです」

苦笑する裕に神楽は「何で此処に来たネ？」と問う。
裕は唇を微笑ませ、「王子が僕好きなんですよ」と言った。

「王子？」

頭を傾げる神楽に裕は頷く。

「駄目でしょ裕。私達の仕事は話す事じゃないでしょ」

其処で近くで新八を支配していた巡が口を開いた。

「そうだね、ごめん」

「もォ最低」

ぷんぷんと頬を膨らます巡に硲は頭を掻く。

「それじゃ巡は何処で働いているネ？」

「あたし？私は吉原」

巡は自分の顎の部分に人差し指を乗せてキャッと可愛らしい声を出す。

「吉原っ！？」

隣で驚く新八に巡は「そうよ？」と頭を傾げる。

「んじゃあ…あの時…」

「残念だけど私は貴方達が吉原に来た時にはまだ働いてないわ。まァちゃんと何が有ったかは完璧に把握しているわ」

新八の言葉に巡はふんっと鼻を鳴らした。

「成る程…どうりでそんな格好アルか」

納得したように神楽は巡を見る。

「でも何でその着物に黒の帯なんですか？その格好だったらもっと華やかな帯の方が良くないですか？」

新八のもっともな疑問に巡は自分の腹、つまり帯を大切そうに触れた。

「これは王子から貰ったからね」

「王子？また王子アル。さっきの暗い…明も王子とか言ってたアルけど…王子って誰アルか？」

神楽は『王子』というワードに疑問を抱いているのか、頭をうーん…と唸りながら傾げる。

硲はそれを見て「王子は僕達の神のような存在なんですよ」と空を仰ぐ。

「神…ですか」

新八も驚いたようにポカンと口を開きながら呟いた。

「そう、私は王子に命令されたら何でもするわ」

巡はそう言い、幸せそうに微笑んだ。

そうしたら神楽は「酢昆布買ってこいって言われたら買うアルか！？」と顔を輝かせる。

「勿論。他にも…其処に居る硲を殺せっていうなら殺すわ」

笑顔で言う巡。

新八と神楽は凍る。

それによって重苦しい空気が流れる。

「じょっ…冗談は…よして下さい…」

かろうじて新八はそう言う。

巡は不思議そうに頭を傾げる。

「そうだよ、巡。冗談はよしなよ」

其処で「殺すわ」、と言われた硲が笑顔で入ってくる。
新八はそれに安心して「ですよね」と返そうとした。
だが、
新八はそう言えなかった。
何故なら、
神楽と新八は次の言葉で完璧に凍るから。

「僕は王子にそう言われたら自分で死ぬよ」

にこりと愉しそうに笑う硲。
巡はそれに「そうだよね、ごめんごめん」と謝った。

「私達の中に王子に死ねって言われて死なない馬鹿は居ないもんね」

「そうだよ、巡。僕はそんな馬鹿じゃないよ」

ニコニコ幸せそうに二人は笑いあう。
新八と神楽は唖然としてもう動けない。

「だって王子は絶対だもん」

「そうそう」

二人の愉しそうな言葉は闇に溶けていく。

取引は色々ある。（前書き）

今日が中学最後の冬休み！！
引きこもりです…。
あははは…

取引は色々ある。

「框という男は奴隷商人の息子であり、現在その後継ぎをした男じゃ。框はの、王子にまたあの事をしようとしとる」

夜透弥の言葉に明が顔を曇らせる。

「あの事って何だよ？」

「…明、どうする」

銀時の問いに夜透弥は俯きながら上に居る明の意見を求める。
明はすたっと床に着地し、立ち上がったまま銀時を見る。

「お前、信用性、未だ、皆無。王子、言われる、悲しむ。駄目、王子、現在、苦しんでる、可能性、有る、から」

銀時を指差して明は答える。
夜透弥は明の答えに「そうか」と悲しそうに返した。

「じゃあお前さんが信用出来るようになったら話す。どーせ未来には分かってしまうけんな」

「おいおい、こちとら理由とか全部聞かなきゃ困るんだよ。全部言え」

銀時は二人の出した答えに納得出来ないのを表す。
明は銀時を見つめる。

「白夜叉、お前、自分自身、過去、話す、きっと、嫌。それ、王子、一緒」

明は銀時の一つ一つの動作をしっかり見る。

銀時はその言葉に歯軋りする。

「分かった分かった。仕方があるまい、王子のどてかい秘密を一個教えてやんぞ」

宥めるように夜透弥は二人の間に入って言葉を出す。

そして銀時を見て一言呟く。

「我々は昔、奴隷じゃ」

銀時はその単語を聞いて目を見開く。

「御主は長に聞いちょるじゃろう。昔、奴隷商人の奴等は実験体を逃したとな」

銀時に更に衝撃が走る。

「これで良いじゃろう。んじゃ、我々は一人十万ずつ御主に依頼料として払う。つまり四十万じゃ。後、王子を救うのは明後日。待ち合わせ場所はそうじゃの、近くの団子屋はどうじゃ？」

懐から夜透弥は膨らんだ封筒を出し、机の上に乗せた。

「…別に明日でも構わねェよ」

銀時は夜透弥からの封筒を見てから言葉を出す。

「船、用意、まだ。お前、準備、完璧、しろ、期限、明後日」

「…分ァったよ。それとよ、こんな大金は要らねェ」

渋々銀時は明の言葉に頷いてから封筒を夜透弥に返す。

「俺だって風雷を早く助けてェ。だからお前達は情報をくれ」

夜透弥は最初ポカンと口を開けていたが、その台詞を最後まで聞いて笑った。

「くっははっ…。本当面白い男じゃの。だが依頼料は貰うんじゃ。こりゃあ以前王子を春雨から救った分も入ってるからな」

笑いを抑えて夜透弥は言うと立ち上がる。

明は目を瞑り「猿飛様、惚れる、理解」と小さく呟いた。

「おいおい、それだからって――」

帰ろうとする二人に銀時は言葉をかける。

だが夜透弥は振り返って銀時に笑いかける。

「貰うんじゃ。そうじゃな、王子を救ったら半分返しても構わへんぞ？」

ニヤリと愉しそうに笑う夜透弥。

明は「救う、決定事項。お前、それ、返す、それ、王子、救う、後」と静かに言う。

銀時ははぁと溜息を零してから言う。

「分ァったよ、絶対半分は返してやんよ」

重苦しい空気を纏う新八と神楽。
どうしようかと頭はこんがらがるのみ。

「あっ、そうそう、私月姉様に江戸のお土産買うように言われてたんだ。後で夜透弥からんまい棒でも頂こうかしら？」

思い出したようにポンッと手を叩く巡。
硲は「幾ら何でも夜透弥が攘夷志士担当だからって何時も持ってる訳では無いんじゃない？」と苦笑する。

「えっと、夜透弥は攘夷志士アルか？」

其処でやっと言葉を出せるようになった神楽。
硲は神楽を見て「そうだよ」と返す。

「じゃあ…明さんも何処かで働いてるんですか？」

新八もやっとの事で言葉を出す。

「明はねェ、始末屋よ。何か凄いドMの人が居るとか呟いてるのよ」

巡は「可哀想に」と愉しそうに笑う。
硲は「それでも楽しそうじゃない？」と頭を傾げる。

「まァ皆久しぶりだけど元気で安心したよ」

巡の肩を叩く硲。

巡も「そうね」と微笑む。

「あれ、皆さん久しぶりなんですか？」

頭を傾げる新八。

「えぇ。私は地下、硲は空、夜透弥と明は地上だからね。もしかしたら夜透弥と明は会ってるかもしれないけど」

頬に人差し指を突き立てて頭を傾げる巡。

硲は「巡は吉原楽しい？」と頭を傾げた。

「えぇ、勿論。日輪様と月姉様と出会えたし」

「僕も陸奥さんや船長に会えて良かったです」

二人で愉しそうに笑いあう。

新八はその姿を見て心中で呟く。

さっき自分の命を軽く言ってた人には見えないな、と。

「おぉ、お前ら此処に居たんか？探したんじゃぞ」

「発見、帰る、今すぐ」

そこで夜透弥と明がやって来る。

「お二方さん、もう帰って平気や。迷惑かけたな」

夜透弥はそう言うと「さらばじゃ」と手を振る。
そして四人は並んで帰る。
新八と神楽はその背中を静かに見守った。

細かい情報を仕入れるのは悪役から。（前書き）

おはよーございます（＾ｏ＾）／
今日から学校の為更新遅くなると思いますが宜しくお願いしますｍ
（＿＿）ｍ

細かい情報を仕入れるのは悪役から。

「御馳走様」

神威は右手と左手の平を合わせて言う。
神威の前にこれでもかと乗せられていた料理は跡形もなく消えていた。
その向かいに居る阿伏兎はハァと分かりやすく溜息を零した。

「さて、阿伏兎の昔話も聞いたし、地球に遊びに行こっかな」

「おいおい、提督何逃げようとしてんだ、すっとこどっこい」

立ち上がった神威に阿伏兎は疲れたように肩の力を抜く。

「だってさァ暇だし。仕方が無いよね？」

「何がねェんだ、すっとこどっこい」

二人の変わらない上下関係漫才は相も変わらず健在である。
と、その時、

「邪魔するぜェ」

ドアがキイィと不気味な音を発しながら開く。
そして其処には高杉が居た。

「久しぶりだね、どうかした？」

「テメェの耳に入れてェ話が有ってな」

そして高杉は何の断りも無く自然な動作で椅子に座る。

「何々？」

まるで子供のように興味津々な神威。

阿伏兎は思わず「仕事放棄は駄目なんだがねェ」と呟く。

「第四師団の話だ」

高杉はそう前置きとして言うと銀時に言った事と同じ内容を伝える。

神威はそれを愉しそうに笑いながら聞き、阿伏兎は眉間に皺を寄せながら聞いた。

「まァ幕府の犬共の動きを見るとほぼ確実だな、あの餓鬼が攫われたのは」

阿伏兎はその言葉に残念そうに溜息を零した。

「ふーん、でもさァ疑問が一つ有るんだけど？」

神威はふわぁと欠伸を漏らしながら呟く。

「何でハマチは風雷が爆弾だって事知ってんだろ？確かあの事の詳細を知るのは此処に居る三人だけじゃないかな？」

その言葉に高杉も同じ疑問を抱いていたのか目を閉じる。

そう、神威達は上への報告書に風雷の名前、容姿など細かい事は記

載してはいない。
まぁそれはただ単に神威が面倒だった為『夜兎族』としか書いてないのだ。
元老院すら知らない筈の事を、
框が知る術は無い筈なのに。

「あぁ、俺もそれで更に詳しい事を調べたんだよ。そしたら面白い事がもう一つ出てきた」

高杉はそう言って神威の紙を渡す。
阿伏兎も神威の後に渡される。

「ふーん、成る程。そーゆー事」

神威は変わらない薄っぺらい笑みを浮かべた。
『少年少女、以下の番号の物達が脱走。６、１３、１５、２１、２８、３４。尚、３４は爆弾として利用価値がある物である。が、その数日後、その奴隷達により他の奴隷達にも逃げられた。３４番は我々の全てを奪い、消えた。もし見つけた場合は即刻排除。貿易相手、春雨様にもご協力をお願いしたいと思っております。』と紙には書かれてあった。

「これは一年前位に春雨に送られたモンだ」

高杉が懐から煙管を取り出し、口元で噴かす。

「つー事はこの３４番の奴ァ…」

「あの餓鬼の可能性が有る」

口ごもる阿伏兎に高杉は続きを容赦なく言った。
阿伏兎は視線を下に落とす。

「てかその元奴隷達の写真とか保管されてないんだ？」

「あぁ、残念な事にな」

神威は「それじゃあ分からないね」と呟く。
高杉は頭を横に振った。

「奴隷達は皆右肩に焼印が有るらしい」

「…焼印か」

復唱する阿伏兎に高杉は頭を縦に振る。

「あぁ、あの餓鬼の右肩にありゃ確実だ」

「成る程ね。まァ仕事はどーせ上から来るだろーし。その中に紛れ込めば良いっか」

「おいおい提督…お前さんはお前さんの仕事をしてくれェ…」

問題ない！のようににこやかな笑みを浮かべる神威。
阿伏兎は思わず苦笑する。

「あぁ、それともう一つ有るんだよ」

「んっ？」

頭を傾げる神威に高杉は煙管を離した唇から言葉を零す。

「奴隷商人、つまりその框っつう奴の父親は奴隷達に逃げられた翌日に元老院を訪問し、更に数日後、殺されてる」

「…どおゆう事だァ？そりゃあ…」

眉間に皺を寄せる阿伏兎に高杉はふっと白い息を吐いてから答える。

「今ではその事は大っぴらに言われてるが、去年では全く知られてなかった事だ。つまり…」

一瞬、
高杉は貯めてから言う。

「何かが裏で動いてるかもしんねェんだよ」

そう言った高杉は立ち上がると「邪魔したな」と言い、背を向ける。
神威は面白い玩具を見つけたように笑い、阿伏兎はまた面倒な事がありそうだと疲れ切った顔をする。
高杉が去った後静かになった部屋。
すると扉が開く。
無論、扉を開けた人も入ってくる。

「報告です」

下っ端天人が其処には居た。

「神威提督殿と阿伏兎団長、以下二名は明朝、出陣用意」

敬礼したままの天人は言葉を紡ぎ続ける。

「尚、この事は内密に行う事。出陣先は――」

天人は最後まで敬礼して言った。

「那落迦の楽園」

天人は、
最後まで敬礼して、
阿伏兎と神威に伝えた。

地獄ってのは底が見えない。（前書き）

来月はあまり携帯でウェブ行くな、と言われてしまった為来月から完全に更新遅くなる…。
それまで続くかも分かりませんが、宜しくですｍ（＿＿）ｍ

地獄ってのは底が見えない。

錆び付いた鉄の臭いが鼻の中に入ってくる。
捲いていた包帯は既に血だらけ、そして汗も染みて汚れ放題。
だがそんな事を気にする事など不可能だった。
何故なら、
足の骨を折られたから。
その上、框は自らの爪で風雷の爪を剥いだから。
風雷は目を閉じる。
そこで、
思い出される地獄。

「うわアアァァァ！！」

一気に金槌が風雷の足に下ろされる。
逃げようとしても逃げれない。
足を左右に避けようとしてもがっちし男達に握られており、避けれない。

「はぁっ…はぁっ…」

痛みを必死に堪える事しか出来ない風雷は荒々しい息を吐いた。

「そうですね…お前達は１５番を用意して下さい。それと、奴隷に相応しい着替えがあったでしょう。アレも取りに行って下さい」

框の言葉に金槌を握っていた男達は頷き静かに部屋から出る。
風雷はその言葉をしっかり聞こえていなかった。
そんなのを気にする程、余裕というものが無い。

「では、どれ位堪えれるか試しましょうか」

框はそう言うと風雷の右手を取る。
風雷の手は痛みによって噴き出した汗が滲んでいる。
対して框の手は冷たく、何も汚れてない綺麗な手。

「はぁっ…はぁっ…」

風雷は荒々しい息を吐きながら框を見る。
框はそんな風雷に構わず、自分の人差し指を使って、
爪を剥いだ。

「うわアアァァァァ！！」

再度悲鳴をあげるが框は容赦なく更にもう一枚と花びらの様に爪を
散らす。

「あっ…はっ…はっ…」

叫びすぎて喉が痛くなるうえ、呼吸すら疎かになる。
だが、そんなモノは些細な痛み。
手、肩、足。
此方の方が何倍も痛い。
唯一無事な左手で床を握る。
そんな力は無いが、キュッと痛みに堪える為必死に、健気に意識を
繋ぐ。

框はそんな風雷の姿を見て、
無表情。
何時の間にか何の感情も無いように冷たい顔立ちに変わっていた。

「では足にいきますかね？」

框の言葉に風雷は思わず顔を強ばらせ、ぷるぷる小さく震える。
小さく、儚げな小動物を思わせる姿。
だが、
框はそんな事は気にしない。
框は立ち上がり、風雷の足元に歩く。
そしてぼろぼろな足の爪に手をかけた。

「うあっ…あっ…」

風雷の口からは言葉が漏れる。
逃げようとしても逃げられない。
まるで、
自分という存在は鎖に縛られたように。
框は指に力を、
入れた。

「うわアアァァァ！！」

今度は一気に五枚剥いだ。
パラパラ、と爪が桜の花が散るように無造作に落ちた。
大の大人すら二枚剥がされる事で気絶する可能性が有るのにも関わらず、風雷は懸命に堪える。
汗に全ての水分がいってしまったのか目にまで水分がいかない。
泣かしてくれる事すら、

許されなかった。
そして框は左足にも手をかけ、力を入れる。
何度悲鳴をあげたか分からなくなる位、風雷は叫ぶ。
左足は一枚一枚丁寧に剥がされた。
そして框は立ち上がって風雷の目の前に立つ。

「後は左手ですか」

風雷はその言葉にびくっと体を震わせ、左手を握る。
框に爪が見えないように。
そして、爪というカバーが無くなった右手で左手を覆う。
指先から赤い液体を流して。
その姿に框は「無駄な足掻きです」と冷たく言った。
しゃがんで、右手を取る。
痛みで力が入ってない為簡単に右手が取れる。
そして框はその右手を左足で踏みつけ、左手の手首を握る。

「一気にが良いですか？それとも一枚一枚丁寧にですかね？」

「やっ…いや…やめっ…やっ…」

風雷は左手を自らに寄せるように引っ張る。
だが痛みで緩くなった力で框に適う筈が無い。

「情けとして五枚一気に剥がしてあげましょう」

そして框は最後の五枚を、
剥いだ。

その後は良く風雷は覚えていなかった。
ただ、必死に意識を繋げた。
それのみ。
だが、一つだけ、
風雷を更に辛い事実が襲った。
それのみ、
風雷は覚えてしまった。

「清琳…も…」

自分が全ての爪を剥がされた時、
鎖で繋がれた少女がやってきた。
黒髪のショートカット、左目の下に黒子の少女。
以前自分が逃した少女。
名は、
清琳。
今風雷は白いランニングシャツのようなノースリーブ、白いズボンを履いている。
多分、清琳に着せるよう框が言ったのであろう。

「…ごめんな…清琳」

横になったまま風雷は、
一人では広い牢屋の中で呟いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4467x/

流れる夜兎の血――罪か、希望か――

2012年1月11日07時46分発行